

オバロリ

ラゼ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイトルまんまで。完全にチートですがエロを円滑に進めるためのものですので、無双描写は少ないです。

1
2 話

1
1 話

1
0 話

9
話

8
話

7
話

6
話

5
話

4
話

3
話

2
話

1
話

300

271

241

199

176

144

123

85

61

39

18

1

目次

1
7 話

1
6 話

1
5 話

1
4 話

1
3 話

457

434

395

363

325

1話

現地人にとってユグドラシルのプレイヤーは化物以上に化物だ。加えてユグドラシルで大勢力を誇っていたプレイヤーともなると、神とすら言えるかもしれない。六大神と呼ばれてた連中だと少し足りないように思うけど、八欲王だのアイنز・ウール・ゴウンだのならば確かに神と言って然るべきだ。

「…そうすると、僕はどう評されるべきなのか——って思うんだよね。レイナスちゃんはどう思う？」

「あ、っ、んっ、んうっ……はっ……？ な、なにが、でしょう——あっ、あっ、い、イキますっ！ ああっ！」

「くっ、いい締めつけだな……！ 僕も射精すぞっ！ 膣内でいいな！」

「はい……っ！ あ、あうっ——！ つは、あ……ハア……」

ふう……気持ちよかった。ロリペド野郎である僕を、妙齢の女性でありながら満足させるとは、出番が少なかったとはいえ流石は原作キャラと言えがいいのだろうか？ 物語の登場人物を犯すという精神的な興奮が作用しているのか、実際に彼女の体が特別なのかは気になるところだな。

『レイナー・ス・ロックブルズ』……誰もがご存知、重爆ちゃんだ。原作で容姿が明らかになった途端、一気に二次絵が増え二次創作のチヨロインとして脚光を浴びた呪われっ娘ちゃんでもある。やっぱなんだかんだ女は容姿なんだろうね。

彼女と僕がセックスしている理由は、別段特筆するべきところはない。呪いを解けばやれる系女子であるレイナー・スちゃんだからして、むしろやれない理由を探す方が難しいだろう。ちよちよつとアイテムを差し出せば、あちらは気持ちのいい穴を差し出してくれる……間違いなくウインウインの関係だろう。

「ふうー……あー、気持ちよかった。ありがとね、レイナー・スちゃん」

「——ハアツ、ハツ……はい、こちら、こそ……」

「それにしてもホントに綺麗だねえ。王国の黄金姫よりも美人だよ。断言してもいい」「は、はい！　ありがとうございます……ふふ、うふふ……戻った、戻った……私の顔……！　ふふっ……！」

精液でぐちよぐちよになった彼女の穴を、余韻を味わうように、柔らかくなった肉棒でゆっくり掻き回す。名器と言ってもいいその感触に感嘆のため息を吐きながら、彼女の容姿をこれでもかと褒めそやす。

元々容姿に絶対の自信があったからこそ、呪いの解除に心血を注いでいたんだろう。そうなる前は褒め言葉など日常的であつたらうが、現在のレイナー・スちゃんにとっては

何度聞いても飽き足らない甘美な言葉の筈だ。

「さてつと……んじや、そろそろお開きかな。期待以上に満足させてもらったし、何か他に欲しいものがあるなら聞くけど」

「あ、も、もういいんですか……？ それに、解呪以上に欲しいものなんて……」

「いいのかい？ 無欲だねえ。そんじやまあ、何か困ったことがあつたら言いなよ。これ使えば通信できるから」

「マ、マジックアイテムですか？ そんな貴重なもの、よろしいのでしょうか」

「ん……引け目を感じるんなら、そうだな……じやあそれで呼ぶ度に抱かせてもらおうよ。それでいいかい？」

「あ、あはは……」

呆れたように笑うレイナスちゃん。そんな彼女の胸をもう一揉みして、僕はベッドから体を降ろした。アイテムの効果を発動させ、色々な体液で汚れた体を清める。差し出した指輪を恐る恐る嵌める彼女を尻目に、右手を上げながら宿屋を後にした。

いやあ、しかし原作キャラがみんなしてあんなに気持ちいいとしたら、これからは積極的に狙っていくべきだろうか？ 描写のあつたキャラで少女、あるいは幼女つてなると意外と少ないけど……とりあえずやりやすそうな女から狙っていくべきかな。

犯すのも嫌いじゃないけど、基本は和姦にするべきだよな。ギリギリ残った倫理観と

いうやつがそう訴えかけてくる。ヤツてみなきや解らんが、泣き叫ばれると萎える可能性もあるし。男性の遺伝子には、女が泣くと性的興奮が抑えられる要素があるって聞かしのね。

さて、それにしても……オーバーロードにおいて少女、幼女キャラか。どんな娘がいたつけ？ ナザリック勢は流石にちよつと置いておくとしてだ。というかあの勢力の女で和姦が成立するキャラっていないだろうしな。あるとすれば、主人に『あいつとヤレ』と言われた時くらいだろう。まあその可能性の方がありえんけど。

ヤリやすそうな、か……おお、そういうえば金でいけそうなのが帝国のワーカーにいたな。アルシエだつけ？ 一応少女といえる年齢だった筈だけど……今はそこまで窮してはないかな？ 一応候補には入れとこう。彼女の双子の妹も、ペド心をくすぐる年齢だったよな。機会があれば姉妹丼を検討しておこう。

あとはオバロの登竜門と名高い、カルネ村のエンリちゃん……はもう少女ってほどじゃないか。ネムちゃんは文句なしにチンポに響くが、もうナザリック勢と接触してる頃だろうしなあ。負ける気はしないが、さりとて無闇に敵対したいわけでもないし、優先順位は低い。

あとはロリババア枠のイビルアイと、竜王国の女王か。前者はよくチョロイン扱いされるが、彼女とセックスしたいならまずマッチポンプ劇場が必要なんだよな。『ぐわつ、

もう駄目だ……!』からの『大丈夫かい?』キラツ が必須項目だ。

そして彼女が苦戦する相手などそうそういない上、僕は演技が非常に下手だ。国を滅せるような吸血鬼が苦戦してしまふようなモンスターを用意したとしよう。そんなのとエンカウントした上、更にそれを倒せるような強者がピンチに駆けつけるってどんな確率だよ。どう考えても自作自演を疑われるし、それを逸らせるような演技力など持ち合わせていない。

うん、じゃあまずは竜女王だな。ドラウデイロンだっけ? 場合によってはロリコンアダマンタイト冒険者にロイヤルマンコを使おうとしたような節があるし、間違いないかと和姦でいける幼女穴だ。しかも幼女姿を堪能した後、大人バージョンでもやれると考えれば一粒で二度美味しいってやつだろう。

——行くか、竜王国。



ということ、獣人見てから塵殺余裕でした。縦横無尽に駆け回る剣士が斬撃と魔法でビーストマンを駆逐していく様は、竜王国の国民にとつて胸のすく思いだろう。超位魔法やら次元断切やらを連発できるような戦場つて中々ないし、僕としても割と爽快な体験だった。

職種もリキャストタイムも全無視で好き放題にできるのは元運営の特権だろう。あちらの世界でも勝ち組だったけど、こちらにすれば超絶勝ち組が確定しているのだ。迷いなど一切なかったのは、言うまでもない。

そんな殺しまくりシティを何日も続けていたら、ビーストマンに侵攻されていた領域をかなり押し返せたようだ。まあ橋頭堡という橋頭堡を軒並み潰していったし、当然の結果だろう。とはいえ、これほど馬鹿げた戦果を叩き出しても竜王国はまだ救われていない。

そもそもがお先真つ暗、亡国まっしぐらの詰み国家だったのだ。個人がひっくり返すのは無理があるだろう……まあ超位魔法の種類によっては可能だけど、一回で救っちゃったら有り難みも継続しないからさ。脅威が完全に去ると、人はすぐに感謝を忘れるものだ。それはよろしくない。

ドラウディロン女王陛下には是非とも、僕の肉棒を啜えて放さないような状況でいて

ほしいのだ。自分の穴の締まりが国を救うとなれば、彼女も王族として本望だろう。そんな妄想をしつつ数日が過ぎ、予想通り使者がやってきて女王との謁見の申し出を受けた。

もちろん受けましても。さて、どつちでくるのかな？ 大人バージョンか、幼女バージョンか……まあ僕の戦果に対する褒美なんて払う余裕もないだろうし、幼女の懇願以外の選択肢はないと思うけど。

「よ、よくぞまいった！ ぜんぜんからのきゆうなひきあげ要せ、ようせい……ひきうけてくれてかんしやる！」

「……」

「……」

「いえ。ドラウディロン女王陛下のご命令とあらば、たとえ地獄の底からでも馳せ参じましょう。感謝の必要など一切ございません」

おいおい、褐色ロリですかそうですか最高かよ。しかもなんなのあの衣装。女王がしいい恰好なの？ この位置からだと奥が、奥が……くそつ、ギリギリ見えないように調整されてやがる。

しかし女王と、あと傍に侍る宰相が露骨に安堵しているな。まあ急に現れた人間だし、そもそも竜王国の国民かどうかすら不明なんだ。女王に敬意を払うかどうかすら定

かじやなかつたろうし、たとえ僕が傍若無人に振る舞つてもあちら側としては頭を下げられないこの状況。

内心がどうあれ、片膝についておべつかを使う程度には、権威を大事にしていると捉えられたのだろう。まあ僕が大事にしているのは女王の幼女マンコだけだね。しかし想像を超えて、更に素晴らしい容姿だ。しかもこう……やるとなると、すべてを理解してくれるつてのがポイント高いよね。

無知な幼女ツクスはもちろん好きだけど、ロリババアとの大人の関係も良いものだ。どういう風を持つていくかな？ ただ唯々諾々と従うなんてあり得ないけど、横暴に振る舞つて体を要求するなんてガラじやないなあ。

「そのような謙遜をなされるな。貴殿の武勇、もはや伝説に謳われる英雄となんら遜色がありませんぞ。女王様と共に、私からも最大級の感謝を送らせていただきたい——それにしてもウンⅡエイ殿。その実力に対して些か名の通りが悪いように思えるが、以前はどこで活動しておられたのですかな？ 恥ずかしながら、今回の件で貴殿の名をようやく知りましてな……」

「ああ、それは仕方のないことでしょう。私がこの周辺諸国に来たのはごく最近のことですから。それまでは少し毛色の違う人生を歩んでいたのですよ」

「ほう……詳しくお聞きしても？」

「つまらない話ですよ。語る程に中身があるとも思えません」

「わ、わらわもききたいぞ！ えいゆう殿の話ならば、どんなものでもつまらぬわけがない！」

宰相が『ファインプレー！』といった雰囲気醸し出している。ふーむ、そうくるか。となれば交換条件だな。そつちが聞きたいんだつたら、こつちも聞かせてもらう……うん、間違いなく対等だ。何も問題はない。

「そうですね……しかし先程も申し上げましたが、わざわざ語る程のものではないのです」

「そ、そうか……」

「ですが、話のタネとしてならば悪くはないかもしれません」

「……む？」

「二人きりで食事でも如何でしょうか？ これまでの女王陛下の苦労は並々ならぬものでしょうが……しかし愚痴を吐き出す場など立場的にそうそうあり得ぬもの。私の過去もただの苦労話になりかねませんので、同病相哀れむという訳ではございませんが——胸襟を開いて語らう場としてどうでしょうか？ 臣下の方がおられては、吐き出すものも吐き出せぬというものですし」

ニコツと爽やかに笑う。先行き不安な国のトップにすげられた、可哀想な幼女王を気

遣う英雄、英雄英雄英雄英雄……うーん、ちゃんと下心を隠せてるだろうか。そつちの方は解らんが、とりあえず女王の生死に關しては問題ないと認識されてる筈だ。なにせやろうと思えばこの首都くらい落とせるし、あちらもそれは理解している。危険だと思わなければ、そもそも謁見が成立していない。

僕の言葉に、女王が宰相へと恐る恐る視線を向ける。あつ、宰相の女王を見る目が養豚場に送られる豚を見る目に……！ つてことは下心を隠せてないんですね解ります。その上で『食われてこい』と。まあ女王の純潔で数十、数百万の国民が生き延びられるとなれば、選択肢は一つきりだよな。

「それは素晴らしい提案ですな！ 女王陛下の心労については私共も思うところがございまして。幼き背に重責を負わせるばかりの、我らの至らなさ……！ どうかエイ殿との語らいで少しでも癒されますよう、切に願っております」

「よ、よ、よろしく願いますのじゃ……」

宰相さんマジ宰相。これじゃどっちが上か解らん。なんとというか、弁舌の立つ政治家を見てる気分だ。ものの言いようってあんなに多岐に渡るんですね。彼を睨む女王と、その視線を柳のように受け流す宰相。漫才コンビかな？

「え、えつと……にちじはいつにするのじゃ？」

「ご都合がよろしければ今からでも。いつでも拠点に移動できるマジックアイテムもご

ございますので……こちらの指輪をどうぞ。使い方は嵌めれば理解できるかと」

「う、うむ。つーかこれ相当なマジックアイテムじゃないのか……？」

「女王陛下！」

「あ、いや、その……このようなものを、いいのかとおもったのじゃ」

「ええ、どうぞ差し上げます。是非とも有効にご活用ください」

「そういう原作でもわりとずさんな演技力だったっけ？ まあほとんど描写されてなかったと思うけど。勘の良い人間なら、既に彼女が似非少女だということを見抜いていることだろう。まあ僕はそれ以前の問題だけだ」

「では参りましょうか」

「う……うむ……」

「めっちゃ嫌そう。嫌そうな少女そそる。いや別に嫌な思いさせたいわけじゃないんだよ。ちゃんと自分から腰振りたくなるくらいには持て成すって。だからそんな屠殺される前の牛みたいな目をするなよ。」

「ちなみに僕の拠点は、空間を隔てた場所にある。どこにも繋がっていないという点ではナザリック宝物殿にも似ているだろうか。あそこのロイヤルスイートには劣るだろうが、その分NPCには力を入れている。いやまあ力を入れてるってよりは、異世界にくることが解ってたからフレーバーテキストに力を入れまくった。」

職業構成もそうだが、テキストのところは『神を超えた腕のコック』だとか、とにかく『神のく』という言葉をつけまくった。いちいちレベルや職業構成を計算するより手取り早いし。モデリングはすべてつるとしたマネキンだが、とにかくそれぞれの分野において超一流のNPC達だ。戦闘要員はいないが、此処にいればあらゆる贅沢を堪能できる。

「む、おお…?」

「すごいだろ? 仕事やりつつ、ちまちまと拠点作ってたんだぜ。センスが無いから豪華に仕上げたりはできなかつたけど、実用性はパないのさ」

「エ、エイ殿…? その、くちようが…」

「こつちが素。さっきの謁見とか歯が浮きそうだったぜ。ドラウディロンも、もう演技いらんよ? 愚痴大会つつったじゃん」

「へ? あ、いや、え…?」

幼女を持ち上げて食堂へ連れていく。既に用意されている天上の美酒に、神々の食物。何回か食べたけど、もはやこの世のものとは思えないレベルだった。ただ中毒になりそうで、あんまり頻繁には訪れないんだよね。美味しいものしか美味しいと認識できないより、馬鹿舌の方が人生楽しそうだな。

「うまーっ!」

「ほら、こつちの酒もやばいぜ。素面じゃ愚痴も捗らんよな」

「うまーっ!?」

「いつき、いつき」

「んぐぐ……ぷはっ！　なんだ？　今まで飲んできた酒は水だったのか？　この香りの

高さは……」

「ノツてこうぜドラウ！　ほらほら、二十四時間苦惱オンリーだったんだろ？　吐いて

け吐いてけ！」

「ぬ……ぐ……ぬああああ!!　あのアホンダラ宰相！　私を娼婦かなにかと勘違いして
いるんじゃないのか！　ロリコンアダマнтаイトになんぞ誰がやられるかちくしょー
！」

「いいぞー！」

「ピーストマンのボケ共がー！　だいたい敵がそのまま食料にもなるとか反則すぎるだ
ろうが！　兵糧つて言葉知ってるのか奴らは！　あほー！」

「そうだそうだー！　……いや、ほんとにそうだな。戦争で食料無限つてなにそのチート」

「法国はもつと援軍をよこさんかー！　毎年毎年いくら払つてると思つてるんだ！」

「まあそれに見合う隊は来てるんじゃないのか？　集団戦で陽光聖典以上の戦力とか、
人間つて括りならまずいないだろ」

「…っ!? な、なんで知って…!」

「僕は割となんでも知ってるのさ。どうにかしようとはしてるけど、どうにもならないと薄々気付いている女王様の心情とかね」

「う、うう…」

「けどそんな心配も既に過去のこと! 僕がいれば全てはノープロブレム! だから明日のことなんて考えずに酔いつぶれたって、明日はやってくるのさ! 飲もうぜドラウ!」

「…本当に救ってくれるのか? 本当にか?」

「本当に本当さ。だから今はなんでもやっていいんだぜ。今は女王じゃなくていいのさ! ぜーんぶ放り出しても問題なし! 国のことなんて知るかーってさ、明日のことなんて知るかーってさ。そう叫んでも誰も咎めない。なんせドラウが放り出しても僕が勝手に解決するからさ」

「う、ううう…」

「そうそう、存分に泣いていいんだぜ——」

「うおおお!! 酒池肉林じゃああああ!!」

「ええ…」

無限に湧き出る酒壺に飛び込む幼女。つるべ落としかな? 酒に溺れるとはまさに

あのことだろう。作法を完全に無視して、手掴みで食べ物を読み漁る様子はおよそ王女とは思えない。完全にヒヤツパー状態である。

「楽しいかい？ ドラウ」

「楽しい！」

「そっか、よかつた。じゃあ酒池肉林って言ってたし、酒池の後はさ……どう？ よかつたら、 فقط」

「……うむ。よいぞ」

「っしやあ！」

「……楽しそうだな」

「ああ、楽しい！」

「そうか……ふふっ」

酒でずぶ濡れの幼女を抱いて、テーブルに乗せる。ちっばいにちゅうちゅう吸い付くと、高貴な酒精の香りと甘いミルクの香りが混然となつて鼻孔をくすぐる。なめらかな肌が程よく露出している衣装をほだき、足先から太もも、そしてその奥まで舌を這わせていく。

くすぐったいのか感じているのか、クスクスと笑いながら両足で僕の首を固定するドラウ。さてさて、もう完全に和姦だな。痛いほどに屹立した剛直を空気に触れさせ、僕

の首に足を巻き付かせたままの彼女を持ち上げた。肉棒の先端を、ドラウの逆さまになった顔に突き出す。そして彼女はいささかの躊躇もせずそれを口に含んだ。

——これが高貴な口マンコか。うん、拙さが良い感じた。目の前にある、割れ目も言えないぴっちりとした筋が背徳感をこれでもかと煽る。肉体的な気持ちよさはそれほどなのに、あまりの興奮のせいか一分も経たずに彼女の口へ吐精する。

苦しうに咽るドラウ。けれど我慢できず、弱々しく押し返そうとしてくる小さな舌を無視して、肉棒を奥へ押し込んだ。しばらくそのまま、長い射精が続いた。こくん、こくんと喉が小さく鳴る度に柔らかい刺激がチンポを包み込む。

すべてを出し切った後、ずるりと彼女の口からイチモツを引き抜いた。ネバネバとした糸が、彼女の小さな口と肉棒をいやらしく繋ぐ。荒い吐息を零しながら口の周りを舐め取る仕草は、一度射精して落ち着きかけた肉棒をこれでもかと誘惑してくる。

初めてがテーブルの上と言うのもあれだし、ベッドルームに行くか。雲でも掴んでいくかのように、軽すぎる彼女の体を抱きしめてベッドへ運んだ。少しだけ不安げなドラウの頭を何度も撫で、同時に舌で彼女の口内を蹂躪し尽くした。

いやらしく絡み合う舌は、まるで互いのそれが性器になったかのように錯覚させる。にゆるにゆるともつれ合いながら、何度も唾液を交換し合った。

——そしてドラウの雌穴から蜜が絶え間なく溢れ出した頃、僕はそこに肉棒をあてが

い……一
気に貫いた。

2話

執務室とは、悩み苦しむための場所である。少なくとも彼女——ドラウディロン・オーリウクルスにとつては、つい先日までそんな場所であつた。しかしそれも既に過去のこと。うんうんと唸りながら対症療法的に、その場しのぎの政策を取りまとめるだけの日々は終わりを告げた。

それが彼女にもたらしたものは、見た目によく似合つた軽やかな鼻歌と、つやつやとした肌の潤いだ。誰から見ても『ご機嫌』という風に政務をこなす姿は、幼い体軀と相まつて非常に微笑ましい光景である。

「随分と変わられましたな。女王陛下」

「うん？ そうか？　なんだ、どんな風に変つたというんだ」

「簡潔に言いますと……ふむ……草臥れ果てていたおっさんのようだった雰囲気、風呂上がりのおっさんのような雰囲気になりましたな」

「もう少し上手く言えんのか、お前は」

「しかしまあ、陛下の御身体一つで全てが良い方向へと進み出しました。我々としても、陛下のロリっぷりには感謝しきれません」

「二々口の減らんやつめ……だが、まあ外的外れとは言えんか。だがな、大人の姿でも同じくらいしたのだぞ？ 私の幼女姿に惹かれたのではなく、私自身に惹かれた可能性も大いにあると思うのだが」

「ははっ」

「鼻で笑ったな宰相！」

いつものようにコンビ漫才をしながら、各地に運び出す物資の流通を確認する女王。かつてあった国境まではまだ取り返せてはいないものの、着実に竜王国の領域を取り戻しつつある。そして無限とも思える物資の数々。彼女が王座についてから今まで、良い報告などは片手で数えられるほどだった。それが嘘のように、今では幸せの青い鳥が群れをなして飛び交っているような状況だ。

疲弊仕切った竜王国は、ピーストマンに追われて難民になった者達すら満足に養えない。どこの都市も食料が足りておらず、それは首都でさえも例外ではなかった。それをイチャイチャしながらのピロートークで知ったエイは、インベントリから取り出した物資を、首都を埋もれさせるかのような勢いで積み上げたのだ。

効率だけを考えるならば、彼が街を転位魔法で回ってばら撒いた方が手っ取り早い。しかし『王都』から各地に運び込まれたという実績こそが、結束の固い竜王国を更にまとめやすくする手段でもあった。加えて、ピーストマンを殲滅して周ったエイが事ある

ごとに『女王陛下ばんざーい』と叫んでいたため、ドラウディロンの人気はうなぎのぼりであった。

「しかしいったい何者なんでしょうな、彼は。陛下はお聞きになられたのですか？ 建前とはいえ、連れて行かれる前にそのような話をしていましたか？」

「うむ……そうだな。法国が崇める神が実在していたことは知っているな？ エイはそいつらと故郷を同じくするらしい」

「——つまり神そのものということですか？ それはまたなんとも……」

「いや、なんというかな……ものすごくぶつちやけられたんだが、単に常識が違うだけだと言われた」

「と言うと？」

「要は、だ。仮に私達が見知らぬ世界へ迷い込んだとするだろう？ そして現地の者は姿こそ我々と似通っているものの、強さはその辺の虫にも劣るレベルだった——そんな感じらしい」

「彼らからすれば我々こそが虫であると……なるほど。ということは、彼らには彼らの文明や国家が普通にあるということですか？ 無数の人々が暮らしているというのに、その内の一人ですらがちらでいう国家クラスの戦力以上であると……いやあ、想像できませんな」

「ちなみに彼ら基準で言うならば、六大神は平々凡々な冒険者程度らしい。逆に八欲王はアダマンタイトクラスのようなものと言っていたが……物差しが違いすぎて理解できんな、まったく」

呆れたように笑い合う女王と宰相。しかしそこには、今まであった暗い陰が微塵も感じられない。軽口を叩きあっていた時でさえ垣間見えた、押し込めていた諦観の感情が消失していた。久しく忘れていた『希望』という感情がそれを消し去ってしまったのだろう。

「さて、三日後にはまた来るらしいから……それまでに仕事を片付けるとしよう」

「……嬉しそうですな？」

「ぬっ……！ やかましい！ お前もさっさと手伝わんか！」

「あい畏まりました、女王陛下」

周辺国家全てから援助を受けたとしてもこれほど国が潤うことはないだろう。そんな確信と共に、自身の幸運に感謝しながら、ドラウディロンは政務に張り切るのであった。

うーん、どこかで噂されてるような気がしないでもないそんな今日このごろ。エ・ラ
ンテルにある黄金の輝き亭でお食事中なわけだが、まあこれが非常に美味である。もち
ろんNPCの作った料理には劣るんだが、だからといって不味く感じるわけもなし。

ちなみに何故ここで食事をしているかというところ、原作キャラを直接見てみたかったと
いうミーハーな好奇心故だ。ソリュシヤンお嬢様が癩癩をおこしてギャーギャー言っ
てるのは、演技と解っているのに見事なウザさだった。あの演技力、ぜひとも欲しい。

まあ接触するつもりはないから傍観してただけだけど、せっかく王国くんだりまで来
たんだしセックスしたい。この街にいる原作キャラで若い娘っていたっけ？ うーむ
……あつ、そういうえばニニヤなんとかって娘は男装の少女だったっけ。いや待て、今の
時期だと主人公と一緒にカルネ村か？

つーかどっちにしてもヤれるビジョンが見えんな。とりあえず放置しとこう。あと
は——あああつ！ 向こうをてくてくて歩いてるアイツはまさか……！ もしかして、
もしかすると……！

「クレマンティーヌ！」

「っ!？」

「クレマンティーヌか？　おお、やつぱり！　クレマンティーヌだ。みんな大好きクレマンティーヌ、僕も大好きクレマンティーヌ」

「ああ？」

嫁になったり仲間になったり奴隷になったり、素材になったり餌になったり、可哀想な過去を持つてたり持つてなかつたりするクレマンティーヌさんじゃないか。あらゆる二次創作から引つ張りだこの、謎の人気を誇るマンさんだ。

ロリ属性はないけど、オーバーロードのカリスマと言つてもいい彼女とは是非エロいことをしたい。しかも僕が彼女を留めることによって、さきほどのニヤなんとかさんを助けることにも繋がる素晴らしい出会いだ。

「僕だよ僕！　忘れたのかい？　ますます美人になったねえ、クレマンティーヌ」

「え……？」

「え、なにその『マジで誰だ』みたいな顔……え？　ほんとに覚えてないの？　それは――……もしかして法国にいる間、頭を弄られた記憶はあるかい？」

「なっ……！」

「これぞ『人を疑うな、自分を疑え』アプローチだ。色々暗い部分があるあの国だか

からこそ、知らぬ間に脳を弄られていた可能性が無きにしもあらず——という無茶苦茶な設定である。動揺するクレマンちゃん可愛い。

「くそっ……！ まさか漆黒聖典であるクレマンティーヌすら実験動物にするなんて……！」

あの外道国家、よくも……！」

「……！ ね、ねえ。ほんとに知り合いなの？」

「いや、初対面だけど」

「死ねオラアアー!!」

草。まだ日が暮れたばかりなんだから、こんな往来でステイレット抜くなよ。しかしどうしたものか……彼女との和姦条件はなんだろう。原作キャラの背景をある程度知ってるからこそ、レイナーズちゃんやらドラウやらをいただけたわけだが、クレマンちゃんが股を開く理由ってなんぞや。

おっと、とりあえずステイレットはデコピンで弾いところ。あ、消し飛んじやった。目を見開くクレマンティーヌ可愛い。思わず飛蝗のように飛び退いた彼女——の背後に立つ。壁かと思つたら僕でしたゲーム。振り返って、信じられないものを見たようによろけるクレマンちゃん。

「あいむ『プレイヤー』！」

「なっ……！ 『ぶれいやー』!?!」

「あ、ごめん嘘だわ」

「て、てめえ……!」

「プレイヤールの更に上、『運営』が僕ね。そこ重要」

「ぶれいやーの……上?」

「ん……解りやすく言うなら、プレイヤールを管理する側の方さ。つまり実力差も推して知るべし。例えば君たちはプレイヤール人が敵に回ったら、国家単位で対抗しなけりゃきついだろ? そんなプレイヤール達を、最大規模で千二百万人近く管理統括してたのが僕達『運営』」

「はっ……嘘くさっ。どこでぶれいやーなんて単語聞いたか知んないけど、ほどほどにしとかなないと法国の暗部が殺しにくるよ?」

「ま、神の存在証明なんて実質不可能だしね。でも絶望的な戦力差は理解してるんじゃないの? 仮に君が千人に増えたところで、僕は負けないぜ」

「ぐっ……」

おらおら。無理矢理は好みじゃないけど、悪人にならちよつとくらいの強要は許されるんじゃないか? 苦しむほどではないだろうけど、まったく振りほどけない力の差はありありと感じている筈だ。必死に藻掻く彼女を、微動だにせず掴み続ける。

「ちっ……! ……それで? あんたがその『うんえい』だったとして、私に何か用でもあん

の?」

「セックスしない?」

「死ね」

「待て待て、もちろんタダじゃないぜ。やらせてくれるなら、君の願い事をなんでも一つ叶えてやろうじゃないか。自慢じゃないけど、叶えられないことの方が少ないぜ僕って奴は」

「じゃあ今すぐ自害」

「……」

「自害」

「なんなのコイツ。なにマンティーンだよちくしょうめ。まあ自害して復活することには可能だけど……死んだ僕と復活した僕って連動してるのか? 正直あんまり試したい事柄じゃないし、御免こうむりたい。」

「却下」

「あれー? なんでもって言ったのにー? 神様でも嘘はつくんだー」

「ぐっ……! …ちえつ、じゃあいいよ。無理やりしたいわけじゃないしい……あ、一つだけ忠告しとくぜ。この街で騒ぎは起こさない方がいい。プレイヤーがいるからね」

「は……? あ、ちよつ、待っ……ていうかなんで私のこと知って——」

いいさいいさ、他にも女の子はいっぱいいるもんね。最後の忠告は僕の優しさだ。あ、大人の女性に虐められてささくれだつたこの心、ぜひとも純粹無垢な少女に癒やされたい。誰かいないか？　：おお、純粹といえは正義。正義と言えは聖騎士。聖騎士と言えはローブル聖王国。聖王国といえはネイアちゃん。

犯罪者のような瞳とは裏腹に、その心は純粹だ。純粹すぎて染まりやすく、最終的にちよつと狂信者つぽくなつたネイアちゃん。いいんじゃないか？

——よし、行くかローブル聖王国。



ぴつかぴか。今の僕はとにかくぴつかぴかである。煌めき、輝いている。まさに純白の聖騎士。誰がどう見ても、どこに出しても恥ずかしくない聖騎士っぷりだ。もちろん職業も完全に聖騎士よりのものに変えてるし、中身以外は立派な聖なる騎士でござい。

そんな僕がいま彷徨っているのは、首都ホバンスの中でも中心部にある裕福なセレブ街。確かネイアちゃんの家ってかなり裕福だった筈だから、会えるとしたらこの辺りだろう。聖王国が誇る『九色』の住居……その辺の人に聞いたら普通に教えてくれた。まあこんな世界で個人情報もクソもないよな。

着いた着いた。うん、中々に立派な邸宅だ……ん？ 誰かが家の前で剣を振っている。熱心なこと——って、もしやネイアちゃんでは？ ああ、やっぱりそうだ。なんだなんだ、犯罪者瞳なんて書かれてたけど全然可愛いじゃないか。むしろ内心を知っているとギャップ萌えが捗るな。

まあ、そもそもこの世界って『ブサイク』全然いないからな。現地基準で微妙な娘も、リアルなら普通に可愛いレベルだ。ネイアちゃんの間目も、なにも知らなければ嫌われてしまったのかと勘違いしてしまう鋭さだが、僕は知ってるから問題なし。はい、かわい子ちゃん。セックスしようぜ。

「やあ、精が出るね。けどもう日も暮れてるし、治安が良いとはいえ程々にね」

「……?! あ、は、はい……その、父か母のお知り合いですか？」

「そう見えるかい？」

「あ……はい。あの、あなたより聖騎士らしい人って、あんまり見たことありません……人間ってやっぱり着てるもので判断されるよねー。見目の良いアバターではあるけ

ど、この装備を脱いでボロキレを纏えば、やっぱりホームレスとしか見られないだろうし。しかしなんと、見てて可哀想な少女だ。剣の才能が欠片もないのに、剣を振っている少女……うーん、これは僕がなんとかしてやらねば。そしてお返しをしてもらおう。

「もう一度剣を振ってみて」

「えっ? ……は、はい」

「もう一度」

ダメダメだわー。中身以外は聖騎士の最高峰たる僕が言うけど、ダメダメだわー。というようなことをオブラートに包んでやんわりと伝えると、ネイアちゃんの鋭い瞳がじわわりと潤んできた。なにになに? 自分でも気付いてるって? 父親にもそれとなく諦める的のことを言われてると。父親の血を濃く継いだのか、弓のほうに適正があると。

それでも母親のように剣を振るう立派な聖騎士になりたいと。つてそれ父親ナミダ目じゃないかオイ。まあでも、なるほど納得。憧れは何にも勝るモチベーションだもんなあ。僕も子供の頃は、撃てもしないかめはめ波を散々練習したもんだ。拳句の果てに『練気弾』くらいならいけるんじゃないかと、よく掌を上に向けてぶるぶるさせてたわ。あの頃から無意識にヤムチャさんを侮ってたんやなつて。

「ふうむ……よかつたら少し稽古をつけてあげようか？」

「え……いえその、でも……」

「強くなりたいたいなら、どんな機会も逃さない貪欲さつてのも必要だぜ。凜々しい目をしてるけど、ネイアちゃんは引つ込み思案の気があるね。君の尊敬する聖騎士は、常に胸を張つて堂々としてるんじゃないのかい？」

「……は、はい」

「自慢じゃないけど、僕に勝てる人間なんてあんまりいない程度には強いからさ。良い機会だと思つてかかつてきな」

「……はい！ よ、よろしくおねがいます！ ——せやあつー！」

一応、様にはなつてゐる振り方で僕を攻撃してくるネイアちゃん。しかし本当に純粹無垢な娘だなあ。いきなり声を掛けてきた男が稽古つけてやるつて、もうちよつと怪しむとかなんとかすると思うんだけど。それとも、よほどこの格好が効いたのかな？ 聖騎士への憧れが凄しいし、無条件に信じてしまったのかもしれない。

いなして、躲して、偶に反撃。圧倒的な実力の差は既に感じてゐるだろう。少し遠慮がちだった打ち込みも、今では『なんとか当てるくらいはしてみせる』と全力だ。でも当てるのに意識を割きすぎて、もはや振り回してるだけになつてゐるな。

「うん……やっぱり、あんま剣に適正はないね」

「…っ、う…」

「そもそも体が剣を振る体じゃないんだよ。強くなりたいなら、まずはそこからだね」

「体、ですか…?」

「ああ、こつちじやそういう考えはあんまりしないんだっけ。そっか…:うん、ならちよつと僕がやってあげようか」

「あ、あの…?」

「さあ、エロのお時間です。大丈夫大丈夫、ちよつとマッサージするだけだから。ちよつとエツチな感じになつちやうかもしれないけど、下心とかはほんとにないから。ほら、リラックスして。しかし聖騎士訓練生用の服つて薄くてエロいなあ。」

「——っ！ や、やめっ…!」

「ほら、ちよつとの間だから。我慢しな」

「事ここに至つて、ネイアちゃんもようやく不信が形になったようだ。自分に女としての魅力がないと思つていたからか、割と無防備だった態度が一変した。けれど関係なく、力で抑え込んで体中を不躰に触つていく。」

「ひっ…! やめっ、やめてください！ いやっ…!」

「ちなみに本気で無理やりする気はない。これは単なる布石だ。この変態的な行為が『本当に必要だった』と思わせるための布石。どう考えても敵わないと悟つたのか、

ぎゅつと身を固めて涙を零すネイアちゃん。可愛い。

「はい、終わり。じゃあもう一回模擬戦をしてみようか」

「ひっ……！ ……え？ あ、え……？」

ネイアちゃんの体をまさぐり倒し、堪能しきった後に時間を止める。インベントリからコンソールを取り出し、彼女を対象にステータスを弄る。異世界にすることが解っていたから、わざわざ管理者権限の全てを『アイテム』として具現化した一品だ。なんでそんな非効率をするんだという同僚の目も既に懐かしい。

現地の人の構成まで弄れるとは思っていなかったけど、作っていてよかった機能だ。とはいえ操作できるのは構成だけであって、経験値を無かったことには出来ないし、逆に増やすこともできない。けど『強欲と無欲』に経験値はぶっこんでるし、そこから引き出してレベルを上げるのは可能だ。

弓術の職業消して、剣士の職業追加して、ついでにレベルも三くらい上げとこう。これだけやれば、完全に実感として認識できる変わりようの筈だ。

「無理矢理でごめん。けどこれでだいぶ剣士に近付いたと思うぜ。ほら、かかってきな」

「は、え……」

混乱しきった頭で、それでも剣を振りかぶってくるネイアちゃん。そしてその一撃は

——先ほどとは雲泥の差だ。速さも鋭さも、そして威力も段違い。相対する僕がこれだけわかるんだから、本人はもつと認識しやすいだろう。

それを証明するかのように、一撃を振り終わつた後、呆然と自分の腕を見つめるネイアちゃん。その隙について、ややゆつくりめに剣を突き出す僕。先ほどであれば無様に食らつていただろうが、彼女はすぐさま反応して、僕の一撃を横薙ぎに防いだ。

「え……嘘……？」

「嘘じゃないぜ。ここまで変わる娘も珍しいけど、ちゃんと効果あつただろ？ ま、勘違いされるのも仕方ないけどさ」

「あ……！ そ、その、ごめんなさい！ エイさんは善意でしてくれたのに、疑うなんて、私……！」

ふはは、そうそう。存分に罪悪感を覚えてくれたまえ。これで彼女は容易に僕を疑うことができなくなつた筈だ。つまりもつとエロいことをしても、ある程度までは許容範囲！

その後も彼女の特訓に一時間ほど付き合ひ、親交を深めた。後ろから抱きつくようにして構えを修正したり、頭をなでなでしたり。そしてその間、事あるごとにネイアちゃんの容姿を褒めまくつた。彼女のコンプレックスである怖い目も、僕にはとてもキュートに映ると何度も囁く。

イケメンかつ強い聖騎士で、更には自分を強くしてくれて、その上で可愛いと褒めそやしてくる男。たった数時間とはいえ、これで好意を抱かない女性の方が少ないと思う。最後には相当ボディタッチしてたけど、嫌がる素振りもなかったしね。

「そういえば今更だけど、ご両親はどうしたんだい？ 家の中から気配も感じないけど」
「ふう、ふう……あ、えつと、父は数週間ほど国境に駐屯してます。母の方は王宮の番で明日まで留守にしてるんです」

「ありや、そうなんだ。大変だねえ」

「いえ！ 父も母も国のために任務を果たしています。私もそんなふうになりたいって、ずっと思ってるんです……まだまだ実力は足りませんが」

「そっかー。立派だねえ」

「立派だなんて、そんな」

いや、立派立派。だからそろそろオマンコさせてくださいお願いします。流石にそろそろ我慢の限界だ。僕に真面目さは似合わないんだよ。

「さて、じゃあそろそろ……対価を貰おうかな？」

「たい——えっ？」

「まさか無償でここまでするわけないだろ？ それがまかり通るなら、教師だの指南役だのも商売上がったたりつてもんだ」

「え、でも……あの……」

ちよつと『裏切られた』つて感じになつてゐるネイアちゃんも可愛い。ほらほら、そんな顔しないでさ。要求するものは、別に大金とかじゃないから。動揺してゐる彼女の顎をくいっと持ち上げ、桜色の唇を塞ぐ。

「んむっ——!? ……ぷはっ、ひゃ、あ、あ、あのっ……！ エ、エエエ、エイさん!」

「対価……払つてくれるよね?」

「あ、う……」

体を対価にしてくれと、視線で訴えかける。まだ恋愛とすら言えない感情だろうが、この世界なら攻略可能域まできてるんじゃないやなかうか。そもそも割と性に寛容な社会だし、十代半ばで処女卒業は全然普通だ。二十ちよいの聖王国女傑三人組が行き遅れ扱ひされてるんだから、むしろそろそろ卒業しとかなきゃ恥ずかしいまである。

卒業相手としては申し分ない筈だ。押し押せでいけば必ず応えてくれると信じてるぜ、ネイアちゃん! お願いしますお願いしますお願いします。

「あ、あの……はい。私なんかで、よければ……」

やつたぜ。じゃあ僕の拠点までご案内つと。ベッドの上まで直行転移だ。何が起こつたのか解らない風の彼女を抱きしめ、汗でびっぴちりと張り付いた訓練服を剥いでいく。真つ赤な顔で、先に体を洗わせてくれと懇願された。断る!

「じゃ、じゃあダメですっ！ ダメー！」

「一回良いって言ったから、もう聞きませーん」

「う、うううっ……！」

小さな胸も、毛の生えていない恥丘も、どこもかしこもじんわりしょっぱいな。だがそれがいい。これだけは二十を超えた女性には出せない魅力だ。匂いフェチってわけでもないし、汚いのが好きだとかいう性癖は持ち合わせていないけど、白人系の少女とか幼女の分泌物ってまったく汚さを感じないよね。

「舐め、舐めないで……！ ひやうっ!？」

「よくほぐしとかないとねー」

「んっ、あ、あつ、いっ——はっ、ひやう……」

感度バツグン、指で感じる締めりもバツグン。やはり原作キャラは何か特別なものがあるんだろうか。ドラウも幼女のキツマンの癖して、三段締めの名器だったし。これは否応なしに期待感が高まるな。魔法で痛覚を鈍化させて、ぐちよぐちよになったネイアちゃんの穴に肉棒をあてがう。

「よっ……と」

「——うあつ!?! んっ、あつ、いっ、ひあつ……?! あぐっ、は、んうっ!？」

十三、四歳の穴というだけでも最高なのに、やはり締め付けもチンポを悦ばせること

に特化している。しかもこのうねりに加え、数の子天井つてやつなのか、亀頭に感じる違和感が射精を促してくる。

ガシガシと激しく腰を打ち付け、粘性を含んだ卑猥な水音をこれでもかと響き渡らせる。ネイアちゃんもガツツリ感じてくれているようだし、これは素晴らしいセックスだ。快感に喘ぐ彼女の口を塞ぎ、舌で口内をねぶる。

チンポで膣内を犯し、舌で口内を犯す——まったく、最高だ。こみ上げてきた射精感を限界まで我慢し、びくんと彼女の体が震えた瞬間、一気に解き放った。腰の動きを止め、限界まで彼女の股に腰を押し付けた。搾り取るようにうねり締まる彼女の穴に、子宮に、白濁とした精液を注ぎ込む。

「は——あつ、あ……」

「ほら、呆けてないで。あと三回は射精すからね？」

「……ふえ？ うしよ、そんなの、む、むり……む——んうっ!! も、もうかたくなっひえ……」

「やばいなこれ。一生挿れときたい名器だぜ、ネイアちゃん」

「んっ——あつ、あ、あ……」

蕩けた表情で腰砕けになったネイアちゃん。正常位だった彼女をひよいと裏返し、先ほどとは逆になった膣の感触を堪能する。

——
まだまだ夜は長そうだ。

3話

ローブル聖王国、首都『ホバンス』。その都市の一角にて、聖騎士の女性と、聖騎士見習いの少女が剣を交わしていた。当然のごとく劣勢は少女であったが、しかし見るものが見れば驚愕で声を上げただろう。

聖騎士の方は、ローブル聖王国の中でも上位に当たる猛者だ。そんな彼女と曲がりなりに『戦い』と言えるレベルで模擬戦を繰り広げているのである。それが単なる訓練生ともなれば、その若さも相まって将来を有望視されることに疑いはない。

「驚いた……！ どうしたの、ネイア。数日で見違えたじゃない。いったい何があったの？ 母さん、びつくりしたよ」

「えへへ……」

「むう……」

見習いには似つかわしくない、魔法の力を秘めた剣を鞘に戻し、少女——ネイア・バラハははにかんだ。剣の道を目指すことを褒められても、剣の腕そのものを褒められたことはなかったのだから、嬉しさもひとしおといったところだろう。数日前とはまるで別物になったその力を、憧れの象徴である母親から褒められ、ネイアは誇らしげに胸を

張った。

そんな彼女の様子を不満げに見つめるのは、二人の戦いを見学していたネイアの父『パベル・バラハ』だ。間違いなく弓の適性があった娘が、数週間ほど家を離れていた内に剣に熟れていたのだ。威厳ある父親として、娘に弓のなんたるかを教授するという妄想が崩れ去ったのだから、彼の不機嫌も仕方のないことかもしれない。

「お母さんとお父さんがいない時にね、稽古をつけてくれた人がいたの。すつごく強くて、教え方も上手で……それで強くなったの！」

「へえ…… にしても、ちよつと信じられないくらい成長だよ。どこの誰か知らないけど、教導官に打診したいくらいだねえ。どんな人なんだい？」

「うん、ちよつと珍しい名前……ウーン||エイさんって言うんだ。凄く立派な聖騎士って感じの人だね……！」

「——ウーン||エイだと?」

「あら、知ってるの? あなた」

「うむ……前線は情報が早いからな。いや、しかしこの国に居るとは思えんが。そもそも存在自体少し疑わしいというか……」

「エイさんのこと知ってるの? ねえ、聞かせて! エイさん、あんまり自分のこと話してくれなかったの」

「いや、正直眉唾ものの話ばかりでな。単なる噂でしかないと思っただけ……うむ」

「どんな噂なんだい？」

「信じられん話ばかりだ。竜王国に急に現れた英雄だの、十万を超えるビーストマンを屠つただの……最強の剣士だと言う者もいれば、信じられん威力の魔法を使う詠唱者だという話もある。胡散臭い噂だが、しかし竜王国が窮状を脱したというのは事実らしくてな」

「ふうん……？ どうなんだい？ ネイア」

「うん、絶対同じ人だよ！ 剣の腕も凄かったのに、転移の魔法も使ってたもん。エイさん、そんな凄い人だったんだ……！ わあ、わあ……！ 私、そんな人と——」

「……?! 待ちなさい、ネイア。『そんな人』と……なんだ？ 何があつた？」

「えっ？ う、ううん。なんでもない。そんな人に教わったんだな、って思っただけ！」

娘の変化に目ざとく気付いた父親が、殺し屋のような目を更に鋭くさせる。まさに視線だけで人が殺せそうな瞳だ。誰が見てもネイアの父親だと言うことが丸わかりな、遺伝子の妙である。

そんな父親の追及を躲しながら、ネイアはプレゼントとして貰った剣を抱きしめる。これは間違いなく君が持つべき剣だ——と、微笑みながら渡してくれた瞬間を脳裏に浮

かべ、頬を染めた。そしてその様子を見て、更に怒気を強めるパベル。溺愛している娘にいったい何をしてくれたのかと、両手をボキボキと鳴らし始めた。クスクスと母親が笑い、娘が慌てて父親を諫める。

——とある三人家族の、そんな日常であった。ちなみにネイアが持つ剣の名前は『アルティメイト・ツヴァイヘンダー・スーパ』……とある弓の同シリーズ武器である。



元漆黒聖典、現ズーラーノーン所属であるクレマンティーヌは、己の悪癖に対しこれ以上ないほど後悔していた。先日エイに警告された彼女は、苛つきながらもその助言をしかと受け入れた。ふざけた言動を繰り返すふざけた男であっても、その実力は本物なのだ。ならばその言葉を軽々と扱うほど、クレマンティーヌは愚かではなかった。

しかし行動そのものを止めるには、彼女を取り巻く事情が許さなかったのだ。そもそ

もクレマンティーヌは、いくら嗜虐趣味であったとしても、わざわざ街を滅ぼすような面倒事を計画する人物ではない。ならば何故か——その理由は「元」漆黒聖典という部分に集約される。

国の暗部から抜け出した彼女を抹殺せんと、風花聖典が追手をかけているのだ。とはいつても、追われる最大の理由は国の秘宝を盗み出したという一点に尽きるため、まさに自業自得だ。

人が移動すれば、どう気をつけようとも痕跡が残る。そして探索に特化した風花聖典は、どんな小さな痕跡も見逃さない。一時を逃れたとしても、いずれ捕捉されるのは自明の理であった。だからこそ必要なことは、足跡の完全な抹消だ。

彼女は追手を完全に撒くため、エ・ランテルを死の街に変えんとする同僚へ手を貸したのだ。街がアンデッドの巣窟になってしまえば、いかに風花聖典といえども追跡は困難を極める。そんな目論見を持って行動していたのだが、クレマンティーヌはエイとの邂逅により予定を少しばかり変更していた。

『プレイヤーがいる』と警告してきた意味を考えれば、取るべき選択肢は限られる。きつとそのプレイヤーは騒動を解決するのだろう。それはきつと予定調和で、街の壊滅は期待できる状態ではないのだろう。しかしそれなりの規模の騒動にはなる筈だ、とクレマンティーヌは考えた。

彼女はもともと計画の半ばまでは墓地にいる心算であったが、それを変更し、計画のキーパーソン——『ンファイレア・バレアレ』を誘拐した後、騒動の開始と同時に逃走を開始することに決めたのだ。

騒動の大元は墓地故に、解決する者がいればそちらに向かうだろう……そう考えて。風花聖典もアンデッドを完全に無視はできない以上、逃走成功の確率は低くない。『これならぶれいやーが居たところで問題はないだろう』と計画を進めた彼女であったが、結果だけを見れば無駄な足掻きだったのだろう。

全てが中途半端だった。やめるのならすっぱりとやめるべきであった。一応殺しは控えておこうと、誘拐の際に一戦交えた冒険者に情けをかけるのなら、温情を貫くべきであった。ハンティングトロフィーである『冒険者プレート』だけは頂こう——そんな色気を出してしまったが故に《ロケット・オブジェクト／物体発見》を使用したプレイヤーに追いつかれる羽目になったのだ。

（まずいまずいまずい……くそ、間違いなくぶれいやーだよな……？ 戦闘は悪手——
つつても逃走も厳しい、か）

「どうした？ あれだけのことをやらかした割には、随分と大人しいじゃないか」

「…プレートは返すからさ、見逃してくんない？ 実行犯はカジツちゃんだし、そこま
で悪いことしてないよー？」

「無理な相談だな」

「……ちつ」

エ・ランテルからかなり距離を稼いだというのに、追いつかれた事実。それは標的を捕捉し、容易に距離を縮める手段があるということに他ならない。彼女にとつて『ぷれいやー』とは『神に等しい実力を持つ者』という認識だ。番外席次という別格の存在が知識にあるクレマンティヌにとつて、それを超える実力を有しているであろう人物との戦闘はありえない。選択肢にもならない愚かな一手だろう。

故にここを逃れたいば、詭弁を弄する以外にない。しかしにべもなく、取り付く島もない様子に彼女は忌々しげに舌打ちをする。他に何かないかと、思考に隙を見せたその瞬間——彼女は閃光に貫かれた。

「ガッ……!?!」

「モモンさ——んに舌打ちをするとは、身の程をわきまえなさい下等生物。そもそもこれだけ手を煩わせただけでも万死に値すると言うのに、こともあろうか見逃せなどと——」

「ナーベ。そこまでにしておけ」

「——はっ!」

まさにゴミ虫を見るような目。ナーベと呼ばれた魔法詠唱者の瞳を見て、体中の痛み

を忘れるほど怒りを覚えたクレマンティーヌ。しかし実力差は如何ともし難く、そもそも既に抗うほどの体力が残っていない。

たった一つの魔法で勝負がついたことに、やはりふれいやーかと歯を軋ませる。せめて負け惜しみでも、負け犬の遠吠えでも、なんでもいいから一矢報いたい。彼女は自身の命よりも、目の前の敵の顔が歪む様を見たかった。

——けれど現実残酷で、目の前の男は虫が何を言おうとまったく気にしないだろうと、クレマンティーヌにはなんとなく理解できてしまった。それでも自身が英雄級であるという自負、あるいは矜持ゆえか、痺れの残る体を鞭打って立ち上がる。

「ほう。ナーベの一撃を食らって立つとはな……今までで一番レベルが高いか……? どうせなら持ち帰るのもアリか……ふむ」

「どうされますか?」

そんな彼女の必死の行動も、彼らにとつては珍しい虫を見つけた程度にしか映らない。それがどうしようもなく悔しくて、腹立たしくて、クレマンティーヌは怒りのあまり奥歯を噛み砕いた。ガギリと耳障りの悪い音が響く。

(なにか、なにか……なにかないか? あいつらがちよつとも悔しがるなにか……)——
「っ! そうだ、アイツ……ふれいやーを管理してると言ってた……ほんとかどうかなんて解らないけど……)」

「クレマンティーヌ、だったか。服従を誓うというなら、今すぐには殺さないでいてやるが……どうする？」

「はっ……！　なんか調子に乗ってるねー。自分が絶対だつて信じてるその態度……クソむかつく」

「少なくともお前程度になら、絶対の力だと思いがな。それより返答を聞かせてもらおうか」

「……たかがいち『ぶれいやー』が……調子に乗ってるって……アイツが知ったら、どうなるかな。くひっ……！」

ぶれいやーに対してこのような言葉を吐いたと知れば、法国の上層部は『何をしてくれたのだ』と憤るだろう。そんな光景が手に取るように浮かび、クレマンティーヌは状況も忘れて口を歪める。しかし男にとっては予想外の言葉だったのか、驚きを露わにする様子に、彼女は少しだけ溜飲を下げた。

「……っ！　……その単語はどこで知った？ 『アイツ』とは誰のことだ。返答によっては、地獄すら生温いと感じる場所へ——」

「私ってさあ！　……『うんえい』のお気に入りなんだよねー。こんな目に合わされたつて『うんえい』が知ったら……どうなるかなー？　くふ、くひゃっ」

「なっ……!？」

「あ、あの、モモンさ——ん？ どうされましたか？ あの下等生物の言動が不愉快でしたら、すぐに消しますが……？」

「ま、待て！」

蜘蛛の糸を掴んだ、とクレマンティーヌは口元を歪める。まさか男の言葉が事実だったとはと、驚きと共に喜悦が混じる。生き延びるためには頭を垂れる必要があり、しかし彼女はその選択肢を選ぶような性格を持ち合わせていない。故に完全に詰みの筈だった彼我の関係——それが覆され、彼等の立場は揺蕩い、対等な交渉の余地が生まれた。

「じゃあ——ちよつとお話しましょうか？ くくつ」

「……そう、だな。そうするとしようか」

——かくして狂人と死の支配者の交渉が始まった。それがどこに向かっていくのかは、まさに神のみぞ知るといったところだろう。



…はっ！　なんかクレマンちゃん危険な目にあってるような気がする。いや、気のせいかな？　あれだけ警告したんだから、まさかプレイヤーに喧嘩を売る真似はしないだろう。何とも言えない嫌な予感を振り払い、僕は目の前の敵に向き直った。

「――〈次元断切〉」

「うおっ…!?　ほんとにすげえな、エイの旦那」

「そりゃあ勘違いだぜ、ヘッケラン。僕が凄いいんじゃなくて、僕が使う技が凄いのさ」

「同じことでは…?」

「ノンノン、同じように全然違うんだよ。ロバーデイク」

なんせプレイヤースキルで言えば初心者と大して変わらないからね。管理者権限がなけりや話にならないお粗末さだ。まあそんなところまで話すつもりはないけど。

ん？　いったい何をしているのかって？　なにつてそりゃあ、未踏破の遺跡を『フォーサイト』の面々と一緒に攻略してるのさ。もつと言えば、アルシエちゃんの未踏破オマンコを攻略するために行動してるのさ。

ここまで持つてくるのは結構苦労したぜ。まずトブの森の中域にダンジョンを作つてさ。それでそれとなく噂を流して、欲に目のくらんだワーカーに探索させたんだよ。そして彼等を無事に帰せば、一攫千金の夢を掴んで悠々自適に引退したワーカーさんが

一組、出来上がるじゃん？

しかも途中で引き返してそれだ。奥にはまだまだ価値のあるお宝が眠っている可能性もある——あるが、彼等は身の程を弁えた優秀なワーカーだった。既に孫の代まで遊んで暮らせる大金を手に入れたのだから、奥まで進む必要性はないと帰還したのだ。

大金は人を惑わせる……が、それが馬鹿げた金額ともなると別のものが生まれる。〃余裕〃だ。もうあくせく働く必要もなければ、危険に身を置く必要もない。そんな環境を手に入れた彼等は、幸せをお裾分けすることにも寛容だった。

ワーカーとしては中々のお人好しである『フォーサイト』。そのチームの一人が金に困っていると聞けば、金を恵む程ではなくとも、ダンジョンの情報を教えてやる程度に恩を受けたことがある——まあそんなワーカーを僕が選んだわけだけど。

かくしてフォーサイトは秘密のダンジョンを目指し、トブの森へ向かった。そして僕はアルシェちゃんのケツを追ったわけだ。ちなみにダンジョンは森の東の方……二次創作に出てきてはすぐ殺されちゃう系トロール『グ』さんの住処から、そう離れていない場所へ作った。

人間種以外には探知されないように設定してあるから、変に荒らされることもない。しかしそこを目指す人間まで気付かないわけもなく、フォーサイトはもの見事に捕捉された。彼等のレベルでは『グ』の打倒どころか、逃走すら難しいだろう。

よく雑魚描写される『グ』さんだが、仲間の存在を加味すればガゼフでも死は免れない強さを持っているのだ。ミスリル級程度のフォーサイトには厳しい相手だろう。

唯一『グ』に再生不可能なダメージを与えられるアルシエちゃん。彼女が優先的に狙われるのは当然で、それを必死に妨害するヘツケランやイミーナちゃん……それを援護するロバーデイク。

しかし奮戦むなしく、凶刃に倒れ伏す仲間たち。『空を飛んで逃げろ』と叫ぶ仲間、涙を零しながら首を横に振るアルシエちゃん。嗤いながら毒の滴る剣を振りかぶる『グ』さん——そんなところに危機一髪で駆けつけた僕。まあ見計らってただけだけでも。

イケメンナイトよろしく、わざわざ彼女を抱きしめて、片手で大上段からの一撃を受けとめた。その後はお決まりの虐殺フルコースだ。取り巻きのトロールを首チョンパして、再生する前に六位階の魔法で焼いた。

ちなみに今の職業構成は戦士よりの神官魔法剣士である。ユグドラシル基準で言うところと中位職だけで構成されたゴミつぶりだ。でもあんまり高位階を使用できちゃうと、アルシエちゃんが『おげええ!!』しちゃう可能性があったからさ。気遣いの出来る男つてやつだ。

なら戦士職だけでよかったんじゃないかって? いやいやなに言ってるの。彼女よ

り高位階の魔法が使えるという事実は、命の恩人というのにも相まって好感度をアップさせるのに一役買ってんのよ。ついでに回復も使えると恩を着せやすいし。

ことが終わった後、しきりに感謝される僕。うーん、なんとも心地良いじゃないか。セックスとはまた違った気持ちよさだ。しかしきつとアルシエちゃんの穴には敵わないことだろう。会話する内に目指す場所が同じだったと互いに知った僕らは、仲良しこよしでダンジョンへ侵入したってわけだ。

彼等も彼等で、ある程度の打算是あつたのだろう。自分たち以外の人間がダンジョンを目指しているという事実は、既に情報が漏洩しているということに他ならない。つまり時間をおけばおくほど宝を得る可能性が低くなるということだ。普通に考えれば、これだけ消耗したチームが一度引き返さない道理はない。

しかしその間に他の冒険者やワーカーが大挙し、めぼしいものを全て持っていかれては全てがおじやんだ。だからこそ、対価もなしに救ってくれた僕と一緒に進むことにしたのだろう。不測の自体に陥ってもなんとかしてくれろと見越して、危険を推して進むべしと。

強かだが、そういうのは嫌いじゃない。それに出来る限りは自分たちでどうにかするとう意思は感じるし、どうやって恩を返そうかという逡巡も伝わってくる。良いやつらじゃないか。正直イミナーちゃんとも寝取りックスしたいと思いました。しな

いけど。

「情報ではこの辺りで引き返したらしいが……どうだ？ イミーナ」

「畏の気配はないわね。それも情報の通りだけ……」

「いったいなんのために作られたんでしようかね。通路にも複雑さはない……話によれば、そこかしこに貴重な品が置かれていたんでしよう？ 目的が一切読めませんね」

「……不思議」

まあオマンコ目的のダンジョンとか意味不明すぎてわけ解んないよね。とはいえ、もう少し進めばダンジョンの良さはきつと解ってくれるさ。なんせこれでも『運営』だ。確かに転生者という前提はあるけど、ユグドラシルという世界をおもしろくおかしくするために邁進してきた事実は確かにあるんだ。不純な目的があるとはいえ、マップ構築に手は抜かない。まあそのせいでクソ運営クソ運営言われてたわけだが。

よし、そろそろだ。イミーナちゃん程度のレンジャー能力では察知できない畏。それとなくアルシエちゃんの傍に寄って、と。トラップカード発動！

「なっ……!?!」

「ロバー！」

「イミーナ！ ヘツケラン！」

「ぐおっ……!?!」

わりとよくある転移罠。とはいえこの世界ではまずありえないトラップに、見事分断されるフォーサイトの面々。イミーナとヘッケラン、僕とアルシエちゃん、そしてロバーデイク。周囲が光に染まり、それぞれ設定された場所へ飛ばされていく。

「大丈夫かい？ アルシエちゃん」

「あ……うん、ありがとう。ここは……？」

「入り口は一つだけ、か。わざわざ転移トラップなんて仕込んでたんだ。ただの部屋じゃないと思うけど……ん？ つと、この部屋全体に転移阻害がかけられてるな」

「……みんなが心配」

「ああ、とりあえず部屋を出ようか。危ないから僕の後ろにね」

こくりと申し訳なさそうに頷くアルシエちゃん。いやいや、気にしないでおくれよ。どっちにしてもこの扉は開かないからさ。用心する振りをして扉を調べ、開かないことを見せつける。次元断切まで使用して見せるも、そもそも破壊不能オブジェクトに指定してあるため、傷一つ付かない結果に終わる。

「固いな……なにか特殊な条件が必要なのか？ ふーむ……」

「あ……扉の上、何か書いてある」

「ん？ ああ、気付かなかったな。なにになに……あ、僕こっちの国の字は読めないんだっ
た」

「字が読めないの？」

「…だね。おいおい、そんな目で見るなよアルシエちゃん。自分の国の字はちゃんと読めるってば」

「気のせい。考え過ぎ」

「そうかなー？　なんかちよつと嬉しそうな雰囲気感じるけどなー」

「気のせい」

やつと役に立てることが嬉しいのか、どことなく雰囲気が緩んだアルシエちゃん。可愛い。少し掠れ気味で、読みにくい文字を目を細めて睨んでいる。視線が左から右にすいっと移り、問題なく読み終えたことがうかがえる。

さあどうしたんだいアルシエちゃん。何が書いてあったか教えてくれよアルシエちゃん。きつとこの部屋を出る条件が書かれていたんだらう？　アルシエちゃん。さあ、さあ、さあ、顔を赤くしてないでさっさと口に出してくれたまえよ。

「なんて書いてあったんだい？　部屋の名前か、それとも開けるための条件かなにかだと思っただけど…」

「…っ、う、え、えつと…」

「アルシエちゃん？」

怪訝な表情をつくる。いやたぶんつくれてない気がするけど、彼女も動揺しまくって

るから気付いてないな、うん。真つ赤な表情で狼狽えるアルシエちゃんほんと可愛い。ほらほら、悪足掻きはよすんだ。なんて書いてあるのかなー？

「あ、あの…」

「うん？」

「セ……『セックスしないと出られない部屋』と……か、書いてある」

「…」

「…」

「アルシエちゃんってそういう冗談言うんだ…？ なんとというか、意外というか…」

「ほ、本当！ 本当に書いてある！」

「いや、常識的に考えてそんな部屋があるわけないだろ……ひよつとして僕、馬鹿にされてるのかい？」

「ち、違う……！」

まあ彼女も自分の言っていることが意味不明という自覚はあるのだろう。『字の読めない男をからかっている』という疑いを晴らそうと必死だ。そんな彼女の様子に、ふつと微笑む。

「ま、アルシエちゃんが良い娘だつてのはわかってるよ。だからここが『セックスしないと出られない部屋』つてのは信じるけど……それはそれでどうしたもんか…」

「っ……！ あ、あう……」

「試せるものは全部試したし、後はなにか仕掛けを探すくらいしか出来ることはないけど……僕もアルシエちゃんもそういう技能ないしなあ」

「あ、あの……」

仕方ないかなあ。これは仕方ないかなあ。うん、仕方ないよな。どうしたのアルシエちゃん？ ああ、仲間が心配だから早くここを出たいって？ でもここセックスしないと出られない部屋だよ？ どうするの？

えっ？ オマンコしていいんですかやったー！ 実はさアルシエちゃん、初めて会ったときから可愛いと思ってたんだよ。え？ お世辞はいらなくて？ いやいやほんと可愛いって。セックスしなきゃならないから言ってるんじゃないかって、本心からだよ。

「とても申し訳ないんだけどさ、アルシエちゃん」

「な、なに？」

「こんな状況になって、実はものすごく嬉しいです」

「——は、はわっ……」

よーし、和姦成立だ。今頃イミーナとヘッケランもよろしくやつてるだろうし、僕達も楽しもうぜ。ロバー？ あいつの部屋にはオナホを置いておいたから問題ないさ。男であれば、たとえ知識がなくともそれがチンポを突っ込むモノだと理解してくれるだ

ろう。

「——は、あ……んっ」

「おやあ？　なんでする前から濡れてるのかな…？　もしかしてアルシエちゃん、ずっと期待してたのかい？」

「…！　ち、ちがつ——はひゃう!？」

「こんな良い締め付けで違うなんて言われてもね。もしかして、オナニー好きなの？」

耳まで真つ赤だ。ほうほう、原作の裏ではオナニーっ娘だったのかアルシエちゃん。まあ常にストレス過多な生活だったろうし、どこかしらで発散しなければ人間壊れるからね。彼女の場合はそれがオナニーだったと。

なるほど、Webの方では尻尾を付けられて悦んでたけど……元々その素養があったわけか。シャルティア嬢のお気になるわけだ、うん。となると俄然僕もお尻の穴が気になってきたな。吸血鬼にぶっといディルドを挿れられた可能性もあった尻穴。吸血鬼に散々ほじくられる可能性もあった尻穴。お尻の尻尾を振りながら、下品に処女喪失をねだる可能性もあった雌穴。

——ものすごく興奮してきた。

「——ん、っ!?!　そ、そっちは……だめ……!」

「ほんとに？　今すごく良い反応したけどな——」

「ひゃ、あ、う、いつ、だめっ…」

「今すぐ射精できなきや、こつちに挿れちやおつかない」

「…！ はっ、うっ、んっ、んっ…！」

おおっ。自分から必死に腰を振り出してくれた。くう、アルシエちゃんはミミズ千匹つてやつだろわか？ 膣内のヒダが蠢いて、これでもかかとチンポを刺激してくる。騎乗位でパンパン腰を打ち付けてくる彼女。限界の雰囲気を感じたから、ちよつとしたイタズラ心で両足をすくった。

「っ!? あ、あがっ…！ いつ——ぎゅ、う」

「僕も出すよ」

「あ、熱っ、う…あ、膣内で…」

子宮まで到達したチンポは、出口を塞ぎながら思い切り射精した。うっわ、この吸いつくされる感じ…！ ちよつと普通じゃ味わえないだろうな。

「あ、あいた…みひゃい…」

「そつか。うん、じゃあこつち使わせてもらうね？」

「ふえ…——うあ、っ!? な、にやんで、こつちで出ひた、のに…！」

「だって、アルシエちゃんの尻穴がずつとひくついて誘ってくるからさ」

「ひ、あ、あ、あ——」

アルシエちゃん嬉しそう。やっぱり彼女は尻穴が似合うんやなって。にしてもこの入口の締め付け具合……！ もう僕一生君の尻尾でいいや。そのくらい気持ちいい。むしろがる彼女を壁に押し付けて、激しくピストンする。嫌がってる振りはしてるけど、さつきから何回イッてるのさ？ 初めてのケツ穴でいくとか、もう認めちゃいなよ。君はアナルの方でこそ感じるド変態なんだって。

ふら、もうわかってるんだろ？ この先、チンポ無しじゃ生きていけないって。ふふふ

……帝国の現地妻ならぬ、現地穴手に入れちゃった。こつち来る度に使ってあげるからね？ 他の肉棒くわえこんじゃダメだよ？ オーケー？ うん、いい子だ。なら——出すから受け止めな。

ふう。今日もいいセックス日和だった。さ、行こうかアルシエちゃん。みんなも首を長くしてまってるよ。もしかしたらイミナーちゃん達はまだやってるかもしれないけど、イケそうなら混ぜろうぜー。寝取りはNGだけど、スワッピングは嫌いじゃないんだよ僕。

4話

バハルス帝国が首都、帝都『アーウィンタール』。皇城が遠目にもそびえ立ち、舗装された道が美しく交差する、皇帝が住まう地として相応しい街だ。ここを拠点としているワーカー『フォーサイト』の一員であったアルシエは現在、皇帝への謁見の真つ最中であつた。鮮血帝とも呼ばれる皇帝——『ジルクニフ・ルーン・ファアロード・エルニクス』により貴族の地位を剥奪されたアルシエにとって、ここは非常に居心地の悪い場所である。

「…それで？ わざわざフルーダとの伝手まで使用して謁見を希望した理由を聞こうじゃないか。アルシエ・イーブ……いや、今はただのアルシエだったか。有望な弟子だったと聞いているが——鷹が鷹を生むこともあるものだな」

「何卒、お願い申し上げます。先日献上した数々の秘宝の対価……金銭ではなく、フルト家の再興を願いたく……」

「ならん。無能な貴族ほど国にとって害になるものはない。お前の父親は、かつて肅清する必要すらないと判断した者だ。たとえ新たに地位を得たとしても、百害の後に一利がある程度の働きしか期待できんだろうよ」

「形だけでいいのです。権力を与えず、役目を与えず、ただただ飼い殺していただくだけで」

「ならん。前例を作れば、いずれ悪しき慣習となる。お前の両親が馬鹿げた散財を続けているのは聞いているが、貴族に戻れば治まるとでも期待しているのか？ …いい加減に目を覚ませ。お前の望む『いつか』など、いつまで経っても始まらない。お前のそれはただの甘えだ」

「…っ！」

「何かを得たくば何かを捨てろ。捨てたくないというならば、自分で躓けろ。いつそ市井で庶民として働かせれば、金の有り難みが解るだろうよ。一日必死に働いて銅貨を数枚得れば、考え方も変わるかもしれないぞ…まあそんな人物ではないからこそ、貴族位を剥奪したわけだが」

エイとの冒険——そしてそこで得た宝物の数々。均等に分けたとしても莫大な金額になることは疑いがない、綺羅びやかな秘宝。魔法の力を秘めた装飾品なども多々あり、数点は国宝に指定されるクラスの逸品も含まれていた。

アルシエは自分の取り分を受け取った後、一部を金に変え借金を完済し、残りの全てを皇帝へと献上した。彼女の父親が望むのは金ではなく地位であり、それを取り戻さぬことには、家族の団欒は永久に返ってこないだろう——そう考えた末の行動だ。

しかし彼女の希望は切って捨てられた。皇帝にとっては、莫大な金銭を支払うか無能な人間を貴族位に取り立てるか、二択であり……結果からいえば、それほどにアルシエの父親は貴族に相応しくないという証明がなされただけである。

「正当な報酬は与えよう。後はお前次第だ」

「……」

追い出されるように謁見は終了し、アルシエはとぼとぼと帰路につく。脳裏を過るのは、つい先日、体を重ねた男の顔だ。自分の取り分はいらないと、頑として受け取らなかった男。彼の体温を感じながら、自身の半生を語った時のことをアルシエは思い出す。

まさに言ったとおりだった。エイがアルシエの事情を聞いた後に発した言葉と、皇帝がアルシエへ伝えた言葉は完全に同じだった。親が間違っていると感じているのなら、それを正すことが正道なのだ。結局、親に嫌われることから逃げているだけの小娘なのだ。

彼女にとつては親へ苦言を呈するよりも、ワーカーとして働くことの方が楽だった……ただそれだけのこと。『苦勞をしている』と対外的に訴え、そして自分すらも誤魔化せる手段として最適だった。

もう貴族ではない。もう裕福ではない。一般庶民として働く必要がある。それを父

親に理解させる労力と、ただ金を運んでくる労力を天秤にかけ、後者が勝つただけのこと。

——そうなんだろう、アルシエ。

そうエイは言い、皇帝も結局はそれを見抜いていたのだろう。彼女は莫大な金銭と引き換えに、色々なものを失った。もうワーカーとして活動する必要はなくなった故に、仲間を失った。戦い続けている間だけは見ていられた、家の再興という僅かな希望を失った。

残ったのは過去に執着する父親と、現実を見ていない母親。そして何よりも大事な二人の妹。当分の間は裕福に生きていけるだろうが、それは果たして幸福なのだろうか。疑問は尽きず、彼女は足取り重く歩き続ける。

俯いて進む彼女には気付けなかった。家を目の前にするまで気付けなかった。希望どころか帰る家さえもが灰燼と化している事実、跡地を目前にするまで気付けなかったのだ。

「……? ……は? え?」

綺麗さっぱりと屋敷が消滅し、その跡地で呆然と佇む両親や使用人の姿——そして双子の妹を抱きしめながらあやしているエイ。幼い二人はなにやらとても楽しそうで、彼は子守もうまいんだなあと、現実逃避をしながら微笑むアルシエ。そんな彼女に気付い

たエイは、ニコリと笑って言い切った。

「荒療治！」

「やりすぎでしょおおお！ バカああー!!」

貴族街にアルシエの叫びがこだまする。しかし数日後には仕事に精を出すようになった父と、覚束ないながらも家事を覚えようとする母の姿があり、アルシエは苦笑いをしながら新しい形の団欒を噛みしめる。ああ、こんなにも簡単なことだったのか——
そう呆れながら。



ギルド『アインズ・ウール・ゴウン』のギルドマスターにして、たった一人のプレイヤーである彼は今、自室で盛大に悩んでいた。アバター名はモモンガ。今の名はアインズ。ゲームの世界が現実になり、NPCが動き出し、己の意味もあつたとはいえ勝手に

動き出す様々な事態に彼は困惑しきりであった。

それでもなんとか上手くやっていた矢先、冒険者として追い詰めた犯罪者から飛び出した情報は、アインズ・ウール・ゴウンというギルドの活動の一切を停止させた。結局の所、その犯罪者と『運営』の関係性は問い詰めきれなかった。本当に運営がいるのかも、そもそも犯罪者——クレマンティヌの素性すら調べきれなかった。

もちろん無理やり体に聞くことは出来ただろうが、その結果が運営の不快を買うという事態に繋がれば、最悪としか言いようがない。結果として手を出すこと無く、見逃さざるを得なかった事実に苛立つアインズ。

彼はとても慎重な人間だ。石橋を何度も叩き、出来得る限りの不安を排除して事に臨むタイプの人間だった。故にもし本当に運営がきているのならば自重しなければならぬと、外で活動している全NPCを呼び戻したのだ。

（運営が来ているとして、それはどういう形だ？ 無形の管理者としてか、それとも実態のあるGM……ゲームマスターとしての形を取っているのか。いや、あの女の話から推測するとまず間違いなく後者だろう。問題はその能力だ。管理者として、どこまで力を行使できる？ 違反者に対する処置にしろなんにしろ、ゲーム内であれば管理者用のコンソールを使用していた筈だ。仕様が同じなら、それは使えなくなっているだろうか……）

考えることに意味はあるのかと、幾重にも苛立ちと鎮静を繰り返すアインズ。運営の件だけであればここまで焦燥感を露わにすることもなかったのだろうが、問題は一つだけではない。彼が大事にしているNPCの一人『シャルティア・ブラッドフォールン』が何者かに操られ、ナザリックから離反させられるという憂き目にあっているのだ。命令が宙ぶらりん、待機状態になっているのがまだ僅かな救いと言えなくもないが、アインズにとっては忸怩たる思いだ。

（くそ、せめてもう少し早く運営の件を知っていれば、シャルティアにも帰還の命を出せていたというのに……！ つくづくタイムミングが悪いな。そもそもシャルティアの件と運営はなにか関係しているのか？）

コツン、と固い机を叩く。アインズが知りたい最大の情報は、まず本当に運営がきているかの真偽だ。そして来ていたならば来ていたで、運営がどういうスタンスを取るのか。『運営』というのはいままでなく『仕事』である。まさか異世界にきてまでそれをまっとうするような人間は、そういない。となれば、その後の行動は本人の性格次第で大いに変わるだろう。

筋道だつて考えた場合、アインズ・ウール・ゴウンにとつて運営の存在は非常にまずい。運営を『普通の一般人』として考えた時、カルマ値マイナスだらけの異形種ギルドをどう思うだろうか。ゲームであればともかく、それが現実になった時、その集団はあ

まりにも危険である——と判断する可能性は極めて高い。実際問題として、アインズが推し進めていることはまさに悪のそれだ。

単純な懸念としても、異形への嫌悪感などがある。そもそも異形種が嫌われている最大の要因は、見た目の醜悪さが由来だ。ポリゴンであればまだ直視できても、リアルな質感を備えた化物達に忌避感を覚えるのは、人間としてはむしろ正常だろう。

そういつた事実を鑑み、アインズは外で活動している者達を全て帰還させたのだ。あらゆる想定の中で、最悪を引いた場合の被害は計り知れない。下手をすればボタン一つで全てが消え去ってもおかしくはないのだ。

（手をこまねいているだけでは事態が進展しない。できれば早期の内に接触を試みたいが……クレマンティーヌへの接触はいまだ無し、か。助かりたいがための嘘だった可能性も十二分にあるが、とはいえ不用意に手を出すのはリスクが高すぎる。監視に留めておくのが最大限の譲歩……）
加えてシャルティアの件も放置はできん。ペロロンチーノさんにも申し訳が立たないし、優先順位をどうするべきか……問題が山積みだな）

悩むアインズの元へ、全ての配下の撤退が完了したと報告が入る。『悪事をなさず、そして悪事をしていたならばその痕跡を全て消した後、何をおいても帰還せよ』と厳命を下した。もつとも時間がかかったのがデミウルゴスという点から、アインズは戦々恐々としていた。

(一番優秀と言つてもいいデミウルゴスが遅くなつたつてことは……めつちや悪事してたつてことでいいのか？ 悪魔だもんなあ……運営にバレたらやばいよな、ほんとに。今の時点でアクションがないつてことは、ゲームの時みたいに完全な監視体制は築けてないつてことだよな？ いや、普通に考えてそれはそうだ。ユグドラシルの『仕様』はそのまま残っている場合がほとんどだが、形のない『システム』はコンソールを始め、基本的には使用できなくなっているんだ。むしろ一番可能性が高いのは、単なるGM用キャラでこちらにきているというものだろう。となれば何一つアイテムを持っていないということもあり得る……単身、着の身着のままなんじゃないか？)

プレイヤーがGMに傷をつけることは、システム上不可能だ。しかし誘惑することは可能なのでは、とアインズは思考し始めた。アインズの体は食欲、性欲、睡眠欲の全てが消失した——故に誘惑にも耐えていられるが、リアル世界の普通の人間がナザリックの豪華さを味わえば、中毒のように『無くてはならぬもの』と感じるのではないか……そう考えたのだ。

(腑抜けにして、籠の鳥として飼い、そのまま寿命を迎えてもらうのが一番なのだが……いや、とにかくは存在の有無だ。運営がきている可能性、来ていない可能性、そして運営の名を騙るプレイヤーの可能性……全てを想定して事に当たらねば)

玉座へと赴き、一様に顔を伏す配下達へ声をかけるアインズ。まずは撤退命令を出し

た理由を説明し、当座の危険を共有しなければならぬ——と考えたところで、先に重要な情報が伝えられた。

「……！ プレイヤーの影だど？」

「はっ。竜王国方面の調査は後回しになっていたのですが……既に噂として出回っていました。戦闘面での支援、そして物資の援助。現状で把握できている情報のみで推測するならば、时期的にもまず間違いなくプレイヤーかと」

「そう、か……」

多数のビーストマンの殲滅——戦闘面だけならば、大抵のプレイヤーには可能なことだろう。しかし夥しい量の物資を援助した事実は、推測を容易に絞り込む。

（まずは規模だ。個人が持てるアイテムに制限がある以上、そいつは拠点ごと移動していると見ていい。同じことはナザリックでも可能だが、おそらくは右も左も分からない状況で、ギルドの資産を大幅に減らす馬鹿げた行為……相当なお人好しか、あるいは別の目的があるのか。どちらにしても、竜王国への助力は『人間種よりである』ことの証明……！ よほど財産管理のできない馬鹿でなければ、中規模以上のギルドということも間違いない）

運営という可能性もあるが、それは最初に考えた推測が否定する。異世界に転移するという情報でもなければ、GM個人が大量の物資を持つ状況など有り得ない。となれ

ば、竜王国の件は新たな問題として見なければならぬだろう。

出ないため息を幻視しながら、アインズはプレイヤーと思しき人物の詳細を尋ねる。アバター名でも解れば儲けもの、有名なプレイヤーであればアインズの知識にも入っている可能性が高い。

「はっ。出回っている名は『ウン||エイ』と——」

「まんまじゃねーか!!」

盛大なツツコミを叫んだアインズが、『クウ、クソ運営がああ——!!』ともう一度声高に叫ぶ。主のキャラ崩壊に目を丸くする配下達……そんな彼等に対し、アインズが慌てて取り繕うまであと数秒。彼がこの世界にきてから一番の音量であったと、とある守護者統括の日記に書きこまれた——そんな日の出来事であった。



クーデちゃんとうレイちゃんにキャツキャウフフチュツユペロペロしてたらアルシエに切れられた件。まだペッティングまでしかしてないってのに。二人とも喜んでたんだからいいじゃないか、まったく。まあ仲直りのアナルセックスは気持ちよかったのでよしとしておるか。

女兒がお股弄りを覚えると癖になるっていうし、今度きた時はオナニー好きの幼女になつている可能性は大だ。なによりオナニーっ娘であるアルシエちゃんの妹なんだから、素質もばっちりだろう。

さて、そんなこんなでやってきました今度の舞台は『リ・エステイーズ』。王都といえどばなーんだ。それはもちろん蒼の薔薇。一人を除いてみんな可愛い奇跡のチーム。ロリババア枠のイビルアイもさることながら、双子の忍者もわりとロリロリしてて可愛いよね。JK忍者って感じ？ まあJKがロリと言えるのかは人によるだろうけど。たぶん男女でだいぶ差が出るだろうね、その辺の認識は。

一部のマンさん達が『オタクはロリコン！』と声高に叫ぶのは、そもそもヒロイン枠の年齢制限がJKまでという暗黙の了解があるからだ。JKをロリ扱いするなら、なるほどラノベの九十九%はロリコン向けとなってしまうな。

「ついで、よろしく頼むよ」

「ああ、任せときな。これだけ貰ったんだ。俺の人生で一番の役者つぷりを見せてやるよ」

人相の悪いゴロツキという言葉が似合う彼に、金貨が百枚入った革袋を渡す。普通に暮らせば一生、散財して遊びまくっても十年くらいはいけるだろう。そんな大金を代価に頼んだことと言えば、『数分の名演技』である。

蒼の薔薇で一番セックスしやすいのは誰か？ それは言うまでもなくガガーラン。しかし彼女は童貞専門だから、既に卒業している僕は対象にならないだろう。というか僕の方も彼女は対象にならない。

二番目にセックスしやすいのは、双子の忍者だろう。というかガガーラン、ティア、ティナはかなり性に奔放なようだ。逆にラキュース、イビルアイはお硬い。よく一緒にチーム組んでられるなあ。まあとにかく、ティナちゃんとやりたいなら自らがシヨタればいい。年齢を操作できる指輪を偲め、僕の姿は見事なシヨタキャラと化している。

十歳くらいだろうか？ 半ズボンで生足をこれでもかと思せつけるファッション。田舎から出てきた、冒険者に夢見るお登りさんという風体を装っている。たぶん変態貴族とかにもケツを狙われそうな見た目だ。たぶんこれだけでも落とせそうな気はするんだけど、やっぱり大事なシチュエーションだね。

八本指の末端に扮するゴロツキが、なにも知らない幼気な少年を、口八丁手八丁で連

れ去ろうとする一幕——そんな場面に出くわしたシヨタコンがどうするか？ そんなの決まってる。かっこよく助けて、あわよくばシヨタチンポをいただこうとするだろう。たまには誘い受けもありだよ。存分に忍者つ娘へ甘え倒してやろうじゃないか。

——よし、予想ドンピシャでティナちゃんか一人で歩いてきおる。頼むぞゴロツキ。僕は演技が下手だから、成否は君の腕にかかっているんだ。ツカもかくやという役者つぷりを所望するぞ。

「——よう、坊主。お前此処へ来たばかりか？ 中々見所のある面構えしてんじやねえか」

「えっ……と、僕ですか？ そ、そうかなあ……えへへ」

「強い冒険者になるやつってのは、最初からオーラが違うってもんだ。お前さん、でっかくなるぜ」

「そ、そうですか……？」

「ああ！ 俺は将来有望そんな人間には唾を付けておくタイプだな。ちよつと一緒にこうぜ。お前さんみてえなのももう何人かいるんだ……ひひ、冒険者になるなら仲間も必要だろ？」

「紹介していただけるんですか？ あ、ありがとうございます！」

ガチの人攫いっぽくて笑えないぞゴロツキ。だがいぞゴロツキ。君の迫真つぷり

に釣られて、僕もなんだか本当に無知シヨタになった気分だ。これならティナちゃんもきつと引つかかってくれる……！ 来るか？ 来るか？ ……よしギター……！

「へへ、じゃあちよつとこつちに——ガッ!? て、てめえ……！ なにしやがる……！」

「……何処に連れてくつもり?」

「てめえの知つたこつちやねえだろうが! あんまり調子に乗つてるとガキごと娼館に——いつ!? ア、アダマンタイト……? あ、蒼の薔薇かよ……」

「何処に、連れてくの?」

「あ、い、いや……なんでもねえんだ。ちよつと声をかけたただけだ。お、俺はもう行くからな……」

まさに惨めな負け犬のように、スタコラサツサと駆けていくゴロツキ。ぶつちやけて言つていいかい? たぶん世が世なら名俳優として名を馳せたんじゃないだろうか。こんな文化の発達していない世界に生まれたばかりに、オマンコ劇場でしかその才能を發揮できないとは実に憐れだ。ん? いや、それで人生逆転レベルの大金を掴んだんだからいいのか?

まあいい、とにかくあとは僕の演技にかかっている。ティナちゃんのオマンコは目の前だ。目線の高さで言えば、物理的にも目の前だ。

「……危ないところだった」

「え……つと……？」

「危機意識が足りていない。あのままだったら、たぶん男娼として売られてた」

「だん……？ えつと、助けてくださったんでしょ……？ でしたら、その——ありがと

うございませすー！」

「どうぞ致しますて」

うむ……演技下手という自覚はあるのだが、忍者の癖に彼女は気付いていなさそう
だ。それはなぜか？ うん、僕の生足を舐めるように見つめ続けているからだ。世の女
性達が『男の視線ってほんとわかりやすいよねー』と言っているのは事実だったのか。
視線に質量があるかのように、ブスブスと太もも辺りに何かを感じる。

「あ、あの……僕、お礼がしたいです。なにかできることはありませんか？」

「………そう。ならあそこの宿屋に行く。大丈夫、代金は私が払う」

「は、はい。わかりました……？」

直球だなオイ！ 僕でももうちよつと時間かけるぞ。まあ男から女と、女から男は違
うもんなー……男はただ気持ちいいだけだし。少年だろうがなんだろうが、童貞を『奪
われた』なんて感覚はあまり感じるもんじゃないだろう。童貞『卒業』と処女『喪失』……
もうこの言葉だけで違いがわかるってもんだ。

さて、薄暗い部屋でいくつか言葉を交わし、ある程度は親交を深めた。そしてベッド

に座るように言われ、なにも疑うことなく受け入れる。ふふ、逆レイプとか新鮮でいいね。ん？ 目を瞑れて？ はいはい、ティナちゃんのエッチだなあ。

ん？ 手を後ろに回せて……おいおい、後ろ手に縛られちゃったよ。何も知らない純真無垢な子供に緊縛プレイとか、ちよつとアダマナイト冒険者としてどうなんですかね……？ まあ別にいいけどさ。そろそろ目を開けていいかな——うわっ!! なんか首筋にひやりと金属質なものが……ん？ なぜナイフを首筋に？

「何が目的？」

「え？ えつと、ティナさん、何を……」

「演技が下手すぎる。子供を装って、何が目的？ 変装アイテムか……それとも《ティスガイズ・セルフ／変装》を使用した魔法詠唱者？ 五秒以内に答ええないなら、そのまま引き切る」

全然引つかかってなかったの巻。おい！ ただの色ボケ忍者じゃなかったのかよ！ エロい忍者娘の穴を堪能できると思っていたのに。つーか五秒って短くない？

えーと、どうするかどうするか……よし、じゃあここは『元頭領とはいえ、暗殺集団から足を洗うことが本当にできるとでも思ったのか？』作戦でいこう。確か抜け忍的な状態だよな、ティナティアって。

——シチュオ的な意味ならともかく、ガチで僕相手に優位に立てると思うなよ？ うお

らっ！

「——なっ……！」

「くくく……冒険者などになって、腑抜けたな。だからこうしてやすやすと縄抜けをされるのだ。立場が逆転した気分はどうだ？ お前が抜けた後、我らはさらなる高みへ登っているぞ……！」

「嘘。さつきも言っただけど、演技が下手すぎる」

「……」

だからなんで解るんだよ。《センス・ライ／虚偽判別》使ってるわけでもないのにさー……しかし立場逆転しても動揺する心配がないな。やつぱ暗殺集団のトップだっただけあって、そういうのにも耐性あるのかな？ 尋問プレイとかちよつとしてみたい。

しかしイジャーニーヤの追手という嘘もバレたし、どうすべきだろうか……よし、ならここは『かつてお前に父を殺された男』作戦でいこう。なんやかんやで結構殺してるんだらうしね、この娘。

「よく気付いたな……！ ならば教えてやろう！ 俺はお前にかつて父を殺された男！

これは正当な復讐だ！」

「嘘」

「……くくく、まあ引つかからぬか。先程までは単なる戯れよ……！ 我は秘密結社『ズー

ラーノーン』の高弟。元『イジャンニーヤ』の頭領よ……お前には使い道がある」
「嘘」

「…ふ、それも見抜くか。さすがはアダマンタイト冒険者だ。私は世界を導く唯一にして絶対の御方『魔導王』の忠臣……！」

「嘘」

「……」

「……」

「…ティナちゃんとセックスがしたかったので、アイテムの力でシヨタっ子になりました」

「ほんと——えっ?」

めっちゃ嘘っぽく言った本当のことは、マジで看破された。そんなに僕の演技つて下手なのか……? いや、忍者がおかしいだけということにしておこう。汚ない、さすが忍者汚い。というか居た堪れなくなるから、その目をやめろ。『マジかよ……』みたいな目をやめろ。

とりあえず拘束は解くか……じつと見るのはやめてくれよ。ちよつとエツチなことしかかっただけじゃん。現代だって『出会い屋』なんてものがあるんだし、ちよつと偶然を装って運命的なものを演出しようとしただけじゃん。そうだ、俺は悪くねえ!

「……」

「……」

「…シヨタは中身までシヨタじゃないと意味がない。初めての快感に我を忘れて、必死に腰を振っているのを優しく見守るのが至高。育ちきつていない小さな肉棒で突かれるのが快感。似非のシヨタつ子なんて…私の心には響かない」

なに言つてんだコイツ。いやまあ、なんとなく言いたいことは解るよ。本当のロリ好きからすれば、ロリババアは似て非なるものつて感じなんだろう？ わからなくもない

……が、未熟だね。

「…未熟」

「…っ！ なにを…」

「それが君の限界なんだ。心の中までシヨタじゃないとダメ？ はっ……なんという欺瞞。なら君はシヨタが成長してシヨタじゃなくなった時、なんの興味もなく捨てるってことだろ？ そこに愛はあるのかい？」

「…っ!？」

「僕は少女が大好きだけど、抱いた少女が成長して大人になったからといって、捨てるなんて有り得ない。セックスし続ける自信がある。似非だ似非だと言っていたけれど……君の心こそが似非なんじゃないかい？」

「——っ！」

シヨックを受けたようにガクリと項垂れるティナちゃん。おいおい、こんなはまだ序の口だぜ。一時間は舌戦を繰り広げるつもりだったのに、なんという体たらくだ。それとも僕の論破スキルが高すぎたのか？ 『クソ運営クソ運営』と盛り上がっているスレに降臨しては、レスバを繰り広げていたのが功を奏したのだろうか。

「人は間違うものさ。自覚したのなら、また立ち上がればいい」

「……っ」

だからセックスしようぜ。ほんとのシヨタじゃなくたってやれば興奮するもんだつて。ドラウとセックスした時とか、彼女に『少女の振り』をしてもらったことがあるけど、充分に興奮したし。僕もできるだけ演技を頑張ってみるからさ。

「わかった……やってみる」

「うえーい！」

「ただし条件がある」

「ん？」

なんだい？ なんでも言ってごらんよ……え？ 四歳ぐらいになれるかって？ いや、そりやなれるけど……ええ……？（ドン引き）。完全にヤベエ奴じゃねえか。僕でも五歳ぐらいがギリギリだぞ。

うん？ まったく性知識がない子には手を出せなかつたけど、興味はあつた？ なるほど、まあ中身が僕ならやりたい放題やれるしな……つーか中身が僕じゃなきゃそもそも勃起する年齢じゃないだろ。じゃあまあ、和姦成立つてことでいい？ よっしやオーケー。

「んむ——んぶつ、ちゆ、はむ、んつ……美味しい」

どんだけ美味そうに頬張るんだよ。しかし小指くらいのチンポがキャンディのように啜えられている光景は、視覚的にめつちや興奮するな。しかもやたら敏感なチンポになつてるせいか、舌の感触がすごく感じられる。

なによりティナちゃんの淫らな顔だ。さっきあんなこと言つてた癖に、ものすごい興奮度合いが伝わってくる。まああれだ、男は幼女に悪戯できるし、小さい体の至るところで射精はできる。けど女が男児に悪戯しても、たぶん勃起しないだろからな。四歳の勃起チンポをしゃぶれるなんて、シヨタコンにとってはまさに垂涎の状況だろう。

「じゆるつ、んつ……きもひいい？」

「うん、すごく気持ちいいよ……おねえちゃん」

「……！ はぶつ、んつ、じゆぶつ……んんつ……！」

うおっ！ ちよ、吸い着きがえぐい……！ めつちやくちやいやらしい顔した忍者娘が、自分の指で激しく雌穴を弄りながら、僕のチンポをぐちゆぐちゆとしやぶり続ける

…！　なんてエロいシチュエーションだ。最高すぎる。

都合三発ほど彼女の口に射精し、忍者の口淫の上手さを思い知らされた。幼い頃から「仕込まれた」のかという想像が、さらに興奮を高める。そのままベッドに寝転がったティナちゃんは、蕩けたような笑みでベッドの真ん中に座り込む。言うなれば体育座りだろうか、ふくらはぎの隙間から見える雌穴を指で広げ、おいでおいでと小さい陰茎を誘う。

小枝のような肉棒ではガバガバに感じるかと思いきや、とろとろになった蜜穴はキュンキュンと刺激的に締め付けてくる。ああもう、くそ、きつとこつちも小さい頃から『チンポを悦ばせるように』仕込まれたんだろうなあ！　ガキのチンポまで愉しませるなんて、とんだ肉穴じゃないか。ええ？　これまで何本任務で啜えこんできたんだよ。この淫乱忍者め——おらっ！

「は、あ、んっ、いっ——はふっ、いっ、あっ」

「こんなちつちやなチンポで感じるなんて……ほんと君つて卑しいね。この『雌豚』」
「——っ！　あ、っ！　いっ……あぐっ、んっ——!!　は、あっ……」

なんとなく解つたけど、たぶん『汚い自分』に『純真な子供』が腰を振ることで……下卑た興奮を覚えるんだろうね。自分への卑下もあり、そして『子供を犯した』、墮とした、汚い自分が汚しきつたという事実が、たぶん緋い交ぜになった感情を倒錯させるん

だろう。そこにはまあ、暗い育ち特有の悲哀と陰を感じる。

「はあ、はあ、は——ありがとう。よかった」

「うん、僕もすごくよかった。いままでで一番……綺麗な体だったよ、ティナちゃん」

「…！ ……そう」

なんだか申し訳なさそうに、けれど嬉しそうに、ぎゅつと抱きしめてくるティナちゃん。ふよふよとした胸の感触を感じつつ、しばらくは『おねシヨタ』にハマりそうな気がする僕であった。ちゃんちゃん。

5話

リ・エステイーゼ王国が誇る二組のアダマンタイト冒険者——その内の一つ『蒼の薔薇』。女性のみで構成されるチームであるが故に、同性愛者である一人を除いては色恋沙汰でもつれることはない。その同性愛者にしても、チーム内のメンバーに本気で迫るようなことはない。

だからこそ、肉体関係やその類のことで不和が広がることなど有り得ない筈なのだが——先日、双子の忍者であるティアとティナが痴情のもつれを起こしたと聞いて、リーダーである『ラキュース・アルベイン・デイル・アインドラ』は耳を疑った。

シヨタコン忍者とレス忍者。どう考えても一人の人間を取り合うような事態には成りえないのだから、いつたい何が起こったのかと問いたただすのは、まとめ役としても当然の帰結だった。拠点にしている宿屋に全員が集まり、机を挟んで相對する蒼い薔薇達。

童貞食いの筋肉漢女『ガガーラン』、二百年ものの処女吸血姫『イビルアイ』、発達した文化に依らない純正の中二病『ラキュース』。彼女達三人の前には、非常に肌をツヤツヤとさせ、いかにも『充実しています』といった風の双子姉妹が並んでいた。

「あなた達、喧嘩していたんじゃない？」

「喧嘩じゃない」

「機会の分配に関して物申すことがあっただけ」

「模擬戦で決めただけなのに、イビルアイが大事にした」

「ぬっ…！ いや、しかしお前たち相当本気だっただろう！ あれは完全な殺し合い

だったぞ…」

「エイが作った『制限びーびー』空間だったから問題無し」

「結果的に、姉に勝てる妹などいないことが解った。重畳」

「あれは紙一重。次は私が勝つ」

「ちよつとなに言つてつかわかんねえな…」

双子の言葉に疑問符を浮かべるばかりの三人。そもそも最大の疑問である『相手の性別』にすらまだ言及しきれていないのだ。肌ツヤ、雰囲気などを鑑みれば、彼女達の性生活が充実していることが窺える…：しかしいったい男を取り合っているのか、女を取り合っているのかすら不明だ。

とはいえ、それもすぐに解決するだろう。ラキユースが取り計らったこの時間帯は、その人物が来るであろう時間と被っているのだ。もう間もなく、宿屋の入り口を開いて二人に会いに来るだろう。ラキユースがチラとそこに目をやれば、どんぴしゃりで扉が

開かれる。

——そこに現れたのは、年端もいかぬ見た目四、五歳の男児だ。キヨロキヨロと周囲を見渡した後、ティナの姿を確認して笑顔で寄ってくる様は、そういう趣味でなくとも庇護欲を掻き立てていた。

「おまたせ、ティナおねえ——」

「うおりやあぁー!!」

「おぐううっ！ な、何を……鬼リーダー……」

「あなたたつて娘は、あなたたつて娘は……！ 小さい子が好きだからつて限度があるでしょう！ 何も知らない子にそんなことをするなんて、最低よ！ それこそ、腐った貴族とにも変わらないじゃない……！」

「ええ……？ おいおい、大丈夫かよティナちゃん。なにも説明してなかったの？ そりゃラクユースちゃんもキれるぜ。幼い子へ手を出すやつなんか、ろくな奴はいないからな」

「おま………いう……」

「うむ、僕はまごうことなき口クでなしだ。自覚してるからいいのさ」

腹部を強打されたティナに駆け寄り、回復魔法をかける少年——エイ。そんな彼の口調にも、そして発動した魔法の位階にも驚愕を見せるラクユース。世界単位で見ても、

上位に位置する神官戦士である彼女には、エイが使用した魔法が己にすら扱えぬほど高位であるという理解できたのだ。

「エイ……説明して……ごごご。私はもうダメみたい」

「いや、もう回復してるだろ絶対……まあいいか。こんにちは、蒼の薔薇の皆さん。僕の名前は『ウン＝エイ』。この前ティナお姉ちゃんに襲われて、それからずっと酷いことをされて……うつ、うつ……」

「やつぱりかああ!!」

「ごごごふうう! う、裏切りもの……」

「というのは冗談で、ほんとの姿はこつちね」

「——なっ!?!」

「うおっ! マジかよ。マジックアイテムの効果か? だとしたら相当イイもんだな、オイ」

再度腹部に痛打を食らったティナに寄り添い、またも回復魔法を行使するエイ。その後、からからと笑いながら元の年齢へと姿を戻した。その様子を見ていた三人は驚愕を露わにし、思わず席を立つ。

「そ、そう……本当は大人だったのね。よかったあ……」

「全然よくない。殴られ損」

「あつ……その、ごめんね？ ほら、やっぱり普段が普段だし…」

「謝罪と賠償を要求する」

「鬼ボスには体で払ってもらおう。それでチャラ」

「あなたには何もしてないでしょう！ ティア！」

「ティナの痛みは私の痛み……ティナへの賠償は私への賠償」

「いい話だなあ、うん。その時はぜひ僕も混ぜてくれよ、ティアちゃん」

「了解」

「了解しないで！」

気の置けない仲間たち——そんな仲睦まじいチームを見て、少しだけ羨ましそうにするエイ。彼は集団に帰属することがあまり好きではなく、奔放に生きることを是としていた。けれど絆や繋がりとといったものに尊さを感じていることも、また確かだ。

「しっかしよお、ティナがお前さんのガキ姿に欲情すんのはまだ解るぜ？ ティアはどういうこつたよ」

「ん？ ああ、それはこつちの姿でね」

「…ぬおっ!？」

首を捻るガガーランへの答えとして、エイはその姿を絶世の美少女へと変化させた。彼は自身の外装を多数に渡って用意していたが、その中でも数点はその道のプロへ依頼

して制作したものだ。もちろん自費故に貯金は目減りしたものの、どのみち時期がくれば無用の長物だ。惜しむ筈もない。

「そ、それもマジックアイテムか…?」

「いや、これは……これは……そういえばなんて言えればいいんだろ。外装は一アカ一アバター最高三つまでだから……運営特権って感じ?」

「駄目だ、何言ってるかわかんねえ」

「まあタレント的なものと思つとけばいいよ。不思議なことがあればタレントって言うときゃ済むのがこの世界の良いところだよね」

「それって褒め言葉なの…? とところで本当の性別はどつちなのかしら」

「そりゃあもちろん男さ」

「つってもよ、ティアってタチだろ? ってことはお前さん、ホモの気もあんじゃねえのか…?」

「ねえよ!」

女だらけのチームではあるが、違和感なく溶け込むエイ。しかし今まであまり会話に入っていなかったイビルアイが、エイが発した言葉に違和感を覚え、指摘を入れる。

「この『世界』だと…? それに不思議な能力に、高位のマジックアイテム……お前、まさか『ぶれいやー』か?」

「うん？ それは……イエスとも言えるし、ノーとも言えるね。それ以上が聞きたいならベッドの上でね。キーノちゃん」

「…っ!? お前、なぜその名を知って…!」

「タレント」

「絶対違うだろうが!」

「いやまあ、そこまで詳しく知ってるわけじゃないよ。二百年くらい生きてるとか、国墮としかだとか、十三英雄の仲間だとか……そのくらい？ あ、あと可愛い」

「——っ！ 貴様、本当に何者だ…… ぶれいやー」 だとしても、そこまで知り得る筈が……!」

「タレント」

「全部それで済まそうとしてるだろお前!」

ガーンと気炎を上げるイビルアイを『どう、どう』と押さえ込み、椅子へ座らせる工イ。他のメンバーを見渡せば、好奇心や警戒心などが幾つも混じった視線が向けられていた。イビルアイがアンデッドだというのは——それどころか伝説の吸血鬼『国墮とし』だというのは、蒼の薔薇のトップシークレットだ。それを知る人間を警戒するのは当然だろう。

しかし同時に、エイがイビルアイを警戒していないことも確かな事実だ。人間は無条

件でアンデッドを嫌うものなのだから、そうでないというだけで多少の安堵が混じるのは必然ともいえる。加えて、エイとイビルアイの間だけで通じている様々な単語が、警戒よりも好奇を誘う最大の理由なのだろう。

「エイさん、だつたかしら?」
「ぶれいやー」というのはいったい…?」

「タレント……つてやつかな」

「いい性格してやがんな、マジで」

「オーケーオーケー、そろそろ真面目に話そうか。プレイヤーつてのはそう、要は異世界からの来訪者のことだね。確認してる限りだと——六百年前の六大神を皮切りに、百年毎にこの世界へ訪れる異邦人を指す言葉さ」

「…… 本当、なの?」

「そりゃあイビルアイちゃんに聞けば早いでしょ。十三英雄だつてプレイヤーを多数含んでるんだし。彼等がどこまで話したかは、僕も知らないけどね」

「む……私が知っているのは、異なる世界から偶に訪れる強者が居ること……そしてそれがぶれいやーと呼ばれているということだけだ。六大神がぶれいやーだったとは初耳だが、推測としては充分にあり得るだろうな」

「ふーん……まあ、そっか。たぶんだけど、十三英雄つて新アカ作つて最終日だけインした引退勢と、最後の乱痴気騒ぎでデスペナくらいまくった奴らっぽいんだよな……イビ

ルアイちゃんからすればそうは思えないだろうけど、プレイヤーとしては相当レベルの低い集まりだった筈だぜ」

「なに？ そんなわけがあるか。今の私ですら勝てるかどうか解らない奴らの集まりだったんだぞ」

「んー……別世界は……そう、『ユグドラシル』って言うんだけど、そこにいる存在は君ら基準で言う『難度三百』が基本なのよ。まずそこが最低線。だから六大神みたいな一般人でも、こつちに来ちゃえば神様扱いされるのさ」

「い、一般人って……」

どこからか取り出した紅茶で唇を湿らせ、滔々と語るエイ。彼は嘘を必要とせず、真実を語ることに躊躇いはない。なにせ嘘をつくこと、真実を語らないことで得られるアドバンテージなど皆無なのだ。自身を害するものなど、あり得るとすればシステム外の強力な事象——真なる竜王が放つ“始原の魔法”くらいのもだろう。それすらも、精々が可能性というだけの話だ。限りなくゼロに近い確率である。

「逆にユグドラシルの頂点を誇った存在が『八欲王』。流石ワールドチャンピオンの集まりだけあって、この世界でも猛威を振るつたみたいだね。なんだか悪として語られてるけど、人間種から見たらむしろ六大神より救世主してるんじゃない？ 竜が蔓延する時代を終わらせて、人間にも扱える魔法——位階魔法という“法則”をワールドアイテム

で生み出した。最後は自滅したところまで含めて、彼等に感謝すべきだよね」

「…三度目だ。お前はいつたい何者なんだ？　それが真実だったとして、なぜお前がそこまで知っている。お前はいつ——この世界に来たんだ？」

「僕？　僕は『運営』。プレイヤーを管理する存在だよ。この世界へ来たのはつい最近さ。なぜ諸々の事情を知っているかっていうなら、この世界でのプレイヤーの行動は全部ログに残ってるからね」

「ちよつと話が大きすぎてついていけないわね……つまりあなたは、とてつもなく凄い存在ってことでいいのかしら」

「ちよつと違うかな。僕の持つてる力がとてつもないってだけで、僕そのものはただの一般人だし。君らの王様と一緒に。とても偉くて一般庶民には絶対の存在だけど——無能だろ？　努力で得た役柄じゃないってのもミソだね」

シニカルな笑みで肩をすくめるエイ。虚を突かれたように目を丸くするラキユース達をケラケラと笑う。『偉大さ』とは持つてる力に宿るのではなく、歩んだ道と結果、そして精神性に宿るものだと言ふ。だから自分は『一般人』なのだ、と。

「プレイヤーってのは、凄いいけど凄くないのさ。僕だって凄いいけど、凄くない。持つてる力が強すぎて、この世界の人には眩しすぎて、中身が見えにくいってだけだよ」

「…大丈夫、私達にはちゃんと見えてる」

「…うん」

「ティアちゃん？ それにティナちゃんも…」

「神様は『おねえちゃん、おっぱいしゅきー』とか絶対言わない」

「神様がメスイキとかするわけない」

「ああああああ！ 君らに合わせただけなんですけど！ メスイキなんてしてないんですけど！」

赤裸々な体験談をつまびらかに語る双子の忍者に、美少女姿のまま叫び声を上げるエイ。そんな様子を見て、ラキユース達は顔を見合わせてクスクスと笑った。なるほど、確かにただの一般人だ——そんな風に思いながら。



『アインズ・ウール・ゴウン』という男は、非常に慎重である。しかし臆病者かといえればそんなことはなく、やるべき時は誰もが驚くような決断力を見せる。運営の存在を警戒しつつも、しかし最優先はシャルティアの奪還である——そう考えるような男だ。

大切な仲間達が残した唯一無二のNPC。たとえ何をおいても救わねばならぬと、死の支配者は覚悟を決めた。そうと決まれば彼の行動は早かった。他の配下達の制止も振り切り、単身シャルティアの元へと向かい、死闘の果てに打倒せしめたのだ。

そして拠点にてシャルティアを復活させ、ひとまずナザリックには全員が揃った——もちろんアインズ以外の至高の四十一人を除いて、だが。

ならば次は何をすべきか？ アインズは考え抜いた。運営の存在は既に疑いもなく、噂の限りでは間違いなく善性の人間種である。ならばナザリックという存在に不快感を示す可能性は高く、管理者権限の程度によってはそのまま消滅させられる恐れすらある。

——つまり、ナザリックは変わらねばならない。善性であるというならば、そこにつけ込めばよいのだ。言うなれば『ボク悪いスライムじゃないよ』作戦。いくらカルマ値が極悪でも、実際に悪いことをしていない存在を消滅させることはないだろうと、アインズはそう考えたのだ。

否。むしろ積極的に善を成していくことで、ナザリックは良い組織であると対外的に

訴えていこうという試みだ。故にその考えを実現するため、最初に声をかけたのはカルマ値が善、極善である『セバス・チャン』と『ユリ・アルファ』の二人である。

「セバス、ユリ。お前たちに聞きたいことがある」

「はっ。なんなりとお聞きください」

「叡智の結晶たるアインズ様のご質問……ご期待にそえるよう、全力を尽くします」

「う、うむ……実はお前たちの性質についてなんだがな。ナザリックは知つての通り悪を標榜しているわけだが、お前たちはそれに納得しているのか？ 私が非道そのものの命令を下した時、どう考え、どう行動に表れるかが知りたい。たとえばユリ、お前に幼子を拷問するよう命じれば……どうする？」

びくり、とユリの肩が震える。しかしそれも一瞬のことであり、唇を固く引き結んだ後、彼女は主の望むであろう答えを返す。

「アインズ様のご命令であれば、是非もございません」

「…セバスはどうだ？」

「同様にございます。至高の御方のお言葉は、全てに優先されます」

「ふむ……ならばその時の心情はどうだ。カルマ値が善に傾いている以上、何も感じないという事はないだろう」

「——申し訳ございません、アインズ様。おそらくボク——私であれば、助命の嘆願を致

します。立場を弁えぬと理解はしていても……お許してください。ですが、厳命を下されたのならば、必ずや成し遂げましょう」

「…そうか。セバスも、やはり良い気分にはならないか？」

「…はっ。申し訳御座いません」

「いや、そう創られたのだ。謝る必要など一切ない」

アインズは顎に手をあて、ふうむと考える。カルマ値が善に傾いている者が、悪を成す際に感じる思い。カルマ値が悪に傾いている者が、善を成す際に感じる思い。これは同じなのだろうか、と。

「現状、ナザリックが悪として居続けることは非常に危険だ。私自身は善悪どちらを成そうがそこまで気にはならないんだが……問題はカルマ値が低い者達がどう思うか、だ。シャルティアやアルベド、デミウルゴス……ナーベラルなどは、善行をどの程度苦痛に感じるのか。それが知りたい。何物にも代えがたい苦痛か？ それとも不愉快に感じる程度なのか？」

ナザリックやNPC達のためを思つての『ナザリック大改革』ではあるが、善行そのものが身を引き裂くような苦痛であったり、死よりも辛いものであった場合、本末転倒だ。故にアインズは、逆パターンを現在進行系で体験している彼等に問うたのだ。『本質が善の者が、悪の組織に身を置くのは辛いか？』と。

「本音が聞きたい。私を慮ったり、気を使った物言いはやめてくれ」

「…悪事を目の当たりにすれば、心苦しくはございます」

「しかし、栄光あるナザリツクの任務を果たすことには代えがたい充実感を覚えます」

「心情に複雑さはあれど、我らは任務の完遂をもって絶対の忠誠を捧げます」

「それだけは——それだけはアインズ様におかれましても、自身にとっても、疑いようなない真実でございます」

「…そうか。お前たちの忠誠を嬉しく思う。しかしストレスがかかるのはよろしくないな……逆に、その心苦しさを軽減するような手段はあるか？　それが言いにくいことも、心当たりがあるのなら全て言葉にしてほしい」

アインズの言葉に、ちらりと視線を交わすセバスとユリ。それは『心当たり』の存在を如実に表しており、しかし言葉にするには憚られるという心情がありありと見て取れた。

「…あるのだな？　ならば言え。これは命令と心得よ」

「…はっ。アインズ様、恐れながら申し上げます」

「うむ」

「たとえどのような苦痛を感じようとも——その後には御方からお褒めの言葉を頂きますれば、幸福に塗りつぶされるかと」

「アルベド様やシャルティア様を例に出すのならば……あの方々人間種などに頭を下げたりするような状況に陥れば、屈辱に身を震わすのは確かでございます。しかしその後にはアインズ様にお褒めいただけると知っていれば、むしろ進んで屈辱へと向かうかと」

(なにそれこわい)

御方から誉を求める浅ましきをお許し下さい、と頭を垂れる二人。そんな彼等に対し、アインズはドン引きであった。洗脳教育が完全に染み渡ったブラック企業の如き服従っぷりだ。褒めるだけで問題ないってなんだよ、と焦燥と強制的な鎮静を繰り返す。

「そ、そうか。ならば我らナザリックはこれより、世のため人のために活動する組織であることを、行動によって示していこうと思う。全配下に大々的に通達せねばならん。セバス……階層守護者を此処に集めよ」

「はっ！」

『姉妹たちには申し訳ないが』『守護者達には申し訳ないが』と思いつつも、アインズの言葉に喜ぶセバスとユリ。他人への思いやりある行動が全てナザリックのためになるというならば、彼等にとつてはこれ以上ないほど素晴らしい変革だ。加えて、直々に褒められる機会が増えるともなれば、さらなる忠誠を誓えるというものだろう。

喜び勇んで部屋を後にする彼等の後ろ姿を見て、アインズは憂鬱そうにため息を吐

く。『愛が重い』というのはこういうことなのか——そんなことを思いながら。



さて、なぜわざわざ蒼の薔薇に色々と説明したのか——それはもちろんセックスのためだ。自身が超越者だと知られれば、選択肢の幅が狭まるじやないかって？ いやいや、そりゃあノーセンスな奴が言うことだ。

僕は運営だぜ？ イベントでもあり、シナリオライターでもある。ユグドラシル内のイベントやらシナリオやらの発案、進行を引き受けていた実績もある。その上で言えることは、セックスにおいて一番の大敵は『マンネリ』だ。

毎度毎度弱みにつけ込んだり、手っ取り早い方法でしたってすぐに飽きちゃうだろ？

イベントには深みや仕込みが必要不可欠だ。僕を『神様のような存在』だと知ってしまつた彼女達だからこそ取れる手段もある。特にラキユースちゃんなんかは、僕にとつて理想の『プレイヤー』だ。

提供する側にとつて、相手が中二病であるというのは一切マイナス要素にならない。中二病を馬鹿にする風潮こそが、人生を素直に楽しめない要素になるんだ。そもそも僕がアインズ・ウール・ゴウンに配慮するのは、中二病を患っているあのギルマスが好きだからだ。最後までユグドラシルを愛し、狂気に近い執着の対象にさえなる——運営冥利に尽きるつてもんだらう。

というわけで、ラキユースちゃんにはレイドボス討伐シナリオ『災厄の魔樹と運命の申し子』の主人公になつてもらふ予定だ。愛と勇氣とセックスが王国を救う、彼女にピッタリなストーリーリーと言えるだろう。ほんとのこの国つて、利用できるイベントに事欠かないよね。

ちなみにイビルアイちゃんにはラブコメディシナリオ『失われた記憶と偽りの恋慕』のヒロインになつていただく予定である。どちらにしても腕が鳴る、僕自身のセンスも問われるイベントと言えるだろう。とりあえず今日のところは、ラキユースちゃんへの仕込みをしてお暇する予定だ。

和やかに会話が終わり、ラキユースちゃんとお別れの挨拶をする直前……指をパチン

と鳴らし、時間を停止させる。この世界では、対策をしていない人間が時間停止の効果を受けた場合、かけた側が何もしなければ魔法が発動したことすら気付かない。

反してユグドラシルでは時間停止対策をしていないプレイヤーであっても、停止中は動けないだけで意識はある。本当に時間が止まるわけではないのだから、それは当然のことだろう。この違いこそが重要なポイントであり、第一シナリオの肝は彼女に『中途半端な時間耐性』を付与することだ。

こちらの世界にきて様々な検証を行ったが、時間停止に関しては中々興味深い結果となった。耐性を最低限にすると、体は動かないものの、意識は覚醒したままの状態となる——要はユグドラシルと似たような結果となるのだ。

それを利用し、止まった時間の中でラクキースちゃんだけを覚醒させておく。しかし僕はそのことに気付いていない……振りをする。そして『この世界の管理者』と会話をする……振りをする。なんやねん世界の管理者って。

「——やあ。どうしたんだい、急に連絡してきて。うん……ああ、偶然だけど、会ったよ。『ラクキース・アルベイン・デイル・アインドラ』……確かに『彼』の血を引いているね。覚醒の可能性は充分にある」

めっちゃ視線感じる。いったい何が起きているのか——という彼女の雰囲気を感じつつ、話を続ける。

「おいおい、僕は何もするつもりはないよ。この世界の管理者は君さ。彼女達にも言ったけど、僕はあくまでも異邦人……傍観者に過ぎない。たとえもうすぐ王国が滅びるとしても、手は貸さない——というより、貸したら君、怒るだろう?」

ピクリピクリと、僕が出す単語に反応している様子が窺える。特に『王国が滅びる』という言葉に反応しているようだ。あと『覚醒の可能性』とかいう意味不明の言葉にもめつちや気をやってる。ごめんね、そんなのほんとはないんだ。ラキュースちゃんごめんして。

「ルールは守るさ。安心してよ……うん?」
 “契約” はルールの範囲外になるだろうって? まあ確かに僕が彼女と契約すれば覚醒を促すことになるけど——心配しなくても、彼女には無理さ。『無垢なる白雪』なんてつけてるんだ、君にも解ってるんじゃないのかい? まあ、僕にできることは精々危険を呼びかけるくらいさ」

ピクリピクリっていうか、ビクンビクンしてる。まあ意味深なこと言いまくってるから、中二心が刺激されてるんだらう。ごめんね、僕も半分くらいは何言ってるか解んないよ。ライブ感って大事だよな。

「ああ、災厄の魔樹の復活は近い。それが王国へ向かうとしても……それで滅んだとしても、腐敗のツケでしかない——そう言いたいんだろ? はいはい……うん、じゃあね」
 通話を切る。振りだけど。というか、ほんとになんか変な電波が飛んできそうなり

取りだ。『なにやっつてんだろ私』感が半端ない。とはいえ、最後までやり通さねば。再度パチンと指を弾き、時間停止を解除する。別れを告げるところだったから、その続きだ。「じゃあね、みんな。ティナちゃん達はまた明日」

「ん」

「明日は十二歳シヨタ茶髪セミロングのかつこでヨロ」

「清々しいほど欲望に忠実だなお前達……まったく、男にうつつを抜かす暇があるなら修行でもしろというに。色恋など強者には不要だ」

「——待って！」

真剣な瞳で僕を呼び止めるラキュースちゃん。とりあえず一つ目のフラグはゲット、と。なんだい？ 何か質問があるなら二人きりで聞こうじゃないか。じゃないとティナちゃんとティアアちゃんにすぐバレるし。

——さあて、イベント一日目の始まりだ。

あー、頭を使った後は何も考えずセックスがしたい。『ラキユース・アインドラは勇者である』計画は順調だし、あつちで頭を使った分、別の場所では下半身を使おう。さて、この王都で手っ取り早く性欲解消をしたいならどうすべきか？ そう、娼館だ。

違法娼館に行つて存分に下卑た欲望を叩きつける——というのは趣味じゃないので、娼館を叩き潰しつつ可哀想な娼婦達を救つて、感謝のセックスと洒落込もう。事務的なセックスを避けるためのコツとは、可哀想な状況の人間を救うことから始まるのだ。うん、なんかすごいクス思考だな。

「というわけで襲いにきましたー」

「っ！ 来やがったぞ！ ……な——っ!? てめ……ガッ！」

「はいはいさっさと投降してね………つて『来やがった』つてなに？」

「こ、こは八本指と関係のある娼館だぞ！ てめえ自分が何やつてるかわかつてんの

か!? どんだけの数を敵にまわ——あがつ!」

「はいはい八本指八本指。掛けましては六十四指」

んー? なんかやたら武装してる人間が多いな。ある程度の護衛は常駐してるだろうけど、流石に戦力過多じゃなからうか。というか襲撃されること知ってたみたいな反応がちよつと気になる。支配して聞いてみるか。いちいち拷問しなくて済むし、魔法ってほんと便利だよな。

「なんでこんなに数が多いんだい? 毎日こうつてわけじゃないよな。護衛費用だって馬鹿にならないだろうし。それに襲撃があることを知ってた理由も教えてくれる?」

「最近……娼館への襲撃が相次いでいる……護衛の数が強化されて……警備部門である六腕の全員も雇われたらしい……」

「……へえ?」

はて、時期的にはクライム君の活躍もまだな筈だけど……つていうか蒼の薔薇のみなんも何も言つてなかったし。まあ僕が好き勝手やっている以上、当然変化はあるだろうけど。でも襲撃が『相次いで』いるのは不自然だ。あの怪物王女様が発案するなら、一晩で全てが終わるように画策するだろう。散発的に行動して警戒を強めるなんて、悪手以外のなにもでもない。雲隠れされて、場所を変えてまたやられるのがオチだ。

「下手人に見当は付いているのかい?」

「解らない……だが……最初に襲撃があった日の前夜に……娼婦が一人連れ去られている。銀級の冒険者のチーム……尋問のため……六腕の内二人が向かっている……」

「ふうん……？　なんだそりゃ」

そもそも戦力的に八本指を襲撃し続けられるような個人、あるいは組織って相当限られてるよな……？　まさかアインズ・ウール・ゴウンってことはないと思うけど……？　つか銀級冒険者って誰だよ。ワケワカメなことばかりだ。さつさと可哀想な人達を助けてしつぽりセックスの予定だったのに。

つーかよくよく聞いてみると今は経営してないらしい。ここは罨として待ち受けるための場所だつて。ああ、どうりで大して調べもしてないのにここに辿り着けたわけだ。そっちから積極的に情報を流してたわけね。

うーん……ん？　感知スキルに反応があるな。どれどれ……おや、シャルティアちゃんとソリュシャンちゃん？　ああ、八枝刀の暗殺蟲も二人隠れてるな。なにごとだ？　確かにそろそろ王都での活動時期ではあった筈だけど……ツアレちゃんイベントでも早まったのだろうか。にしても面子がああ二人つてのは理解の範疇にない。

八枝刀の暗殺蟲がいるってことは正式に命じられた任務である可能性が高いし、既に僕の知る展開とは別物と考えた方がいいな。その上で先程のお雑魚さん達の発言を加味するなら、彼等こそが最近頻発しているという襲撃犯の正体に間違いないだろう。な

んだなんだ、先に八本指を掌握しようって計画なのか？ いや、それにしては少し杜撰すぎる。

やろうと思えばすぐに掌握できるんだから、他に目的がある筈だ。数度にもわけて襲撃を行う意味……うーん……じわじわと追い詰めて恐怖を煽るため？ いや、死よりも恐ろしい拷問の手段なんぞナザリックにはいくらでもある。わざわざここまで迂遠にする意味はないだろう。

——なら考えられるのは『見せしめ』か、あるいは『示威』『誇示』あたりだろうか。行動そのものに意味がないのなら、見せつけること自体に意味がある筈だ。それなら行動を数回にわたける意味も出てくる。誰かに対して『お前もこうなりたくなかったら』のサイン……もしくは『我々はこういうことをしている』の主張。

はてさて、どうしたものか。考えている内に扉が開かれた。何気にナザリック勢が僕を認識するのは初めてだろう。おお、めっちゃ驚いてる。まあ探知不可属性を僕自身に付与してるから、それも無理はない。八枝刀の暗殺蟲もそうだし、ソリュシャンちゃんもレンジャー技能は高かった筈だから、それを掻い潜っている時点で警戒に値するのだろう。ま、とりあえず適当に話しかけてみるか。

「あ、エ・ランテルのワガママお嬢ちゃまだ。なんでこんなとこにいるんだい？ ずいぶん雰囲気違って見えるけれど」

「……あちらでお会いして良かったですか。恥ずかしい姿をお見せ致しましたわ……しかしあの時の私は世を忍ぶ仮の姿……！ その正体は——」

「そうでありんす！ 世のため人のため、悪を誅する正義のヒロインズ——」

「『イルミナティ・エナミティ』！ 所属は『ナザリック』。ナザリック地下大墳墓ですわ」

「正義の墳墓、ナザリックでありんす！」

「……」

「……」

「……」

「そ、そう……」

頭が沸騰しそうだよ……何が起きたらそうなるんだ？ もしかしてギルマスじゃなくて、正義のワールドチャンピオンでも来てたのか？ いやいや……ヘルヘイムの悪の華、異形種の筆頭、運営にもファンにいる偽悪の集団がなんの冗談だ。

待てよ？ もしかして僕が転移したのはオーバーロードの世界ではなく『ぶれぶれぷれあです』とか『不死者のOh!』の世界なのか？ それならこの意味不明な事態もギャグ時空として納得できるけど。いやでもそれならみんなもつとぶにぶにろりろりしていい筈だ。

しっかし、なんにしても可愛いな……ダサイポーズと口上だけど、絶世の美女と美少女がやるとそれだけで様になるな。ん……? 『ダサイポーズと口上』ってことは——うん、間違いなくAOGのギルマスがきてるな。いまい何が起きているかは解らんが、とりあえずおべっか使つところ。NPC達つてご主人様アゲしとくと割とチョロイイメージ。

「——そのポーズと見得切り……そこはかとなく偉大さとセンスを感じるぜ。隠しきれない智慧が滲み出てる。どちらかが考えたのかい?」

「くふっ……! ぬしはわかっついていんす。それにその隠密の上手さ……そいで僅かなヒントから御方の智謀を感じ取る慧眼……! 只者ではありんせん。何処の何方様でありんすかえ?」

『うんうん』って感じで頷くシャルティアちゃん可愛い。ちよつとこういう言い方はあれだが、やはり別格の容姿だ。福本作品に突如現れた矢吹ヒロインばりに違つて見える。

さて、とにかくだ。君たちがプリキュア風にくるつてことは、僕も倣えばいいのかしらん。いいんだな? やるぞ? そつち系の空気つてことでもいいんだな? よし、いこう。ついでに対『シャルティア・ブラッドフォールン』用の決戦外装を使うとするか。当たり前だけど、ナザリックに対する準備は万端だ。

「ふっ。バレたのならば仕方ない。僕は……いや！——私は！」

『魔の法則と少女達』アツプデートで実装された変身ステッキの力を見よ！ …まあ外装のチェンジは管理者権限でやってるだけだけど。くるつとステップ、ターン&ターン、くるりくるりとチェンジスピナー。

「ある時は娼館を襲撃する男！ またある時は殺戮の墮天使！ しかしその正体は——」

何言つてんだろ僕。とはいえ、これもセックスするためには意外と有効なのだ。もちろん女の子に変わることが、じゃなくて『馬鹿になること』が、だ。童貞はよくチャライ男のノリを馬鹿にするけど、あれはあれで真理だ。セックスへ移行するためには、男と女の双方がある程度馬鹿にならなければ成立しない。大学生の『うえーい』は意外と馬鹿にできないもんだぜ。

「——街を裏から守る正義の吸血鬼！ マジカル☆イウエン！」

彼女達のダサイポーズを踏襲しつつ、胸を強調する姿勢を崩さない。今の僕の姿は、金髪ロングのちよいロリ美少女巨乳吸血鬼だ。屍体愛好家^{ネクロフィリア}で巨乳好きで同性愛者でもあるシャルティアちゃんに対しては、中々の効果を見せるんじゃないかなろうか。

「……くひっ……！」

…うわー、現実に舌なめずりする人って初めて見たわ。まあ僕が取った姿もさること

ながら、衣装も衣装だからな。ワカメちゃんばりのミニスカな上、黒い乳バンドから零れそうな乳房は、動く度にぽよんぽよんと揺れ動くのだ。正直分身して自分を犯したいくらいだ。レベル高すぎだつて？ うん、僕もそう思う。

「あいあい、各々疑問はあれど、人ならざる者が集いし今夜……異形には異形に相応しき理が御座します。此度の出会いは豈^{あにはか}図らんや、されどただ求むは獣の道理なれど、それは我らの運命^{さだめ}と定め——格の違いを引き比べましよう？」

『偶然出会った僕達は互いに目的を知りたいだろうけど、人間じゃないのだからまず必要なことがあるでしょう……どちらが上かを決める、獣染みた格の付けあい』という感じに訳せるセリフだ。ああ、心が中二の頃に戻った気分である。でも雰囲気って大事だからね。僕もやりたかないんだけど仕方ないんだ（棒）

「ああら、ずいぶんと自信がありんすのね」

「うん。言葉の通り、自分を信じているからね」

「——くきつ」

シャルティアちゃんが完全武装に変身した。歪んだ口元や不遜な態度とは裏腹に、まったく油断していない様子が窺える。誰も僕を感知できなかった事実に加え、おそらくは傾城傾国で操られたイベントは普通に起きたんだろう。世界には格下ばかりでないという認識がきつちりあるように思える。

——しかし今はお馬鹿なノリでいくと言った筈だぞ。エロゲ脳で『戦い』といえはセックス勝負だろうが常識的に考えて。臨戦態勢に移行した彼女達を前にして、僕も乳バンドを華麗に脱ぎ去って準備を整える。

「おほっ……んんっ！ 戦うというのになんのももりでありんすか？ それとも……くひっ、ベッドの上での勝負でありんしたかしらあ？」

「え？ そのつもりだけど……」

「……え？」

「娼婦はもう居ないみたいだけど、元々そういう施設だし……地下には正義——じゃなかった、性技を競うのに向いてるグッズもいっぱいあるぜ。最初にイった方が負けの……『床勝負』を致しましょう？」

右腕を下乳に添えて、美巨乳をこれでもかと主張させる。瞳にはエロさとだらしなさを込める……これは演技の必要もなく素だ。そんな僕の姿を見て、シャルティアちゃんは一瞬だけ目を丸くした後——欲望に爛れた瞳で、ニタリと口元を歪めた。

まあ配下の『吸血鬼の花嫁』とネチヨプレイしたり、アルシエちゃんのアナル調教したり、巨乳アンデッドであるユリちゃんを密かに狙っていたりと、元から変態の彼女である。こんな好機を逃すわけもないだろう。

「そう、そう、そう……！ そういうことなら仕方ないでありんすねえ。ソリュシヤン？」

これは情報を得るために必要な戦いだと思ひんす。すぐに終わらせんしよう。ぬしは上で見張つてなんし」

「…程々にしておかれませうよう」

トイレでレイプ中のヤンキーが、舎弟に『入り口見張つとけよ!』つて言つてるみたいな雰囲気を感じるな。ソリユシヤンちゃんにも言つてるんだらうし、さり気なく視線を八枝刀の暗殺蟲に向けてるあたり、彼等にも伝えてるんだらう。

「では……行きんしょうか」

「オーケー」

どちらも負けることなど考えていない表情をしながら、並んで地下へ降りていく。うわあ、拡張器具やら三角木馬やらスケベイスやら鞭に口ウソク、媚薬にギヤグボールとなんでもござれの、性戦にもつてこいのステージだ。

いくつかある部屋の内、一つを選んで入る。先手必勝、その無防備な後ろ姿をガバリと抱きしめ、ドレスの隙間から彼女の秘所へと手を伸ばす。パニエ必須の膨らんだスカートは、セックスするのに面倒な手順を増やす——通常であればそうだ。しかし彼女のそれは前から手を差し込めるようになってる多重構造で、金属のワイヤーは折りたたみ式のワンタツチ仕様。見た目と実用性がハイブリッドされた完璧な衣装だ。ペロンチーノさん、こだわり過ぎで素晴らしいと思います。

「んっ……せつかちは嫌われるでありんすえ」

「こんな濡らしと言って言うセリフじゃないよねえ」

「はっ、ん……！ あっ、はあ……！」

ぐちゅぐちゅと彼女の雌穴を掻き回すと、濃厚な雌の匂いが部屋に充満していく。肌触りの滑らかさ、入り口の締め付け、腔壁の感触……全てが一級を超えた、まさに理想の体だろう。まあ今の僕も負けてないとは思うけど——つてなに女として張り合ってるんだ僕は。どうにも、精神というやつは体に引つ張られる傾向があるな。

「うひゃっ!？」

「んくっ、くふ……！ 張りも形も感触も……極上でありんす」

「く、んんっ……！」

く、勝負だもんな。そりゃあつちも攻めてくるさ。しかしこつちには明確なアドバンテージがあるんだ。僕は君をよく知っていて、君は僕のことを何も知らないだろう？

赤ちゃんののように僕の胸にしゃぶりついてくるシャルティアちゃん。そんな彼女の尻を撫で回しつつ、前の穴と後ろの穴を気ままに弄る。とめどなく溢れる蜜は、彼女の興奮具合を物語っているようだ。

「おやあ……？ 自信の割には、まだ処女なんだねえ。男を知らない未熟な花で、僕に勝てるつもりかい？」

「くふ、その分女の扱いには自信がありんすの。ここは大事な御方のために取っているのよ」

「へえ……」

蕩けたような笑みで処女を誇るシャルティアちゃん。頭に浮かべているのは主人か創造主か……ま、それが君の敗因だよ。NPC達の主人愛や創造主愛は異常なレベルで、彼女はそれが特に顕著だ。というより、その忠誠は性欲にも直結していると言わべきか。忠誠の儀でびしよびしよに濡らし、いく寸前だったという事実がそれを証明している。ならそれを利用すればいい。

「ふうん……じゃあここを遅いので貫かれる気持ちよさ、知らないんだあ……」

「……む……」

僕も知らんけどな。というか一生知りたくはない。

「じゃあちよつと想像してみなよ」

「そ、想像……?」

「そうだねえ……今までで一番『良かった』のは『バードマン』だったかな?」

「——っ! バ、バードマン……でありんすかえ?」

「そう。あの種族のアレって遅しくてねえ……シャルティアちゃんの知り合いにバードマンがいるんなら、その人で想像してみなよ。彼のぶつとい剛直が、ここに入って……」

ガンガン突いてくるの。気持ちいいよお？」

「あ……あ……！ ペ、ペロロンチーノさまの、太いの……！」

うわつ、急に締めまりが……！ 指が痛いくらいだ。それに愛液もすごい勢いで溢れてくる。ぴつちりと閉じた割れ目の上、陰核を擦ると、先ほどとは比べ物にならない嬌声上がる。ペロロンチーノ効果しゅごい。流石名前も微妙に卑猥なだけはある。ペロペロチンチーノ効果とでも名付けておくか。

「ほら……ガンガン突かれた後は、女として求めるものがあるよね？ 言ってみなよ、ほら」

「あつ、あつ、ん、っ……！ ペロロンチーノ様……！ 膣内に、膣内に出してくんなまし……」

！ シャルティアは、わらわは孕みたくございます……！ あうっ！ ふっ——」

「なら——イけよ、シャルティア。バードマンの肉棒を雌穴でいやらしく扱く妄想で……だらしな顔のままイツちやいなよ」

「ああっ！ ペロロンチーノしやま、ペロ——んきゆうっ！ ……は、あ……？ ひゃふ、んう……」

お尻だけ高く上げながら、脱力したようにベッドへうつ伏せになるシャルティアちゃん。バックから突いていいってことかな？ そろそろ僕も我慢できないし、挿れさせてもらうか。勝者はなにをしても許される……それが真理だ。

「僕の勝ちだね」

「ひゃ、ひゃい……っ!? って、な、なんでありませんかそれは……? は、生えて……?」

「何って、オチンチンだよ。見りゃわかるだろう?」

「そ、そういう意味じゃ——だ、ダメであります! ここは御方に捧げる、だ、大事な……!」

「解ってるって。だからこつちで……ね?」

「お、お尻の処女も、ぜんぶ捧げたいのであります……」

「ワガママ言っちゃダメだよ、シャルティアちゃん。それにさあ……」

まだ力の入らない様子の彼女の穴に、いやらしく肉棒を擦りつける。カリがクリトリスに引つかかる度、ぴくんと反応する様が淫靡だ。

「前の穴は、大事なもの。それはわかるよ。でも後ろの穴は? これはいつたいなんのために付いてるのかな?」

「はあつ、んっ、か、かきまわしやないで……こ、こここは……排泄用の、あなでありますしゅ……!」

がくがくと体を震わせながら、幼い体を振らせるシャルティアちゃん。必死に答えてくれたのはいいけど、間違ってるぜー。

「おいおい、僕らアンデッドは飲食不要なんだから排泄用の穴ですらないだろ?」

「ふ、ふえ……？」

「ここは——練習用の穴だよ。いざ愛しい人とセックスする時に失敗したら嫌だろ？だからそのために、チンポの悦ばせかたを学ぶ穴」

「あ……あ……」

「処女が大事と言うけれど、大事なのは心さ。どんな経験をしようが、心の膜さえ守つときゃ処女だつて。ほんとほんと」

「あ……あ……！ は、挿入つてく——んうっ！」

んじや和姦つてことで。僕も前の穴はモモンガさん用なイメージあるからさ、アナルで我慢しとくよ。にしても——こつちの具合も尋常じゃないな……！ 奥に進む時は入り口が程よくしまつて、抜く時は逃さないとばかりに絡みついてくる。

「は、あ、んっ、大きい、いっつ、ふ、うっ——」

「ペロロンチーノさんとやらは……もつと大きいだろうねえ」

「——っ！」

うひや、すごいうねった。ただでさえチンポ絞り特化の穴だったのに、極上なんて言葉じゃ言い表せないケツ穴に変化した。流石にこれは……保たないな。

「中に出すぞ！ ……主のチンポより先に、知らないチンポを受け入れたらしない穴で——受け止めろ！」

「ああっ、はう——も、もうひわけありまひえん……！ ペロロンチーノひやまあ！ いぐっ——」

…今までの人生で一番出たわ。中出ししてる最中、穴全体がごくごく飲み干すようにチンポを刺激してきた。最初から最後まで、信じられない気持ちよさだった。これがW e b 版ではヒロインの座を我が物にしていた穴か……！ できれば前の穴も体験してみたかったけど、残念だ。

気絶した彼女を満足げに見ながら、ぎゅぽんとチンポを抜く。シャルティアちゃんのアナルからは噴水のように精液が溢れ出し、ベッドを汚す。いやあ、なんだか感慨深いものがあるね。

——ん？ 人の気配……ソリュシャンちゃんか。ちよつと時間かけすぎたかな？ 扉をノックされたので、どうぞの声をかける。蕩けたような顔で失神しているシャルティアちゃんと、まだ勃ったままの僕のチンポを見比べて驚きの表情を作っている。

「僕の勝ち、だね」

「……然様でございますか」

…ん？ どしたの近付いてきて……ソリュシャンちゃんも勝負するってのかい？

おいおい、今更手コキごときでどうにかなる僕じゃないぜ——っ!!

「うわっ……!! ちよ、待っ……！」

「勝負に待ったはごさいません」

手コキじゃなくて、なんだこれ……掌にチンポが飲み込まれて……？　そういやソリュシャンちゃんってスライムだった——待て待て待て！　なにこの感触、ちよ、洒落になってない……！　やばい、すごく無様だ。彼女の腕を必死に掴んで、犬みたいに腰をカクカク振ってしまう。でも振らずにはいられない。ソリュシャンちゃんの蔑んだような視線と、歪んだ口元が被虐心を煽る……！　やば、出るっ……！

「はあっ、ふう——……っ!?　ちよっ！　いま出したからもう……うわっ!」

もう無理だっつて！　く、くそ……！　ならこつちも攻めて……え？　スライムだから性感帯とかないって？　ちよ、待ってほんとに待って……し、搾り取られる……！　うあ、また勝手に勃起して……！

「これで一対一。引き分けということでもよろしいでしょうか？」

「は……ひ……」

世界で一番気持ち良いのは、具合を自由に調節できるスライムの体内……そんなことを思い知らされた。掌だけでイカされるって、屈辱極まりないなあ。この恨み、いつか晴らしてやるぞソリュシャンちゃんめ。

6 話

玉座にて、支配者然とした態度で鷹揚に構えるアインズ。眼前には片膝を立て顔を伏す、一人の階層守護者と一人の戦闘メイド。彼女達をわざわざ呼びつけてまで任務の報告をさせたのは、案件がそれほど重要だとアインズが考えたからだ。

アインズ・ウール・ゴウンの方針転換——それに際して何が必要であるか。それは根本的な原因を考えれば自明の理だ。運営に対し、自らが正義であるという主張をすること。となれば、そう……必要なものは『悪』である。

自らが正義足らんとするならば、必要なものは信念だけだ。しかし自らが正義であること「主張」したいのならば、必要なものは『打ち倒すべき悪』だろう。ただ人を救いたいというならばどこでもできる——しかしそれを広く知らしめたいという偽善には、誰もが認める悪の存在が必要不可欠だ。

故にアインズは運営に接触する前に、実績を作る必要があつた。浅く広く周辺国家の事情を探った彼は、正義の証明に必要な対象を幾つかに絞る。

リ・エステイーズ王国に巢食う悪の組織「八本指」の壊滅。ローブル聖王国へ少なくない被害を与えている「巫人」の殲滅。法国が積極的に虐げている「エルフ奴隷」の

解放。

大衆に被害をもたらす悪を討つならば、ただ単に人を救いたいというならば、もう少しやりようはあつた。しかし彼の目的はあくまでも『運営に対する正義の主張』であり、それ故に重要なポイントは『現代人が眉をひそめる状況』を解決することにある。

——麻薬を量産し、娼婦という名の奴隷を使い捨てる悪の組織。善性の人間であれば、間違いなく不快に思うだろう。

——人間種を襲う亜人。これは生存戦争とも言えるため、自然の掟だと考える人間もいるだろう。しかし竜王国を救うために十数万ものビーストマンを屠つた運営であれば、正義であると考えer可能性が高い。

——そしてエルフ奴隷の解放。これほどわかりやすい正義もないだろう。たとえ内情が国家間の戦争による報復の応酬によるものだったとしても、現代人にとつて『奴隷』とはそれだけで悪だ。たとえアークロジ―住みの富裕層であっても、国民の九十九%以上は企業の奴隷のようなものだから、その言葉に対する憤懣もひとしおだろう。

そんな事情もあり、配下を使い善行の押し売りを画策し始めたアインズ。もちろん人間世界の事情を鑑みれば、押しつけて売り飛ばすような善行であっても、喉から手が出るほどに欲しいものだろう。アインズ・ウール・ゴウンの目的が対象からの『感謝』とその流布である限り、双方に利がある取引だ。

問題があるとすれば力の差が大きすぎることだろう。隔絶した力を持つナザリツクにとつて、八本指の壊滅など片手間かそれ以下の労力で事足りる。迅速に事が成された場合、正義が執行されたことすら気付いてもらえない可能性があった。

だからこそ数度にわけて襲撃を行ったのだ。守護者や戦闘メイドを幾つかのパイにわけ、じわじわと八本指を追い詰める。そこにわざわざシャルティアを加えたのは、先日の失態を拭う機会を与えるためだ。アインズと敵対するという、配下であれば自害をもってすら許されない大罪——そう考える憐れなNPCに対する慈悲。

しかしアインズは考えもしなかった。シャルティアという最強の守護者が、このような簡単な任務でさらなる失態を重ねるといふ結果など。

「つまり、結果から言えば逃げられてしまったのだな？」

「——はい。申し訳ございません、アインズ様。二度に渡る続けざまの失態……階層守護者としても、配下としても許されません。先日の失態の折、自死は許さぬという慈悲深き御言葉を頂戴致しました……しかし度重なるこの醜態。どうか厳罰をお命じくださ……！」

「やめよ。やめよシャルティア。八枝刀の暗殺蟲とソリュシヤンが認識も出来ずに終わった相手だ。間違いなく隠密特化型のカンストプレイヤー……おそらくはニグレドであつても厳しいだろう。高位アイテムのブーストがあつてようやくと言つたところ

だ。たとえこの私がお場に居たとしても、逃走を阻めたとは思えん」

「ですが——!」

「私ですらが成し得なかつたであろうことを悔やむか、シャルティア。それは少しばかり不遜が過ぎるのではないか?」

「そんな、そのような……:至高の御方のお慈悲に、感謝を」

「慈悲もなにもないだろう。純然たる事実を述べたのみだ……これを失態と考えるのは、私の能力すらも侮辱することと知れ」

このくらい言えば大丈夫かと、出もしない額の汗を拭うアインズ。感動に打ち震えているシャルティアとソリュシヤンの姿を見て、心の中で深い溜め息を吐く。自虐系メンヘラの彼女を持った男の苦労とはこのような感じなのだろうか、数秒の間、現実から目を背けた。

しかし新たななるプレイヤーの存在が明るみに出てしまったのだ。現実逃避もそこそこに、シャルティア達に詳細を尋ねる。

「名は判明しているんだつたな、ソリュシヤン」

「はい。あくまで本人が名乗った名ではありませんが『マジカル☆イウエン』と」

『マジカル☆イウエン』か……(行動といい名前といい、そこはかなくなるし☆ふあーさんと同じ匂いが……いや、あそこまで酷い人間がそうそういてたまるか)」

「先程聞いた容姿の他に、なにか特徴のようなものはあったか？　もしくは手がかりになるものでもいい」

「…はっ。その…」

「…？　どうした、ソリュシャン。何か言いにくいことでもあったのか？」

「いえ。こちらを、その——戦利品として渡されました」

「——っ！　それはヘロヘロさんの……人形か？」

ソリュシャンがおずおずと差し出したのは、アインズ・ウール・ゴウンのメンバーの一人『ヘロヘロ』を象った人形だ。しかしそのクオリティは見るからに高く、アインズが手ずから作成したアヴァターラよりも遥かに精巧である。

そしてそれと同時に、ソリュシャンの歯切れの悪さにもアインズは納得する。彼女はヘロヘロによって創造されたNPCであり、製作者に対する忠誠や愛情はただならぬものがある。これほどに見事な人形であれば、誰もが手元に置いておきたいと考えるだろう——そう、彼女であればなおさらに。アインズへと差し出せば、手がかりの物証として接收される可能性が高い。配下としてそれは当然だと考えてはいても、惜しむ気持ちを感じていけないのだ。

「なぜ彼女がヘロヘロ様の人形を持っていたのかは、不明でございます」

「ふむ…」

珍しく動揺を表に出すソリュシヤンを宥め、アインズは思考に時間を割く。ヘロヘロの人形の存在——実のところ、それ自体はおかしくない。オンラインゲームであれば……特にそれが大規模なものであればあるほど、特定のプレイヤーに対するファンというものは自然に発生するものだ。

アインズ・ウール・ゴウン程に悪名を轟かせたギルドは、ユグドラシルでも数少ない。アンチの多さであれば五指に入るだろう。その分コアなファンも多く、中には信者と言える者もいたほどだ。嫌われ者とは、ある意味で人気者といえる。

実際問題、アインズ・ウール・ゴウンが四十一人という少数精鋭であったのは、とある時期にギルド加入希望が殺到したためだ。スパイなどの懸念もあり、ぶにと萌えが参加を打ち切った経緯もある。

それを考えれば、ファンの中で自作の『AOGギルメンモデリングデータ』を売買、譲渡、共有していた可能性も充分にある。疑問があるとすれば『ソリュシヤン』に『ヘロヘロ』の人形を渡した部分だろう。かつての大侵攻でさえ、戦闘メイドが守護する階層に辿り着いたものはいない。両者の関係性を知るものなど、ギルドメンバー以外には存在しないのだ。

もちろんアインズ・ウール・ゴウンのファンだと言うのなら、既知の情報もあるだろう。ナザリックにはメイド好きが三人いる。その内の一人は普通のメイド好きだが、

残りの二人は真性だ。メイドキチガイであるへロへロと、メイド服キチガイであるホワイトブリム。

これは少し調べれば知れる情報である。そこから推測し、メイド服を着たソリュシャンの製作者が彼等だと考えるのは、可能性としてはあり得る。何しろ『ナザリック』と名乗ったのは彼女達なのだから。しかしピンポイントでソリュシャンにへロへロの人形を渡すのは、やはり違和感がある——アインズはそう考えた。

「まあ、そうだな……しかし警戒しすぎるほどでもないか……？ そいつは異形種だったのだろうか？ それでいてへロへロさんの人形を持っていたのなら、我々のファンである可能性が高い。そしてファンといえど——いや、ファンだからこそ逃げたと考えれば納得もできる。ユグドラシルという枠組みであればともかく、この状況で接触したい組織ではないだろうか」

「……？ それは、どのような……」

「いや、こちらの話だ。へロへロさんの人形は鑑定後、問題がなければお前が持っているソリュシャン」

「……！ よ、よろしいのでしょうか？」

プレアデスにおいて最も沈着冷静なソリュシャンであったが、アインズの言葉には思わず破顔した。子供のように無邪気に顔をほころばせ、差し出していた人形を宝物のよ

うに抱き締めた。

「戦利品なのだろう？　ならばそれはお前のものだ……というか聞き忘れていたが、ど
ういう意味の戦利品だ？　まさか実際に戦ったわけではないだろう」

「はい。性技を競う戦いでございました」

「正義を？　…ああ、そういえば『正義の吸血鬼』と口上を述べていたんだったか。それ
にシャルティアは敗北し、ソリュシャンが勝ったと。ふうむ……どのような戦いか想像
できません」

「アインズ様！　このシャルティア、次こそは必ずや御方に勝利を捧げます！　尻尾は
付けさせるものであり、付けるものではない……その考えを恥じ、今は常に括約筋を鍛
えております。挿入って五秒で即射精を目指し——」

「なに言ってるの？」

「ご安心ください。前の処女と心の膜はアインズ様に！」

「だからなに言ってるの？」

「戦利品として奪われた下着は、御身に誓って取り返します！」

（なんでパンツ奪還を宣誓されてるんだろう…）

パンツを奪い合う戦いつてなに？　と頭を抱えるアインズ。更に悩みの要因が増え
たことに肩を落とした。不幸中の幸いは頭髪がないことだろうか、抱えた頭の頂点を

擦る。もし生えていたままであれば、きつと徐々に薄くなつていくだろう——そんな訳のわからない思考をしながら、やる気に燃えているシャルティアを呆れと共に見つめるアインズであつた。



『災厄の魔樹と運命の申し子』 Chapter : 7 // 覚悟

——無限に続く白い空間。果てなき純白の地にて、轟々と燃え盛る炎の魔神が崩れ落ちていく。消えゆく瞬間にひととき強く輝き、白い空間に在る二人の陰を濃く描いた。火傷、切り傷、打ち身……全身に限なく怪我を負った女性は息を荒げながら、禍々しい

劍を杖にして立ち続ける。

「——ハアツ、ハ……………やった……！ 勝ったわよ……………エイ！」

「……………」

「これで……！ いいんでしょう……？ 覚悟の証……！」

「……………」

「……エイ？」

「——信じられない」

女性——『ラキユース・アルベイン・デイル・アインドラ』は、そんな言葉を呟いた青年に笑いかける。怪我の一切を感じさせない、生命力に溢れた美しい笑顔だ。呆然と言葉を紡ぐ青年は『ウン』エイ。この空間と炎の魔神という存在を生み出した、神の如き力を持つ存在だ。

「そう？ 私は信じていたわ。たとえどんな敵を用意されたって、きつと倒せるって」「有り得ない。君のレベルで倒せるような敵じゃなかった」

「——それでもよ。理屈じゃないわ。倒れる度に、倒れる度に、誰かが私の腕を引き上げてくれた。私の中の誰かが背中を押してくれた。きつとそれは……私の中に眠る『彼の血の成せる業。最古の管理者『ネフィリム』の……！』」

「……っ！ つく、ふうっ……！ ぷっ——おほんっ！ そうか、彼の力が……目覚めかけて

いるのか……！」

何かを我慢するように、腕に爪を突き立てるエイ。まるでそうしなければ何かを抑えきれないという仕草に、ラキユースは心配そうな視線を向ける。『最古の管理者』と『滅びた世界の管理者』……その関係性は彼女には預かり知らぬものであったが、俯きながら体を震わせるエイから、並々ならぬ激情を感じ取ったのだろう。

「やめてくれよ。僕の心配をする前に、自分のことを考えるべきだろう？ そんなポロポロの体になってまで——何が君をそうさせるんだい？」

「わからない……でも彼が囁くだよ。この感情こそが『真の勇者』である私の力だって。それが折れさえしなければ、どんな強敵にだって負けないって……！」

「——っ！」

腕に立てた爪は皮膚を破り、血を滲ませる。いったい何を我慢しているのか、エイの体の震えは次第に大きくなっていく。そんな様子を見て、ラキユースはふわりとエイを抱きしめる。血や煤で汚れた体でも、きつと彼は気にしない……そんな確信を持ちながら。

「……ラキユースちゃん？」

「あなたの迷いは、私にはわからない。でも——私、こんな短い付き合いなのに……あなたのことを仲間だって思ってしまったの。もしかすると、この『血』がそう思わせるの

かもしれない……大事な人だったんでしよう？」

「……」

「都合の良いことを言ってるのはわかっている。けど……お願い、私と契約して。ルルを破れとまでは言わないから——お願い！」

「……」

抱擁から十数秒。体の震えが収まったエイは、答えの代わりにとも言うように抱き返しながら、ラキュースを完治させた。温かな光を感じ取りながら、彼女は頬を朱に染める。貴族の嗜みとして社交界のダンスで踊ったこともあった……男性をすぐ近くに感じたこともある。しかし今のそれは、彼女にとつてまったく違うものであった。

「……ラキュースちゃん」

「……うん」

「僕と契約して、真の勇者になってほしいんだ」

「——ええ！」

何も無い白い空間。反響する壁も何も無いそんな場所で、それでも響き渡ったラキュースの声。心の内から響く『もう一人の自分』からの称賛を受け止め、彼女はいま真の勇者となった。

——しかしまだ足りない。真の勇者とは一人で戦うものではない。全てを一人で背

負わんとする彼女に、仲間が思いの丈を打ち明けるのは明日か明後日か――

次回『災厄の魔樹と運命の申し子』 Chapter : 8 〃絆〃



腹筋が死ぬ。この世界で初めて入ったダメージが、まさか自傷とはね。腕に爪痕とか、姉にリモコン争いで付けられた時以来だよ。確かに設定を伝えたのは僕だが、だからって『彼』の力感じすぎだろ。誰だよ『彼』って。いったいラキュースちゃんのだの辺に潜んでるんだ『彼』は。オマンコの中とか？

まあいい、とにかく計画は順調だ。そして真面目に考えた後はひたすら下半身だけで行動すべきだと、僕の息子も言っている。この前はアルシエちゃんのせいで最後まで出来なかった、ウレイちゃんとクーデちゃんのところにも行くのかな。今の所いちばんペドい彼女達は、貴重な癒やし枠だ。

というわけでやってきました新フルト家。前と比べるとだいぶ質素だけど、それでも家族五人で不自由はしない程度だろう。莫大なお金を手にしたことは、アルシエちゃんも伏せているらしい。使用人へ退職金を支払い、すっからかんになったいで過ごしているようだ。

今は帝国の魔法省で研究しているらしく、どちらにしても父親よりは高給取りだ。けれど父親も日雇いで頑張ってるらしいし、微笑ましい家族と言うべきだろう。

…ん？ 流石にこんな状況で手を出したらクズすぎるかな……うーん……よし、じゃあほんのちよつとでも嫌がられたらすぐ止めるってことでもいいこう。流石に本番は無理だろうけど、幼女とのペッティングはそれだけで興奮するし。

こんにちはー。おじゃまします。おや、双子ちゃんとお母上だけでござんすか。あ、これお土産ですどうぞ。うーん、嬉しそうに抱きついてくる幼女可愛い。やたらと好かれているけど、幼いなりに僕が恩人ということを見抜いているらしい。

子供というのは環境の変化に敏感だ。貴族位を剥奪されイラつく父親や、それによつ

て憔悴する姉の様子は幼いながらも気付いただろう。そしてそれを全て解決したのが僕というのも、姉の反応を鏡にして気付いたのかもしれない。

「エイさん？　少しお買い物に行こうと思うのだけど、この娘達を見ていただけるかしら」

「…騙されないようにしてくださいよ？」

「もう、心配性ね。そういうところ、アルシエと似てるわあ」

「いくら安いからって果物を箱買いしちやダメですよ？　あと変な人に付いていけないように」

「大丈夫よお〜」

家事を覚えようとしているのは良い事だが、いかんせん生まれてからつい最近まで、フオークより重いものを持ったことがないような女性だ。買い物などの経験もあるわけがなく、財布を空っぽにして帰還することもよくある。

そんなだけぼやぼやしても襲われたりしないのは、鮮血帝ことジルクニフさんのおかげだろうか。王国ならたぶん、庶民落ちした貴族が市井に混じったらすぐ行方不明になるだろうし。一応魔法で監視しておくか。いつてらっしやーい……よっしやイタズラチャンスだ。二人ともおいでー。

「クーデちゃん、ウレイちゃん、イイもの見よっか」

「いいものってなにー?」

「なにー? エイにいさまー」

寢室に移動し、ベッドの上にあぐらをかく。その上に二人して乗ってくる幼女。既に勃起しているため、二人の視線がそこへ向かう。

「またペロペロするの?」

「でもねえさまがやつちやダメっていつてた」

「そつかそつかー。じゃあちよつと……くくつ、動画再生つと」

プロジェクターで空中に画面を浮かべる。見たこともない光景に興味津々の双子ちゃん達。黒い画面から一転、そこに映し出されていたのは僕とアルシエちゃんの——情事の光景である。自分のお尻の穴を弄りながら、一心不乱に僕のチンポをしゃぶるアルシエちゃん。おやおや、これは妹達に禁止していた筈では?

「おねえさま、ダメっていつてたのにペロペロしてる……」

「そうだよねえ。お姉ちゃんだけずるいよね。だからクーデちゃんとうレイちゃんもこっさりしちやおつか?」

「おねえさま、すごくうれしそう……」

コウノトリを信じている純粋な少女に、ポルノ動画を見せつけるような下卑た興奮……って誰が言ってたんだっけ。とにかくそれ以上に無知な幼女にポルノを見せつけ

る——それも大好きな姉の艶姿を。食い入るように画面を見つめている彼女達は、それだけで射精案件である。

「この前の続き、しよっか」

「はい」

「ん、ちゅ……えへへ、エイにいさまとちゅうしちやつた」

「ウレイずるい！」

ウレイちゃんがずるいとのことなので、クーデちゃんにはディープキスをしてさしあげよう。性的な感覚が発達していない彼女達なら、たぶんこっちの方が気持ちいい筈だ。小さい舌をくちゅくちゅと無遠慮に絡め取ると、蕩けたように体を押し付けてくるクーデちゃん。

セックスも粘膜の擦り合い、ディープキスも粘膜の擦り合い。後者は痛みが一切ない分、感触だけがダイレクトに味わえる。指でクーデちゃんの陰核を擦りながら、左手で小さなお尻を撫で回す。口では疑似セックスを激しく味わう——最高だ。

右手左手と顔は塞がっているため、ウレイちゃんには何もできないが……チンポは空いている。僕の股ぐらに顔をつつ込みながら、視界の端でアルシエちゃんのフェラ動画を見て真似をしている。チロチロと感じる小さい舌の感触が気持ちいい。

物理的な刺激としては弱い、興奮は最高潮だ。十代半ばの姉の交尾動画を見なが

ら、一桁の幼女が一生懸命しゃぶってるんだぜ？ これで射精できなきゃ嘘だろう。クーデちゃんを弄っていた右手をウレイちゃんの頭にそっと添え、苦しければ自力で吐き出せる程度に力を込める。

「ウレイちゃん、白いの出すからね…！」

「あむ……んぶつ、けほつ、こほつ……うー、おねえさまみたいのにめなかつた…！」

「お姉ちゃんは何度もペロペロしてるからね。ウレイちゃんもいっぱい練習して、お姉ちゃんをびつくりさせてあげよっか」

「うん！ まだペロペロする？」

「今度はクーデちゃんにしてもらおっかな。ウレイちゃんはお口でちゅうしよっか」

「はい……んむつ、ちゅ…！」

流石姉妹、両方ともアルシエちゃんのように飲み込みが良い。ウレイちゃんに至っては姉の真似をして、お尻を弄っている。僕もその介助をして、親指で陰核を擦りながら中指で尻穴をくちゅくちゅと弄る。入り口に少しだけ指先を挿入すると、体がびくと跳ねて穴がぎゅうと締まる。

「ここにオチンチン入れるの？」

「んー……流石にまだ入らないからね。もう少し大きくなったら挿入れてみようか」

「うん…！」

「…ちよつと試してみる?」

「うん!」

好奇心旺盛だなー。まあ幼女はオマンコよりアナルだつてどつかのペド漫画家も言つてたし、意外といけるかもしれん。なにせこの世界の人間つて、ホモ・サピエンスが絶滅した後に出てきた新人類だし。人によつてはオークの巨大チンポで腹ポコされても大丈夫なんだから、根本的に違うんだらう。まあオークの人間姦つて、人間で言う獣姦みたいなものだから滅多にないらしいけど。

「あう……んっ、う」

「んー、こりやちよつと無理かな。そんな顔するなつて。じゃあほら、二人で抱き合つて……そうそう、足を広げてね」

ロリペド漫画でお馴染み、幼女のオマンコサンド。たぶん統計を取つたら、なのはちちゃんとフェイトちゃんのサンドイッチが多いような気がする。まあとにかく素晴らしい技だ。とはいえこれつて女の子側だとあんまり気持ちよくないと思うんだよね。カリがクリトリスに上手く引つかかつて気持ち良いなんてのは、ペガサスも驚きのファンタジーである。

というわけで、ちよーつとだけ感度の上がるお薬を垂らす。やつぱり疑似セックスとはいえ、どっちも気持ち良い方が健全だ。薬によつて少しだけ上気し始めた双子の、

密着している穴の間にチンポを挿入する。

うはっ、幼女同士でキスしてる。愛液で泡立ち始めた結合部がパンパンと水音を立てる。奥まで押し込めば、幼女特有のぽっこりイカ腹がチンポを圧迫してくる。実際に挿入しているわけじゃないし、激しくしても問題はないだろう。

「んっ、んっ、んうっ、くーひえ、あ、んっ……！」

「あっ、ひう、うれい、いっ、あっ……！」

「……、出すよ、二人共……！」

最後に思い切り腰を叩きつけて、疑似腔に中出しだ。疲れて仰向けになった二人のお腹を見れば、ゼリーののような精子がお腹を犯しているかのようにへばりついていた。イカ腹に手を伸ばし、その精液を幼い雌穴に塗りたくる。割れ目とも言えない一本の筋が、クピクピと精液を飲み干していく。その様子を見てまたも固くなつていく僕のチンポ。

全力で遊んでいた子供が、急に電池の切れた人形の如く眠りこける光景は、幼児の母であればよく目にすると思う。今の双子ちゃん達はまさにそんな感じだ。おそらく何をしてもすやすやと眠り続けることだろう。

少しだけ乱暴に、小枝のように細い足を掴んでこちらへ引つ張る。この年頃の女の子は、体のどこでも精液を搾り取れる。シャルティアちゃんのように舌なめずりをしながら

ら、寝ている彼女達の雌穴にチンポをこすりつけた。

お母上はまだ帰ってこないよな……あつ、なんか浮浪者に絡まれてる。くつ……仕方ない、あと二発出したら助けにいかう。ごめんねお母様。あなたの膣から出てきてまだ五年しか経ってない娘さんは、最高の味でございました。アルシエちゃんともども、最後まで幸せにするので許してくださいな。

7 話

バハルス帝国首都『アーウィンタール』。鮮血帝が振るう辣腕のもと、豊かな暮らしを謳歌する国民で賑わう街だ。とはいえ、数代前までは王国と同じく腐敗が横行する醜悪な都市でもあった。先代、先々代の皇帝が時間をかけて浄化を図り、今代の皇帝たる『ジルクニフ・ルーン・フアーロード・エルニクス』が凄惨な粛清のもと、腐敗した貴族を一掃したが故に隆盛を誇っていると見えるだろう。

しかし都市の隅々までその威光が届くには、更に数代を要するだろう。皇帝が座すこの街であっても、暗い影はそこかしこに在る。邪教の集団や禁止されている奴隷の売買など、王国に比べれば少数ではあるが、犯罪行為というものはどうしてもなくならない。場所によっては浮浪者や犯罪者が彷徨っている危険な所もある。アルシエの母が迷子になった挙げ句そんな場所へ辿り着いたのは、偶然でもあり必然でもあった。なにせ移動となれば馬車が基本だったような女性だ。一般庶民が使用する街道を徒歩で歩く経験など皆無に等しい。

アルシエの母は、貴族の女性というにはあまりにも天然である。そもそも貴族として没落した後も、その意味をあまり理解していなかったような人間だ。腹に一物を抱えた

狸や魑魅魍魎が跋扈する貴族界限において、フルト家に『嫁がさせられる』という時点で、彼女の凡庸ぶりも自ずと知れている。『金に困る』という概念すら、つい先日までは持ち合わせていなかったような女性だ。

家計が火の車であるというのに、アルシエに高価なブローチを買い与えるような行いがその証明だろう。彼女なりの気遣いや優しさではあるものの、場合によつては無知も罪だ。今回の騒動もそれが引き起こしたと言えるかもしれない。

浮浪者然とした身なりで、腹を空かせていそうな女性。そんな可哀想な人を目撃したアルシエの母は、同情から財布を取り出して中身を浮浪者に恵んだ。それが本当に浮浪者であれば、あるいは泣いて喜ばれたのかもしれない。しかしその女性は施しを受けたと理解した瞬間、激昂した。『この私を憐れんだのか』と。

怒りの度合いの割に暴力に訴えない不思議さはあれど、アルシエの母には人を宥めずかすスキルなど欠片もない。それどころか何に對して怒っているのかも理解しておらず、一方的な諍いは収まる事がなかった。

——そんな場面に、すやすやと眠る姉妹を抱いた男が一人現れた。

「やあ、お困りですか？　危ない人に関わっちゃいけないってあれほど言ったじゃないですか」

「あら、エイさん。今どこからいらつしやったの？」

「タレントです」

「へえ。すごいよねえ」

「納得するのか……まあいいや。それよりその君、何を怒って——ん？ あれ、クレマ

ンティーン？」

「……っ！ お前っ……！」

「なんでそんなみすばらしいカツコ……？ 漆黒聖典からズーラーノーン、次は浮浪者と
か斬新だぜ」

「誰が浮浪者だ！」

「今の君が浮浪者じゃなかったら、この街に浮浪者はいないってことになるな」

「うぐ……」

薄汚れたマントを纏う彼女に、いったい何があつたのかと事情を聞こうとする男——
エイ。しかし彼女へと話しかける直前、何者かに遠隔で監視されている事実気付く。
とはいえ自身が探知不可である以上、その対象はクレマンティーンで間違いないだろう
とも考えた。

「ふーん……？ ……あ、お母上様。お買い物はもう済みましたか？ 済んでますね。じゃ
あお送りしますのでちよいと目を瞑つてどうぞ。クーデちゃんとウレイちゃんはお疲
れちゃんなので、そのまま寝かせといてください」

「あらあら、遊びつかれちゃったのね。ありがとうね、エイさん」
「いえいえ、僕も楽しかったので」

少し離れたところでアルシエの母と姉妹を転移させ、クレマンティーヌのもとへ戻るエイ。そのまま話しかけると思いきや、彼女の手を取り不思議な行動を取り始める。肩を抱いてくるくると回らせ、右手を取り上へあげる。左手も同様にし、最後は両手を取ってぶんぶんと上下させた。

頭に疑問符を浮かべつつ、されるがままのクレマンティーヌ。しかし片足を持ち上げられ、Y字バランスの体勢を作らされたところでいい加減頭にきたのか、エイの手を振り払った。

「うざい！ …さつきからなんなの？」

「ん……いや、相変わらずクレマンティーヌは可愛いなって。ところでなんでそんなカッコしてるんだい？ ブーラーノーンの潜伏任務かなんかかな」

「う……いや、その…」

「…？」

エイの問いに、彼女は口を噤んだ。なにせプレイヤーの存在を伝えられ、騒動を起こさないよう釘を刺されすらしたというのに、結局は醜態を晒す羽目に陥ったのだ。最悪の危機は脱したものの、おそらく監視されているであろうことは彼女も気付いている。

クレマンティーヌの視点からすれば、冒険者モモンとナーベは『正義』である。犯罪者たる己を正義感から追つてきたプレイヤーだ。監視されているとなれば、下手な悪行は身を滅ぼす。しかし堂々と表に出てしまえば法国の追手に捕捉されかねない。現状ではズーラーノーンと関わる訳にもいかず、彼女には稼ぐ手段がなかった。故に浮浪者を装った——というより、浮浪者そのものになったと言うべきか。

「……お腹減つてるのかい？」

「つ……！」

「複雑な事情がありそうだねえ……とところで『前の話』はまだ無くなつてないぜ。何かお願いごとがあるなら聞くけど」

「……なんで私なの？ そもそもそれに意味つてあるのかよ。『うんえい』なんでしょ？

指先一つでなんでも出来るような存在じゃないの？ したいならすればいいじゃん

……勝手にさ」

「ふうん……？ 前は信じてなかったのに、随分な変わりようじゃないか。となると……なるほど、プレイヤーとはもう関わった訳だ。その上でシャルティアちゃんとソリュシャンちゃんのあの行動……それで君がこの状況つてことは——」

「……？」

「……ああ、オーケーオーケー。だいたい理解したよ。つまりAOGのギルマスは『運

「『営』を認識してるわけだ。八本指のあれは『主張』か……この監視は法国の方だと思つてたけど、ナザリックの方つてわけね」

「……? 一人だけで納得されても困るんですけどー?」

「いやいや、簡単な話だよクレマトソン君」

「誰だよ」

「まず君が『運営』という存在をきちんと認識するには、それを知る誰かと接触する必要があるわけだ」

「……ふん」

どこからかシャツポを取り出し、とんびを着込みながらパイプを啜えて煙をくゆらせるエイ。さながらシャーロック・ホームズといった風体だが、異世界の人間に通じるかは甚だ疑問である。というより、クレマンティーヌが彼に向ける奇異の視線を考えれば、通じていないと断言できるだろう。

「この世界の人で僕の役割を正しく認識しているのは、現状だと蒼の薔薇にドラウくらいだね。どちらも君と接点はない……とすれば、エ・ランテルに居たプレイヤーと接触したことが窺える」

「……それで?」

「君が彼等と接触したという推測を前提にすれば、やっぱり騒動は起こそうとしたん

じゃないかい？ となれば彼等が容赦するとは思えないから、一度は戦闘行為に入った可能性が高いね。けれど君は今ここにいる。しかし監視はされている……この時点で監視元は『プレイヤー』か『法国』のどちらかが濃厚だ。けど騒動を起こしたなら、観者の額冠は君の手元に無い筈だよ。いくら元漆黒聖典とはいえ、至宝を手放した君に、わざわざ巫女姫の儀式まで使って法国が監視を継続させる意味はない」

「……」

「そもそも遠隔で監視を続けることが出来る存在は限られてる。状況から考えれば、それはナザリック——つまりプレイヤーだろうさ。エ・ランテルを死の街に変えようとした君を逃し、けれど監視下に置く意味は？ 可能性としては、手の内に入れて何かをさせようとしている……もしくは『やむを得ず』のどちらかだ。でも前者だとすれば、プレイヤーのバックアップを受けているとは思えない見窄らしさ。つまりプレイヤー側としても、君の解放は予定外であった可能性が高い」

「…そうだねー。ってなにさり気なく尻さわってんだ！ 殺すぞ」

「まあまあ。ところでお風呂はちゃんと入ってる？ その……あー……ちよつと野性的な香りがね、うん。僕は嫌いじゃないけど」

「……うぐっ！」

息を吸うようにクレマンティーヌのケツを触ったエイであったが、クレマンティーヌ

からふわりと漂ってきた匂いに眉をひそめる。先程まで甘いミルクのような幼女の匂いを味わっていただけに、その落差が気になったのだろう。ファンタジーな異世界というだけあって、人類圏の衛生観念は現代と大して変わらない。だというのに、今の彼女はあまり清潔と言えない状態であった。

「まあまあ、それは置いとこうか。それで、どこまで話したか……ああそうだ。プレイヤー側がなぜ君を解放したかってとこだ。しかるに、クレマンティーヌ。窮地に陥った君は僕を——『運営』をダシに使ったんじゃないのかい？ 駄目で元々、動揺すれば儲けもの……そんな心算だったけど、彼等の困惑は想像以上だった。張子の虎もいいとこだけど、その威を上手く借りた君は晴れて逃げおおせることができた……が、監視までは振り切れなかったと。どう？ 当たってる？」

「……まあね。ほんとはどつかで覗いてたんじゃないの？」

「まさか。僕は覗く暇があれば触りにいくよ。もちろんチラリズムは否定しないし、隠すことよって逆にエロくなる現象も肯定してるけど」

「馬鹿じゃないの？」

「男にエロを足すと理性が豆腐になるのさ」

呆れたようなクレマンティーヌの視線を飄々と受け流し、服装を元に戻すエイ。期待していた尊敬の目は得られなかったものの、少しばかり疑問に思っていたナザリックの

行動にも説明がついたようで、満足げに頷いた。

「…で？ どうするんだい。プレイヤーにどう語ったかは知らないけど、君が真実を話したとは思えないぜ。ここで一つ、嘘を本当にしておくのも手だと思うんだよね」

「その代わり一発やらせろつて？」

「別に代価なしでもいいけど、そうなるとさつきと同じになるじゃないか。お恵みと施しがとてもお嫌いなんじゃないのかい？ …いや、憐れまれるのが嫌いつていふべきか」

「…はつ。なに解つたような口を聞いてんだか。それとも全知全能であらせられる、うんえい様”にはすべてお見通しなのかしらー？」

「君のことは多少知ってるけど、それは僕的能力とは関係ないかな。客観的な情報でしか知らないし、それだって法国を出てからのことくらいさ。人の内面なんて文字に起こせるほど簡単なものじゃないし、君のことは今までの会話で理解できた部分だけ——それ以上でも以下でもない。僕は君を君としてしか見てないつもりだけど」

「いきなりやらせろとか言ってきた事実と矛盾してるんですけどー？」

「それは見た目が百パーセントだし」

「ええ…」

クレマンティーヌの見た目と言えば、誰がどう見ても痴女である。既に『冒険者プ

レート胸当て』などという悪趣味な装備はしていないが、そうでなくとも足、ヘソ、肩と、肌の面積は多い。マントで隠しているとはいえず、目の良い者であれば中身はチラチラと見える程度だ。見目も良く、彼女が強者でなければレイプ被害の格好の的だろう。「…ま、僕は人の意思をある程度までは尊重するタイプなんでね。蒼薔薇のラキユースちゃん、AOGのギルマス、それに君と…内面が好きタイプには配慮もするし、尽くしもするさ。誰だって好きな人には好かれたいだろ？」

「…くつ、くひやつ…！ 私の内面が好きい？ あつは、ははつ——酔狂極まりすぎでしょ。だいたいその『ぎるます』ってのは知らないけど、蒼の薔薇のラキユースつつたら…『良い子ちゃん』で有名じゃん。どこに共通点があるつてのよ」

「正統派中二病に、メンヘラ系中二病に、狂気系中二病。僕つてその手の病気の人に弱いんだよ」

「ちゆう…なに？」

「特定の精神疾患を患った人のことさ。といつても命にかかわるものじゃないし、人生を楽しむにあたってはむしろ良いものだよ。自覚すると精神ダメージが入ることもあるけど」

「ふうん…？」

「いまいち理解できないという風に首を傾げるクレマンティーヌ。無償の好意という

ものに胡散臭さを感じて鼻白むが、好意そのものは無償であっても、体を求められているという事実を思い出して納得する。

「というわけで、どうしても叶えたい願い事ができたら連絡してくれよ。これが連絡用のマジックアイテムで……こっちは『リング・オブ・サステナンス』。空腹と睡眠が不要になる指輪で、もう一つが『リング・オブ・クレンリネス』——常に清潔でいられるアイテムだよ」

「…一つ目はともかく、二つ目と三つ目は『施し』じゃん。言つてたことと違くない？」
「施しと贈り物は別ものだろ？ 昔から惚れたもん負けつて言うし、今回は君の勝ちつて」

「…ふん。貰つとく」

「じゃあお礼にキスの一つでも…」

「死ね」

「じゃあハグの一つでも…」

「……」

期待に満ちた目で見つめてくるエイに対し少しばかり逡巡し、ほんの一瞬だけ彼に体を預けた後、クレマンティーヌは人混みに紛れて去っていく。その背を見送ったエイは、柔らかな感触の余韻を味わいつつ、宙に視線を送る。

最初にクレマンティーヌに取らせた奇怪な行動……そしてその後のやり取り。『エイ』という存在を目視以外で確認できない以上、監視相手には全て一人しか映っていない。つまり今までのやり取りは全てクレマンティーヌの一人芝居にも見える。

——『きつとキチガイ扱いされてるだろな』と含み笑いをしつつ、エイもその場を後にしたのであった。



——その日、アーウィンタールの皇城は揺れた。それは情報による動揺といった類のものではなく、物理的な振動だ。強大な魔法の行使による揺れ、そして地割れ。戦闘不

能に陥った多数の兵士。それだけの規模にもかかわらず死人や重傷者が出なかった事実は、皇帝にとつてけして喜ばしいものではなかった。

明確に感じ取れる『手加減』は、実力の差を如実に物語っている。皇帝——『ジルクニフ・ルーン・ファアロード・エルⅡニクス』は、災害を引き起こした張本人である双子のダークエルフを前に、恐れをおくびにも出さず交渉に努めようとしていた。

彼の優れた選定眼からすれば、双子のダークエルフの行動は正に子供の短慮そのものであった。問題はそれを成し遂げる実力を備えていることであり、下手な言動をして癩癩を起こされた時、帝国が滅びかねないという事実だ。

『エルフの解放』。それを訴える双子の主張は、当然と言えば当然だろう。エルフとダークエルフ……多少の違いがあるとはいえ、基本的に種族を同じくする同胞が憂き目にあっているのだ。見た目通りの子供であれば、義憤に駆られて行動を起こすことは充分に考えられる。

そう——となれば、ジルクニフが取る行動と言動は決まりきっている。子供の浅い考えがこの被害を引き起こしたというならば、利用するだけのことだ。

「なるほど……了解した。では私の権力における最大限をもって、迅速にエルフの奴隷制を廃止しよう」

「わ、わかつて頂けて嬉しいです……兵士さん達のこととは、すみませんでした」

「なに、数人が軽い怪我をした程度だ。威力に関しても素晴らしいものだが、その制御の緻密さには心底驚かされたよ。姉君も同じような実力をお持ちなのかな？」

「え、えっと……はい」

「ほう、敬服に値するな……さて、それはともかくだ。私の権力が届くのは帝国の領土のみ。エルフを虐げ、奴隷にしているのはあくまで法国なのだ。我々がそれを糾弾したところで、精々が『得意先を失った』程度にしか思われん」

「そうなの？」

「うむ。申し訳ないが……エルフの解放のために法国と事を構えるのは、皇帝として容認出来ん。先程言った通りのことが精一杯だ。それ以上を望むのならば、私の首を切つて君達が帝国を動かすしかないな」

「そ、そこまでする気はありません」

内心で目を細めながら、ジルクニフは目の前の二人の心情を推し量る。おどおどとした妹の方は彼にとつても読み辛いものであったが——「お姉ちゃん」と呼ばれている姉の方は解りやすい。装ってはいるが、同胞の心配など欠片もしていない。

真剣ではあるが、それは帝国騎士が任務に臨む時の雰囲気……すなわち『上位者からの命令』を確信させるものであった。それは同時に、さらなる厄介事の可能性を孕んでいた。心の中でため息を吐きながら、ジルクニフは護衛たる「四騎士」の一人『レイ

ナース』の言葉を思い出す。

———どうにか出来る心当たりが御座います。

その言葉を残し、何処かへ消えた『重爆』。正直ジルクニフにとって、彼女の言葉は半信半疑であった。既に呪いは解かれ、四騎士に在籍する必要も薄まっていた状態だ。帝国そのものの危機に対し、逃走を選んでも不思議はない。

そもそも国を滅ぼしかねない化物に対する心当たりなど、眉唾どころの話ではない。右手に付けた指輪にそつと触れながら退室するレイナース……その姿を脳裏に浮かべ、しかしそれを振り払うジルクニフ。僅かな希望よりは、自身がこれまで拠り所にしてきた話術を頼るべきだと。

ジルクニフは己に活を入れる。全身全霊、全力全開で法国に責任を擦り付けねばならない。潜在的な敵国の力が減衰し、王国と共に取り込めれば万々歳だ——と、不幸を嘆きながらも利益に腐心する彼は、やはり有能な皇帝であった。



とある町外れの小屋で、自慰に耽る高貴な女性——聖王国の女王『カルカ・ベサーレス』。いやあ、ロイヤルな御人がエロ本片手にクリを弄つてるのつて、中々に興奮するな。なぜ彼女がこんなことになっているかと言えば、もちろん僕の仕業……いや、氣遣いかな？

王様つてとにかく大変そうだし、彼女の性格なら尚更だろうなつて思うんだよ。もう即位から十年近く経つつてのに、未だに南部諸侯から認められてないつてのも心労の一端を担つてるんだろう。身分を超えた友人が二人いるとはいえ、何でもかんでも話し合えるつてわけでもない。

だから僕は、そんな彼女の自室——代々受け継がれている王室にちよつとしたギミツクを付けてみた。大儀式魔法《ラスト・ホーリーウォー／最終聖戦》の収束具となる、聖王国の国宝ともいえる王冠……それを鍵として開かれる、秘密の扉。ひよんなことからそれに氣付いた女王は、恐る恐るそれを調べた。

不用意といえばそうだろうが、なんといつても王の私室だ。一番可能性が高いのは、

受け継がれてきた中で失伝した隠し部屋といったところだろう。あるいは逃走経路と考えるのは当然の帰結。まさか危険なことなどないだろうと、歩みを進めた彼女が踏んだのは転移魔法陣。

驚くカルカちゃんであったが、転移した先の魔法陣をもう一度踏めば問題なく帰還できることを確認し、転移先の調査に移行した。そこには僕が用意した『息抜き』用のマジックアイテムの数々と、エロ本が所狭しと並べ立てられていたわけだ。

一番のお宝はなんと言ってもイミテ人形——要は自分をコピーできる人形——だろう。傍に置いておいた変装用のマジックアイテムと併用すれば、誰に憚ることもなく自由を満喫できるって寸法だ。

予想と違うことなく、彼女は即位してから初とすら言える休暇を満喫し始めた。僕が書きしめておいた『伝言』も効いたのだろう。代々の王様もこの部屋を利用してリフレッシュしていた……そんな風に見えるよう色々と仕込んでいたから、彼女も心置きなく使用に踏み切ったというわけだ。

最初は市井の観察、体験。解放感に酔いしれていた彼女であったが、それでも超えられない一線があった。そう、エロ体験である。ぶつちやけて言うならば、おそらく彼女は男漁りをしたかったのだろう。それはビッチ的な意味ではなく『そろそろヤベエ』な意味で。

現代で女性が婚期に焦り始める時期は、どんどん伸びている。むしろ結婚願望自体が薄い男女が増えてきているとも言えるだろう。対してこの異世界はと言うならば、そこはやはり中世チックなファンタジー。初潮を迎えりや性交可、十五を超えれば適齢期、二十を過ぎれば売れ残り……そんな感じだ。

特に王侯貴族は婚礼に関して庶民よりも気が早い。二十二歳でありながら、結婚どころか婚約すらしていない彼女がどう見られているかはお察しである。それどころか、女傑三人衆が軒並み交際経験ゼロときているのだから、『もしやレズでは?』という噂も流れているほどだ。

二十二歳で処女。リアルであつても、喜ぶ男性と引く男性が半々くらいと言つたところだろうか。女性であれば九割以上が残念な目で見るだろう。この異世界であればさらに割合は酷くなる。せめて処女くらいは捨てたい——彼女がそう思うのもおかしくはない。

とはいえ、やはり軽々に喪失できるものでもない。女王の純潔というのも重要なものだ。なにより彼女はまだまだ乙女(自称)であり、『我が儘は言いません。糸の一切ついていない、私という人間を愛してくれるお婿さんを!』などと考えているような女性だ。変装しているとはいえ、その辺の飲み屋で男を引つ掛けるような愚行には出られなかつたようだ。そんな煮え切らない彼女がハマつたのは、当然といふべきか『自慰』で

ある。代々の王様も使っていたという事実が躊躇いを乗り越えさせたのか、最近ではもっぱら小屋に籠もってオナニーの日々だ。とはいえ政務は疎かにしていないあたりが、真面目さを感じさせる。

膜を破るのは怖いのか、お気に入りにはクリトリスにバイブを当てての行為だ。自分を重ねて見たいタイプなのか、エロ本の内容は女王モノや女王モノが大半である。どちらかというマゾっ気があるようで、『女王の癖にこんなに乱れやがってよ』的なものが多いようだ。しかし乙女願望が根底にあるせいか、ガチの陵辱モノは手に取らない。あくまで恋愛的な要素が前提にあり、その上で乱暴な言葉遣いをされるのが好きらしい。

どんどんどん性癖が暴かれていくカルカちゃん可愛い。しかし覗いてばかりじゃ意味がない。僕は彼女のオナニーを見るために舞台を作ったんじゃないよね、彼女とセックスしたいがために舞台を整えたんだ。そろそろエロいことしたいよね。

彼女のために費やした労力は、実を言うとこの世界で堂々のナンバーワンだ。なにせ人の手が入っていない未開の地に、広大な地下ダンジョンを創り上げたのだ。適正レベルは二十五から三十といったところだろうか。名前は『時の迷宮』。ラクユースちゃんが喜びそうな名前だが、今回はカルカちゃんのためのダンジョンである。

——というわけでご案内つと。

「あつ、んつ、ん……つ、私、女王なのにこんな——あつ……えっ？ な、なんつ……!？」

「うおつと……！　トラップかな？　にしては手が込みすぎてるけど」

「え、え……？　な、なにが……ここはいつたい……？」

右手にローターを、左手にバイブを、頭には王冠を乗せている全裸な変態女王様。陰部は濡れそぼっていて、しかし汚さは微塵も感じられない。成人しているというのに薄めなアンダーヘアは、処理しているというわけでもないのに美しく整えられている。一度も侵入されたことのない割れ目は桜の色を連想させ、幼い少女のようにピチリと閉じていた。エロい。

「とりあえず——敵じゃあないのかな？　変態ではあるようだけど」

「えっ、あつ、そのつ……！　こ、これは違うんです！」

「どう違うんだい？　君がそのいやらしい器具を使っていたつてのが、僕の勘違いってことかな。それとも『敵』の部分か……どっちにしても目の毒だし、これ使いなよ」

「う、うう……ありがとうございます」

まあローターとバイブ使ってオナニーしていたというのは事実だし、変態か否かといえば前者だろう。背徳感に酔うためか、王冠だけは被っていたあたりが最高にイッチャつてるぜ。まあ誰が導いたかというならば僕だが、昇華させたのは紛れもなく彼女だ。エッチな女の子っていいよね。

とりあえず漆黒のマントを貸し与え、素肌に直接被せる。後で返してもらった時に

は、雌の匂いがこれでもかと付いていることだろう。付加価値で言えば元値の数十倍は固いな。全裸マントに王冠の女王様ってほんと変態チック。

「ど、どうも……えつと……」

「急に現れたけど、自分で転移したってわけじゃなさそうだね。事故か何かかい？」

「はい……おそらくは。転移の魔法陣が暴走したのか、元々そういう仕掛けがあつたのかは解りませんが……」

「仕掛けつてことはないと思うよ。此処は『転移不可』『空間系の魔法、マジックアイテム不可』領域だし。無限の背負い袋も使えないから、着替えも出せなくて申し訳ない」「い、いえ！ マントを貸して頂けただけでも充分です。それに、かなり上等な魔法を施された装備とお見受けします……見ず知らずの他人に貸し与えるようなものではないでしょう?」

「ま、その辺は気にしなくていいよ。とりあえず情報共有といこうか? 言いにくいことは言わなくていいし、僕も言いたくないことは言わないよ」

全部が僕のシナリオなんてことは口が裂けても言いません。まあ現状はともかく、ここ数週間は君も随分満喫してみたいだし、ウインウインつてことで。さて、僕にどう伝えようとしたものか悩むカルカちゃん。まあ『私が聖王国の女王です』なんて、この状況では言いたくないだろう。下手をすれば性王国のレットルまで貼られてしまい

ねない行為だ。

「転移事故つてことなら右も左も分からない、か。じゃあ先に僕から説明しようか」

「…ええ。ありがとうございます」

「此処は南海『トバルト』にある孤島、生命無き島『クルーズ』に座す『時の迷宮』の中だよ。僕はそれを調べている最中の探検家、つてところかな」

「…どれも聞いたことがない名前ですね」

「ま、世界は広いからね。特に脆弱な人間種が把握できてる領域なんて、それこそ全体の数%以下さ。最低限、レベル五十はないと世界を周るなんて夢のまた夢でしょ」

「レベル…ですか。それも聞いたことのない指標ですね」

「地域によってそういうのは違ってくるからね。レベルと言ったりランクと言ったり、あるいは難度と言ったり…」

「…！ 難度という言葉でしたら知識にございます。確か冒険者の間で使用されていた筈…」

「ああ、じゃあ君はあつちの大陸の人間か。随分遠くに飛ばされてきたもんだ。ここは位置的に考えると——君らで言う南方の砂漠、それより更に南に下って海を渡ったところにあるんだ」

「それは——困りましたね…」

青褪めた表情で俯くカルカちゃん。まあイミテ人形は一日経過したら一度元に戻っちゃうし、その後の騒動を考えれば頭が痛いどころの話じゃないだろう。そもそも無事に戻れるかも不明だ。彼女も彼女で、人類の生存圏では強者だが——それでも不安なのだろう。僕が言った『脆弱な人間種』という言葉も効いているのかもしれない。

「その……難度で言えば、どのくらいあれば無事に大陸へ戻れるのでしょうか？ 私もある程度は戦えるのですが」

「んー……百五十つてどこかな？ 危なげなく戻るには、だけど。かなり無理をすれば九十台でなんとかってとこかな。君は見たところ八十前後つてとこだね。ただ後衛つてところを加味すると、生存確率五%くらいじゃないかい？ ちなみにこの迷宮に出てくる魔獣の平均難度も、八十から九十くらいだよ」

「……っ！ そうですか……」

ほんの少しだけ顔を歪ませるカルカちゃん。とはいえ解決策は目の前にあるし、彼女が次に出す言葉は解りきっている。それを僕は理解しているし、僕が理解していることを彼女も当然理解しているだろう。となれば後は交渉次第、という話だ。

「……とても図々しいお願いになってしまうのですが、どうか私をローブル聖王国まで送っていただけませんか？ 対価は必ずお支払い致しますので、何とぞ……」

「うん、いいよ」

「——えっ？ あ、あの……そのように軽々しく頷かれてよろしいのですか？ あ、いえとても助かるのは事実なのですが」

「いや、そんなカツコじやどのみち此処から出るのも無理だしね。僕が断つたら、君は全裸かついやらしい器具だけを武器に出口を目指さなきゃならないだし……流石にね、うん」

「あう……あ、ありがとうございます。対価は十二分に支払うことをお約束致しますので」

「それも別にいいよ。何か欲しけりや、国ごと奪えるような実力は持つてるつもりだし。どうしてもお礼がしたいってんなら……くくつ、体で払ってもらおっかな？ まあ随分と『好き者』みたいだもんな」

「ご、誤解です！」

「じゃあそれで何してたの？」

「うっ、ううっ……！」

顔真つ赤。顔真つ赤やで自分。肌が白いから余計に鮮やかで、とても美しい。流石『ローブルの至宝』と謳われるだけはある。キャラデザが若干ラナー王女様に被ってるか思ってたごめんよ。正直今すぐに襲いかかりたい気分だ。

「ところで名前を聞いてもいいかい？」

「はい。私は『カルカ・ベサーレス』と申しま——あばばっ！　じゃなくてっ！　カツ、カ……」

「いや、もう遅いつて。ふうん……聖王国の女王様がこんな変態だったとはね。ま、その王冠を被つてる時点で薄々わかつてたけど」

「こ、この件はどうかご内密に……！」

「はいはい。カルカちゃんの秘め事は漏らしませんことよ」

「ちや、ちゃん……ですか」

「様付けの方が良かった？　ならそうするけど」

「……！　い、いえ。そのままでお願ひします」

「オーケー。あ、僕は『ウン＝エイ』ね」

「エイさんですね……あら、どこかで聞いた覚えが——もしかして竜王国の救世主様ですか？　まだ未確認の情報でしたので、信憑性に乏しいと思つていたのですが……」

「その呼び方は微妙だよねえ……もつとカツコイイ二つ名で呼んでほしいもんだけど。まあ人物的には同じだよ。別に救うために行動したわけじゃなくて、結果的にそうなたただけだから——つまり善人じゃあないから、その辺は勘違いしないでよね！」

「は、はあ……」

僕にツンデレのマネは無理があつたか。そういえばオーバードに典型的なツン

デレってあんまないよな。まあ今どき流行らないのかもしれないけど。型にはまつたようななツンデレって、冷静に考えると精神疾患抱えてるレベルだもんな。その点アスカってすごいよね。ほんとにそうだったし。

まあツンデレの意味も初期と後期でだいぶ違うから、一概には言えんが……おつと、今はそんな場合じゃなかった。まずはカルカちゃんの肢体を堪能せねば。そのために床をゴツゴツにしたといつても過言ではない。

「何から何まで、本当にご迷惑をおかけします…」

「いやいや。こっちも気持ち良いから気にしなくていいよ」

「…っ、あうう…」

全裸だったつてことは、当然靴なんかも履いてない。爪先から頭の上まで、全身が玉のようなお肌のカルカちゃん。足裏といえども傷つけるわけにはいかぬと、おんぶを申し出てみた。というかそのままだと普通に怪我して動けなくなるかもしれないし、ほぼ無理やりおぶった。

両手が塞がっては危険だろうとむずがるカルカちゃん。しかし足だけで魔獣やらゴレムやらを討伐していく僕を見て、諦観と憧憬と好意が緋い交ぜになったような表情を作っている。まあ強者がモテるのは世界共通の真理だ。ちゃん付けすることで『ありのままの私を見て欲しい』という部分も刺激できてるのかもしれない。

「出口までほどのくらいかかるのですか?」

「このペースだと一時間くらいかな。迷宮から出ればアイテムも出せるし、転移も可能になるからすぐ戻れるよ」

「そう、ですか……エイ様はとても凄いい方なのです。国を救ったというのも領ける話です」

「さてね。僕は好きにやつてるだけだし、さつきも言っただけど結果的にそうなたただけだから。行動を評価されるだけならともかく、それで人格まで想像で固められるのはよろしくないぜ。それに——自分がそういう人間って自覚してるからこそ、カルカちゃんのこととは凄いいと思ってる」

「えっ?」

「女王ってのは求められる理想そのもので、即位した時点で『そうあれ』と強制される。そこに自分は存在しないし、自由はないだろ? それでもそこにいられるのは、国と国民を思っただけさ。……正直尊敬するよ。女王だから尊敬するんじゃない、君という人間そのものにね」

「あ……」

クサイ。どこぞの妖精が出てきそうなくらいクサイ。しかし一応本音でもある。国民という他人を思い、自分を殺すなんて僕には絶対できないからな。僕が自分を殺すと

すれば、後にエロが待ち構えている時くらいだ。

しかしカルカちゃんには感動ものの言葉だったらしく、首に巻かれた腕が少し強く締め、背中に感じる胸の圧力が増した。チンポが勃起しきりで、正直歩きづらいんですけど。気持ち良いんですけど。というわけで、都合よく出てきた休憩所のような場所で一休み。カルカちゃんをそつと下ろし、彼女と向き合う。

「ありが——…っ！ あ…」

ズボンを貫きかねないほどに、屹立した肉棒。それを目にしたカルカちゃんは、一瞬だけ恥ずかしそうに目をそらしたものの…：頬を染めながらチラチラと視線を彷徨わせる。自分が勃たせてしまったという自覚はあるのだろう。マントの下にある裸体をもぞもぞとさせ、心なしか太ももを擦り合わせているようにも見える。よし、もういけるかな？ そもそも最初にオナニーを見られた彼女だからして、かなり抵抗感は薄まっている筈だ。

「…やつぱり『代価』貰っていいかな？」

「…っ！ あ、あの、その——はい」

よつしや和姦成立つと。無理やりがお好みみたいだし、頷いたかどうかといった瞬間には既に、ぷるんとした桜色の唇を貪っていた。

「んむ——っ、は、えうっ、ん、ちゅ…」

クーデちゃんとうレイちゃんはかなり受け身だったけど、カルカちゃんは隙あらばこちらの舌を絡め取ってきそうなくらい積極的だ。ぴちやぴちやとした水音と、荒い息づかいだけが数分ほど響く。キスをしながら彼女の尻を両手で強く掴むと、マント越しにも解る極上の柔らかさを堪能できた。一瞬だけびくりとしたものの、逆らわず、そのまま腰を押し付けてくるカルカちゃん。

開いた部分から手を潜り込ませ、彼女が大好きなクリトリスを弄る。既に床へ滴るほどだった彼女の愛液は、秘所へ指を滑り込ませるための潤滑油として最高の役割を果たしていた。一切の抵抗なく、指が割れ目に入っていく。浅めに抜き差しを繰り返し、そのまま陰核を擦り続けると、カルカちゃんの嬌声が耳を楽しませてくれる。

「んっ！ く、んきゅっ、あう——は、あっ……！」

「本当に変態な女王様だねえ、カルカちゃん」

「い、いわない、れ、ひゃっ……！」

「イジメられるのが好きなんて、王族失格じゃないかい？ それなら相応に扱うかな……ほら、舐めろよ。好きなんだろ？」

「あ、あ……」

愛液まみれの右手を、彼女の口へ乱暴に突っ込む。被虐の快感に蕩けた瞳を見てとつた後、彼女の頭を掴んで股ぐらに押し付けた。聖王国でもっとも高貴な口マンコに、限

界まで勃起したチンポを無理やり挿入れる。

「んぶっ、んっ、じゅぶっ、は——あぐっ!? んぐっ、んっ、じゅるっ……」

喉まで犯しているというのに、嬉しそうに舌を巻き付けてくるカルカちゃん。たぶんこれはエロ本の影響だろう。日本の HENTAI 文化はほんと素晴らしいなあ。今まであんまりしてこなかったけど、彼女になら心置きなくイラマチオが出来る。

さらさらと流れるような、絹よりも上質な髪。そこに手をおいて、カルカちゃんの口へこれでもかと腰を打ち付けた。それでも吸い付いてくる唇は、まさに最高の口オナホだ。我慢できず吐精し、喉奥へと精液を流し込む。えづきが丁度いい蠕動となって、残った精液を吸い出してくる。

「よく出来ました」

「は、はい……」

抱きしめながら頭を撫でて褒める。めちやめちや嬉しそうだ。あれだねー、カルカちゃんはDV男に弱いタイプの人だね。酷いことされても、ちよつと優しくされたら依存してしまう系の娘だ。うーん、こういう娘って幸せにしてあげたくなるのが男の性だよね。

嬉しそうにチンポを舌でお掃除しつつ、期待を込めて上目遣いをしてくるカルカちゃん。完全に日本の文化に毒された彼女の雌穴に、そそりたつ肉棒をあてがう。誘われる

ようにぐぷりと先端を飲み込まれたため、そのままの勢いで奥まで貫いた。

「——！」
声にならない声を上げ、体をビクンと震わせるカルカちゃん。痛みのせいなのか、あるいは絶頂を迎えたのか。初めての挿入でイッたのだとしたら、やはりそつちの才能があつたのだろう。遠慮なくピストンを繰り返す。

なんだろう、膣内はとろとろなのに、吸い取られるような感触だ。『ここがいい』という目立った部分はないというのに、総評としては最高の一語に尽きる。これが聖王国の女王様の穴か。ドラウの時もそうだったけど、国のトップを犯すという精神的な高揚も相まって、正直長くは保たない。

「はっ、くっ——カルカちゃん、どこに射精してほしい？」

「んっ、いつ、うあっ——な、膣内に……あ、っ、だひ、て、んうっ……！」

「孕むよ？　ほんとにいいの？」

「はい、はいっ——だしてっ……！」

全身で孕ませてほしいと訴えかけてくるカルカちゃん。そんなお願いをされて断れる男はいないだろう。子宮の入り口に亀頭を押し付け、今日一番に濃い精液を注ぎ込む。どくどくと肉棒が脈動する度に、膣が『もっともっと』と締まってくる。

らんらんと瞳を輝かせ、少し危ういレベルで瞳孔が開いている彼女。すぐにチンポの

お掃除に取り掛かり、今度は胸で挟み始めた。

…もしかしてエロ本の行為、全部試すつもりかな？

うん——今日は長い日になりそうだ。どっちが変態として上か決めようじゃないか、カルカ女王陛下……って感じ？

8話

聖王国神官団団長『ケラルト・カストディオ』。ローブル聖王国における神殿勢力の頂点に座し、実力、知性、美貌の全てを持って生まれた傑物である。

その若さに対し、四位階までを行使できる稀有な神官である——というのが公称されている評価だが、実際には五位階にすら到達している英雄の領域に立つ者であった。

姉である『レメディオス・カストディオ』も聖騎士として頂点に立つ者であり、姉妹揃って神に愛された存在と言えるだろう。欠点らしい欠点と言えば、姉のレメディオスが母親の胎内に置き忘れてきた『知性』というものの存在くらいだろうか。

とはいえその分、妹であるケラルトが余すことなくさらってきたため、釣り合いはとれているのかもしれない。脳筋の姉と腹黒の妹——そんな麗しの姉妹である。とはいえ大抵の苦労は妹の方が背負うため、賢すぎると言うのも考えものかもしれない。

そんな知恵者であるケラルトは、上司であり友人でもあるカルカの変化に目ざとく気がついていて、清廉潔白の化身のような聖王女が、時折見せる『女』の顔。

王として繁忙を極め、偶に訪れる余暇は友人付き合い……すなわち自分たちとの交流に使っているというのに、いったいどこにそんな余裕があるのだろうか、ケラルトは

首を捻る。身分に違いはあれど、友人として親交の深い自分たちにさえ何も話さない事実は、彼女にとつて少々不満であつた。

ついでに言えば、抜け駆けをされたという感情もあるのかもしれない。妙な噂を立てられている仲間同士だというのに、相談もなしというのはたまつたものではないだろう。加えて、単純に国の重鎮としての憂いもある。なにしろ『女王』だ。簡単に『恋人ができました』で終わる筈もない。

身分は見合っているのか、貴族や組織との折衝に支障はないのか、その他にも多岐に渡る問題がある。権力というのは、持てば持つほど自由が少なくなるのだ。

その最たるものが婚姻関係であり、王族が自由恋愛を謳歌できるのはお話の中だけだ。場合によっては苦言を呈することも視野に入れなければ——ケラルトがそう考えるのは当然の成り行きと言えるだろう。

「……」

「ど、どうしたの？ ケラルト。今日はなんだか機嫌が悪いようだけど」

「…カルカ様。私達になにか言うことはありませんか？」

「む？ どういうことだケラルト」

「姉様。最近のカルカ様の様子……明らかに変化があるでしょう？ いったいどこにそんな暇があるのかは解りませんが、明らかに男の匂いがします」

「な、なんのことかしら。貴女も今まさに言ったではないですか……私にそんな暇はありませんよ」

「そうだぞケラルト。カルカ様がそんなつまらんことにかまける訳がないだろう！」
「うぐつ……！」

「もうその反応が答えですね。で？ いったいどこでお知り合いになったんですか？ 婚期を焦りすぎて騙されていやしませんか？」

「エ、エイ様はそんな人では——あつ、いえその……」

「エイ？ エイ、エイ……そんな名前の貴族は……ふむ、聞いたことがありますね。姉様は知っていますか？」

「知らん！」

ジト目でカルカに視線を向け続けるケラルト。その圧を受けて観念したのか、針のむしろに堪えられなかったのか、カルカはようやく重い口を開いた。そうして語られた、彼女のつややかな唇から紡ぎ出されるエイの人物像は——そう、誰がどう聞いても、拗こじらせた行き遅れぢの妄想であつた。

曰いわくドラゴンを歯牙にもかけぬ剣技を持つ勇者。曰く神話の魔法を使う偉大なる魔法使い。曰く『糸の一切付いていない私』を見てくれる素敵な男性。

曰くイケメン。曰く優しい。その他にもアレが上手い、アレが大きい、アレがアレが

アレが……と、彼女の言はイケナイ薬をキメた妄想女のそれであった。

「…あつ、ごめんなさいケラルト。私だけがこんなことになってしまつて……でもこれで変な噂もなくなるでしょうし、きつと貴女にも素敵な出合いがあるわ!」

「カルカ様」

「はい?」

「神官を呼んできます。それと薬師も」

「ふえっ!」

「くっ……! なぜ、なぜこんな酷いことになるまで気付かなかつたのですか私は……!

大丈夫です、カルカ様には私達が付いていますから……だからご安心ください」

「な、なにを言つてるの? 私は病氣じゃありませんし——というか貴女は神官団の团长でしょう! だいたい……あつ! …嫉妬? 嫉妬なのねケラルト。それなら私は許します……天にまします神よ、どうか彼女にも大いなる幸福を…」

「黙れボケ女王」

「ボツ!」

「あなたは仮にも聖女王なんですよ? 妄想も大概にしてください」

「誰が妄想ですか! エイ様はちゃんと実在しています!」

「カルカ様の脳内にですか?」

「むうううっ……い。げ・ん・じ・つ・に・です！ 何を隠そう、エイ様は竜王国を救った英雄——『ウン・エイ』様なのですから！」

どういった男かは口にしても、その実態や背景は頑なに口を割らなかつたカルカ。しかし友人の煽りによってエイの正体を口にする。

そしてその瞬間、ケラルトはニヤリと口元を歪めた。『胡散臭い』『怪しい』と言われる彼女の妖艶な美貌は、実際に中身も腹黒である。軽い演技で上司の口を割らせることなど造作もない。

「——なるほど、それがカルカ様ご執心の男性ですか」

「……はっ!? ケ、ケラルト……嵌めましたね！」

「素直に教えてくれそうにもなかつたので。それにしても救国の英雄様と……ですか。どちらでお知り合いに？ 実際のところ、そんな暇はなかつたでしょう」

「う、うう……」

王の資質という点においてカルカとケラルトのどちらに軍配が上がるかと言えば、圧倒的に後者である。そもそも王という地位にありながら清廉に過ぎ、なおかつ腹芸も不得意なカルカは、教主としての適正はあれど君主としての器には欠けるのだ。腹の探り合いでケラルトに敵う筈もなかつた。

じわじわと真綿で首を絞められるように、エイとの出会いや秘密の部屋が存在を暴か

れていく。オナニー女王という不名誉だけは何としても守り抜いた彼女であったが、それ以外のほぼ全てを説明する羽目となった。

「うふふふ……そうですか、そうですか。政務をお人形に任せて男とちちくりあつていたと……そういうことですか」

「そ、それは少し悪意ある解釈じゃないかしら？　ちよつとした息抜きみたいなものよ

……その、あなた達に黙っていたことは悪いと思つてゐるけれど」

「姉様はどう思いますか？」

「——ん？　話は終わったか？　難しい話はよくわからん……」

「寝てたんですか!?　…はあ。イサンドロとグスターボの苦勞がよくわかります」

その後もうつつかの問答があり、最終的にはエイと引き合わせるように沙汰を下されたカルカ。聖王国に名高きカストディオ姉妹——天然娘と腹黒娘。彼女たちとエイの邂逅は近いようだ。

ナザリック地下大墳墓——シャルティアの自室。甘い匂いの立ち込める典雅なその場所には、十数人の吸血鬼の花嫁が死屍累々と横たわっていた。その誰もが秘所を泡立たせ、口元からよだれを垂らし、恍惚の表情で倒れ伏している。

——そしてそんな場所へ、不躰に立ち入る影が一人。女性の理想像とも言える均整の取れた体に、美の体現者と評すべき美しい顔かんほほ。頭上の双角と腰についた翼は、彼女が人間であることを否定しているが、美しさは欠片も損なわれていない。彼女こそ、このナザリックを実質的に運営統括しているNPC——『アルベド』である。

「…酷い有様だわ」

「ふう……ん、う、アルベド……？ なんの用でありんすか？ というか部屋へ入るならなんぞありんしょう」

「部屋の前に誰もいなかったもの」

「…ああ。そう言えばそこに転がっていんすな。小間使い程度にしか使い道がないと思っくいんしたが、中々どうして具合が良かったでありません」

「少し乱れすぎじゃないの？ そんな体たらくじゃ、モモンガ様のご命令を満足にこな

せるとは思えないけれど——ねえ？ シャルティア。続けざまの失態……これ以上モモンガ様を落胆させるようなら、私にも考えがあるわ。守護者への失望は配下全員への失望になりかねない……理解しているわね？」

「……」

「…イウエン、だったかしら。随分探し回っているようだけど、まさかそれにかまけて任務を疎かにしていないでしょうね。栄えあるナザリックの守護者が、外部の吸血鬼に心を奪われたなんてことは……ありえないでしょう？　ねえ——シャルティア・ブラッドフォールン」

「……」

ベッドに寝そべる同僚を、アルベドは鋭い眼光で射抜く。しかしそんな凍てついた視線にも動じず、シャルティアは深くため息をついた。

彼女としてもサボっているつもりはないが、しかし^{やま}疚しい部分が皆無というわけではない。ナザリックへの忠誠を疑われた時点で、弁明のために目的は吐かなければならず——けれどその相手がアルベドという点について、複雑な心境を覚えたのだろう。

「…はあ………いっとう話したくない相手でありんす……」

「…なんのこと？　まさか本当に懸想^{けそう}しているわけじゃないでしょうね」

「専用の愛玩具にしたいと思っではいんですが、わらわが愛を捧げるのは唯一モモンガ様

のみ。見当外れもいいところでありんす」

「ならいったい何を隠していたのかしら。もしそれがナザリツクに不利益をもたらすものだったなら——」

「——モモンガ様のやや子」

劍呑な雰囲気を纏わせるアルベドであつたが、シャルティアの言葉を聞いた途端、ピタリと口を閉じた。金色の瞳が爬虫類のように縦に裂け、鼻息を荒くしながら裸の少女へとにじり寄る。はたから見れば完全に変態であつた。

「くわしく！」

「さて……どうしんしょう。わらわのことをさんざん腐していんしたけれどお……？」

「うぐ……ね、ねえ、シャルティア？ 私達、同じ御方を愛する仲間でしょう？」

「……くふ。ま、意地悪はここまでにしんしょうか。そう……ぬしが言及したイウエン

……あれは最高の体でありんした。零れ落ちそうな乳房に、極上の尻……そして——雄々しい剛直」

「剛直……？ 女の吸血鬼だと聞いていたけれど、違うの？」

「間違いなく女でありんした。わらわが最初に弄まさぐった時も、ぷつくりとした恥丘の感触があつただけ」

「……つまり？」

「生えた」のでありません。不思議なことに、それまで影も形も無かった肉棒が現れ……わらわの尻穴を蹂躪し尽くしたのであります。乱暴に犯し、えぐり、無遠慮に射精して……はあ、んん……」

「サカるのは後にしてくれないかしら」

「はあ、ふう……んっ……そう、わらわはしかとこの眼で見んしたの。あの魔羅まらが——イウエンが嵌めた指輪の力によって生え、そして消えるところを……」

「……っ！ と、ということとは……」

「そうであります。アンデッドな上、女体ですらありませんのに生えたということは……」

「そのマジックアイテムなら、モモンガ様にも効果は見込める……」

「燦然と輝く美しき白磁の体に、雄々しく屹立する一本の肉棒……！ ああ、考えただけで、はふう……」

「く、く、ふー……!!」

頬を上気させ、いかにも発情していますと主張している極上の女性たち。今の彼女達を目の前にすれば、どんな男であろうとも熱いり立つこと間違いなしだ。そして一頻ひとしきり妄想に浸りきった彼女達は、それを現実にするべく語り合う。

「貴女の不審な行動については理解したわ。だからまずは休戦協定……正妻の座を争うのは後回しね」

「兎にも角にもモモンガ様の『立派』を確保してから……そういうことでありんすね。ぬしに話した意味は理解していんしょう？ わらわも随分探し回りんしたが、煙の如き隠形で困っていんすの」

「ええ、姉さんに協力してもらおうわ。どんな手を使つてでも——その指輪、奪い取つてくれる！」

「あ、それはダメでありんす」

「……え？」

殺してでも奪い取る——そんな雰囲気を感じもしないアルベドであつたが、それを諫めるシャルティアをポカンとした表情で見つめる。そんな間抜けな守護者統括を、シャルティアはフンと笑つた。

「モモンガ様のお言葉を忘れんしたの？ 今のナザリックは正義の組織……ぬしが言うような横暴がまかり通る筈もなし。それ以前に『ウン＝エイ』『マジカル☆イウエン』、その他プレイヤーと考えられる者には危害を加えるなど厳命されていんしょう？ ……ま、ぬしが考えなしに行動して指輪を奪い——謹慎処分を受けている間にわらわが孕むと言うのも悪くありませんが」

「ぐつ……！ な、ならどうするのよ。譲つて欲しいと言つて、素直にくれる相手なの？」

「わかりんせん……が、掴みどころのない女性にょしやうでありんした。そう簡単にいくとは思え

んせん」

そんな言葉とは裏腹に、シャルティアの顔には曇りが無い。それを見て取ったアルベドは、何かしらの作戦があるのだろうと看破した——そして唇を噛む。

休戦協定を結び協力体制にあるとは言え、マジックアイテムを手に入れた際の貢献度が、主へ迫る優先順位に影響を及ぼすのは明らかだろう。大した戦果もなく、報酬だけをかつさらうような真似は許されない。

「……どうするつもりなの？」

きつと教えてはくれないだろう——そんな心持ちで問いかけたアルベドであったが、返ってきた言葉は彼女の想像をさらりと超えていた。

「性戦でありんす」

「……は？」

「わらわは性技を競う勝負に負け、下着を奪われんした。ソリュシヤンは勝ち、ヘロヘロ様の精巧な人形を手にした……ゆえに、先にあやつを吐精させれば正々堂々と権利を主張できんすの。『それを寄越せ』と！」

「そ、それは……でも、私は……」

「——モモンガ様に操を立てるのは当然。さりけれど、アルベド……ぬしはこんな言葉を知っているか？ 『アナルはノーカン』と。そして『心の膜さえ守つとけば処女』……」

！　そもそも『女どうしだからセーフ』と！」

「アウトよ」

「くふつ、淫魔の癖に融通の利かない女でありんす。まあ好きにしなんし。わらわが指輪を手に入れた暁には、ちやあんと使わせてあげんすから……に・ば・ん・め・に」

「くううつ……！」

嘲笑から逃げるように部屋を後にし、悔しげに体を震わせながら帰路につくアルベド。彼女の主への愛は常軌を逸しており、そこに余人が入り込む隙間など一ミリもない。極上の体の全ては、余すこと無く主へ捧げると決めているのだ。

元より配下相手にレズセックスを嗜んでいたシャルティアとは違い、全ての初めてを主に捧げたい——アルベドはそんな女性である。

淫魔らしく性技に自信はあれど、しかし女性とは言え行為に及ぶのは抵抗がある。けれど寵愛を真つ先に受けるためには、どうしても先手を取る必要があった。うんうんと唸りながら廊下を彷徨き、手淫か口淫ならばありだろうかと妥協し始めた頃——彼女に声をかける者が現れる。

戦闘メイド『プレアデス』が一人、『ナーベラル・ガンマ』である。ナザリック配下にも派閥というものがあり、正妻の座を争うシャルティアとアルベドの関係において、ナーベラルは後者を支援する筆頭であった。その対象が見るからに苦悩していれば、声

をかけるのは当然と言えるだろう。

「どうかされましたか？ アルベド様」

「あらナーベラル……ううん、なんでもないからほつといてちょうだ——」

心配げに声をかけてきた彼女に対し、素気なく通り過ぎようとしたアルベドであったが——瞬間、天啓を受けたかのように立ち止まる。そして次に振り返った時には、裂けるような笑みが口元に貼り付けられていた。

「ねえ、ナーベラル。少しお願いがあるのだけれど」

「……？ は、どうぞお申し付けください」

「く、くふっ……！ くふふっ……」

「あ、あの……？」

淫魔の嬌笑が廊下に響き渡る。ああ、プレアデスの運命や如何に——



なんか良いことありそうな今日この頃。本日は『蒼の薔薇』の拠点でもある王都の宿屋にて、菓の作製に勤しんでるところだ。いくつものフラスコを並べ、怪しげな菓をコポコポと煮立たせ、まさにイカれたマッドサイエンティストといったところだろうか。宿屋には通常の何倍もの料金を払っているから文句を言われることもない。ついでにいうと、後ろから興味津々と言った風に覗いてくるイビルアイが死ぬほど可愛くて死にそう。

「…錬金術にも詳しいのか。これはなんの用途に使うんだ？」

「ん？ ああ、この前スライムに負けちゃってさあ。悔しいから色々と策を練ってるのさ。これもその一環」

「は？ …お前がスライムに？ いや、どんな化物だそれは」

ちよつと前、僕の話が真実かどうか試させてもらおうと戦いを挑んできたイビルアイ。結果は当たり前前ものものにしかならなかったけど、彼女の僕を見る目が変わったのは言うまでもない。

恋心とかそんなのは無いようだけど、ちよくちよく絡んできてくれる程度には仲良くなった。どんどん実力が上がっているラキュースちゃんのこともあつて、色々と気に

なっているんだろう。

「んまー、何百人ものプレイヤーを阿鼻叫喚の地獄に陥れた古き漆黒の粘体エルダー・ブラック・ウーズが作ったNPCだから……君らで言う『魔神』かな？ うん、そんな存在だから僕が負けるのも仕方ない」

「なに……!? だ、大丈夫だったのか?」

「しばらく腰砕けになっちゃったけど、なんとか逃げ出すことはできたよ。今度は負けないぜ……そう、この薬があれば」

「そ、そうか……それはいつたいどんな効果なんだ?」

『性感帯が無いから無敵』なスライム……けど、人型である以上そんなことはないと思うんだよ。だからこそ——これだ! “感度を三千倍にするお薬”!」

「……スライムに脳でも溶かされたのか? それとも元々がバカなのか? ——ああ、そういうえば後者だったな。すっかり忘れていた」

「酷いナイビルアイ。どう考えても画期的な新薬だろ? まあ健常者が摂取すると空気に触れただけでイキ死ぬと思うけど」

「ええい! その薬を私に近づけるな! 変態め!」

「変態で何が悪い!」

「開き直るな!」

お腹辺りに抱きつく僕を、げしげしと足蹴にするイビルアイ。あー、やわっこい。しかし実力の差は理解したというのにチヨロインつぶりを発揮しないのは、やはり原作の『救出劇』が効いていたということなんだろう。まあ女の子はみんな『助け出されるお姫様』になりたいって言うしね。ただ強いってだけで惚れるほど安い女の子じゃないってことだ。

「ほら、さつさとしまえと言うに。というかよく考えたらお前……それはもはや超即効性の猛毒だろう。媚薬よりもタチが悪いぞ」

「まあ希釈すれば効果は薄まるからさ。イビルアイもちよつと使ってみるか？ アンデッドだともちよつと感じにくいだろうし、たぶん百倍くらいに薄めるとちよつといいんじゃないかな……」

「いらん！ ……まったく、ティアもティナもお前も……！ 盛りのついた犬でもあるまいし、何が楽しいんだか……」

「……」

「な、なんだ？ なんで黙るんだ」

「イビルアイはさ、愛だの恋だのを馬鹿にしてるけど……それはどういう理由で？」

「む……別に馬鹿にしてはいない。ただ……女の愛嬌や愛想は、男に守ってもらうための媚こびでしかないだろう？ ……だから、強くあれば必要のないものだと思っただけ

だ」

「その言い方だとさ、例えば強者同士のカップルはいちやつく必要がないってことになるけど。『甘え』と『依存』は弱者の特権ってことかい？」

「少し飛躍しすぎな気もするが、概ね間違つてはいないな。強者足らんとすれば、異性に甘える必要など一切ない」

「ふうん……」

まあ何百年も生きてる彼女が言えば、なんとなく含蓄がんちくのある言葉に聞こえなくもないが……しかしこの発言は筋金入りの処女の声である。言葉とは不思議なもので、たとえまったく同じものであつても、発した人間によつて印象はがらりと変化する。

イケメンヤリチンが口にする『ハハツ、女なんて所詮……』という台詞。童貞キモータが口にする『ハハツ、女なんて所詮……』という台詞。もはや別物と言つていいだろう。

まったく同じ文面だというのに、何もかもが悲しいほどに違う。それと同じで、イビルアイのそれも所詮は未通女の戯言だ。せめて経験してから言えつてーの。処女膜から声が出ちやつてますよ、お嬢さん。

「高尚な人ほどさ、愛を幻想つて言うよね。哲学者とか小説家とか、きつと何周も何周も考えを巡らせて……論考を重ねて、それで結論付けるんだよ。それは『本能に後付けされた付属品でしかない』つて。文化が無ければ存在しない感情だからこそ、生物として

は本来必要のないものだって。あるいは必要だとしても、それはより優秀な遺伝子を紡ぐための衝動でしかないって」

「…ああ、まさに道理だな」

「僕はさ、そういう気取った奴等に『んほお!!』って言わせるのが好きなんだ」

「ああ、真面目な話を期待した私が馬鹿だったよ」

「いや、真面目な話さ。だって滑稽じゃないかい？ そいつらが巡らせる思考や論理的な解釈だって、文化によって後付けされたものじゃないか。彼らがなんの教育も受けていなければ、一生涯考えることすらなかった筈だぜ」

「…ふむ」

「だから彼らが論考を重ねて愛を欺瞞だと叫ぶなら、前提から否定できる。何も考えずに愛を虚構だと罵るなら、ただの考えなしの馬鹿野郎さ」

「いや……うむ……そうか？ なにか煙に巻かれているような気がするんだが…」

「まあその通りだからね」

「——ええい！ 毎度毎度からかいおつて！ 目上の人間を敬うことを知らんのか貴様は—」

「ぶつ……！ ヴァンパイアジョークかな？ どこにも人間なんて見当たらないけど」

「お、おまつ……！ そういうところだぞ！ すつ、すつ、すつ、すつ、すぐくデリケートな部分だろ!!」

そこは！ 超えちゃいけないライン考えろよ！」

「うん？ でもさ、自分が大して気にしてないところを氣遣われると、逆に嫌じゃないかい？ 君はそんな程度のこと、とつくの昔に乗り越えてるように見えるけど」

「…まあ、そうだが。でもお前、もうちよつと配慮してもいいだろうに…」

「そうかい？ じゃあイイコイイコでもしてあげよう」

「いらんわ！」

暴れるイビルアイを押しえつけ、後ろから抱きすくめる。まだまだ恋愛感情は育っていないが、まあ偶にはゆっくりでもいいだろう。ティアちゃんもよく彼女をクンカクンカしてるし、軽いスキンシップのようなものだ。多少意識してくれるだけでも悪くない。

「…どう？」

「ええい！ は・な・せ……—うん？ 何がだ？」

「いや、盛る理由を聞いてたからさ。結局なにを求めてるかかってんなら……温もりつてやつかな？ 他人の肌つて気持ちいいんだよね。だからどうかかって」

「…ふん。ならお前が私に求めるものは何もないな……なにせこんな体だ。冷たくて仕方ないだろう？」

「どれどれ、あそこも冷たいのかなつと…」

「そういうところだつてんだろがああ!!」

「ぐふうつ!!」

うーん、どんどん遠慮がなくなってきたな。実に良い傾向だ。なにせ自分と対等か、それ以上に強い奴となんてそうそう出会えない彼女だ。いくら蒼の薔薇のメンバーが仲間だとはいえ、突出した強さからくる疎外感はついて回る。その点、僕に対しては全力で殴ろうが魔法をぶつ放そうが問題なしだ。そういう存在は貴重だろう。

「——ま、これから長い付き合いになるんだし……遠慮のいらぬ相手はすごく貴重だと思ふんだよ。僕は君にそういう存在でいてほしいし、君にとつての僕もそうでありたい。これも一つの愛だぜ」

「……そうか。お前は私と同じで、永劫の時を生きる☒なんだな」

ええ……？ ラキユースちゃん病気で移ったのか？ いきなり『永劫の時を生きる』とか草生えるんですけど。というかそんなもんは深く考えなくてもいいのさ。好きだけ生きて、満足するまで生きて、飽きたら死ぬべいい。というか不老ではあつても不死じゃないんだから、君だって永遠ってわけじゃないだろうに。

——というか『君って生きてなくね?』と言いたくて仕方ない。けど流石に三度目のボケはあれだろうか……腕の中で少しだけしんみりしてる彼女を見ると、いくら僕でも空気を読まざるを得ない。流れるような金髪を手で梳いて、少しだけ抱きしめる力を

強くした。

「——イビルアイ」

「…なんだ？」

「君って生きてなくね？」

「うがああ!!」

どうどう。おお、噛み付いてきた。ついに吸血鬼の衝動を我慢しきれなくなつたのだろうか。はぐはぐと腕を噛んでいるけれど、ダメージは通らない。むしろ小さい舌が偶に当たって、ちよつとばかしエロスを感じさえするな。

そんな感じで一頻り^{しつこ}りじやれあつた後、疲労とも満足ともつかない表情を浮かべて退室する彼女を見送つた。しかしなんとも、好ましい幼女である。

容姿は言うまでもなく、そして精神の成熟ぶりに反して性的な未熟さを持ち合わせたロリババア。まさに理想じゃなからうか。

某魔法先生のロリババア吸血鬼が、新作でロリババア枠を脱した今、覇権を握るのは彼女なのかもしれないな。ま、今は僕にとつても現実なこの世界で、確固たる一人として存在してるんだ。非實在性の幼女ではなく、きつちり三次元幼女である。キャラとして見るのは言語道断と言えるだろう。

さつき彼女にも言った通り、長い付き合いになるんだろうし……できる限り素で接し

あえる関係になりたいものだ。いつか過去の出来事も話してくれるような——そんな関係に。

9 話

——目を見張るほどに巨大な満月。その怪しくも美しい、昏い輝きに照らされる少女が一人。月下の元、宿屋の屋根の上で黄昏れているのは数百年を生きる吸血鬼。誰も彼もが夢見に沈むこの時間も、彼女にとっては毎夜毎夜に訪れる孤独な時間だ。

いつも身に着けている仮面やマントも外し、自身の年齢や外見の偽装を解く——ともしれば吸血鬼として追いついてられる危険性すら孕んでいる行為を、彼女は偶の息抜きとしていた。どのみちこんな深夜に出歩く人間などそうおらず、いたとしても彼女に気づく可能性はごく僅かだ。

加えて、遠目からでは吸血鬼と人間の僅かな差異など見抜ける筈もない。高位の神官が夜な夜なアンデッドを探している——などという有り得ない事態を警戒するほど、イビルアイは小心ではなかった。

「…はあ」

「どうしたの?」

「——へっ? どあつ?!」

物憂げにため息を吐く彼女の横に、いつのまにか鎮座していたレズ忍者——ティア。

レベルに差はあれど、隠形に関してはその差もひっくり返る。動転して屋根から転げ落ちそうになるイビルアイを抱きとめ、ティアは胸いつぱいに少女臭を吸い込んだ。

「うーん……これは悩みを抱えている匂い」

「どんな匂いだそれは。別に悩んでいるわけじゃないさ。ただ、なんというか……『愛』という奴に関して考えていただけだ」

「……お年頃？」

「誰が思春期だ！ というか、お前の何倍生きていると思ってるんだ。そうじゃなくてだな……なんだ、その……例えばお前とエイだが、セツ……あ、アレをしている時はどういう感じなんだ？ 別に恋人という訳ではないんだろう？ お前はお前で行きずりの女と関係を持つ時もあるし、アイツもアイツで他に相手がいるようだし……お前らのそれは愛なのか？」

「（完全に思春期）エイに何か言われた？」

「いや……私に対してというよりは、自分の考えを口に出したただけだろうな。私が勝手に気にしているだけだ」

「エイは普通じゃないし、私の生い立ちも普通じゃない。イビルアイの人生も普通じゃないから……あんまり他人を参考にしないほうがいい。それでも答えが知りたいのなら——」

「…知りたいのなら?」

「私がベッドの中で教えてあげっ、ぐふうっ!!」

「なぜお前らはやることなすこと同じなんだ…」

屋根の上で器用にルパンダイブをきめたティアであったが、腹部に掌打をくらい崩れ落ちる。そのまま緩やかにゴロゴロと転がり続け、屋根から放り出され——隣の建物の壁を蹴り、元の位置に戻った。アダマタイト冒険者の身体能力を持つてすれば造作もないアクロバットである。

呆れたように肩を竦めるイビルアイ。そんな彼女に性懲りもなく近付き、キスを迫るティアであったが——その表情は至極真面目くさったものであり、イビルアイはいったいどうしたのかと訝しむ。迫る顔は唇を通り過ぎ、そして耳元で囁かれた言葉は——警告であった。『囲まれている』と。

「…っ!」

その言葉を耳にした瞬間、素早く仮面を付けマントを羽織るイビルアイ。『蒼の薔薇』は闇組織に煙たがられているチームではあるが、しかし今このタイミングで誰かしらに襲われる理由があるとすれば、彼女が吸血鬼であるという一点に尽きるだろう。

あまりに油断しすぎたと、イビルアイは自責の念にかられる。現状ティアと一緒にいることを考えれば、下手をするとチームメンバーをも不味い事態に巻き込みかねない。

どう言い訳をしたものかと、襲撃者の様子を窺う。そんな彼女の前に暗がりから身を現したのは——見目麗しい三人のメイドであった。

「ビンゴっす！ アイテムかなんかで隠しちやっつすけど、アンデッドの気配ビンビンさせてたっすよユリ姉！」

「遠目でしたけどお、ちらつと牙も見えましたあ」

「あなたは目が良いものね、エントマ。それにしても探し始めて三日目で見つかるなんて……運がいいわ」

「夜な夜な探し回った苦労も報われたっす！」

三方向から迫る、それぞれが方向性の違った美しさを持つ三人。声量は普通だと言うのに、まるで近くで会話をしているようなやり取りが違和感を醸し出していた。そして常人ではありえない身体能力で、イビルアイ達が乗っている屋根へと跳び移る。

煙突の上に陣取り、軽やかに笑う褐色のメイド——ルプスレギナ・ベータ

メガネをクイツと持ち上げ、上品さを漂わす夜会巻きのメイド——ユリ・アルファ

甘ったるい声とは裏腹に、人形のように表情が動かない小さなメイド——エントマ・

ヴァシリツサ・ゼータ

街中に現れたアンデッドを退治してきた——というには少々有り得ない出で立ちに、イビルアイは怪訝な表情を作る。しかし三人の言動からは、既に自分の正体が割れてい

ることが窺えた。彼女はため息を吐きながら、無駄だと思いつつも弁明を図る。

「…確かに私は吸血鬼だ。だが人を襲うことなどないし、悪行に手を染めてもない」

「私は人間だけど、今の言葉は確かだと保証する。むしろ正義のために行動することの方がよっぽど多い」

自身の立場も顧みず、擁護の言葉を口にするティア。そんな彼女に対し、イビルアイは嬉しさと心苦しさが緋い交ぜになった表情を浮かべ——しかし諦観を覚えてもいた。『自分は悪い吸血鬼ではない』と、そんな言葉が届くと考えるほど彼女は人間の善性を信じていない。というより、そんな人間は異常だとすら考えていた。

アンデッドは人間に敵する者。それが常識であり、そもそもとして事実である。イビルアイのような吸血鬼こそが例外中の例外であり、まずもって考慮に値すべき存在ではないのだ。見つけ次第問答無用に滅すべき存在……それがアンデッド。

そんな化物が正義を訴えたところで、信用されることなど有り得ない。しかし届くと思っていなかった言葉に対する返答は——彼女にとつてあまりにも予想外であった。

「知ってるつすよー。街を裏から護る正義の吸血鬼！ ヒューヒュー、かつこいいつすー」

「ボクより高レベル……正義の吸血鬼……正体を隠している……うん、間違いないね」
「じゃああ、さっそくですけどお……選んでくださいいなあ〜」

「……はっ。」

逃げる素振りが無いのを見て取った三人のメイドは、包囲を解き、トコトコと歩いて二人の前に並び立つ。その立ち居振る舞いはメイドとして完璧な所作であり、その立ち姿はまるで芸術品の如き美しき。しかしそれがどういった意味を持つのか理解できず、イビルアイは呆けた声を零す。

「ほらほら、よりどりみどりつすよ？ 清楚系淑女なユリ姉、可愛い系ロリっ娘のエンちゃん……なんなら私でもいいつす」

「いや、意味がわからないんだが」

「またまたー。シャルティア様をなぶ颯り尽くした御人おひとが言うことじゃないつすよ。気が乗らないんなら……ほい、ちよつとサービスつす」

ルプスレギナのメイド服は修道服を模した衣装である。しかし前者の用途にしても後者の用途にしても、本来は有り得ない扇情的な意匠が随所に凝らされている。胸を強調するコルセットもその一つであるが、なにより視線を惹くのはスカートの切れ目——腰まで伸びたスリットだろう。

膝上まで伸びるオーバーニーソックスにより、肌の露出こそ十数センチではあるが、ちらちらと見える小麦色の太腿は男にとって目の毒でしかない。ルプスレギナはそんなスリットを自らの手でつつと広げ、惜しげもなく肌を晒す。

下着こそギリギリ見えていないが、その大部分がさらけ出された太腿は、むしろ全てが見えている状態よりも性欲を掻き立てる。傾城傾国とすら言える美しさも相まって、たとえその気がない女性ですら魅了しかねない危うさだ。

「いや、だから——私を誘惑する意味が理解できないと言っているんだ！　というか私にそつちの気はない！」

「隠しても無駄っす！　女の子の尻穴が大好きな変態吸血鬼ということは調べがついてるっす！」

「どこの調査!?　人違いにも程があるわ！」

「王都を拠点にして、この世界においては伝説級の強さを持ち、正体を隠しながら正義を執行する吸血鬼……そんな存在が他にもいるっすか？」

「え……いや、まあそれは流石に私以外にないと思うが……」

「ほらほらっす！」

「いや、ほらと言われても……」

数百年ものの処女だというのに、女好きの変態扱いをされている。そんな意味不明な状況に慄くイビルアイ。度し難い感情を共有しようと、横にいるティアの様子を窺う。しかしそこにあつたのは——悲しさと切なさど心苦しさを瞳に秘めた忍者の姿だ。まるで裏切り者を見るような目をイビルアイに向けるティア。その顔には様々な感情が

浮かんでは消えていた。

「な、な、なんだその目は!?　なんでそんな目で見るんだ!」

「女の子が好きだったのなら……私がいたのに……なのに、他の女と……?　それどころかあんな美女美少女に求められて——こんなに酷い裏切りはない」

「私はお前に裏切られた気分だよ!」

「少しこつちにも超越すべきそうすべき」

「ええい、勝手にしろ!　とにかく私には関係ない……:というかお前らも!　仮に私がそんな変態だったとしてだ。だからといってする理由にはならんだろう!」

「もちろん目的はあるつすよ!」

「ボク達が先に貴女を絶頂に至らせたなら——」

「オチンチンを生やす指輪……:戦利品として所望いたしますわあ」

「わかった。お前たち頭がおかしいんだな?」

真剣に何を宣うかと思えば『チンチンを生やす指輪をくれ』である。イビルアイでなくとも、相手を「キ印じし」が入った相手だと考えるだろう。しかし彼女達の言葉に応じたのは、向けられた当人ではなくその横の忍者であった。

「……これのこと?」

「なんで持ってるの!?!」

「やっぱり！　今は愛人に持たせてたんすね！」

「ああ、もうどこから突っ込めばいいんだ……」

「ふわあ、どこから突っ込むかなんてえ……えっちい」

「ならお前らはびつちだよ！　もうなんなんだ本当に……誰か助けてくれえ……」

女性相手にはタチが基本のティアが『生やす指輪』を欲しがらない筈もなく、彼女がエイにねだつて手に入れたのは当然の帰結だ。そもそもエイのアイテムは基本的に無限であるため、彼が惜しむこともない。女の子が女の子に対し腰を振る姿は、それはそれで興奮するものである——というのがエイの言であつた。

「くうう……とにかく、お前らが何か勘違いしてるのは間違いないんだ！　私達には何も関係ない！　——逃げるぞティア！」

「ここは私にまかせて、先に行つて」

「わかつた！」

「……即答は酷い」

死亡フラグ満載のセリフでこの場に残留の宣言をしたティアに、イビルアイは振り返ることもなくシユバつと逃げ出した。本来の彼女であれば、危険を推して残る仲間を見捨てたりはしない。しかし今この場での『危険』は、命ではなく貞操である。そもそも喜んで残つていそうなティアのために、自らを危険に晒すこともないだろう。

「待てつす——つと！」

「あの娘を追いたいのなら、まずは私を倒してから」

「…どうするつすか？ ユリ姉」

「うーん…指輪を持つてるのはその娘みたいだし、無理して追わなくてもいいんじゃないかな。それに、あの娘と違ってあんまり強い感じがしないとは言え——」

「忍者の格好が酔狂じゃないならあ、少なくともレベル七十近くはある計算ですう。邪魔されると厄介ですわあ」

「それもそつすね。なら忍者のお嬢ちゃん——」

「ティア」

「じゃあティーちゃんつすね。勝負の方法はさつき言つた通りでいいつすか？」

「モチのロン」

「良い返事つす。んじゃ、どこかいい場所は…」

「近くに昨日潰した八本指の違法娼館があるよ。建物はまだそのままじゃないかな」

ユリの言葉に全員が頷き、屋根の上から軽やかに飛び降りる。夜の帳も落ちきつたこの深夜、連れ立って歩く三人のメイドと一人の忍者——なんとも怪しいことこの上ない。警邏中の兵士が目撃すれば、間違いなく声をかける案件だろう。とはいえそんなヘマをするような彼女達ではなく、道中はスマートそのものだ。

「…八本指を潰したと言っていたけど、本当？」

「まだ完全には潰れていないけどね。でも時間の問題だよ」

「ふっふっふっ、なんとと言っても私らは——」

「正義の組織い〜」

「ナザリック！ だからね。覚えておいてくれると助かるよ」

「ナザリック…最近噂になってる、あの？」

「おっ、どんな感じですか？ まだ浸透はしてないって聞いてたつすけど」

弱きを助け強きを挫く者達——それが王都で最近噂になっている謎の集団への評価である。小さいものであれば失せ物探し、大きいものであれば暴漢の鎮圧など、様々な場面に現れては問題を解決していくヒーロー。まだまだ知らない☒の方が多いいとはいえ、それも時間の問題だろう。情報通のティアであれば、当然のごとく既知だ。

善行をなしては『ナザリックのものです』と言って去っていく者達。『消防署の方から来たものです』ばりに胡散臭いが、とはいえ騒動が自作自演という訳でもなく、見返りを求めることもないのだ。職業柄疑い深いティアであっても、ある程度は好意的に見ていたほどである。

「——『超速おじいちゃん』」

「…？ どういうことつすか？」

「一番よく見かける『ナザリック』の人……執事姿のお爺さん。強くて渋くて優しくてもものすごく速い。街の東で火事があれば駆けつけて、西で強盗が起きても駆けつける。目にも映らない速度で良いことをしていく老人……付いたあだ名が『超速おじいちゃん』。そう聞いた」

「そ、そつすか……ぶふつ、くく、くひつ……！ ちょ、超速セバス様……うひひつ……」
 「わ、笑つちやダメよルプス——ふふつ」

「んふつ、んんつ……さすがセバス様ですわあ」

残像を残して走り回るセバスを想像し、三人のメイドは笑いを堪える。直属の上司であるが故に、その姿が容易に想像でき——だからこそ可笑さもひとしおなのだろう。お腹を押さえながら笑いこけるルプスレギナ、真面目な表情を保とうとしながらも口元をひくつかせるユリ、可愛らしく両手で口を押さえるエントマ。そんな姿であっても三様に美しく、ティアはこの後に訪れるであろう素敵な時間に思いを馳せた。

「——ここだよ。入り口はその柵の横の隠し扉」

ユリの案内に従い、地下へ続く隠し通路を進んでいく一行。いくつもある部屋に微妙に残った行為の残り香が、この建造物の用途を表していた。とはいえ鋭敏な嗅覚を持つルプスレギナやティアが気付く程度のものであり、清掃はきちんとされていたことが窺える。

適当な部屋を選んだ彼女達は我が物顔で侵入し、四人を乗せてもなお余裕のあるベッドへ各々座り、あるいは寝転んだ。数瞬、なんとも言えない『間』が空いたのは、これまで一貫して余裕のある態度を崩さなかったメイド達が、ほんの僅かに緊張の糸を張ったからだろう。

ユリ、ルプスレギナ、エントマ。『生やす指輪』を手に入れるために選ばれたこの面子は、当然のことながら処女である。首なし騎士、人狼、蜘蛛人と——人間のような貞操観念こそ持ち合わせてはいないものの、まったく何も感じないということはない。感覚としてはルプスレギナがある程度人間に近い感性を持ち、エントマがもっともかけ離れているといったところだろう。

そもそも指輪を手に入れたいというならば、一度勝利を収めているソリュシヤンがもっとも適当な人選であった。しかし彼女はアルベドとシャルティアの正妻戦争において後者の派閥だ。任務が正式なものであればともかく、実際にはかなり私的な感情が入り混じっている現状において、彼女がアルベドへの協力を拒否したのは当然とも言える。

ナーベラルはアルベド派閥ではあるものの、冒険者として既に名が売れているため運用に適さない。シズはナザリックのセキュリティ上の観点から外出が禁じられているため、同行が叶わなかったのだ。

「……ルールはどうする？ 人数は……三対一？」

「……ユリ姉」

「うん、わかってる。ティアさん……だったよね。始める前に一つお願いがあるんだ」

ソリュシヤンのような反則技を持ち合わせていない彼女達は、そも大した性技など覚えていない。シャルティアを下した百戦錬磨の相手に、いつたいどう立ち向かうべきか。

彼女達が最初に考えたのは、『ハンデを貰う』という身も蓋もないものであった。しかしシャルティアからの情報——正しくはソリュシヤンから伝え聞いた情報だが——では、充分に交渉の余地があると判断したのだ。

むしろハンデを引き出す、その部分から戦いが始まっていると考えた。このチームのリーダーであるユリは、見た目に反して無鉄砲な戦い方を好み、まずは殴ってから考えようという脳筋気質である。今回も『とりあえずやってみよう』という、あまりに杜撰な計画を立てたお馬鹿なリーダーだ。

そんな彼女に苦言を呈したのは、ナザリックでも相当な慎重派であるエントマだ。シャルティアを超える超ビッグ相手に、処女三人が無策で挑むほど愚かしいことはない、滾々と説いたのだ。ナザリック以外の☒など大したことはないと傲慢に振る舞う☒が多いNPCの中で、彼女はしっかりと相手との戦力差を見極める頭脳派なのだ。

妹から丁寧に諭されたユリは己を恥じ、いくつかの案を素直に聞き入れた。まずはハンドレを引き出すためのテクニク——女として最高クラスの美貌を利用した『誘惑』を。プレアデスの中でもっとも丈の長いスカート——その裾を両手でつまみ上げ、ススと持ち上げる。物憂げに、そして恥じらいながらのその行動は、どんな男の心をも掴む魔性であった。下着が見えないぎりぎりまでたくし上げられたスカートは、しかし輝くほどに白い太腿とのコントラストで、芸術的な美しさと性的な美しさの両方を演出していた。

「ボク達……まだ処女だから、ハンドレが欲しいの……」

「——っ……………う……」

「……へっ?」

「はわっ……?」

清楚な真面目系美女が魅せつける、ギャップ萌えの極地とでも言うような行動、そして言動。これで堕ちない女好きなどいないと、エントマは太鼓判を押した。そして練習通り完璧に演技きつたユリの誘惑に——ティアの心臓は停止した。

「し、ししっ、心臓が止まってるっす! だ、誰か回復魔法を——!」

「ボ、ボボ、ボクのせいなの!? 回復——ってあなたの専門でしょう! ルプス!」

「そうだったっす!」

「お姉さま方あ、落ち着いてえ〜」

悪事を固く禁じられている彼女達にとって、殺人はもつとも忌避すべきものだ。まさか魅了（物理）しただけで死亡するとはこれっぽっちも思っておらず、混乱が三人を包む。そして懸命な回復によりなんとか息を吹き返したティアは、少しかだけレベルが上がっていた。

「ふう……死ぬかと思った」

「いや、死んでたつすから」

「えつとお……それでえ、ハンデは受けていただけですかあ？」

「わかった。どうせならこれも一時的に貸し出す」

「指輪……いいんすか？ まだハンデの内容も聞いてないのに」

「問題ない」

死亡騒動の後、ハンデの内容を確認して頷くティア。条件としてはまず、一人あたり十分間「攻め」の猶予を貰うこと——そして計三十分を耐え抜いた後にティアの反撃が許されること。それまではされるがまだ。そして三人のメイド達は三回まで絶頂しても敗北にはならない。

その二つを勝負に織り込んでほしいという願いを、ティアは問題ないと受けた。あまりにも不利な勝負な上、そもそも『処女』とはいまいちハンデになっていないのだ。女

性の絶頂とは男性ほど容易に導けるものではない。男性が物理的な刺激で勃起、射精しやすいのに対し、女性は快感も絶頂も精神的な部分の比重が大きい。

女性の“開発”とはその優位性を逆転させる行為であり、精神的な快感と肉体的な快感を何度も結びつけ、最終的に肉体の反応を精神に及ぼせる可逆的な行いなのだ。要はパブロフの犬と似たものだろう。

故に未経験の女性を絶頂に導くというのは非常に難しい。それどころか、そこに愛情がなければ難易度は余計に跳ね上がるだろう。そんな不利な勝負をティアが受けたのは——もちろん勝算があるからだ。当然、指輪を貸し出したのもその一環である。

「じゃあエントマ、お願いね」

「はいい、ユリ姉様あ」

「——ちよつと待つっすー！」

そしてユリ達もユリ達で勝算はあった。それはエントマへ頼り切りの、姉としては不甲斐ない計画ではあったが——上手く行けば貞操を散らせることなく勝負が決する、何よりも望ましい作戦だ。

いくつか保険はかけているものの、できれば最初の十分で勝負が決まって欲しい。そんな願いを込めながらエントマへ声をかけるユリであったが、ルプスレギナから待ったの声がかかる。その理由は姉としての意地と、指輪への興味であった。

妹へ任せつきりにする申し訳なさと、不可思議なマジックアイテムへの興味。ついでに言う『ナザリックの方針転換』で少し溜まりがちな鬱憤の解放だ。ルプスレギナにとって人間とは玩具であり、虐めて楽しむものである。

とはいえ至高の存在にそれを否定されたならば、従う以外の選択肢はない。しかし悪性を持って生まれた彼女からすれば、口には出さずともストレスが溜まるのはどうしようもない。

しかし今であれば——プレイの一環ということ嗜虐心を満足させることができる、そう思い至ったのだ。わざわざ貸し出してきたもので屈服させることができれば、尚更にその滑稽さを嗤えろと。

「コレ……試してみるつす。エンちゃんの出番はないつすよ!」

「ちよつと、ルプス? 本気で言ってるの?」

「私はあ、二番目でもいいですけどお……」

「どのみちエンちゃんが無理だったら厳しいつすからね。まずは姉から様子見するの
が、年長者の義務つす」

「じゃ、じゃあボクが……」

「妹のお願いを聞くのが姉の務めつすよ?」

「——もう。ならルプス……頑張って」

「屁理屈をこねる妹に苦笑しながら、ベッド横の椅子に座り込むユリ。エントマも同様に続き、ベッドの上にはルプスレギナとティアだけが取り残された。そしてその状況に——ティアは内心でガッツポーズを取った。それは彼女にとつて、もつとも与しにくいと感じたメイドがルプスレギナだったからだ。

それが——最初の十分で消えるのだから。

「うおお……ほんとに生えたつす」

「……」

「そんじゃ……うひひ、精々いい声で泣き喚くつす……」

処女であり、そして今は童貞にもなつたルプスレギナ。前戯もなしに挿入へ向かつたのは、初体験故の未熟さからか——あるいは苦痛を与えることを目的としているからか。とは言え既に準備万端であつたティアからすれば、特に問題はない。

そう……問題があるとすれば、むしろルプスレギナの方だろう。性的な知識をあまり持ち合わせず、そして勿論のこと陰茎が生えたことなど一度もない彼女。男性器が女性を喘がせるモノとの認識はあつたが——逆もまた然りであると失念していたのだ。

「ん……挿入つた………っ!?! う、あ……」

「ん。もつと奥まで」

「あ、ちよ、待つ——!」

ティアの膣内の半分ほどまで挿入したルプスレギナは、その未知の快感に思わず腰を引いた。しかし網にかかった獲物を逃す筈もなく、ティアは両足で器用に彼女の腰を掴み、自身の奥まで引き挿れた。

「あつ、やつ……は——！」

「……まず一発」

女でありながら女を味わうという未知の領域。ルプスレギナは腰の根本についた尻尾をピンと立たせ、次の瞬間には果てていた。ティアは既に足の力を抜いていたが、それでもメイドは自ら腰を押し付ける。もつと奥に入りたいと、もつと注ぎ込みたいとも言おうように。

ティアはそんな彼女の背を優しく撫で、抱きしめる。ビクンビクンと体を震わせ、長い射精の快感に酔いしれるルプスレギナの顔を優しく引き寄せ、キスをする。帽子がずれ犬耳が露わになり、尻尾も見えてしまつてはいるが——ティアは気にも止めず唇を貪り続けた。

既に体験済みなのだ。女性は——突然生えた男性器の快感に抗うことが出来ない。性的な刺激はクリトリスから始まるのが女性というものだが、しかし実のところ男性器ほどの快感を得ることはできない。

女性のオーガズムで得られる快感は実に男性の数十倍と言われるが、そもそも快感の

質そのものが違うのだ。頭痛と肩こりを比べるような、そんな頓珍漢な比較である。故に女性が射精の快感を知ると癖になり、男性が女性のオーガズムを知れば中毒にもなる。

それが予想できていたティアは、鍛えた舌技でルプスレギナの口内を蹂躪し尽くした。求めあうように唾液を交換し、ふいに尖った犬歯がティアの舌を傷つけ、二人の口内に血の味が交じる。しかしそれすらも興奮材料となつたのか、膣内で柔らかくなつていた陰茎が再び硬さを取り戻していく。

「はあっ、ん、ちゅ——んむっ」

「…はぶ、んっ…：…腰を、ね。乱暴に振つて…：…おちんちんを出し入れしたら——すごく気持ち良いよ」

「はっ、ぶ、う…：…うあっ…：…」

唇を貪り合い、唾液の橋がかかり——ティアはルプスレギナの耳元でそつと囁いた。その肉棒は雌穴を乱暴に突くものだと…：…ゴシゴシと擦れば、さらなる快感を得られるのだと。欲望で湯だった頭にするりと入り込んだその言葉は、即座に腰の動きへと変換された。

ルプスレギナが激しく腰を動かす度に、褐色の艶めかしい胸がぶるんと揺れる。乱暴に覆いかぶさられたティアは、それをしゃぶるように口に含んだ。女性の扱いには手慣

れている彼女だ。転がすように舌を動かし、性感帯を煽る。元より名器を生まれ持ったティアは、加えて暗殺技術の一環として伽にも長けていた。秘所を擦り続ける陰茎を器用に締め付け、射精を促す。

二度目の射精は、最初の挿入から五分後のことだった。荒い息を吐きながら叩きつけるように腰を打ちつけ、既に許容量を超えた膣へ精液を注ぎ込むルプスレギナ。射精に伴いピンと張った足が柔らかさを取り戻し、ようやく腰を引いた時——ティアの割れ目から噴水のように白い液体が溢れ出す。

「はっ、は——あ、しようら……勝負らっひや……っす……」

「……お掃除してあげる」

「んうっ——ひ、あう……」

愛液と精液で汚れた陰茎を、躊躇うことなく口に含むティア。弱いところを熟知しているように、舌が艶かしく動き回る。十数秒も経った頃、ルプスレギナの股ぐらには再度立派な剛直がそびえ立っていた。

「……だ、だめっす……！ そっちからひやつ、な、にやにもしないって、やく、そく……」

「……」

残された時間は後一分ほどだ。できればそれまでに一人脱落させておきたいと考えたティアは、口淫を拒否する——口だけだが——ルプスレギナに従い、厚ぼったい唇を

陰莖全体に這わせながら、名残惜しそうに引き抜いた。

びくりと身を震わせながら、切なそうにその様子を見ているルプスレギナ。本音は、数センチ先のすぼまった唇へ『自身』を突き入れたいのだろう。存分に出し入れしたいのだろう。しかし僅かに残った理性がそれを拒否しているのだ。

——そんな彼女を愛おしそうに眺めつつ、ティアは最後の一押しを決行する。拳を握って情欲に耐えるルプスレギナの前に跪き、瞳を潤ませ、蕩けた表情で口を開けた。覗き見える舌が淫らに動き、陰莖の表面から数ミリを這う。確かに触れてはいないため、ルー尔的にはセーフであつたが——しかしラストストローには充分過ぎた。

口元からよだれを垂らし、理性が消え去つたルプスレギナの剛直が、ティアの口内を乱暴に犯す。十数回ほどのピストンの最後、肉棒は完全に喉奥へ飲み込まれ——壊れた蛇口のように精液を吐き出した。

「ふーっ！ ふーっ！ …はう、はふう……気持ちいいっす……！」

「んっ、じゆるっ、はむっ……ぷはっ……これで三回。私の勝ち」

「——へっ？ あっ……」

「ぐちそうさま」

「あー……うー……お粗末様です！ ——ぎゃんっ!？」

「ル・プ・ス？」

「あだだっ！ い、いやその……だって気持ちよかったんすもん……そうだ、あつちのエンちゃんでもぜひ試してみたいっす——ぎゃわんっ！」

拳骨を二度も落とされたルプスレギナは、涙目でベッドの上から退散した。『ティアをイかせられなかった』だけならばユリもこれほどに怒りはしなかったのだろうが、結果としては『負けようがないはずの十分間』での敗北だ。駄犬の躰としては大変に適当であつた。

「次はどつち？」

「では僭越ながらあ、わたくし私 エントマが務めさせていただきますわあ」

「ばっちこい」

褐色元気娘の後は、可愛いロリ娘かと鼻息を荒くするティア。とはいえ本当に楽しめるのは二十分後だ。まずはあちらの責めを堪えなければならぬと、興奮を鎮める。

先程の醜態を見て再度指輪を使用する馬鹿はいないだろう。つまりあと二回戦は攻め手がなく、ただ耐え抜くのみだ。しかし幼子に己をどうにかするテクニクなどないだろうと、彼女はさして脅威を覚えていなかった。

そんな彼女の前に立ったエントマのスカートから零れ落ちたのは……うごうごと動く、男性器を模したナニカだつた。有り体に言えば、どこかの聖杯戦争に出てきそうなタイプの虫である。

「……」

「ではあ、いきますねえ」

「…それは、なに？」

「淫虫ですう」

「…認めるのは『道具』まで。自分以外の生命体を入れたら、一対三ですらなくなる」

「大丈夫う。私の体を構成する一体として連れてきてるからあ。人狼のルプス姉様も大丈夫だったんだからあ、蜘蛛人だって差別なんか……しないでしょうう？」

「………わかった」

エグいもの。エロいもの。痛いこと。忍としてあらゆる苦痛に耐える訓練をしたティアであれば、この程度はまだ許容範囲であった。少なくとも、もう少し我慢すれば美女と美少女三人の処女をいただけるのだ。ルプスレギナの陰茎より二回りも小さい虫の陵辱など、耐えてみせると——そう決意して、背けていた顔をあげる。

——瞬間、ボタリボタリと粘性を含んだ音が何度も響いた。

それはエントトマのスカートから追加された、十数匹の淫虫の音。獲物の秘所へ向かう虫達の這った後には、強力な媚薬成分が含まれた体液が滲んでいる。それでもティアは歯を食いしばりながら——雄々しく吠えた。

「淫虫なんか絶対負けないっ！」

うーん、いまどこかで誰かが即堕ち二コマをキメた気がする……気のせいかな？ まあ世界には喜びも溢れてるし悲しみも溢れてるし、即堕ちだつて溢れてる。きつとその内の一つが変な電波を伝つて僕に流れ込んできたとかだろう。今はそんなことより、蕩けた顔でチンポを舐めるレイナースちゃんに集中すべきだ。

「んう、じゆる、ちゆ……んぐつ?! んぶつ、んつ、んつ——はあ、あつ……」

「ふう……なんかめつちや上手くなつてないかい？ もしかして良い人でもできた？ それなら無理にこういうことしなくても大丈夫だけど。人から奪うのはあんまり好きじゃないし」

「はふう……あ、い、いえ。またエイ様が伺われた時のために、その……張り型で練習な
どを……」

マジで？ えらい好かれようだな……確かに呪いは治したが、だからといってそこま
で夢中になるほどじゃない気もするけど。あれかな、女性は初めての人が特別になるつ
てやつなのかな。まあ男も男でそんな感情がないとは言えないけどさ。

「竜王国での武勇、帝国にも轟いておりますわ。フルーダ様でも治し得なかった私の
呪い……それを解呪してくださいました時点で、絶大な力をお持ちであると理解はしていま
した——それでもまだ過小な評価だったのですね」

「ああ、なるほどそういう……ふーん……？ 王国じゃ大した噂にもなってなかったって
のに、帝国は耳が早いな」

「ふふっ。王国より情報が遅い国家があるとは思えませんわ」

「そりやあ間違いだ。なんだかんだ大きいだけあって、それなりの力はあるよ、あの国。
たださ、手に入れた情報を上に報告しない貴族が沢山いるってだけの話さ」

呆れたような、納得したような顔で頷くレイナスちゃん。唇が唾液やら精液やらで
ぬらぬらとしていて、非常にエロティックである。しかしなるほど、竜王国への援助は
ドラウの穴以外に思惑はなかったが、意外と色んなところでプラスに働いているよう
だ。直接あつてなくとも好感度が上がつてるとか、中々素晴らしいね。そしてレイナ―

スちゃんも意外と現金である。

「…さて、それで用件はなんだい？　僕にできることならなんでも聞くよ。なんとたつてレイナースちゃんの頼みだしね」

「まあ…！　ふふ、ありがとうございます。では早速ですが——数時間前、この皇城へ襲撃者が現れ…：そして私達は為す術もなく制圧されました。初めは彼女達が乗っていたドラゴンこそが脅威だと考えていましたが、問題はそれどころの話ではなく…：…たつた一つの魔法で私達は敗れたのです」

「…へえ。ちなみにどんな容姿だったんだい？」

「二人の幼いダークエルフ…：おそらくは双子でしょう。帝国で盛んに取引されている『エルフ奴隷の売買』をやめ、即刻奴隷を解放せよと要求していました。どちらが正しいかと言えば——ええ、あちらに正義はあると思いますが」

「なるほど、なるほど」

胡散臭っ！　絶対エルフの奴隷解放とか興味ないだらあ双子。まあ八本指への襲撃と同じく、善行の一環としてやってるんだらうな。

それで？　レイナースちゃんは僕に何を望むんだい？　死者はいない、怪我人もほんの少しってんなら、あちら側としても穏便に済ませようとはしてるんだらうし…：…奴隷云々に関しては君も肯定してるっほいけど。

…ああ、一応の保険つてことか。確かにあちら側がそれ以上の横暴を通そうとしてきた時、抑止力があると無いじゃ大違いだ。

うーん……どうしたもんかな。『自分以外の別人』としてナザリックへ接するならともかく、『運営』としてはあまり近付きたくない……というより会話をしたくないんだよな。まあでもレイナスちゃんの頼みだし、仕方ないか。

「オーケー。じゃあ案内してくれるかい？」

「はい！ 今は皇帝陛下と交渉をしている最中ですよ……おそらく割り込んでも問題はないかと」

「『皇帝の選択肢を増やす』ってことね」

そういやフルーダお爺ちゃんはなにをしてるんだらう？ 部屋の中に入ったら、マーレちゃんのおみ足をペロペロしてたなんてことになったらどうしよう。え？ ああ、交渉そつちのけになりそうだから四騎士の三人が見張ってるのか。まあその気になれば障害にもならなさそうだけど……取り敢えずまだ理性は保ってるのね。

さてさて、部屋の前についたが——もちろん見張りが何人もいる。通ろうとするレイナスちゃんを止めようと奮闘しているが、実力的にも権力的にも難しいようで、ちよつと涙目になっている彼らが少し哀れである。がんばえー、みはきゅあー……あ、諦めた。

「失礼いたします、皇帝陛下」

「…誰も入るなと命じておいた筈だが。四騎士の地位にこだわる必要もなくなって、従順さも失ったか？ —— 答えろレイナーズ」

「そのようなことは。先程申し上げた『どうにかする術』がこちらの御方——ウンⅡエイ様でございますわ。あとは陛下次第かと」

「——やあジル！ 久しぶり！ 元氣だったかい？」

とりま、一発からかつてみよう。しかしなんともまあ、イケメンである。今の僕なら負けていないが、アバターじゃなければ横に並びたくないレベルだ。さあさあ、どう出るのかな？ —— つてジル君が反応する前にアウラちゃんとマーレちゃんが片膝をついた。なにごと？

「ウンⅡエイ様。あたしはギルド『アインズ・ウール・ゴウン』所属、階層守護者『アウラ・ベラ・フィオーラ』と申します」

「お、同じく……『マーレ・ベロ・フィオーレ』です」

「我が主、至高の御方がお会いしたいと申しております。どうか我等が拠点『ナザリツク』へ招待させていただきませんか？」

…！ 片膝をついたマーレちゃんのスカートの奥が見えそう……もうちよい視線を下げれば——つて何を考えてるんだ僕は。あの奥には穴じゃなくて棒があるのみだ。

どれだけ可愛くとも男の娘はホモって武蔵さんも言ってたじゃないか……ってそうでもなくて、だ。どう答えたものか……などと逡巡していたら、先にジル君が言葉を発した。

「やあ、エイ。こちらこそ久しぶりじゃないか……君も元気だったかい？」

「うえっ……し、知り合いだったの……？ や、やば……」

「ど、どうしようお姉ちゃん……」

おお……機を見るに敏。こちらの冗談に乗っかって友人の振りをするジル君。あわよくばそのまま友人にしてしまおうと言った魂胆だろうか。クレマンティーヌとは役者が違うなあ。

実力を傘にきて交渉していた二人が狼狽えるのを、横目で楽しそうに見てる。性格悪そう。けどなあ……将来ハゲるかもしれないとなれば、僕は彼に優しくせざるを得ない。だって可哀相だし。

「元気も元気、大元気さ。この前アルシエちゃんが虐められたって聞いたけど、僕は全然気にしてないぜ」

「ふむ……フルト家の娘と知り合いだったのか。今は魔法省で仕事をしていた筈だな。わかった、便宜を図っておこう」

「サンキュー、ジル」

「なに、気にするなエイ」

どこまでこの茶番は続けるべきなのだろうか？ まあ実は友人じゃないよって二人に暴露しても、それはそれでユーモアな感じに持ってくんだろう。まったく、できる男は違うぜ。ただしハゲ（可能性）である。この一言だけで許せちゃうんだから、実はハゲってすごいんじゃないか？

「さて、と……アウラちゃんにマーレちゃん」

「はっ、はい！」

「悪いけど招待は断らせてもらおうよ。モモンガさん……今はアインズさんだっけ？ そう、あの人が僕に会えば絶対に聞くことが一つある。僕は『運営』としてそれに答える義務があるけれど、それをアインズさんの耳に入れるのは時期尚早だと思うんだよね。それがどっちにとっても無難……じゃないかな、うん」

「……あの、アインズ様のことをご存知なんですか？」

「そりゃあ有名なだしね。ところで、アウラちゃん達は僕のことをどう聞いてるんだい？」

「え、えつと……『ユグドラシル』を創造した神様だと聞いています……僕達にとつての至高の御方のようなものだ」と

「ふうん……？ そりゃまた過大な評価を——いや、違うか」

とにかくナザリツクのシモベ達つて他者を侮りまくりのアナドリストが多いからな。そうでも言つとかないと、どんな無礼を働くか解らない……的な考えでギルマスが盛りまくつたんだろう。どちらかと言うとナーベラルちゃんやらアルベドちゃんへの牽制や対策なのだろうが、アウラちゃん達はみごと鵜呑みにしてしまつたと。

「あ、あの……アインズ様が聞きたいことつて……」

「んー……君らに言うのも大概なだけだなあ。でも会つた以上は——……うん、じゃあこうしようか。一つ質問をするから、その答えによつて僕も言うかどうか決めるよ。ただ、どっちにしてもギルマスへ『それ』を報告するのは禁じるけど。どうする？」

顔を見合せて迷つてゐる二人。正直シリアスな雰囲気は大嫌いなんだけど、こればかりはなあ。僕が名詞として『ウン||エイ』を名乗つてゐるのは、多少なりとも『運営』であり続けたいと思つてゐるからだ。

だからこそ、プレイヤーであるあのギルマスが『Question』を提示したならば、『Answer』を返す義務がある。いわゆる、運営への『Q&A』だ。まあGMロールを無視してゐるあたり、非常に無責任な義務感だけでも。

「……質問を先に聞いてもいいですか？」

「オーケー。『アウラ・ベラ・フィオーラ』『マーレ・ペロ・フィオーレ』……君達はギルドマスターである『アインズ・ウール・ゴウン』と、創造主である『ぶくぶく茶釜』――

「どちらがより大切だい？」

「なっ——！」

「……っ！」

揃って体をビクリと震わせる双子ちゃん。まあ意地が悪い質問だということとは理解しているんだが、いかんせん先にこつちを聞いとかないと別の問題が起きちゃうし。ぶつちやけると、NPCは創造主を優先するんじゃないかとは思ってるんだけど——さて、いったいどつちなのかな。

「な、なんでそんなこと……っ！」

「質問に対する質問はマナー違反だぜ」

「……、このっ……！ だいたいなんでぶくぶく茶釜様のことを——」

「お、お姉ちゃん！」

「あつ、うぐ……！ し、失礼、しました」

「別にその辺りは気にしなくていいけど。普段通りでお好きにどうぞ。そもそもギルマスが言ってる僕の人物像も、かなり誇張されてるしね。プロジェクト初期から居た訳でもないし、『創った』んじゃないかって『管理してた』が正しいかな？ ——そう、絶対の神様なんかじゃあない。もしそうなら、ユグドラシルはまだ存続してる」

「……？」

僕が紛れ込んだところで、十二年という寿命はなにも変化がなかった。手を抜いていたわけでもないし、なんなら睡眠時間を馬鹿みたいに削ってまでイベントを計画したことだってあった。それでも結局、僕たちが無能だったせいでサービス終了となったのは、疑いようなない事実である。神様なんて言われたら逆に貶されてるのかと勘ぐっちゃうね。

「——対等さ。僕達は世界の法則を管理して、プレイヤーに提供してた。でもそれは上位者からの施しじゃなくて、プレイヤー側から対価を頂いて……それで僕達の生活も成り立ってた。僕達がいなきや彼等は存在できなかったけど、彼等がいなきや僕達も存続できなかった。だから……謙^{へりくだ}る必要はまったくない」

「……じゃあ聞くけど！ さっきの質問はなんなのよ！」

「そこに関しちや言う必要を感じないね。ギルマスを選んで、茶釜様……んんっ、ぶくぶく茶釜を選んで、それは君らを選んだことだ。どっちが悪いってこともないさ」

「いま『様』って言わなかった？」

「言っていないけど」

「言ったわよ」

「言っていない」

「言った！」

「言った！」

「言つてない！」

「言つたつて言つてるじゃないか！」

「言つてないわよ！ ……ん？ あれ？」

「じゃあ問題ないな、うん。さつさと質問に答えなよ、アウラ・ベラ・フィオーラ」

危ない危ない。ぶくぶく茶釜様こと『風海久美（※エロゲ声優名）』様のファンだったつてことは知られないようにしなければ——いやまあバレたところで大した支障はないが、なんかちよつとね。というか結構な有名声優だし、運営の中にも数人ほどファンはいた。ロリ声ばかり務めるもんだから、僕にとつても大変お世話になった人物である。

「う、うう……」

「…あう……」

「別に悩む必要はないんじゃないか？ 本音で言やいい。そもそも正解なんてないし、僕がどつちの答えでどう答えるかを君達は知らないわけで。わざわざ『君達にとつての不正解』を暴露するほど悪趣味でもないし。さ、返答は？」

散々悩みぬいた彼女達は——最終的にギルマスを選んだ。正直とても意外だったけれど、『遠くの親戚より近くの他人』みたいな感覚なのかな？ まあ茶釜様がいればまた

違う答えになりそうな、揺蕩う感情ではありそうだ。単純にギルマスを選んだ方が聞きたいことを聞けるという思惑もあったのかもしれない。別に嘘をつくなどは言っていないし、見知らぬ僕に本音を吐露する必要性もないしね。

「——そうかい。なら……大丈夫かな」

「……っ！」

「……ギルマスのことは大切かい？」

「あ、当たり前でしょ？ そんなの聞かれるまでもないわよ」

「自分がどれだけ傷ついても、シヨックを受けても、ご主人様を優先できる？」

「で、できます……それが僕達の存在理由ですから」

「——そう。なら運営として断言させてもらおう。ギルド『アインズ・ウール・ゴウン』メンバー……『至高の四十一人』は、ギルドマスター『モモンガ』を除いて誰も居ない。これからこの世界に来ることもない——未来永劫、君達が創造主と再会することは叶わない」

——ギルマスが必ず僕に問い掛けてくるであろう質問。けれど、きつと耳にしたくない真実。

あ………やつぱ泣くよね。正直こういうことを伝えるのは、アルベドちゃんやデミデミ……最悪パンドラ辺りが適当だろうし、精神年齢も幼気な彼女達に伝えるべきではな

かったような気もする。とはいえNPC達で共有すべきことでもあると思うし……あー、こういうしがらみが嫌だからリアルと決別したつてのに、結局ついてまわるのか。自分以外の他人と接する以上、当然っっちゃ当然なんかね。

「…なんで僕がこれを伝えるかわかる？ それと“時期尚早”つて言った意味も——なあ、泣くなよ二人共。泣いたつて何も解決しないし、僕がこれから言うことを実践しないとギルマスまで消えちゃうぜ」

「……」

「……っ！」

「今あのギルマスが支配者として君臨してる理由は——まあ君達のためだ。正しく言うなら、君達を創った仲間を想うからこそ、かな。仲間への執着が彼の原動力と言ってもいい。だからこそ、もう二度と会えないと知った時どうなるかは僕にもわからない」

自暴自棄になるのか、それともNPC達への責任感が勝つのか……どっちにしても、生きる気力がだだ下がるのは確かだろう。それがアンデッドになって変容した精神にどんな変化をもたらすのか、僕にだってわからない。

「だから君達が頑張らなきゃいけないわけだ」

「どういう、こと……？」

「メンバーによつては十年以上も付き合つてきて、育くまれた友情。それを今度は君ら

が育てろってことさ。ギルマスにとつて君達こそが、なによりも大事になれば……真実を知つても問題ないだろ？　…ついでにそれは、主とシモベの関係のままじゃ難しいってことも理解しておいてほしいね」

「そ、そんなの……！」

「できるわけがないって？　親への不義理から？　それとも主人への不敬から？　そんなのどっちも君らの言い訳だろ。状況を知れば、ギルメン達は間違いなくそれを君達に望む」

「…っ、なんであんたにそんなこと……！」

『運営』だからだよ。それ以上に——まあ、『アインズ・ウール・ゴウン』のファンだからってのもある」

…さて、これ以上言うことはない。後はもうNPC次第ってとこだろうし、最低限の義理は果たしたと言える。そもそも絶対に言う必要があつたって訳でもないんだよね。アルベドちゃんやらシャルティアちゃんが妻の座を狙っている以上、何十年後かには『NPCとギルメンの価値』が逆転してゐる可能性は大いにあるし。

「…あ。ジル、レイナスちゃん、さっきの問答は他言無用で頼むね」

「ああ、わかっているとも。というより、そもそも何のことを言っているのかまったく理解できなかつたからな」

「まあそうだよね……それじゃ、後は……というか僕なりに来たんだっけ？ ……ああ、エルフの奴隷云々だっけか」

正直なところ、目の前で酷い目にあつてたりしない限りはそこまで気にしないけどね。救おうとすれば大抵はできちゃうからこそ、線引きは必要だ。関係ない人間を気にしてたらキリがないし、それを冷酷だとも思わない。

倫理だの人権だのと言う人達も、貯金や給料をはたいてまで後進国へ支援したりしないよね。自分が質素な暮らしをすることで、遠い国の貧しい子どもたちが救われると知っていても、そこまでではない。人間なんてそんなもんだと思うし、それでいいとも思う。

「ま、若干僕のせいでもあるみたいだし……それ関係で掛かる費用は僕が払うよ。概算が出たら教えてくれる？」

「……いいのか？ かなりの金額になるが」

「気にしないでくれよ。これから君に待ち受ける過酷な運命ハゲを思えばこそ、僕は惜しみなく手を差し伸べるのさ」

「——それは神からの警告と受け取るべきか？」

「うん。いざれ髪から警告が出ると思うよ。兆しを忘れずにね……人はそれを、いつも気付かない “ふり” をする。勘違いだと信じるんだ——予兆は必ずあるのに。 “鏡は

嘘をつかない”。ジル、君にこの言葉を送るよ」

「…肝に命じよう」

肝じゃなくて頭皮に命じておくべきだと思うけど……まあいいか。双子ちゃんたちは——まだ俯いたままか。うーん……なんか罪悪感。仕方ない、今の彼女たちに効くかはわからんが、茶釜様グッズでもくれてやろう。ついでに動画でも見せたげようかな？

ピンクの肉棒がうねうねと戦闘してるところって……元氣出るのかな。

「アウラちゃん、マーレちゃん。ちよつとこつちにおいで」

「な、なによ……」

懐からピンクの肉棒を模したぬいぐるみを取り出し、二人に一つずつ渡す。実に卑猥だ。目を輝かせた幼女達がピンクの肉棒を大事そうに抱きしめているのは、なんとも言えないエロさがある。ジルとレイナスちゃんがドン引いているが、これが彼女達の創造主なんだから仕方ないだろう。

その後は『ナザリック大侵攻』の動画を全員で鑑賞し、僕はその間アウラちゃんを膝上に乗せ、尻の感触を堪能した。常軌を逸した戦闘風景にジルが唸り、レイナスちゃんが乾いた笑いを零していたのがちよつと面白かった。まあ期待した通りの反応だけでも。

茶釜様のタンクとしての活躍っぷりや、公式チートと言われたギルマスの虐殺コンボを見て大興奮の双子ちゃんたち。まあ元気が出たようでよかった……ちよいちよいお触りできて、僕の息子も元気になったが。

——ん？ 誰だ？ この反応は……カルカちゃんがお呼びのようだ。はて、約束の日はまだ少し先だった筈だけど……まあいいや。褐色ロリエルフのお尻でいきり勃ったチンポを、ロイヤルマンコで鎮めてもらうとするか。

じゃあね、双子ちゃん達。さっきの事はちゃんと皆に伝えて、全員がギルマスの大切になれるようにね。それがたぶん……誰にとつても幸せなことだろうし。

10話

ナザリック地下大墳墓——執務室。この部屋の使用率がもつとも高い、アインズ・ウール・ゴウン最高峰の頭脳を誇るNPC『アルベド』。部屋の扉を開け、椅子に座り、ほうと一息をつくその佇まい一つとっても『優雅』そのものだ。

しかしその雰囲気も長くは続かず、次第に口元が歪に曲がっていく。腹を押さえてくつくつと嗤い、机の表面を掻き毟りながら、息も絶え絶えに狂笑は続く。なぜ彼女がこれほどに喜んでいるかと言えば——それは先程、主に隠れて行われた『守護者会議』で語られた内容に起因する。

彼女にとつては、まさに慶賀の至り。『至高の存在』が現存せず、そして未来においても帰還しないという事実が、彼女を喜びに打ち震わせているのだ。

「くふつ、くふふつ——アッ……ハハハ！ アインズ様が『絶対』であると仰った『うんえい』が！ 奴等の帰還を否定した！ 断言した！ ならばもう無駄な心配をする必要もない……くふつ、アインズ様のお心が乱れることもない。それに、ふふ……明らかに私達を『鼻屑』しているじゃない？ なんなのかしら、何に由来する感情なのかしら？ アインズ様の御威光のおかげなのか、それとも——いえ、今は考えても意味はないわ

ね」

ただただ創造主達の不明を喜び、祝うアルベド。彼女はNPCの中で唯一『至高の存在』を憎む☒であり、搜索部隊を装った『抹殺部隊』まで編成するほどに異端なシモベである。とはいえ運営が創造主達の帰還は有り得ないと断言した以上、その部隊も彼女にとっては既に無用の長物だ。戦力のほとんどを撤収させ、上辺を取り繕う程度にすべきかと考えているほどに。

アウラとマーレから語られた真実に、守護者達は揺れに揺れた。真偽に揺れる☒、嘘に違いないと激高する☒、アインズに報告すべきだと提言する☒。しかしその全てを抑え、運営の言う通り『自分達が主の大切になるべき』だとアルベドは主張した。

その考えは不敬だと罵る☒達へ、彼女は伝家の宝刀をきった。『アインズ様がお隠れになってもいいの?』と。その言葉はナザリックのシモベにとって何よりの毒であり、恐怖だ。アインズが『絶対の存在』だと断じた『うんえい』の言葉を利用し、アルベドは守護者達を懐柔していった。

そもその話、彼女の言葉に嘘は無い。主へ不用意に真実を告げる危険性は言わずもがな、アインズ・ウール・ゴウンを永遠としたいならば、忠誠を捧げ続けたいと言うならば、どのみち大切に思われなければいずれ見限られる。

彼女の歪な忠誠も、仲間たちへの裏切りの感情も、この件に関しては大した意味を持

たない。むしろ至高の存在の不帰が確約された以上、無用の軋轢が無くなつたと言えるだろう。後は正妻戦争を勝ち抜くだけの、シンプルな構図になつたとも言える。

「指輪も手に入れたことだし……ふふ、順風満帆ね。後はシャルティアの邪魔が入らないタイミングでアインズ様としつぽり……！ く、くふう……！」

幸せそうにくるくると回るアルベド。フリルの付いたスカートがひらひらと揺れ、太ももだけが露わになる扇情的な衣装がエロスを醸し出す。胸元がこれでもかとはだけた上半身は、豊かな双丘が零れ落ちそうなほど震えていた。

——そんな光景を見ながら、机の上で堂々と自慰に耽る変態が一人。ご存知、元ユグドラシル管理者『ウンⅡエイ』である。絶世の美女が露出の激しい衣装で踊っているのだから、性欲を刺激されるのは当然とも言えるだろう。完全に自身を不可知にできるからこそ、世界一自由なオナニーである。

とはいえ、これがオナニーであるかは難しいところだ。陰茎をいきり立たせ、右手を上下運動させているのは普通だが——手に握るものはオナホではなく、レンズの入っていない虫眼鏡を思わせる何かだ。

その穴に剛直を出し入れしているものの、穴に挿れた先から陰茎が消失しているのは——つまり、そういうことである。よくある転移オナホールと言うべきだろうか。《転移門／ゲート》を利用したりアルオナホール——ひみつ道具風に名付けるならば『どこ

でも肉オナホ』とでも称すべきマジックアイテム。

転移先は任意で選択可能であり、現在はドラウディロンの膣へと繋がっていた。ちなみに彼女は現在、会議の真つ最中である。喘ぎを我慢しながら必死に問答を繰り返し、小刻みに絶頂しながらエイへの怨嗟を心の中でぶちまけていた。

ロリ女王の幼膣を使用し、絶世の美女で見抜きする——これほど贅沢なおナニーがこの世に存在するだろうか。抜かすの三連発でドラウディロンの小さな子宮が満たされ、ようやく一息ついたエイ。愛液で泡立った秘裂から剛直をズルリと抜き、ズポンを上げながら不可知化を解いた。

「ふふ、くふつ——…っ!? なっ…!」

「あ、お邪魔してます」

「…! ——— 勘違いでしたら失礼…:…もしや『ウン||エイ』様であらせられますか?」

「…秒でそこに行き着くって、どんな思考速度なんだ? そりやあまあ、ナザリックのセキユリティを抜いてここまで来てる時点で想像はつくにしても…:…ま、僕には関係ないからいいけどさ。ギルマスの苦労もわかるねこりや」

「…『ウン||エイ』様におかれましては——」

「アウラちゃんから聞いてない? 別に謙る必要はないし、そもそもそんな大した人物でもないよ。そのかわり、僕は誰にも謙らない。その辺の乞食でも、君でも、あるいは

君を創ったタバラ・スマラグディナであつても同じように接するから」

「かしこまり——いえ、わかつたわ」

「…形だけでも怒つた方がいいんじゃない？ 『我が創造主を乞食と比するか！』みたい
な」

「あなたはアインズ・ウール・ゴウンのことを随分把握してゐるんでしょう？ 取り繕う必要は感じないわね」

「んー……見透かされてるなあ……ま、能力の方はともかくオツムの方はどう足掻いても敵わないんでね。変な比喩表現とか使われても気付かない可能性があるから、解りやすく丁寧な会話で頼むよ」

胸元やスリットに向けられるだらしない視線に、アルベドはエイの本質を早々に看破したのでらう。上辺だけの敬意は放棄し、対等に向き合つた。彼女の瞳には僅かながらの警戒が浮かんでいたが、ナザリックの利益にせんがための友好的な振る舞いは忘れていない。アインズからもたらされた情報——『そもそも勝ち負けを競うような存在ではない』という言葉は、彼女もしかと理解しているのだ。

「それで、なんの用かしら？ アインズ様と顔を合わせるはずつと先だと——さつき
そう聞いたけれど」

「そうだね。少なくとも誰かしらがギルマスと結婚するくらいにはならないと、危なっ

かしくてさ。ちなみに運営である僕の中から見て、もつとも正妻に近いのは……

「……！　ち、近いのは？」

「……聞きたい？」

「聞きたい！」

「オーケー。じゃあおっぱい一揉みで一文字明かそうじゃないか」

「殺されたいの？」

「じゃあお尻……あ、ウソウソ。そのキツイ目やめて。美女の怒り顔って怖いぜ……ほら、ちよつとあわよくばと思っただけだからさ。君のアイン——モモンガさんへの執着は誰より知ってるとも」

「……なら早く本題に入っただけかしら？　私も暇じゃないのよね」

「ああ、そうだった。いやあ、僕も別に来たかったわけじゃないんだけど……ティアちゃんが指輪を奪われたって聞いてさ。たぶん君かシャルティアちゃんの指示だろうなっと思ってただけど、どう？」

「……っ！」

エイの言葉に、ぎくりと体を揺らすアルベド。彼女も『マジカル☆イウエン』と『ウンIIエイ』に関係がある可能性は視野に入れていたが、嫌な予感が当たったとも言おうように、背中から冷や汗を垂らす。

「…正当な勝負の結果よ」

「ああ、別にそれはいいんだよ。あんな指輪いくらでもあるし。問題は用途に関してなだけでよ…もしかしてギルマスに使うとしてる？」

「——ええ。この指輪さえあれば、モモンガ様に私の初めてを捧げることが…」

「あー……それさ、『女性にチンコを生やす指輪』であって、男にとっては意味ないんだけど。じゃないと二本生えて気持ち悪いことになっちゃうし」

「…っ!? そ、そんな…」

「それを伝えに来ただけだから。じゃね」

「ま、待ちなさ……待って! ……貴方は神にも等しい存在なんでしょう? だったらモモンガ様にも効果のあるマジックアイテムを作ることできるわよね…! そうよね?」

「んー……そうだね。作れるし、それ以前に持ってるし」

「なら! 是非! 譲っていただけませんか! 私にできることなら何でもするわ!」

「じゃあいつちよ一揉み」

「それはイヤ」

「…ワガママだなあ。まあ無理強いはしないけど……対価なしに何かを得ようとするの

はよろしくないぜ。そういう奴は、大抵どつかでツケが回ってくるもんさ」

エイは『女性に優しい男』ではなく、『やれる可能性がある女性に優しい男』である。指一本すら触れそうにないアルベドへは、大した配慮も見せない。アインズ・ウール・ゴウンという括りが無ければ、積極的に話そうともしないだろう。

「…貴方は女性と交わるのが好きなんでしょう？ プレアデスのことも知っているようだし……ええ。あの娘達なら、私が命令すれば抱けるわよ」

「そりゃあ君からの対価とは言い難いね。ついでに言うと、事務的なセックスは嫌いなんだ」

「…あくまで私が体を差し出すべきだと？」

「それも違うかな。内心で嫌がられてるセックスはもつと嫌いだし」
「…ならどうしろと言うの」

苛立たしげに爪を噛むアルベドに対し、にこやかに笑い、右手で肩を抱きつつなだめすかすエイ。眉間にシワを寄せる彼女の耳元に顔を寄せ、いくつかの案を提示する。それは双方にとって利がある、かくも素晴らしき提案だ。

エイの言を聞くに連れ、アルベドの表情からは次第に険しさが消えていく。そして最後には手を取り合い、固い握手を交わしていた。そのまま自然に尻を触ろうとしたエイの右手をツネりつつ、アルベドはにんまりと口元を歪めた。

「そんじや、よろしく頼むよ。くれぐれもギルマスにはバレないようにね」
「ええ、まかせてちょうだい」

いくつかの問答の後、アルベドの手の平には鈍く輝く指輪が握られていた。そして机の上には十数個に渡る別の指輪も。『リング・オブ・アイنز・ウール・ゴウン』を嵌めてもいないというのに、当然のように転移魔法で部屋を後にするエイを見送り、アルベドは天を仰ぎながらガッツポーズを決めるのであった。

ナザリツク地下大墳墓が支配者『アイنز・ウール・ゴウン』の貞操や如何に――



さて、カルカちゃんと呼ばれて遙々聖王国までやってきた訳だが……何故かレメデイオスちゃんと決闘をすることと相成った。レメデイオスちゃんてほんと頭レメデイオ

ス。まあ剣で語るタイプの人だつてのは解つてたし、この展開も可能性としてなくはないとも思つてたけどさ。

しかし……なんというかアレだな。僕にとつてリアルになつた以上、キャラをキャラとしては見ていないんだけど——それにつけても知識にあるよりずっと馬鹿っぽい。カルカちゃんや妹が存命かつ安全であれば、実はこんな感じなのかね。まあ実際にずつと険しい性格だつたのなら、彼女を信望する☒も少なかつたらうし、平常時はきつと問題ない人なんだろう。

追い詰められると下を虐めちゃう人つて考えると、若干なんとも言えない感があるけど……まあ可愛いからいいか。ちよつとムチムチ気味の二の腕がエロい。贅肉じやなくて筋肉なんだろうけど、ムキムキの女の子でも触つたら意外と柔らかいもんだ。むしろ良質な筋肉であれば、男女関係なく柔らかいってどつかの格闘漫画で言つてた。

「…」

「どうした、臆したか？ であれば、そんな軟弱な男にカルカ様を任せるとはできんな」

「いやさ、いきなり呼び出されて決闘だなんだつてちよつと意味不明だと思わない？」

「思わん。カルカ様に相応しい男かどうかを見極める必要があるからな」

「いや、そこだよそこ。なんで上から目線なのさ。例えば君がいきなり誰かに呼び出さ

れてさ、『お前がカルカ様の側近に相応しいかテストしてやろう!』とか言われたらどう思う?」

「たたつ斬る!」

「だろ? じゃあ今の僕の気持ちも解ってほしいんだけど」

「むっ……まあ、そうだな。少し待て」

あ、意外と素直。しかし少し待てつてどういふことだ……レメディオスちゃんがテクテクと向かった先には、観戦しているカルカちゃんとケラルトちゃんがいる。姉の踵返しになにやら焦っている妹ちゃん……というか国の重鎮たちが護衛もなしに何やってんだろ。まあ彼女達より強い護衛なんていないだろうから、意味ないのかもしれないけどさ。

ふむふむ……どうやらレメディオスちゃんが僕に挑んできたのは彼女の差し金だったようだ。そういや腹黒だのなんだの言われてる娘だったっけ? 姉を介して僕を探ろうとは、中々にいい根性である。しかしレメディオスちゃんが馬鹿正直に『アイツの言葉にも一理あるぞ。どうするケラルト』などと聞いているせいで全て台無しだ。アホ可愛いなあ……あ、こつち戻ってきた。

「あ……カルカ様は……えーと、やん……やんとご無き? 身分のお方であり、この馬の骨とも知れぬ輩が近付くのは……ん? どうみても人間の骨格だぞケラルト……」

じゃなかった、とにかく私と戦え！ ウン！エイ！」

「ええ……もうちよつと頑張ろうぜ。そんなんだから皆に嫌われるんだよ？」

「私は嫌われてなどいない！」

「まあそこは置いとこう。とにかく僕の方には戦う理由もなけりや、メリットもないわけだよ」

「むう……少し待て」

また聞きに行っちゃったよ。というか最初からケラルトちゃんが話した方が早くない？ そんなに裏方に拘りたいのだろうか。彼女だつて五位階だか六位階まで使えるんだから、レメデイオスちゃんに比べて弱いってこともないだろうに。あ、戻ってきた。「待たせたな。さつき言っていたお前の『メリット』の話だが……『勝負に負けた方が、勝った方の言うことをなんでもきく』という条件でどうだ。我が聖剣『サファルリシア』にかけて、約束は必ず守る」

「……へえ？」

うーん……つまりアレだな。どっちにしろ僕の実力は見れる。そんでもって、こっちが負けたら『弱き者に資格なし』と。あっちが負けたとしても、僕が約束をたてにしていかかわしい事をしようものなら、やはり『卑しき者に資格なし』と言ったところだろうか。なんて腹黒なことを考えるんだケラルトちゃんは。

「んー……じゃあこつちも条件をつけようか。君と一緒に、ケラルトちゃんも同時にかかってきなよ。一回でも僕に攻撃が触れたら君達の勝ちでいいよ」

「なに？ ……貴様、ふざけているのか？ 私とケラルトを同時に相手取って勝てる□な
ど、亜人の頭にすらいるものか」

「いやいやいや……というか、カルカちゃんに僕の実力とか聞いてないの？ 君の言い方に倣って言うなら、僕に勝てる奴なんかこの世界にはいないと思うけど」

「十位階魔法だの、世界を断つ剣だのというあれか？ ケラルトが言うには……あー……恋はもうろく？ らしい。まあ私も正直なにかの間違いだと思ってるがな」

「恋は盲目、ね。ふうん……生粋の戦士は見ただけで相手の力量が大まかにわかるそうだけど——君から見て僕はどうなんだい？」

「弱いな。それどころか命のやり取りすら経験しているように見えん。戦う□が纏う雰
囲気を、お前は持っていない」

む……レメディオスちゃんの空気が変わった。なんとというか、凜々しい感じだ。なるほど、戦いに臨む時の彼女はこうなるのか……一種のカリスマってやつなのかな？ これなら確かに部下がついていきなくなる気持ちもわかる。

それに戦闘における部分については、きっちり見透かしてきた。彼女の言う通り、僕のは『戦い』でもなければ『命のやり取り』でもない。結果を得るための作業でしかな

いいし、その過程に意味を見出してもいい。戦士の矜持だのなんだのに配慮はしても、理解はしてないし。

「そっかそっか……ま、知ってなお信じずに向かってくるなら、もう言うことはないね。ちやつちやつとかかかってきなよ」

「……っ！ ケラルト！ いくぞ！」

「えっ、いや、ちよ」

まあ強者の雰囲気なんてのはスキルでどうにでもなるもんだ。《威圧Ⅲ》をパッシブスキルとしてセットすると、あからさまにレメディオスちゃんの目が変わった。無理矢理ケラルトちゃんを巻き込んで向かってくる。

——まあ秒殺だけでも。

超位魔法《天軍降臨／パンテオン》で門番のケルヒム・ゲートキーパー智天使を六体召喚し、ケラルトちゃんとの戦意を失わせる。最高位ではないが、それに近いレベルの天使だ。優秀な神官であればあるほど、天使の格は理解できるだろう。

レメディオスちゃんの方へは、特殊エフェクト仕様の《次元断切》をお見舞いする——もちろん当たらないようにだが。地が裂け、天が割れる……というのをガチで効果にした一発だ。実のところ、通常のワールドブレイクは実際に受けてみないと威力がわからない。故にこれは『強さを解りやすく感じてもらうためのワールドブレイク』である。

腰が抜けて、ペタンと座り込むカストデイオ姉妹。それぞれ、それが見たかったんだ。別に無双に興味はないし、調子に乗った相手をびびらせて楽しむ趣味もないが——驚く女の子の顔は可愛いものだ。

「まだやるかい？」

「……い、いや……私達の、負けだ。カルカ様の言っていたことは本当だったんだな……」

「そっか。じゃあ約束も守ってくれるね？」

「へ？ あ、ああ……うむ。負けたのだから当然だ。そうだな？ ケラルト」

「は、はい……コホン。とはいえ、救国の英雄である『ウン||エイ』様がおかしな要求をするとは思えませんが……」

ふーん……そういうこと言っちゃうんだ。ケラルトちゃんって何か勘違いしてない？ 僕は清廉潔白な人間じゃないし、そもそも出会ったばかりの聖王女様とセックスするような人間だぜ。そんなでもって、カルカちゃんもそれを理解してるって……わかんないかな？ 彼女にも真っ先に言ったけど、『英雄として見るな』ってさ。

「じゃあセックスしよっか。秘密の部屋へご案内ー」

「なっ……」

「えっ……？」

強制転移でセックス部屋に二人を送る。残されたのは術者である僕と、ずっと静かに観戦していたカルカちゃんだ。なんとも、勘違いしてくれたものだが——カルカちゃんは別段、僕に依存しているなんてことはない。

世間知らずの小娘を誑かしてゐるわけじゃあるまいし。仮にも聡明な聖王女で、こういう言い方はなんだが、それなりに歳を重ねた妙齡の女性だ。恋心を覚えたとしても、恋する自分に浮かれていたとしても、そうそう盲目的になんてなるわけないだろ？ 仮に僕の命で国が救えるとしたら、躊躇いなく生贄にするくらいには王様として頑張つてよ。

僕はカルカちゃんを愛してるし、カルカちゃんも僕のことを好きでいてくれてはいるだろうけど……それはそれ。これはこれ。僕が他の女の子とも関係を持つていることを彼女は知ってるし、そこについては納得してもらつてる。

強い男が複数の女性を囲うのは、この世界ならそこまで特別なことじゃない。流石に一国の女王となるとあれだけど、その辺はどうにでもなるのが運営の力だしね。そう、つまり僕とカルカちゃんの関係をあえて言葉にするならば——『エロ仲間』である。

「カルカちゃんさ、このシチュはどう？」

『女王騎士陵辱物語』ですか……確か王女を助けにきた女騎士の話……でしたよね？ レメデイオスには似合いそうですけれど……うーん……」

「あれ、あんまりかい？ この前『TENPA』のローターでオナつてた時にオカズにしてたから、てつきり好みのシチュかと」

「っ!?! なっ、ななな、なんで知って…!?!」

「ほら、僕つて超常者だからさ」

「くうう…！ エイ様と言えど、これは承服しかねます。プライベートというものをもう少し…！」

「まあまあ、それはともかく…」

カルカちゃんもちよつと楽しそうにしてるじゃんね。どんなシチュがいい？ …ほほう。やっぱり君つてだいぶエロいよね。幼馴染みの姉妹を巻き込んだんじやうとか引くわー。ドン引きだわー。だがそれがいい。



——どちゆり、どちゆりと、粘液にまみれた肌と肌がぶつかりあう音が響く。もう何百回目のピストン運動だろうか。現実であれば体力も続かないし、そもそも摩擦で皮膚が悲鳴を上げているだろう。しかしここは魔法のある便利な世界。性欲ある限り無限にセックスを敢行できる、素晴らしい世界だ。

「あ、っ！ ひうつ、ん、かふっ……み、見ないりえ、レメディオス……」
「カ、カルカ様……」

「あーあー、聖王女様ともあろうものが乱れに乱れちゃって……ほら、処女のレメディオスちゃんに『どう気持ちいいか』説明してあげなよ」

「あ、あう、ん、っ、エ、エイ様の大きいのが……お、っ、おくまで、えぐっ、う、っ……うあつ！ ま、またイツちゃ……んきゆうっ！」

「……」

ベッドの上で、僕のチンポに突かれて喘ぎまくるカルカちゃん。見ないでと言いつつ、自分から腰を振る様はなんとも淫靡だ。そんなに見せつけないのなら僕も協力してあげようと、彼女の両足を持ち上げて浮かし、後ろからガン突きにする。結合部がレメディオスちゃん達に丸見えて、およそ『清楚な王女』とはかけ離れた行為だ。

「う……あ……」

「……ふう。カルカちゃん、お掃除してくれる？」

「んう…っ！ ふあ、ふあい……んっ、じゆるっ…」

「…っ！ 貴様っ！」

「なに？ 別に無理強いはしてないけど。嫌なら言っつてね？ カルカちゃん」

「んっ、じゅぶっ、んぶっ、はふう……へっ？ あ、いまなにか申されましたか？ エイ

様」

「あ、なんでもないです」

蕩けた顔でチンポに舌を這わせるカルカちゃん。とはいえ催眠状態でもなければ、葉やなんやらで前後不覚って訳でもない。そんな彼女の様子を見せつけられたレメディオスちゃんは、物凄くなんとも言えない表情で、椅子に座り直した。心なしか、太もをもじもじさせているような気がする。

レメディオスちゃんは高潔な騎士で、カルカちゃんが求める理想を信じ、猪突猛進気味に生きてきた女性だ。ということは——このセックスもその一環だと理解できれば、意外とすんなりセックスさせてくれるような気がするんだよね。

カルカちゃんの頭を片手で掴み、喉奥でガポガポとチンポを抜く。世界有数の贅沢な口マンコで、興奮もひとしおだ。そしてそんな状態のまま、レメディオスちゃんに問いかけてみる。

「どう？ レメディオスちゃん。なにか感想は？」

「…ゲスめ」

「…ふむふむ。なんでゲスだと思っただい?」

「カルカ様にそのような下品な行為をさせる、貴様の精神性がゲスだと言っている!」

「じゃあどこからが『ゲスな行為』なんだい? まさか男女のセックスが下品だとは言わないよな?」

生物の営みまで否定してちゃ、自身の生まれすら疑ってるようなもんだ」

「だ、だから…その…いましているような行為だ! 子作りに、その、口でする必要

がどこにある!」

「セックスするのはさ、興奮なしにできるものじゃないんだよ。もちろん互いに気持ちよくならなくていいってんなら、無理やり挿れてさっさと射精して終わらつてのもできるけど…そこに愛はないよね」

「…!」

「カルカちゃんがしゃぶってくれて僕は興奮するし、嬉しい。カルカちゃん自身も、しゃぶってる自分に興奮して…ほら、こんなに濡らしてる」

「んぐつ?! ん、ふう…」

チンポを夢中でしゃぶるカルカちゃん…そのオマンコを無遠慮に掻き乱す。溢れる精液とは別に、とめどなく分泌されている愛液。いくら処女のレメディオスちゃんでも、違いはわかるだろう。

「君がこれに嫌悪を感じる理由つてさ、要はカルカちゃんが『自分の理想』から外れてほしくないつて感情があるからこそだと思っただよね」

「…な、なんだと?」

「綺麗でいてほしい、清廉であつてほしい、ずっとそのままできてほしい……別にそれがダメとは言わないけど、人間つて絶対に変化するもんだよ。『不変』は人間じゃない」

「む、むう…?」

ぬっ……無理やり屁理屈をこね回して納得させるのが僕の常套手段なんだが——その前にレメディオスちゃん頭の頭がショートしそうだ。仮にも聖騎士団の団長なんだから、もう少し頑張つてくれよ……仕方ない、もつと簡潔に言つてみるか。

「あー……レメディオスちゃん、神人つて知ってる? 法国が困う強者達のことなんだけど」

「知らん。が、なんとか聖典に所属する☒達のことであれば、聞いたことくらいはある……詳細は忘れたが」

「簡単に言えばさ、めっちゃ強い人達のことなんだけど……要は昔の神様の血を濃く引いていけば、強者の素養が大きくなるつてことだね。まあ強者イコール神人つてわけじゃないけどね」

「…それがどうした」

「僕はそんな昔の神様より強いんだけど、そこは信じてくれるかい？」

「…まあ、な。自分の目で見たことは信じる主義だ」

「オーケー、なら話は簡単じゃないか。カルカちゃんに僕と『こういうこと』をするのは、君達が目指した理想と何も反しないよね」

「…？」

「聖王国は亜人の脅威が大きいし、王国やら帝国よりは人類の窮状を理解してると思うんだけどさ……やっぱ『人間種』って弱いだろ？ 突出した個人の優劣はともかく、平均値を取ると本当に脆弱な種族だと思う」

「…」

認めたくはないが、その通りだ——と言った感じで黙り込むレメディオスちゃん。よかつた、そのくらいは理解していてくれたようだ。まあ一般的な成人男性の能力値が、既に五倍から十倍近く開きがあるからな。そもそも今滅んでいないのがちよつとした奇跡だろう。

「じゃあなぜ人類が持ちこたえられているかって考えると……そう、君みたいな『稀に生まれる強者』のおかげだね。亜人や異形種は平均値が高いけど、突出した強者はあんまり生まれえない」

「…ふむ」

「そもでもって、『強さ』ってのは割と遺伝するんだよね。強者と強者の子であれば、素養の高さは折り紙付きだ……僕の言いたいこと、わかるよね？」

「わからん」

「…」

「…」

馬鹿なの？ ちよつと障害疑うレベルだぞレメデイオスちゃん。ちよつとイライラしてきた……いや、オチンチンがイライラしてきた。ペちやペちやとチンポを舐めるカルクちゃんを引き剥がし、うつ伏せにして挿入する。響き渡る嬌声が、レメデイオスちゃんの口を固く結ばせた。

「お、っ！ いっ、んっ……！ さっきより、おつき——」

「だからさ、レメデイオスちゃん。僕がこうやってカルクちゃんのマンコでチンポを扱いて、子宮にたっぷり注ぐのは——なんのためかって話だよ」

「っ、や、やめ……くっ……カルク様……」

「…そんなに『これ』は嫌悪することかい？」

セックスすれば子供ができる。そして人類の中では上位の実力を持つカルクちゃんと僕の子であれば、かなりの実力者になる可能性は高い。もしその子がそうでなくても、子孫に覚醒する☒が生まれやすいのは確かだろう。加えて、単純な話——僕がカル

カちゃんへ援助することによって聖王国は富むだろう。つまり、僕とのセックスはメリットしか生まれない……というのを懇切丁寧に説明してさしあげた。

「——つまり！ お前のその『見返り』とやらは、カルカ様が体を差し出すことを前提にしているのだろう……！ 娼婦と客の関係と何が違う！」

「全然違うでしょ。金銭的な契約が先にあつて、体を重ねてるわけじゃないんだぜ。好きな人に贈り物をするのは——邪な感情かい？」

「む、むう……」

うーん………なんというか、セックスそのものに抵抗感があるのかな………つと、油断してたら射精してしまった。ひととき強く膣が締められ、そのまま気絶したカルカちゃん。ちよつとぼっこりしてるお腹がエロい。

「ふう………他になにか言いたいことはある？ 無いなら、そろそろセックスしよつか」

「……！ くつ、この……！ け、結局はそういう男だな。なにが愛だ、私は貴様のことなど愛していないぞ！」

「んー………僕はレメディオスちゃんのこと結構好きだけど」

「う、うるさい！ 近寄るな！」

近付こうとしたら剣の柄に手をかけられた。刃を抜かないのは、正義の所在が彼女の手中で揺らんでいるからだろうか。うーん………そこまで嫌ならもういいかね。別にどう

してもしたいってわけじゃないし。こういう言い方はあれだが、雌穴に困ってはいない。なんなら、失神して気の抜けたカルカちゃんのゆるマンでも、抜けないことはないしね。

「——はあ。じゃ、もういいや。そこの扉から戻れるから、帰っていいよ」

「えっ……？　い、いいのか……？」

「別に無理やりしたいわけじゃないし。ただ……なんていうかな。僕は決闘なんて受ける気はなかったけど、『なんでも言うことを聞く』って条件を——聖剣に誓ってまで提示されたから、受けた。レメデイオスちゃんってすごく可愛いだろ？　男にそんな条件を突きつけたなら、体を求められることも納得づくだと思っただけさ。本気で嫌ならもういいよ……ああ、聖剣への誓いを気にするなら——『そこの扉から出ていくように』。これが僕のお願いつてことでもいいや」

……というような言い方をすれば、レメデイオスちゃんの性格なら案外ヤラせてくれるんじゃないかというテスト。いや、テストじゃないな。最後の悪あがきとも言うべきだろうか。『そうか！　すまん！』とか言われたら終わりである。

「——っ！　……いや、言い出したのは私だ。見苦しい言い訳をした……好きにしろ」
やっただ。押してダメなら引いてみる作戦、成功だ。レメデイオスちゃんは悲壯感を漂わせながら服を脱ぎ、ベッドの上へマグロのように寝そべった。

…色気の欠片もねえな！　もうちよつとさあ、なんかあるじゃん。なんかもうアレ。ギヤルのグループに無理やり援交させられかけてる女の子みたい。

「うーん…」

「早く終わらせてくれ」

「う、うーん…」

…いいや。今日は本番までいけたらいいかな、くらいの気持ちでいこう。カチンコチンになったレメディオスちゃんの体に腕を回し、脇腹を強めに突く。小学生がよくやる感じのイタズラだ。

「のあつ！　…ちよ、やめ…！　ば、ばかやめろ——ふあつ!?!」

「もうちよつとさー、楽しもうよレメディオスちゃん。認識から変えてみない？　セツクスってすごい面白いもんだよ」

「くっ…あは、くふっ、この…！　やめっ、ひうっ！　いひやひやっ！」

「おお、聖騎士団団長の弱点がくすぐりだったとは。意外や意外……ん？　あ、レメディオスちゃんパイパンなんだ」

「…！　ば、ま、マジマジと見るな！」

「いや、でもすごい綺麗だよ。恥ずかしがる必要なんかないって」

「当たり前のように触りながら言うな！」

レメデイオスちゃんとか、いまいちエロい雰囲気にならないなあ。まあ昔の深夜番組のおバカエロっぽい感じにはなるから、これはこれでアリかな。まだオマンコを弄るのは早かったか……よし、緊張もほぐれたみたいだし、次に行ってみるか。

「じゃ、キスするね」

「…… あ、ああ……ふ、んっ……ん、ちゅ……んむっ」

柔らかい肌を優しく抱きしめながら、舌を絡めつつキスをする。いつもならそのまま前戯、挿入の流れだが——今日はしっこくいくとしよう。

「んっ……はむ、ちゅ……えう、んむ……」

背中を優しくさすりながら、キスを続ける。偶に頭を撫でつつ、口内の粘膜を幾度も交換する。息継ぎのタイミングで舌を離し、啄むようなキスを何度も繰り返した。手持ち無沙汰気味のレメデイオスちゃんの左手をしっかりと握り、舌と同じように絡め合う。いわゆる恋人繋ぎだ。

「んむ、ちゅ、……っは、あ……い、いつまでするんだ。したいならさっさとすればいいだ——んうっ！ はむ、ん……」

貪るようにキスを続け……そろそろ二十分くらいだろうか。何度も繰り返したからか、レメデイオスちゃんも慣れたように舌を動かしてくれる。真っ赤な頬がなんとなく新鮮で、僕のチンポもガチガチだ。

舌を放そうとすると、追ってくるような動きが心地いい。数度目の撫で撫でも、なんとなく喜んでくれているような雰囲気は漂っている。目の焦点はあんまりあつていない……未体験の刺激を長々と続けられたせいで、少しばかり惚けているようだ。そろそろキスもおしまいでいいかな？

「ん、はう、んむ……あつ……」

「もつとキスしてたい？ それとも、もうちよつと先に……いつてみるかい？」

「……つ、お、お前がしたいなら……好きにすればいいだろう。約束だからな——んむつ!?」

まだしつかりしてるな。仕方ない、根負けするまでキスし続けてやろう。幸いなことに、レメディオスちゃんはずっとペッティング好きな女の子のようだ。カルカちゃんにやつたような下品な行為は好きじゃないみたいだけど、愛情を示すようなやり方を好むようだ。意外と純情？

「はふ、はう……ん、んぐつ……ん、ちゆ……」

既に一時間はキスし続けているだろうか。レメディオスちゃんの目もトロンとしてきて、偶にオマンコを弄つてもされるがまだ。ちよつと唇まわりがふやけてきて、僕の方も限界。ちよつと催眠ちつくな感じで申し訳ないが、この状態の「メス」なら堕ちやすいだろう。レメディオスちゃんが望む愛の理想も、なんとなく把握できた。

「は、ひ……んう……？ あっ、そこ……」

「レメディオスちゃん」

「はうっ、あ、え……？」

「好きだぜ。愛してる」

「は——んん、っ!? い、っひゃ……あ、う……!」

蕩けた頭へ染み込ませるように愛をささやき、ぴちりと閉じた秘裂へ剛直を突き挿れた。うわっ、きつつ……！ でもキツイだけじゃなく、肉棒を悦ばせるような膣壁のヒダが心地いい。それにマンコでチンポを締め付けつつ、腕と足で僕の体を締め付けるレメディオスちゃんが可愛い。不安がる子供が、全力で親に抱きつくような感じだ。

求められるままにキスをする、締め付けがやわらぐ。キス⇨安心感という構図を、先程の長時間のキスで刷り込んだおかげだろう。膣の締めも心なしかやわらいで、今度は優しく包みこむような極上のオマンコへと変化した。

上も下もぐちゅぐちゅと、ぐぶぐぶと、液にまみれた汗だくセックスだ。長く我慢していただけあって、そろそろ射精しそう。腰を強く打ち付けて、ピストンの速度を速める。レメディオスちゃんも女として何かを感じたのか、太ももを絡めて腰を離さない。

「膣内に射精するけど——いいよね？ レメディオスちゃん」

「ん、っ！ あっ、ひうっ！ いいっ！ んう……っ！」

言質とつたー、っと。最後にひときわ強く腰を押し付け、何も侵入したことはない、まっさらな子宮へと精子を注ぎ込む。その間も舌を絡めた濃厚なキスを続け、中出しと幸福を彼女の脳内で紐付ける。いい感じに堕ちてくれただろうか？ 僕としては、予想外に素晴らしいセックスで嬉しい限りだ。

「エイ様……」

「あ、カルカちゃん……おはよ。お掃除してくれる？」

「ふあい……んむ、ちゅ……」

眠るように気を失ったレメディオスちゃんと入れ替わるように、今度はカルカちゃんが目覚めた。ずるりとオマンコから引抜いたチンポを、彼女の目の前に持つていく。精液と愛液にまみれた剛直を嬉しそうに頬張る姿が、なんともエロい。

——さて、一部始終を別室のマジックミラー越しに見ていたケラルトちゃんのオマンコは……気持ちいいかな？ 姉の情事でオナニーしてた妹マンコは、さぞ蕩けていることだろう。レメディオスちゃんと違って、そんなに潔癖じゃないみたいだし……メリツトもちゃんと理解してくれるだろう。むしろ国のことを考えて、確実に孕むまで離してくれない可能性すらあるな。うん、楽しみだ。

11話

法国秘蔵の虎の子部隊——『六色聖典』。その名が示す通り、それぞれの分野に特色を持つ特殊部隊である。ゲリラ戦に優れた部隊、殲滅戦に優れた部隊、探知探索に優れた部隊など、『国』としてあらゆる局面に対応できることが強みだ。

その中でも特に、戦闘に特化した最強の部隊こそが『漆黑聖典』である。彼等は入隊と共に「席次」を振られ、その後は一般人と同じ生活を送る。しかしひとたび任務を命じられたならば、人類最高峰の実力をもって敵を殲滅する精鋭部隊だ。

隊長である第一席次などは、ユグドラシル換算で言えばレベル八十近くの実力を備え——そして神都の最奥で暇を持て余す『番外席次』に至っては、レベル百へと到達した超越者である。他の隊員達も、レベル帯にして三十から四十になる猛者たちが揃っている。

周辺諸国最強と持て囃される『ガゼフ・ストロノーフ』が、レベル三十に届くかどうかという事実を考えれば、漆黑聖典の異常性が理解できるだろう。しかしだからといって、法国がその強さに増長し、各国に戦争を仕掛けることはない。

彼等は人類そのものの守護者を標榜し、常に種族全体の利益を優先するのだ。法国の

上層部などは、もし自らの死が人類に繁栄をもたらすとすれば、喜んで身を捧げるだろう。実際問題として、脆弱な人間種が現状である程度の勢力図を保つことが出来ているのは、法国の力によるところが大きい。

亜人種や異形種が侵略を企めばそれを察知し、迎え撃つ。他国家がピーストマンの餌場になりかければ、聖典の一つを差し向ける——もちろん国家として見返りは要求するが。もし人類にとつて不吉な予言が詠まれたならば、たとえ国境を侵してでも確認に向かうこともある。

その過程で部隊が全滅の危機に瀕したとしても、彼等はその程度で任務が失敗したなどとは思わない。表向きに——そもそも存在が裏ではあるが——最強である第一席次が敵わない吸血鬼が相手だとしても、彼等は諦めない。

ナザリツクが階層守護者『シャルティア・ブラッドフォールン』との不幸な遭遇戦は、漆黒聖典を壊滅寸前にまで追い込んだが——その一員たる『占星千里』の予言では、いまだ『破滅の竜王』の危機は去っていないと詠まれた。

あるいはその吸血鬼こそが竜王という可能性もあり、法国は最強にして最後の手段である『番外席次』投入を決断した。聖域に秘された例外の席次——なぜ彼女の存在をそこまでひた隠しにしていたかと言えば、それは『世界盟約』と呼ばれる、評議国との取り決めに破っているからに他ならない。

番外席次の存在そのものが約条を犯しており、それを評議国の竜王に知られたとなれば、国家単位での戦争が起こる可能性は極めて高い。しかし人類圏にヴァンパイア・ロードの血脈か——あるいはそれ以上の存在が放たれたとなれば、事態は急を要する。危険を推してでも吸血鬼の討伐は急務であった。

“化物”が野に放たれたというだけならば、彼等ももう少し静観の構えを見せただろう。しかしそれが吸血鬼ともなれば、放置は有り得ない。仲間を増やし、眷属を作ることでできる存在を相手に、時間を与えるほど愚かなこともないからだ。

“中途半端な洗脳状態”が継続しているのならばともかく、討伐されたという情報もなければ、捕獲されたという話もない。忽然と消えてしまったのだ。早期に対象を討伐しなければ、国の一つや二つが滅んでもおかしくはないだろう。

かくして番外席次は、尋常ならざる知覚能力を持つ“真なる竜王”に存在を把握される前に、迅速に吸血鬼を討伐する任務を命ぜられた。そしてそれは彼女にとつて——半世紀以上ぶりの外出であった。

「ふん、ふん、ふん」

「遠足ではないのですから、あまり気を抜かれ過ぎぬよう」

「仕方ないじゃない。忙しくとも自由なあなたとは違って、聖域に閉じ込められっぱなしなんだもの」

「…気持ちはお察ししますが」

「心配しなくても、任務はちゃんと果たすわよ…：対象を発見できれば、だけど」

「発見した段階で出陣していただくのが、もつとも望ましいのですがね…」

「発見した段階で全滅しないならね」

「ふ、耳が痛い」

破滅の兆しはトブの森にあり——その情報を元に、大森林を搜索する漆黒聖典達。番外席次を筆頭に、隊長である第一席次。第四席次「神聖呪歌」、第五席次「一人師団」、第十一席次「占星千里」、第十二席次「天上天下」。

総勢六名をもって、破滅をもたらす吸血鬼の搜索を行っていた。とはいえ戦力として期待されているのは、番外席次と隊長のみ。他の面子に関しては、能力の強化役、召喚した魔物による総ざらい、占いによる探知、技能による物理的な搜索を担う。

「…隊長」

「む、何か見つけたか？」

「…前方、かなり先だが…：戦闘音だ。双方、かなりの実力と思われる」

「…ほう——クアイエッセ！」

「ええ。今クリムゾンオウルを向かわせました」

「総員、警戒たい——ちよっ！ 勝手な行動は…！」

「ふううー!!」

「くっ……追うぞ!」

「は、はい!」

「天上天下」が何者かの存在を察知し、報告をした瞬間——隊長の指示を待たず、番外席次が飛び出した。元々人の指示を聞くようなタイプではないが、それにつけても現在の彼女は浮かれているのだろう。半世紀以上も外の世界にいなければ、それも当然の話だ。

「……隊長! 反対方向からも来ているぞ。四……いや、五人だ。おそらくあちらも気付いた」

「面倒な……!」

逼迫する状況ではあるものの、焦る隊員はいない。この程度のことでは動揺してはいない、フランスの暗部は務まらないということなのだろう。なぎ倒された木々を道しるべに、番外席次を追う面々。

——その先にいた存在は果たして、彼等にとつて既知の人物であった。

「んー? どつちも吸血鬼じゃなさそう……あれ、なんか見たことある顔」

「——うげっ! な、なんでこんなところに……!」

「戦いの最中によそ見とは、余裕でござるな。それとも増援でござるか?」

「追いついたか——勝手な行動は謹んでいただき……むっ、お前は……クレマンティーン？　なぜこんなところに」

「うおっ……！　あ、あの勇壮な姿……！　白銀の大魔獣……！　隊長、きつとあれは噂に聞く森の賢王——ぜひタイムさせてください！」

「クアイエツセ様、先に妹御のことを気にすべきでは？」

「……ん？　はっ……クレマンティーン！　なぜここに！」

「……ちっ！　相変わらず腹の立つ……！」

「さ、流石にこの人数を相手にするのは厳しいでござるな……戦略的撤退でござる——」

「——隊長、来てるぞ」

各々が思い思いに発言する、混沌とした状況——しかし場が静まる前に、さらなる闖入者が現れる。それはリ・エスティーゼ王国が誇る、五人からなる冒険者チーム『蒼の薔薇』であった。とある目的をもってこの森にやってきた彼女達は、『森の賢王』とクレマンティーンの戦鬪音を聞きつけてやってきたのだ。

「これは……どういう状況かしら」

「……ふむ。気をつけろよ、お前たち。あの風貌と、感じる強さ……おそらくエイが言っていた『漆黒聖典』だ」

「……これはこれは、随分と物知りのお嬢さんだ……お嬢さんでよかつたかな？　ところ

で、どこでそれを知ったかお聞かせ願いたい」

「隊長、おそらく『蒼の薔薇』です。ニグン殿が以前……」

「ああ、王国のアダマンタイト冒険者か。確かりーダーは王国の貴族……我らの存在を知っていてもおかしくはない——が、一目で看破する理由にはならんな。それに彼女を見られた以上、どちらにしても……つてうおいっ!? どこへ行くクアイエッセ!」

「森の賢王が逃げます!」

「捨て置け!」

「正気ですか!?!」

「お前が正気なのか!?!」

「おい、どうするラクユース。アレは時間が限られてるんだろう? こんなところで使うわけには……」

「う、うーん……どうしよう。災厄の魔樹を放置するわけにはいかないし……」

「——っ! ……その『災厄の魔樹』というのは?」

「トブの大森林の奥深くに眠る、太古の災厄よ。大魔神の石柱……封印が解けかかっているらしくて、私達はそれを止めに来たの」

「脱兎のごとく逃げ出した森の賢王を、物欲しそうに見送るクアイエッセ。そんな彼を無視して、ラクユースと隊長が情報交換をし始めた。どちらも警戒は解いていないもの

の、双方ともに利があると見越してのことだ。

「…『占星千里』」

「ええ、おそらくは」

「では吸血鬼の方はまた違う……と。それはそれで厄介だな」

「…っ」

「…？　どうかされたか」

「い、いや……なんでもない。その、きゅ、吸血鬼とはなんのことだ？」

「…先日、森の近くで人智を超える強力な吸血鬼が発生した。どこかに潜伏している可能性もある。あなた方は王都を拠点にしていた筈だな……何か知っていないだろうか」

秘匿すべき情報だらけの漆黒聖典ではあるが、件の吸血鬼に関しては、むしろ募るべき情報である。問いかけられたことにこれ幸いと、情報を開示する。そして『それ』に関して、『蒼の薔薇』の一人イビルアイが顕著に反応を示した。それはつい先日、記憶にも新しい『吸血鬼間違い』をされたことによるものだ。

「…！　まさか、女の尻穴が大好きな変態吸血鬼のことか？」

「お前は何を言っているんだ？」

「い、いや……すまん。じゃなくて、そう、王都でそんな噂を聞いたんだ……少なくとも、難度にして二百五十は下らん……らしい。そうだな？　ティア」

「そう言ってた」

「……！ 変態かどうかはともかく、強さから考えて間違いないな……王都で間違いないのですね？」

「あ、ああ……いまいち信憑性に欠けるが」

情報の共有は終わり、二つのチームの間に、なんとも言えない沈黙が降り立つ。そんな状況を見て、静観していたクレマンティヌがソロリソロリと後ずさった。幾度か逃げようとはしていたのだが、その度に番外席次に絡まれていたのだ。

「どこへ行くのですか？ クレマンティヌ。意地を張るのはやめて、そろそろ帰ってきなさい。額冠を返し、頭を下げれば神官長も命までは取らないでしょう……それほどに我等の實力は頭抜けているのです。今のあなたの行動は、人類という種族にとって多大な損失ですよ。兄として、私も一緒に頭を下げますから……ね？」

「どの口が言ってるんだ……！ ……つーか額冠はもう取られちゃったし」

「えっ」

「えっ」

「……嘘でしょう？」

「いや、嘘じゃないし……ほら、エ・ランテルの騒動解決した奴。あれ『ぶれいやー』だったみたいでさー、殺されかけちゃった。額冠はあいつがポケナイナイしたんじゃない

かな」

「…クレマンティーヌ？ 私はいまでも重大なことを聞いた気がするのですが」

「あ、法国の漆黒聖典として喧嘩売つといたから」

「クレマンティーヌウウー！ な、なんとということ…！」

「いちいち狼狽えるなクアイエツセ。今なにもアクシヨンがないと言うことは、そもそもクレマンティーヌの嘘か…ああ、『ぶれいやー』の方が信じていないという可能性もある。釈明の機会などいくらでもこよう——今は災厄の魔樹の方が重要だ」

「はっ……つたく、相変わらず憎たらしー。じゃあ——くひつ、『うんえい』って知ってる？」

「へっ？！」

「ん？ なに？！」

「今、エイの名前を…」

「…エイ、『うんえい』…ああ、竜王国の英雄——『ウン||エイ』か。』

法国もまだ把握していないだろうと考え、運営の名を出すクレマンティーヌ。しかしそれに反応したのはラクユース達であり、予想していなかった方向からの返事に、彼女も疑問の声をあげる。そして第一席次の方はと言えば、こちらもクレマンティーヌの予想とは違い、その名前に反応を示していた。

浮浪者暮らしが続き、遂には森ガール（ガチ）にまで身をやつしたクレマンティーンには、竜王国の近況など知る由もない。そして既に割と名を轟かせている英雄の名を、漆黒聖典が把握していない筈もない。勘違いは絡み合うが——全員が同時に言葉を発しようとした瞬間、地面の揺れと共に轟音が響き渡った。

——災厄の魔樹『ザイトルクワエ』が数百年の戒めを破り、遂には顕現したのだ。全長は百メートル以上にも及び、枝である触腕は広範囲への攻撃を可能とする。およそ人間に打倒できるような存在ではないだろう。しかし漆黒聖典最強の少女『番外席次』は、それを見て不敵に笑う。

「うわー……ふふ、すつごい。あれは私以外じゃ無理か……番外席次が命ずる——総員退避」

「——っ！ 了解しました。全員撤退だ！ …あなた達も逃げた方がいい。クレマンティーン、お前は我等と共にこい」

「へーへー」

「お気遣いありがとうございます——ですが、私達の目的はアレを討伐すること。お気になさらず」

「…失礼だが、もう少し身の程を知った方がいい。私一人でもあなたの方全員を殺すことなど容易い……そしてあちらの彼女は、そんな私を一蹴するような存在です」

「素の実力が足りていないのは承知の上。でも——私達には勇者の力がある！」
 「は、はあ……？」

魔剣を握りながら、威風堂々と宣言するラクユース。イカれた人間を見てしまったと汗を流す第一席次であったが、その傍にいたクレマンティーンは、何かに気付いたように眉を上げる。

「……あ、思い出した。蒼薔薇のリーダーって、あいつが『好きなタイプ』って言ってた奴か……となると……いまこの状況なら……くくつ……あいつ、見てんじゃないの？ つてことは、逃げられるかな？」

「なにをブツブツ言っている、クレマンティーン。まさか逃げられるとは思っていないだろうな」

「——試してみるのもありかなって、さ」

「なに？ 貴様……私の実力を忘れたとでも言うつもりか」

「さあねー。くひやつ……やれるもんなら——やってみなよ」

遠目にも巨大な災厄の魔樹——ザイトルクワエ。その存在に気付いた魔物や動物たちが一斉に逃走を始め、森がざわつく。そしてそんな状況の中、クレマンティーンと漆黒聖典の間には極度の緊張が張り詰める。

腐つても人類トップクラスの強者であり、同格の隊員相手にやすやすと捕縛されるク

レマンティーンではない。もちろん、第一席次が動けばその限りではないが——それを知っているはずのクレマンティーンは、目の前の元同僚たちを嘲笑った。

「まったく、余計な一手間だ。気を失わせる、お前が担げクアイエッセ」

「はっ」

「ふっ！——……なっ！」

第一席次が動き始めた、その刹那。クレマンティーンが光に包まれ、槍の柄による一撃を弾く。なんの痛痒も感じていないその様子に、第一席次は初めて動揺を露わにした。

「くくっ、どっかの神様がご加護でも与えてくれたのかしら？」

「……ちっ、これ以上は時間をかけられん。撤退だ！」

「はっ！——クレマンティーン！ 帰ってくるのを待っていますよ！」

「誰が帰るかっての。バーカ」

現状の漆黒聖典にとって、クレマンティーンはそれほど優先すべき対象ではない。得体の知れない力に手こずる可能性を見るや、早々に手を引く決断をした。先程の番外席次の命に従い、撤退を始める。

この場に残ったのは、番外席次とクレマンティーンの二人のみ。無謀にも魔樹の方へ向かった『蒼の薔薇』を冷ややかに見ながら、番外席次は裏切り者へと声をかけた。

「ねえ第九席次——お前は私が連れて帰るから、大人しくそこで待つときなさい」

『元』だよ白黒馬鹿女。ろくに人の名前も覚えてられない、その小さな脳味噌に刻んどけ」

「…随分と調子に乗ってるじゃない。それに……どうせころころ変わる名前なんて、覚えていてもしょうがないでしょう？ 私が聖域にいる間、どれだけ漆黒聖典の面子が代わったと思ってるの？」

「あー……そつかそつか。くつ、ひひ……エルフが父親だから……寿命が永いものねえ。ごめんなさい、強姦魔エルフの一人娘さま」

「——」

クレマンティーヌの挑発に、番外席次は——静かにブチ切れた。ザイトルクワエから感じる威圧感よりも、更に濃密な殺気。それだけで死人が出かねない重圧が場を支配し、当事者達以外の一切の生命体が逃げ去った。

「もういい、死ね——なっ……!？」

「さっきの見てなかったのー？ ほーんと、お馬鹿さん」

「…っ、くつ、この……！ なんて攻撃が通らない！」

大鎌の一撃も、拳での殴打も、果ては頭突きまで試す番外席次。しかし衝撃すら通らない様子に齒を軋らせ、それでも意味のない攻撃を繰り返す。その強さはともかくとし

て、人生のほとんどを一人で過ごしてきた彼女は、まともな情操教育が行き届いているとは言い難い。感情面で未熟な部分が多々あるのだ。優先すべき敵を放置してまでも、クレマンティーヌを攻撃し続けているのがその証左だろう。

「このつ、この……!」

「効かないつつつてんでしょー? レイプされて狂った母親に育てられただけあつて、やつぱ頭おかしいんだー。神官長も嘆いてたよー? 『なぜあの母親の元に置いたのだ』つて。くひやつ、あははは!」

「——っ! うあ、ああああ!! 死ね! 死ね! 死ねええ!!」

「効・か・な・いつての。お馬鹿さ——ぶべらっ!」

「あ、効いた……覚悟しろオラアアー!!」

「うげ、ちよ、待つ——」

あまりに酷い罵詈雑言に、流石のご加護も匙を投げたのだろうか。馬乗りになつてボコられるクレマンティーヌの悲鳴が、なんとなく哀愁を誘う。とはいえレベル百の拳打嵐を受け生きていられる筈もないのだから、何かしらの力は働いているのだろう。

「ふう、ふう……これくらいで勘弁してやる。私はあいつを倒してくるから、大人しく待つてろ……ん?」

ギャグ漫画のように腫れ上がったクレマンティーヌの顔を見て、ようやく溜飲を下げ

る番外席次。次は魔樹の番だと後方を振り返るが——彼女の視界に入ったのは、天を貫くほどの巨大樹が地に沈む瞬間であつた。

「……え？」

それはもう——ラキユースが覚醒したり、その力が仲間に行き渡つたり、彼女自身が魔剣キリネイラムになつたり、ネフィリムの秘紋が開放されたり、色々あつたようだが——その全てはクレマンティーンがボコボコにされている間に終わつてしまつたようだ。決着がつき、天に剣をかざすラキユースの姿は、まさに勇者であつた。

「うそお……」

「——リグリットが言つていた『蒼の薔薇』か……キーノも随分と強くなつてみたいだけど……何があつたんだろう」

「……えっ？　だ、誰……」

呆然とする番外席次の後ろに、いつのまにか現れていた白金の鎧。蒼の薔薇の勇姿を見届けた『彼』は、法国の裏切りそのものの少女へと、優しげに声をかけた。

「君は完全に覚醒した神人だね？　随分と前から『世界盟約』は破られていたんだ……残念だよ」

「——っ！　し、真なる竜王……!?!」

白金の鎧——その操者である、真なる竜王の一人『ツアインドルクスⅡヴァイシオ

ン』。彼が発した言葉からその中身を悟り、番外席次は青褪めた。絶対に知られてはならない存在に、自身を知られてしまった。それは戦争の引き金になりかねない、最悪の事態だ。

——事態は加速していく。



何事も最初が肝心と言うけれど、僕もその言葉は至言だと思う。むしろ人生は『最初』に支配されてるまでであるな。僕が世間一般的ではない嗜好になったのも、小学生の時

に初めて見たエロ本がそっち系だったからに他ならない。今でもなんとなく覚えてる。ロリっぽい娘が赤鬼に追いかけられて、ぶつとい金棒で腹ボコされてるエロ漫画。

…よく考えたら父親も大概ってことだし、実は遺伝とかなのだろうか。まあそんなことは置いて、何が言いたいのかというところ——レメディオスちゃんがキス大好きっ子になったという、喜ばしい事態について。

性体験の「最初」が濃厚なキスで始まったせいも、それが大好きになったようだ。いやね、僕もキスは好きだけど、レメディオスちゃんはそのから先に中々いかせてくれないので妙にもどかしい。昨日の晩に聖王国にきて、レメディオスちゃんとケラルトちゃんと致した訳だが、今日の朝から昼までの間に至るところでキスをした。本番は一発だけなので、色々ともどかしい。

「どうした？ エイ」

「いや、なんでもないよ。ところでどこに向かつてるんだい？」

「さっき言っただろう……修練場だ」

「いや、言っていない。絶対に言っていない」

「む……そうだったか？ まあいい、とにかく付き合え。お前ほどの強者となら、きつといい鍛錬になる」

「うーん……ま、いいけどさ」

できれば二人きりでエロい鍛錬でもしたいもんだ。とはいえ無邪気に笑うレメディオスちゃん可愛いので、言う通りにしてあげたい感が半端ない。本番オツケでキスNGの風俗嬢がそれなりにいることから考えて、キスが愛情に及ぼす影響は結構あるんだろう。こつちにきて一番キスしてるのがこの娘だし、僕も割と影響されてるのかもしれない。

…あ、修練場って街の外なのね。まあ一定以上の実力になると周りに結構被害が出るだろうし、当然と言えば当然か。レメディオスちゃんの直属ともなると、かなり強い人ばかりだろうし。

僕達の姿をみとめた聖騎士達が、即座に集まって礼をとる。めっちゃバシバシ視線感じるわー。『こいつ誰?』感がすごい。新しい仲間だろうか、貴族のお偉いさんの視察だろうか、それとも……みたいな。

特に前へ出て二人の聖騎士が、レメディオスちゃんへ微妙な視線を送っている。たぶん彼等が噂の『イサンドロ』と『グスターポ』さんだろうか。おつむがよろしくないレメディオスちゃんに代わって、色々と面倒事を背負っている副長さん達だ。『またアポもなく勝手に……!』みたいな感じなのかな。うん、頑張つて。

「今日は教導官を連れてきたー!」

「いや、聞いてないんだけど」

「手も足も出なかった」という事実は、急に出てきた教導官への反発を零にした。おいおい、なんかこう解りやすい噛ませ犬とかいないのか？ 『レメディオス隊長が認めたとて、俺は認めねえぜ！ 手合わせしろ！』って感じの奴とか。うーん……いないのか。まあエリート部隊にそんな馬鹿がいたら、既に死んでそうだしな。

「つーか教導とか言われてもなあ……ネイアちゃんがちよつと特殊だっただけで、そこまで期待されても困るんだけど。純然たる技術だと、たぶんレメディオスちゃんの方が上だろうし」

「むっ……そんなことがあるのか？ あの化物染みた強さで」

ネイアちゃんの場合はさ、職業と合っていない鍛練ばかりかしてたから芽が出なかった訳さ。そこんとこをちよつと弄っただけだし……いやまあ経験値もちよつと上げたけど。まあ今までの無駄な努力分と考えると、相殺されてるんじゃないかな。

——とはいえそこんとこを上手く説明するのは、ゲーム脳を一切持たない彼等に対しては、少しばかり面倒だ。

「んー……じゃあ、ちよつとばかりし講釈を。まず『強さ』には、大雑把にわけて二種類あります。はい、レメディオスちゃん」

「え？ あー……け、剣と魔法か？」

「全然違います。というか槍とか拳とか全否定してない？」

「くっ……」

「さて、では強さとはなんぞやと。定義にもよるんだろうけど、これは『肉体』に依存した強さと『技術』に依存した強さにわかれます」

なんかみんなすっごい真面目に聞いてくれてる……レメディオスちゃんだけ難しい顔してるけど。運営チームの一人としてプレゼンしてる時みたいな感覚で、なんだか懐かしくなってくるな。

「基本的にこれは『肉体』の方が優位性を持ち、戦いにおいてアドバンテージを得ることができます。おおよそ百段階に分けられるんだけど……まあだいたい十近くも離れるとほぼ勝ち目がなくなるね」

「む、むう……」

「あー……わかりやすく言うと……そうだな。たとえばその辺の一般人とレメディオスちゃんが、中身だけ入れ替わったとするだろ？ 当然、培った技術は圧倒的にレメディオスちゃんの方が上だろうけど——二人が戦ったとして、どっちが勝つ？」

「む……まあ流石に私の体を使っている奴だろう。いくらなんでも力と速度が違いすぎる」

「だね。とはいえ『肉体』のレベルがそう変わらないなら、重要になってくるのは『技術』の方だ。さっきの例を出すと……レメディオスちゃんの肉体をもった中身一般人と、肉

体も中身も揃ったレメディオスちゃん。どっちが勝つ？」

「私だ。百回やって百回勝つ」

「うん、それも間違いはないね」

ドヤつてるレメディオスちゃんが中々可愛い。さて、言わんとすることはだいたい伝わっただろうか。副長ズは既に理解してくれてるようで、流石。というかこっちにも『レベル上げ』の概念自体はちゃんとあるみたいだしな。

「つまり技術を疎かにするのはいけないけど、重要度は肉体面の方が高いわけだね。理解できた？ ならばはその『強さ』の上げ方について。『技術』の方については、君達がいつもやっていること……要は日々の鍛練がモノを言う」

「うむ」

「この辺は生まれ持ったセンスも結構重要だけどね。周辺国家で言うなら……：帝国の『エルヤー・ウズルス』とか、王国の『ブレイン・アングラウス』なんか、純然たる剣技では相当な腕前だ。まあどっちも犯罪者スレスレみたいな人だけだ」

「……気に入らん」

「強さと高潔さは比例しないんだぜ、レメディオスちゃん」

ちよつとアヒル口になったレメディオスちゃんも可愛いな。案外こういうところが人気の秘訣なのかもしれん。ちよつと和んでいると、イサンドロさんが話の続きを促し

てきた。間のとり方が上手くて、なんとも聞き上手だ。

「えーとそれで……そうそう、次は肉体系の方だね。まあこれもある程度は周知されると思うけど、もつとも効率が良いのは——『殺害』だ」

ちよつと顔をしかめる人が多数。まあ嫌な言い方をした自覚はあるが、事実なんだからしょうがないだろう。モンスターだろうが亜人だろうが……もちろん人間だろうが、殺せば経験値が手に入る。これは検証済みだから間違いない。

「その『殺害』を前提にして、だ。『肉体』の強さを得る上で、もつとも効率の良い方法は？ はい、ネイアちゃん」

「へっ!? あ、えと……数をこなす……でしようか」

「惜しいところ突いてくるね。それも間違いじゃあないんだけど、もつと効率の良い方法がある。『格上殺し』——俗に言うジャイアントキリング」

ゴブリン千体殺すより、ギガントバジリスク一体殺す方がよっぽど効率が良い……とはいえ、それはゲーム脳寄りの考えでもある。蘇生が簡単にできない以上、格上にぼん挑めるわけないしね。それはただの命知らずだろう。

そもそも強い存在がその辺に湧いて出るわけもないので、強くなればなるほど強くなりにくいという悪循環が発生するわけだ。

「この辺、ある程度は数値で表せるんだよね。さっき言った指標で言うと、同格からプラ

スマイナス五レベルくらいは『経験値効率が良い』相手ってことになる。それ以下だと得られる強さがガクツと下がるし、それ以上だと殺される危険の方が高い」

「なるほど……ちなみにその百段階で私を表すなら如何ほどでしょうか、エイ殿」

「十八、九つてとこかな。人類の中ではかなり強者の部類に入るから、誇つていいと思うよ」

「エイ、私はいくつだ？」

「レメディオスちゃんは三十前後つてとこだね。この辺になると、周辺諸国でもトップクラス……冒険者で言うならアダマンタイトかな。まあそれもピンキリだけど」

なるほど、と頷く聖騎士たち。まあ普段から立ち合つてる彼等だし、体感での強さとおおよそ合致してるんだろう。『流石は我々の隊長だ』という誇らしげな空気も感じる。

「エ、エイさんはどのくらいの強さなんですか？」

「僕？　僕は……」

ネイアちゃんが目を輝かせて問いかけてくる。セックスしたい。にしても、うーん……僕の強さって数値で表せないからな。だからって『最強無敵です』とか言ってもまるで荒唐無稽だ。小学生の妄想のがまだマシレベル。

「んー……百つてことでもいいのかな。『肉体』の強さは、だけど」

「ひゃっ!？」

俺またなんかやつちやいました？ ……じゃなかった。なんかネイアちゃんって都合のいいヒロインみたいな反応するから、なんか面白いな。つい虐めたくなくなっちゃうタイプってやつだろう。聖騎士たちがザワザワラッシュに突入しているが、なんとも居心地が悪い。

性技を褒められると嬉しいけど、強さを褒められてもなあ……所詮は大した努力もなく手に入れたチートだ。別に卑屈になるわけじゃないけど、僕の強さと彼等の強さって、物理的な側面では圧倒的に僕に軍配が上がるけど——どっちが尊いかって言われると間違いなく後者だ。

「ん……君らは百って数値に驚いてるけど、僕以外にもいるところにはいるもんだぜ。例えば法国の秘密部隊『漆黒聖典』なんかは、ほとんどの隊員が三十から四十近いレベルで構成されてる。中でもトップツーツーは八十前後と、後は僕と同じ百。世界に散らばる『真なる竜王』は大抵そのレベルだし、評議国の永久評議員『ツアインドルクスⅡヴァイシオン』もそう」

「——にわかには信じられませんが……しかしエイ殿の仰ったことが真実ならば、彼等はそのようにしてその数字に至ったのですか？ 同格以上の相手を倒したとしても、そう簡単に強くはなれませんまい」

「ああ……まあそこが人間種の脆弱たる由縁だよ。異形種つてのは成長と共にレベル

が上がつていくんだよ。種族によって上がり幅や限界値は違うし、個体差も当然あるけど」

異形種は生き残りさえすれば、定められたところまで勝手にレベルが上がってく。対して人間種は、技能を会得しないとレベルが上がらない。そりゃあ淘汰されるわけだ。そのかわり、同レベル帯なら人間種がやや有利だけどね。

「…つまり漆黒聖典の☒らは人間ではないと？」

「ああ、ごめんごめん。さっきの説明は竜王の方だよ。漆黒聖典がなぜ強いかつてのは、国としてそういう政策をきっちり取ってるから。出生届、戸籍謄本、その辺りがちゃんと整備されてるから、才能”をしつかり掬い上げるんだよね。法国以外は『強くなれた筈』の人間がぼんぼん死んじゃうからさ…：特にリ・エステイーゼ王国とかは」

「…なるほど。しかしその『トップツ』とやらの説明はつきませんな。カストディオ隊長の三倍以上もの数値を誇る御仁は、どう境地に至ったので？」

「ああ、それは『血』だね。この世界には偶に『プレイヤー』ってのが、別の世界からくるんだよ。六大神とか八欲王とか。そいつらの血を引いてて、かつそれを『覚醒』させたのが『神人』。生まれついでの強者って奴だね」

「…失礼。少し理解が及ばなくなってきたのですが」

「話半分で聞きなよ。嫌な言い方するけど、君らが知ったところで大勢に影響はないし。」

彼等に敵対しないなら意味なし。敵対しても意味なし……言ってる意味わかるよね？」
 ちよつと真剣な顔で《天地改変／ザ・クリエイション》を発動させる。街の方以外の、見渡す限りを溶岩地帯に変えてみた。その後、指パッチンで全てを元に戻す。上がった気温だけが、先程の奇跡を証明している。

「……とまあ、レベル百つてのは化物そのものだから。触らぬ神に祟りなしって言うだろう？　そもそも真なる竜王は、一体を除いて世界に興味がないし……：：：：：法国は基本的に『人類の守護者』ってスタンスだから。あれだけの強者が揃い踏みなのに、他の国を征服してない時点で証明されてる。だから君らは、今まで通り過ごせばそれが一番——ん？」
 ……なんか無力さに打ちひしがれてる人が多数。俺またなんかやっちゃいました？
 ……いや、やっちゃってるやっちゃってる！　ドラウ然り蒼の薔薇然り、問われれば答えるのが基本だったから、普通に言ってしまった。

そういうえば彼女達は全然普通の人じゃなかったな。なんかそこまできついな反応とか無かったから、それが普通だと思ってたわ。どうしよ。

…どうしよ。え？　僕が悪いのか？　みんな心が折れたブレインさん状態になつてない？　レ、レメディオオスちゃんは——寝てる！　いつから!?

「あ、あ……えつと、そ、そんな無力さを嘆く人に朗報！　僕は『プレイヤー』を管理する側の人間でさ！　ひ、人を強くするダンジョンの制作とかすつごい得意だから！

君らがよければこの修練場に一つ作るぜ！ 目指せレベル百！」

聖騎士たちがガバツと起き上がった。うーん……ま、まあいいか。いや、むしろポジティブに考えよう。聖王国にエロダンジョンを造る許可を貰ったと！

ダンジョンマスターⅡエロ。これは確定的に明らかか。みんながダンジョンの奥を指す間、僕は聖騎士のオマンコを指すでしょう。ダンジョンに出会いを求めるのは、なにも間違っていないとも。うん。

1 2 話

VRMMO『ユグドラシル』末期。オンラインゲームが衰退を迎える時は、運営がとる対策も似たようなものが多い。難易度の緩和、取得経験値増加、レベリングを手助けする場の提供。レアドロップ率アップ、加工に必要なアイテムの配布、無料ガチャの頻度を上げる等——しかしそれらが根本的な解決になった例はほとんどない。

ユグドラシルもその例に漏れず、新規参入の間口を広げるために様々な施策を取ったものの、サービス終了は免れなかった。そしてその施策の一つが『練磨の塔』である。カースト——つまりレベル百が当たり前になったユグドラシルで、新規勢が古参勢に追いつくための取り計らいだ。

しかし古参が新参を嫌う風潮はどこにでもあり、狩り場をせめぎあつて研磨された彼等からは、その塔は『ゆとりの塔』などと揶揄されていた。

エイは聖王国にダンジョンを造るにあたって、そのデータの大部分を流用した。それはかつてこの塔を作成したのが彼であったため、細部まで把握しているという部分が大きい。

どういった目的にしろ、改良するにあたって原型を深く知っているかどうかは重要

だ。もちろん根幹がレベリングだからこそ、このダンジョンを選択したのも確かな事実である。

元々は非常に経験値効率の良いダンジョンというだけの塔だが、改良された今では、随所に非常に高度な仕掛けを施された施設となっていた。その名は——『キマシ・タワー』。

各所に「素質」を見抜くギミックが仕掛けられ、その対象は上手い具合に誘導されてしまう、世にも恐ろしきダンジョン。そしてあくまで選択式であるが、誘導された先には『個室』が用意され、自身の行く末を決められる。

——今日もそんな犠牲者が一組。

「はっ……あ、ひ、きもちいいっ……ご、ごめんなひやい、モブリシア先輩、わらひっ……！」

「い、いいのよパコレア。ひ、うっ、ぐ……わ、私、ずっとあなたとこうしたかった……せ、先輩……！」

エイが生きた二十二世紀は環境こそ最悪だったものの、その技術水準は非常に高度であった。それは科学的な意味でも、そして心理学的な意味でもだ。

何の変哲もない模様や文字が、特定の人間に与える影響。嗜好による無意識の選択。そういった高度な人間心理を駆使して造りあげられたのは、百合の素養がある人間を

『秘密の部屋』へ誘う『psychology induction aisle』——
通称ユリロードである。

それに加えること『セックスしないと出られない部屋』『リング・オブ・フタナライズ』『ちよつといい感じになるお香』のセット。ここまでお膳立てが整えば、聖騎士たちの中に潜む同性愛者を燻り出すことなど容易い。

「ふむふむ……ロリ系がコロネロールお嬢様を犯すのも中々いい……うん、これでだいたいのデータは取り終わったかな。正規の聖騎士が五百十六人中、二分と四厘……『軍士』は六千三百十二人中、一分と二厘……戦場に出る機会の多い方が、同性愛者の率は顕著だね。吊り橋効果の多さのせいかな？ さて……」

エイが行っている作業は、聖王国の全戦力の数値化——及び性的嗜好の傾向、ついでに言うところセックスできそうな娘の選別であった。彼も運営として『バランス崩壊』には非常に気を使っているのだ。聖王国の騎士達だけがあまりに突出すれば、良くない事態を招くと考えるのは当然。運営がインフレを制御できなくなったゲームは、破滅へと直行する。

ゲームであれば、それは『サービス終了』といった形で終わりを迎えるが、現実ともなればそうはいかない。責任感とは無縁の生活がしたいからこそ、異世界へと旅立ったエイではあるが——それでも細心の注意を払って微調整をこなすのは、ひとえに聖王女

の心労を軽くするためだ。

聖王国北部と南部の確執、巫人の脅威。いまだに「聖女王」ではなく「聖王女」と名乗らざるを得ない情勢。清廉過ぎるがゆえの煮え切らない政策。色を覚えてからはある程度の息抜きは出来ているものの、その重責はあまりに重い。

だというのに、聖王女カルカ・ベサーレスは——エイへと何も頼まない。ドラウデイロンを始め、彼が関係を持った相手は、持ちつ持たれつの形が基本だ。前提に好意があるとしても、ベッドの上で何かしらをおねだりする女性が多い。

それが物資であることもあれば、ナニが生える指輪であったり、あるいは無形の援助など多岐にわたる。しかしカルカは性交に関しての要求はあれど、王として何かを求めたことは一度たりともない。となれば人間のまつとうな心理として、何かをしてあげたくなるのが人情というものだ。

大元は成り行きではあったが、聖王国の全体的な強化は、カルカにとつてかなりのメリットである。半分ほどはエイの都合も取り入れたとはいえ、双方ともに悪くない形となったのは間違いないだろう。

「——ふう。次は一般市民かあ……とりあえず次年度に徴兵される人から始めるとして、おおよそ五万人。中規模以上の都市で練兵……最大規模で二千人か……その時だけ臨時で造るかな？ 流石に一つに集めるのはやりすぎだし……」

聖王国には徴兵制があり、ほとんどの成人男性が多少の戦闘技能を持つ。そして国境には全長百キロにもなる防衛線が敷かれているものの、その全てが常時稼働している訳ではない。故に、村単位でもある程度は持ちこたえられるような防衛体制を築き上げているのだ。徴兵はその一環であり、エイはそれも利用して戦力の数値化を図っていた。

「…うん、こんなもんかな。にしても、数字にするとだいぶ粗が目立つな…：見るからにカリシヤに偏ってるし。資料はまとめてカルカちゃんに渡して、と。しかし南部の情報が少ないのはいただけじゃないな…：仮にも一国の王なんだから、不透明な部分がそのままだと——」

「エイ様、こちらは終わりました」

「ん、ありがと——えっ？ …：僕がやってる作業のたつぷり三倍はあったと思うんだけど…：僕まだ半分くらいしか終わってないよ？ 六倍差ってやばくない？」

「間違いなくそのいかがわしい映像のせいかと。できればもう少し音を抑えていただけると助かります」

「大丈夫大丈夫。ちゃんと防音対策はとってるから、部屋の外には漏れてないよ」
「そういう意味ではないのですが…」

エイにとって異世界の諸々は、元いた世界と比べると、どうしてもどんぶり勘定の感が拭えない。だからこそ効率化を図るために、例年までの大雑把な資料をきっちり仕分

けているのだ。しかしある程度までは自動化できるにせよ、手作業も多い。

ならば有能かつ暇な人間に依頼しよう——という訳で、エイが頼ったのは『リ・エステイーズ王国』が第三王女『ラナー・ティエール・シャルドロン・ライル・ヴァイセルフ』であった。有能な人間とは基本的に忙しいものだが、彼女はその智謀に対して時間が有り余っている人間の代表である。

「…」

「ん？　ありや、意外……ラナーちゃんもこういうの興味あるんだ」

その天才性ゆえに、エイが多くを語らずとも協力を約束した——もちろん見返りあつてのことだが——ラナー。当然それに際し、聖王国の情報がだだ漏れになっていたが、どちらも気にしてはいなかった。

邂逅から数時間が過ぎ、彼女の作業の速さに慄いていたエイであつたが——合間合間に見ていた『聖騎士キャットファイト』を映す画面へ、ラナーが興味深げに近寄るのを目を丸くした。エイにとつて彼女は『やべえ人』であり、何かに興味を持つということ、あまりにも意外だったのだ。

「女性同士の性交など見たことがありませんから。というより、少し気になっていたのですが——」

「ん？」

「エイ様は、私に対して偏見がありすぎるように思います。そうですね……なにか、人形として見られているような異質さと言うべきでしょうか」

「そう？ うーん……ほら、やっぱラナーちゃんてなんでも手の平の上で転がしてるイメージあるからさ。なのに脳内メーカーはクライム君九十九%だし。とりあえず邪悪な笑みで『計画通り』って言ってる新世界ゴッドガールじゃん？ IQが二十違えば意思疎通は困難って聞くし、人間じゃなくて『ラナーチャン』っていう生き物として見た方がいいかなって」

「……これほど人の話を理解できなかったことは初めてです」

「んなことないっしょ。子供の頃は『なぜこんなことも理解できないの？』って、他人の低能さを理解できてなかったんだろ？」

「……よくご存じで」

「——ラナーちゃん目こわっ！ やめて、そのドロドロした瞳やめて！」

「ふ——ふふ……！ 本当に変な御方です」

美貌に相応しい、輝くような瞳は消え失せ——黒と灰で濁ったような目でラナーは笑う。しかし笑顔そのものは自然な、なんとも度し難い相貌であった。エイからすればそれは『レイプ目』であり、あまり好きではない系統の瞳である。

「……にしても、意外と感情とかあるんだね」

「ですから、偏見が過ぎます」

「ほら、ラナーちゃんって人気あるけど……人によってキャラがぶれぶれだからさ。僕のイメージも固まってないっていうか」

「……？ 市民の方々の、私に対するイメージが……ということでしょうか？」

「や、こつちの話。にしても人間味があるな……実は演技とかじゃないよね？」

「さあ、どうでしょう」

「おっぱい揉んでいい？」

「どうぞご自由に」

「……なんか怖いな。様子見しよう」

顎に手を当てながら、獣のようにラナーの周りをぐるぐる回るエイ。人は得体の知れないものに恐怖を抱くのだ。たとえ知能のレベルが違おうと、アルベドやデミウルゴスの内面は彼にとって既知であるが——反面、ラナーの狂気はいまいち理解できなかったこともあり、懐疑的な目を向けてしまうのだろう。

「おっぱい揉まれるの、クライム君に悪いと思わないの？」

「……私を理解しているようで、理解できていないのですね。私の貞操とクライムへの執着が、どう結びつくのですか？」

「いや……『愛』ってさ、その対象以外への性的嫌悪に繋がらない？ 特に女の子は」

「…そうですか？ うーん……そうですね。私は気にしません……仮に私が犯されている姿をクライムが見て、泣き喚くとすれば——心がぼかぼかします」

「ドン引きだよ」

「私は私に興味がないのです。けれど、『そんな私』をなによりも大切だと訴える、クライムの瞳が好きなんです。こんな私を、世界の何よりも尊いと考える曇りきつた瞳が」「いやいやいや。じゃあなんでその『大切』が汚されて泣き喚くクライム君を見たいのさ」

「その慟哭の深さは、私への執着の深さでしょう？ 汚される私を見てクライムが傷付けば傷付くほど、私を想っていることの証明です」

「いや……うーん……リストカットまんさんの究極系なのか……？ でもあれって自己愛の歪んだ形だし……ダメだ、わからん」

首をひねりながら、目の前の変人を睨む変態。しかし先程までとは違い、エイはラナーを『人間』として見始めたようだ。所詮は文字だけで人を表すことなど出来ないのだと。自分が見たままを信じる——つまりラナーは、意外とありふれたメンヘラなのだ。

「…ちよつと踏み込んでもいい？ もうちよいラナーちゃんのこと知りたくなつてきた」

「はい、どうぞ。珍しく——私も楽しいですから」

「どうも。じゃあ……クライム君が誰かを好きになりました。どうしますか？」

「消します」

「どつちを？」

「もちろん、クライムが好きになった人間を」

「バレると嫌われちゃうよ？」

「私なら、バレないようにやり遂げます。やり遂げられます」

「ふむふむ……じゃあこつちは少しよく考えて答えてくれる？ ——クライム君はラナーちゃんに興味がなくなりました。どうしますか？」

「——……そうですね……それは……」

目を閉じながら、静かに考えるラナー。一分間は経つただろうか、面白そうにその様子を観察するエイへ向かって、ぽつりと零す。

「……私も興味がなくなるかもしれないね。けれど……それは、また灰色の世界に戻るといふことです。絶対に嫌です」

「なるほどなるほど……なら——自分で言うほど『自分に興味がない』って訳でもなさそうだね。ん……ちよつと待ってね、入力するから」

その後も三十ほどの質問を繰り返し、カタカタと端末に答えを入力するエイ。まるで

カウンセラー気取りではあるが、やっていることは実際その通りである。二十二世紀において心の病は人工知能頼りとなっており、療法は人間だが、診断はAIの専売特許であった。

「——ふうん。ちよつと面白い結果だ」

「……？」

「ラナーちゃん、君は……精神年齢がまだまだ子供のままみたいだね。情操教育が上手くいってない」

「……私のような子供は見たことがありませんが」

「知識の多さと精神の成熟は比例しないんだ。それに君が持つある種の残酷さは、他人の不幸を喜ぶ相対的なものじゃなくて、『興味』で虫の手足を千切る子供に近いね。うん……精神的な幼形成熟ネオテニとでも言うべきか……表向きのコミュニケーションは取れるから発達障害ではないんだよな……ちよつと脳のCT取らせてね。ああ、うん……正常だ。なら少なからず後天的な部分はある……直接的な原因は天才性であっても、根本的な原因ではない、と。なら——」

腕組みをしながら思考に耽るエイ。そんな姿は、ラナーにとって新鮮そのものであった。彼女の本質を知る僅かな人間は、不気味なものを見る目を向ける。彼女の上辺しか知らない人間は、親愛と尊敬の目を向ける。

だからこそ、内面を知つてなお好奇の目を向けるエイは、ラナーにとつてあまりに異質だ。『飾らない自分』を他者に見せるのはいつぶりだろうか、暗い瞳と柔らかな口元が相反して浮かび上がった。

「——うん。なあラナーちゃん」

「はい」

「ちよつと旅してみよつか」

「はい?」

「環境つて結構大事だからね。こつちの方は僕がなんとかしとくから……旅行にでも行つてきなよ」

「ふえつ? ——きやあああ!」

エイが指を弾くと、ラナーの足元にぽっかりと黒い穴が空き——彼女は吸い込まれるように消えていった。悲鳴は普通の女の子だな、とぼつりと呟くエイ。

「知識は海みたいなのに、君の世界は水たまりみたいじゃないか。もう少し世界が広がれば——きつとクライム君なしでも、灰色にはならないよ」

ラナーへ任せる予定だった書類の山を、自分の方へと引き寄せるエイ。彼にとつて先程の行動は百%善意である。たとえ黄金の如き美女であつても、“病人”に手を出さないのは、最低限の倫理であつた。

そしてラナーが強制転移させられた場所はというと――

「…ひやえ？」

「…ラナーと申します。ところでそのお顔はどうされたのですか？」

「…ひひやないへ」

「は、はあ…」

――トブの大森林。湖の畔で療養中の…顔をパンパンに腫れ上がらせた、クレマン
ティーヌのすぐ傍であつた。



さて、いまいち幼女成分が足りていないと思う今日この頃。ウレイちゃんとクーデ
ちゃんは、基本的にアルシエママや友達と一緒にいるので、意外とチャンスがないのだ。
もちろん強制的に場を作ることはできるが、エロつてのは一期一会である。なんでもで

きちやうからこそ、偶然の機会を慈しみたいたってのはあるよね。

違法奴隷幼女とかもいるつちやいるんだらうけど、買ったらその後も面倒見なくちゃならないし。僕はできるだけ自由でいたいんだ。身の軽さは尻の軽さと股の緩さに繋がるって言うし。

さて、そんな訳で——やってきましたカルネ村。異世界転移したらまず登場する系ヴィレツジだというのに、随分放置してしまっただけ。まあ行く意味もなかったからだけど。そういやンフィー君って何故かこつちに来てないんだよね……まあクレマンティーヌが死んでない時点で、エ・ランテルの騒動も何かしらの変化はあったんだらうから、当然と言えば当然か。

むしろハムスケがハムスケしてない方が気にかかるんですけど。ギルマスもいまだにミスリルのままだし。というか全然冒険者として活動してないみたいだしな。ホニヨペニヨコ案件は秘密裏にやったみたいだし、色々と変わってきてる感。

まあ結果としてイグヴァルジさんの尊い命が助かったと考えれば、僕の心も晴れやかになるというものだ。とはいえ——ギルマスが『運営』のせいで冒険を楽しめてないとするれば、これは放置できる案件ではない。接触する気はないが、どうにかすべきではあるだろう。

…ま、今日はとりあえず幼女だ。カルネ村の幼女と言えば？ それはもちろん、ネム

ちゃんである。機会があればセックスしたかったのだが、ちょうどアルベドちゃんから連絡がきたので、遙々カルネ村へとやってきたのだ。

伝え聞いたティアアちゃんとプレアデスの戦い——その中で、生えたチンポに夢中になったルプスレギナちゃんの話。基本的にはカルネ村へ常駐している彼女。僕がアルベドちゃんに渡した、いくつもの指輪の存在。

そのほとんどは『リング・オブ・フタナライズ』であり、『上手いこと流してくれ』と彼女に伝えて渡したものだ。どこまで女性NPCに浸透しているかは知らないけど、ルプスレギナちゃんはきつと真っ先に欲しがっただろう。『あつちのエンちゃんを試してみたい』という言葉を、ティアアちゃんはしかと覚えていて——当然、僕にも伝わってる。

つまりルプスレギナちゃんによるエンリちゃんレイプ事件——あるんじゃない？

『今日渡したわ』という連絡があつたため、夜の帳も落ちきつたこの時間……エモット家の寝室をこっそり覗き見てみようという訳だ。

どれどれ……あれ、ネムちゃんしかいない。ん……ん？ 居間にいるゴブリン達が、揃いも揃って机に突っ伏して眠っている。いや、違うな……あれ気絶してるわ。ルプスレギナちゃんの仕業だろうか。

どこかに連れ出したのかな？ どれ、鏡よ鏡よ……いまカルネ村で一番美しい女性を映すんだ。さあ、どこで情事に耽ってるのかな……ん？ あ、僕の後ろ姿が映ってる。

そういうやさつきまでティアちゃんとしてたから、女のままだったわ。やだ、私ったら絶世の美少女。

…なんてボケはいらなから、さつきと映せやポンコツミラー。さ、気を取り直して——おつ、ここは……二軒先の空き家か。そういう村民がそこそこ死んだから、空き家が多いんだった。そんなところでレイプするとか、ルプスレギナちゃんったら鬼畜。まあまだ始まってないみたいだし、少し様子を窺うか。

「あ、あの……ルプスレギナさん、お話つて……？ それになんでわざわざここに……？」
「……ちよつとエンちゃんに頼みたいことがあるんすよ」

「私に、ですか？ それは——ぜひ！ おねがいます！ なんでも言つてください！」
「……っ!? そ、そつすか。じゃ、じゃあ……」

疑問符だらけの表情から一転、ルプスレギナちゃんの言葉に、ずずいと前へ出るエンリちゃん。それが意外だったのか、驚き気味にのけぞる駄犬。やはりチンポが生えたとはいえ、人の気持ちには疎いのだろう。

村を救つた上に碌な対価も取らず、それどころか度々援助をしてくれる足長おじさんア。だというのに、恩返しもままならない——そんな人間の気持ちだが、彼女には解らなかつたのだろう。もどかしい生活を送る中で、足長おじさんの縁者が『頼みたいことがある』などと言えば、それはもう張り切るだろう。ルプスレギナちゃんを通

じて、少しでも恩を返したいと。

——そんな降ってわいたような幸運に、ルプスレギナちゃんが驚いたのも束の間。言質を取れたことにこれ幸いと、その瞳に爛れた感情が揺らめく。素朴な村娘には素朴な村娘の味わいがあるものだ。見慣れている美女姉妹とは違う、生活感に溢れた生々しいエロスというのは、確実に存在する。

「んじや……コレの処理、お願いしてもいいつすか？」

「……へ？——え、あ、え……な、なんで生え……？」

ポロンツ！——って感じで大きめのチンポを露出させるルプスレギナちゃん。それを見た瞬間、エンリちゃんもピシリと固まった。女性だと思っていた人にチンポがある疑問。勃起チンポそのものへの驚き。その他諸々の疑問と混乱が伝わってくる。

「この指輪のせいで生えちゃったんすよ。射精しないと治まらないつす」

「……え、えつと……その、わ、わかりました！ 私にお手伝いできるなら……！」

うーん……指輪のせいときたか。まあ嘘は言っていないな、嘘は。なんか僕のやり方に通じるものがあるけど。さて、そんなこんなで、メイドと村娘の情事が目の前で始まった。

褐色狼娘の巨根が、純朴な村娘のお口へと侵入していく。えづきながらも懸命に舌を動かす献身が、ルプスレギナちゃんの興奮を煽ったのだろうか——おもむろにエンリ

ちゃんの頭を掴むと、激しく腰を動かした。始めた。

「んぶっ!? まっ、るぶひゆれぎ——んぐっ、じゅぶっ、はぶっ……」

「はあ——いいっす! エンちゃん! もつと舌を動かして……喉も締めてほしいっす

! うあ——射精る!」

「じゆる、ん、っ、んぶ——けほっ、こほっ……」

最後に思い切り両手で頭を抑えつけ、喉奥で射精するルプスレギナちゃん。中々の早漏である。しかしまるつきりレイプの場面だな、これは。飲みきれなかった精子を口から垂らし、軽く咳き込むエンリちゃん。エロい。

「は、ふ……き、気持ちよかったですか? ルプスレギナさん」

「……」

しかしそんな自分の状態よりも、相手が気持ちよかったかどうかの方を気遣うエンリちゃん。天使かな? おっ……ルプスレギナちゃんの表情がなんとも言えない感じに変わった。困惑と……ほんの少しの罪悪感かな? うーん……カルマ値から考えるとかなり意外な光景だ。

『虫けらに罪悪感など感じない』。徹底的に下として見ているものに、申し訳ないと思う気持ちなど発生する訳がない。となると今のルプスレギナちゃんには、多少なりともエンリちゃんへの思いやりが生じている訳だ。

これはなんとも興味深い。定められた設定が絶対ではないことの示唆でもあり、NPCが変化する可能性でもあるだろう。百合から始まる優しい世界……いいんじゃないか？ そのままエンリちゃんの服を脱がし始めるルプスレギナちゃんだが、心なしか手付きが優しい。

「あ、あの……その、初めてなので、できれば優しく……」

「……」

くにゆくにゆと慣れない前戯をして、挿入の準備を整えるルプスレギナちゃん。ナザリックのNPCが人間の雌穴をクンニするとか、中々お目にかかれる光景じゃないだろう。なんとも、エンリちゃんのオマンコにバターを塗りたくなる。バター犬ルプスレギナ……ありだな。

そして恥ずかしそうに処女宣言をかましたエンリちゃんの言葉に反応して、犬チンポがひととき大きく跳ねた。急いで急いで、オマンコにチンポをあてがうルプスレギナちゃん。完全に情欲に支配された表情だ。

「んっ……！ は、あ……！ ル、ルプスレギナさん……！」

「うあ……やつぱオマンコって気持ちいいっす……！ エンちゃん、エンちゃん……！」

……はっ！ 見入ってしまった。危ない危ない、今日は覗き見じゃなくてネムちゃんとチヨメチヨメしにきたんだった。寝ている彼女をこっそり連れ出して、エンリ

ちやんとルプスレギナちゃんのセックスをこつそり見せつけつつ、『ネムちゃんもやってみる?』的な作戦である。

…しかしそれをするには、チンポがギンギンすぎてキツイ。幼い子が相手とはいえ、思考誘導の際は自身の冷静さこそが重要だ。男というのは、勃起すると知能指数がガクンと下がってしまうのだ。これはいけない。どうしよう? …おっと、そう言えば目の前にちょうどいい人たちがいるんだった。

—うん。即興だけど、悪くないシチュエーションを思いついた。二人が一息ついたのを見計らって、『マジカル☆イウエン』姿で乱入を試みる。

「——誰っす!」

「こんばんは、ルプスレギナ・ベータ。僕が誰かと言うならば——そう! その指輪を間接的に奪われた……『マジカル☆イウエン』その人である!」

「…なっ! と、取り返しにきたっすか?」

「イエス。勝者であるエントマちゃんならともかく、おめおめと射精させられた駄犬が、なぜその指輪をつけてるのかな?」

「ぐっ…! い、妹のものは姉のもの、姉のものは妹のもの。それにこれは一度上司に渡した後、改めて頂いたものっす」

「指輪を持つ資格があるかどうかは僕が決める……さ、勝負しようかルプスレギナ」

「……の、望むところっす！」

なんでこんなところにいるかとか、その辺を突っ込んでこないところが駄犬たる由縁なのだろうか。パチクリと目を瞬かせるエンリちゃんが、中々に可愛い。オマンコから流れ出る精液が、卑猥さを助長している。

「あ、あの……すみません、どういふ状況なんでしょうか……？」

「その指輪は元々、僕のものなんだよ。それを取り返しにきたって状況」

「人間が悪いっすね……正当な勝負の結果っすよ」

「それはそうだけど——勝負の結果、奪ったなら……勝負の結果として奪われることも覚悟すべきだね」

「……道理っす。なら——」

「あの、ルプスレギナさん。その指輪は呪いのアイテムじゃないんですか……？ いまの話だと、知ってて嵌めたように聞こえるんですけど……」

「あわっ!? え、えと……その……」

「彼女は生えたチンポの気持ちよさに魅了されたのさ。だからこう思った——『エンちゃんでも試してみたいっす』……っつてね」

「……本当なんですか？」

「あ、や、えーつと……」コホン。実はその通り！ 気持ちよかつたっす！」

「開き直らないでください！ う、ううゝ……！ 初めてだったのに……」

「ほんと、酷いよね。こりやあエンリちゃん……ちよつとばかり仕返ししても、バチは当たらないぜ」

「へっ？」

「あぎやつ!? なな、なんすかこれ！ 動けないっす！」

ルプスレギナちゃんに金縛りの術をかけ、指輪をスツと外す。そしてエンリちゃんの手を取り、そのまま右手の中指に嵌めて差し上げた。その途端、エンリちゃんはエンリさんになり……そして先程までの性的興奮からか、いまだにびしょ濡れのオマンコを晒す駄犬が目の前に一匹。

「喧嘩両成敗って言うし、ほら……エンリちゃん、腰をもつと前に」

「え？ あ、や、え……」

「——んうっ!？」

レズセの介助って結構興奮するな。エンリちゃんのおっぱいを揉みつつ、後ろから抱きつくように押して——童貞を捨てさせた。訳のわからないままの挿入ではあったが、チンポが雌穴に埋まった瞬間、エンリちゃんの体がビクンと跳ねた。

動かす余裕もないのか、荒い息を吐きながら、快感に抗うようにして小刻みに震えている。そのまま見てる分にもいいんだけど……やつぱセックスの醍醐味って、オマンコ

でチンポをこしこし擦ることにあると思うんだよね。

というわけで、ふるふる震えてるエンリちゃんのオマンコに挿入してみた。初体験だというのに、挿入される感覚と挿入する感覚の二つを味わうって、中々得難い経験だろう。ルプスレギナちゃんの膣壁の感触と、自分のオマンコに侵入されるチンポの感触。

脳が処理しきれなかったのか、叫ぶような喘ぎ声と共に、精液と潮を吹き出して絶頂に至ったようだ。しかし構わず、エンリちゃんのオマンコを犯しぬく。うむ、やはり極上の穴だ。霸王は伊達じゃない。

「あがつ、うっ、あうっ——ひゃ、また射精る……もう、わ、わけわかん、ひゃい、よう……！んきゆうっ！」

「エ、エンちゃん、出しすぎっす！も、もう入らな——んうっ！あぐっ」

指輪から常に精液を補給されるから、漫画みたいな精液ボテ腹もお手の物だ。ぼっこり妊娠したようなルプスレギナちゃんは、とてもエロい。そしてもう僕が動く必要もないくらい、エンリちゃんの腰の動きも激しくなってきた。

前へ動かせばチンポが快感を得、後ろへ引けばオマンコが気持ちいい。きつともう、普通のセックスじゃ満足できなくなるんじゃないやなからうか。ああ、そういえば……もともとビッチの素質に言及されていた娘でもあったな。

ンフィー君が精力増強の薬を作らざるを得ないほど、エンリちゃんがセックスにハ

マったってちらつと書かれてたし。

…ん？ あ、そういえばンフィー君のこと忘れてた……忘れてたけど、別に寝取りつて程でもないか。エンリちゃんも、現状でンフィー君のことが好きかって言われるとそうでもないだろうし。関係が進んでたならアレだけど、片思いの男性に遠慮してたらセックスなんて出来ないぜ。まあこの場合は——『寝取り』というか、『寝取らせ』なのかもしれないけど。

明日以降、毎日セックスするであろうエンリちゃんとルプスレギナちゃんを思うと、中々興奮するな。人間と人狼のハーフだらけになるカルネ村……いいと思います。

「はひい……」

「お疲れ様、エンリちゃん。ルプスレギナちゃんのこと、許せそう？」

「え？ あ……えっと、はい。その、これは……ちよつと我慢できないのも、あの、わかると言うか……」

「そ、そつすよね！ エンちゃんならわかってくれると思つてたつす！」

「…あ、あはは……その、えっと……あ、明日からも……お手伝い、した方がいいですか？」

「…っ！」

もじもじしながら誘い受けの文句を発するエンリちゃん。コクコクと頷くルプスレ

ギナちゃんが妙に可愛い。しかし、一応指輪をかけた勝負の最中だということを忘れていないだろうか。エンリちゃんと位置を交換して、褐色ボテ腹を優しく撫でる。

「…じゃあ明日からも素敵な性生活を送るために、頑張つて勝たないとね」

「…へ？ あ…：…ちよ、ちよつと待つつす！ いまは腰が抜けて——」

「真剣勝負に待つたはしないよ」

「わぎや——んあ、つ、ら、らめ——」

やはりルプスレギナちゃんにはワンワンスタイルが似合う。艶めかしい褐色の尻を強めに掴みながら、抜かすの三連発で雌穴にたつぷり射精した。途中でエンリちゃんも乱入してきたので、二人がかりで穴という穴を蹂躪し尽くす。朝方には、褐色の肌も白く染め上げられていた——そんな日のことであつた。

…あ、ネムちゃんのこと忘れてた。

13話

トブの大森林、南端——カルネ村から目と鼻の先の距離で、エイとルプスレギナは和やかに談笑していた。二人だけを見れば、それは男女の逢い引きとも見て取れただろうが、しかし二人のすぐ近くには多数の死体が所狭しと転がっていた。血生臭さが漂うこの場で、平然としている彼等こそが——下手人で相違ないだろう。

「これめっちゃ美味いっすね！」

「ポテチは『関西だし醤油』が至高だからね……まあこんなところで食べて美味しいと言える感性はわかんないけど」

「……？　なんでっすか？」

「僕はグロ耐性あんまないんだよ。それ抜きにしても、食事は食事で集中したいし……ご飯食べながらフェラさせる男の神経とか、一生わからない自信があるね」

「ご飯と一緒に……？　そういうのもあるんすか……こんどエンちゃんにやってみらうっすー！」

「……まあ好き好きだけどき。それにしても——ザイトルクワエの影響をもうちよつと考えるべきだったか。ちよつと反省」

「ザイトルクワエ？」

「そそ。ユグドラシルのレイドボス……まあ適正はレベル八十以下だから、そんな脅威でもないけどね。プレアデスじゃちよつときついかな？ ……プレアデス」ならなんとかなるだろうけど」

「ウンはなんでも知ってるんすねー」

「おいやめろ、ウンコみたいに聞こえるだろうが。エイにして、エイに」

魔樹の復活はラキユースの活躍により阻止されたが——天を貫く程に巨大な化け物は、森のほとんどから臨むことができた。当然、それによる恐怖で生存本能を刺激された森の住人はてんでこ舞いである。一も二もなく逃走した者、諍いをやめ、団結して事にあたろうとする者。巢の中で震えて引き籠もった者と、それぞれ普段とは違う行動を強いられた。

そんな騒がしい森の状況に、カルネ村が平穏でいられる筈もなく、ありとあらゆる危険が降り注いだ訳だが——その全ては、水面下で抑えられた。もちろんエイとルプスレギナの活躍によるものであり、村の住人たちは危険など知る由もなく安全を謳歌していた。

「それにしても、イウエンが『ウンⅡエイ』だとは思わなかったすけど……一つ聞いていいですか？」

「いや、並べ替えただけなんだから気付けよ……で、なんだい？」

死体の上に座り込みながら、ポテチを口に放り込みつつエイに問いかけるルプスレギナ。あまり優雅な座り方とは言えず、スリットからは下着もちちらちらと見えていた。血の匂いに刺激されたせいかな、性欲が少々高まっているエイには目の毒である。

「見すぎつす」

「だってエロいんだから仕方ないじゃないか……それより聞きたいことって？」

「…至高の御方々が帰ってこないって——ほんとつすか？」

「ああ——うん、事実。ルプスはもう聞いたんだ？」

「アルベド様がシモベを選別して話してるつす。一定以上の地位にいる者にしか話さないとは言ってたつすけど……」

「プレアデスはお眼鏡に適ったってことかい？」

「…派閥より、個人で見てると思うつす。ナーちゃんとシーちゃんには伝えてないみたいつすから」

「へえ。まあナーベラルちゃんは隠し事できなさそうだしな……シズちゃんはシヨックがでかいからとか？ 顔には出なくても繊細みたいだし」

「…ほんとになんでも知ってるんすね」

「運営だからね」

物憂げな表情で俯くルプスレギナ。既に諦めてはいたのだろうが、断言されてしまうと堪えるものがあるのだろう。そのまま数分がすぎ、やがてヤケ食いのように残ったポテチを流し込み、立ち上がった。

「ならせめて、アインズ様がお隠れにならないよう頑張るっす!」

「うん、その意気だ。シモベの中だったら、きつと君は重要な立ち位置になると思うぜ」
「へ? なんてっすか?」

「ギルマスが欲しいのは『シモベ』じゃなくて『友達』だから。その垣根を超えられる——『越えようと行動できる』シモベってあんまりいないでしょ。ルプスはその辺、得意そう」

「——私の忠誠心が低いって言ってるんすか?」

エイの言葉に、喉の奥で少しだけ唸り声を上げるルプスレギナ。獣のようなそれは、やはり彼女が人間以外であることを——そして自身の忠誠を他者に疑われることへの怒りを如実に表していた。しかしそんな彼女の様子を気にすることもなく、飄々と答えを返すエイ。

「『忠誠』って人によって多少異なるんだろうけどさ……やつは重要なことは、主人の望みを叶えること……叶えようと努力することだと思うんだよね」

「…」

「気兼ねなく付き合える関係を望まれてるのに、『私はシモベで御座います』と、『恐れ多く御座います』と。まあそれも忠誠なんだろうけどさ、本人からすれば寂しいもんだと思うよ。その辺りを柔軟に考えられる『忠誠』が、君にはあるって言ってるんだけど……買い被りかい？ ルプス」

「…アインズ様は、本当にそれを望まれてるんすか？」

「望んでいるかどうかまではわからないけど、君らの重すぎる忠誠を心労には感じてるね。アルベドちゃんにも言ったんだけど——あの人の中身は、割と普通の人だから」

「そんなわけないっす！ アインズ様は至高の御方々を纏められ、最後までナザリツクに残ってくださった慈愛の御方……！ その智謀も——」

「だからそれが重いつて言ってるのさ。たとえば君が他の姉妹にこう言われたらどうする？ 『ルプスレギナ様は我等の姉妹なれど、本来は会話すら許されぬ御方……！ 普段の砕けた態度も私達を慮つてのこと……！ ありとあらゆる事態は、まさにルプスレギナ様の掌の上！』って。しかもずっとそれが続いたら？」

「それは……つまりアインズ様を過大評価しすぎることっすか？」

「まさにそうだね。彼は偉大じゃないし、飛び抜けた頭脳なんてのを持ち合わせてもいない。君達を創った造物主とはいえ……」

「——黙れ」

死体から飛び退いたルプスレギナの瞳には、完全な敵意が宿っていた。縦長の瞳孔は殺気を剥き出しに、たとえ敵わずとも、決死を以つて一矢を報いる気概に満ち満ちていた。犬歯を見せながら唸る彼女を見て、エイは目を細め——指先で宙空を弄った。

その瞬間、ルプスレギナの瞳は驚愕に揺れた。敵意は雲散霧消し、起きた事態を受け入れられずに棒立ちとなる。

「な、なん、で…」

「——まあ、こういうことだよ。理解できた？」

なぜ彼女が動けずにいるか。それは、エイの体から感じ取れる『支配者の気配』によるものだ。ナザリックのシモベたちは、例外なく『至高の四十一人』の気配を感じ取ることができる。そしてナザリックに連なる者——要は同僚や配下なども識別できる。

そして現在、その感覚器官がエイを『至高の存在』であると訴えていたのだ。彼女の混乱も無理からぬことだろう。加えて、NPCは基本的に『支配者』を敬うように、敬愛するように設定されているのだから。

「…解除、と」

「あ——え…」

「一時的にナザリックのメンバーになってみた訳だけど……さっきの瞬間、君から見た僕はどうだった？」

「…敬服すべき御方……だったと思うっす」

「だよね。でもその前までの僕は、どういう人間だと思ってた？」

「ドスケベで女装癖のある、どうしようもない人間だと思ってたっす…」

「そこまで!? ……いいやまあ……とにかく、そんな印象ですらあったのに——『ナザリックの支配者の一人』になった瞬間、素晴らしい存在に映ったわけだ。どれだけ『至高の存在』にフィルターがかかっているか、自覚できた？」

「…っす」

「なら、その認識がどれだけ重荷かもわかるだろう？」

「…ど、どういふことっすか？」

「僕の中から見てもね、ギルマスは虚栄心の強い人じゃない。ならなぜ偉大な支配者を装っているかって言うと……まあ君達の『期待』に応えてる訳だ。『我等の支配者であれば、世界で一番素晴らしい御方である筈』——なんて、一種の脅迫とも言える期待に。ギルマスは君達に失望されないよう頑張ってるんだらうね……健気だと思わないかい？」

「…っ！」

「でもそんな強がりを何年続けられる？ 何十年、何百年……アンデッドの精神抑制つてのは、不変を意味してる訳じゃないぜ。永く在ってほしいと望むなら、求めるばかりじゃないだろうに」

唇を固く結びながら、ルプスレギナは顔を伏せる。言い返したい言葉は山程あれど、そのどれもが伽藍堂がらんどうの虚勢でしかない。エイの言葉が真であると、他ならぬ彼女の心が認めてしまっているのだろう。

「…というような趣旨のことをアルベドちゃんに伝えといたんだけど、聞いてないみたいだね」

「…へっ?」

「いや、別に論すつもりもなかったんだけど……ただね。手をこまねいてると、ギルマスの心をアルベドちゃんに全部持つてかれるよ……っつて言いたかっただけ。たぶん実際のギルマス像を自分だけが知ってる状況にして、『私だけがアインズ様のお心を全て理解しておりますわ!』って懐柔していくつもりなんだろうね」

「なっ…!?!」

「ないと思う?」

「やりかねないっす!」

「だろ? ちよつとアンフェアかなって思ったからさ。まあそれでギルマスが安定するなら良いのか、それともずるいと思っちゃったりするのか……僕はNPCじゃないからわかんないけどね。実際のところ、どう思うんだい? アルベドちゃんにギルマスを独り占めさせたら」

「ずるいつす!」

「なら頑張りな。そのためのアイテムもあげよう」

「……………メガネ?」

縁の厚い、赤色のメガネを渡されたルプスレギナ。それはとある特殊な光を可視化する、エイ謹製のマジックアイテムである。守護者統括が最近になってつけ始めたものと酷似しており、ルプスレギナにも見覚えがあった。

誰もいないというのに、何故か耳打ちでゴニョゴニョとメガネの説明を始めるエイ。様式美というやつだろうか。新しいオモチャを手に入れたように、目を輝かせるルプスレギナ。そしてそれを満足気に見たエイは、ようやく「本題」へと入る。

「さて、では……『友人』と『メイド』。これは両立できるものであり、メイドとして生み出された以上、君はそうである必要がある」

「……?」

「アルベドちゃんやらシャルティアちゃんは、友人ではなく妻の座を狙ってる訳だけども——やっぱ物理的にブツがなければ始まらないよね。だから僕は、ギルマスにそれが生えてくる指輪を、アルベドちゃんに渡した訳だけども……」

「……ん? それってこの指輪じゃないんすか? 量産できたとかで頂いたつすけど……」

「や、それは女の子に生える指輪。そもそも物が違うよ」

「……つてことは……昨日の一件はつまり……茶番つてことに……？」

「イエス！」

「噛んでいいつすか？」

「どうぞご自由に」

晴れやかな笑顔でサムズアップするエイへ、身体中に手当たり次第に噛み付くルプスレギナ。この世の生物を『弄り役』と『弄られ役』にわけるとすれば、彼女は間違いなく前者である。だからこそしてやられた事實に、釈然としないものを感じるのだろう。「話を戻すけど……そう、メイドとしての役回りの話だね。ギルマスはアンデッドだからこそ、美女や美少女を侍らしつつも手は出さない訳だ。しかしアイテムによるものはいえ、生えたなら……性欲は復活する。というより、あれには多少の興奮作用も備わってるからね」

「えーつと……？」

「君も生えた時の自分を思い返せばわかるだろ？ ギンギンになってる時に可愛い女の子が傍を通れば？」

「やりたいつす！」

「そう。そして君も含め、プレアデスの女の子は超美形だ。となると？」

「——っ！ ア、アインズ様の……お手つきになれるつすか？」

「可能性は高い。そうになると、当然『ご奉仕』しなきゃいけない訳だけど……そこで上手くできなきゃ……」

「次はない……つてことつすね」

こくりと頷くエイ。そして深刻そうな表情のルプスレギナに、いよいよ最大の目的を話し始めた。『プレアデスエロ化計画』の、その全貌を。しかし——なんとという悲劇か、その計画は始まりの時点で破綻していたのだ。

「そこで君だよ！ そのチンポでもつて他の姉妹のテクを上げていけば……君も気持ちいいし、結果的にギルマスも大満足だぜ！——ついでにちよつと動画にとつてくれれば僕も……」

「や、それはちよつと無理つす」

「——な、なんで？」

「いや、だつて姉妹つすよ？ ……エイには姉とか妹とかいかなかったんすか？」

「僕？ ……『前』の『前』にはいたね。お姉ちゃんが」

「やりたいと思うつすか？」

「……いやー、ちよつときついつす」

「つすよね。いくら可愛いつたつて、姉妹は無理つす」

「うーん……なるほど。確かにそこは盲点だったな……」

人には「線引き」がある。倫理と言い換えてもいいそれは、個人個人によって上限は様々だ。魅力的な女性だけれど『人妻』だからアウト。魅力的な上に『人妻』だから逆に良い。

可愛いけれど『幼女』だからアウト。可愛くて『幼女』なんて最高。やりたいけど男の娘だったから残念。ヤろうとしたら男の娘だったとか神。そういった、人によつての線引きは数多存在する。

エイにとつてのそれは、余人には理解し難い部分がある。例えばプレアデスで言えば——ルプスレギナ・ベータ以外に手を出すのは『なんか悪い気がする』という、適当な線引きである。しかし彼にとつての『なんとなく』は、ともすれば人生に直結するほどに重要なものでもあった。

そして適当だからこそ、ルプスレギナが他の姉妹に手を出すのはセーフという、普通の人間にはいまいち理解しにくい方向へと誘導し、せめて動画だけで楽しもうという魂胆であつたのだ。

「ま、そんなら仕方ないか。ルプスとセックスできただけでよしとしよう」
「なんか釈然としないっすけど」

「ふふん……僕ってやつは、エッチなことが好きな知り合いが多いんだぜ」

「……ん？ どゆことっすか？」

「エロが好きなのは友達を連れていけば、そのうち世界はエロで溢れる……馬鹿な妄想だと思ukai?」

「…っ!」

「とりあえず、レイプシチュウが好きなのは聖王女様と……アナル弄りが好きな女の子を紹介できるけど」

「——私とエイは親友っす!」

「おお、我が友よ!」

死体の山の傍で抱き合う二人はまさに変人で——そして変態であった。



トブの大森林——その中心にある湖は、ひょうたんのような形をしている。ざっくば

らんに分けるとするならば、北側がトードマンの縄張り——そして南側が蜥蜴人の縄張りである。そんな湖の南端で、クレマンティーヌは回復に努めていた。

「いちち……」

「動かないでくださいな」

「んむ……」

刻んだ葉草を腫れた顔に貼り付けていくのは、一目で高貴な存在であると理解できる王女様。エイによつてクレマンティーヌのところへ飛ばされた彼女は、目的が理解できないながらも、とりあえず怪我人の治療へと着手したのだ。

「これほんとに効くの？」

「本来はすり潰すものだったと記憶していますが、器具もありませんし……でも、やらな
いよりはマシでしょう」

「……たく、あの糞女……ま、結果的に戦争になりそうだし？　くつ、ふふ……！　あー、
面白いことになりそう」

「戦争……ですか？」

「そーそー、聞いてよ！　法国と評議国が——や、たぶん法国と竜王かな？　戦いおっ始
めんの！　わくわくするよねー」

「……そうなんですか。リ・エステイーゼにまで被害は……いえ、確実に及ぶでしょうね」

「人類全土巻き込まれんのも面白そうっちゃ面白そうだけどね……ま、それなりのことと落とし所はつけるだろうけど」

「そうなんですか？」

「あつは——頭が良すぎて飛ばされたとか言つてた割に、察しは悪いじゃん」

「『予測』とは前提となる情報があつて初めて成り立つものです。なにもない状況から推測できたなら、それは未来予知の類ですね」

「ま、それもそつか。なんつーか……：法国は本気で評議国に敵対する気概なんかないし、あつちもあつちでかなり穩健派つて聞くし。となれば神官長たちはかなり分の悪い条件でも飲むだろうし……：まあ番外席次の身柄要求と、神の遺産の一部譲渡くらいつてとこかな。後は折り合いつけるための小競り合い……：戦争なんてそんなもんでしょ？」

「ええ、その通りです」

身も蓋もない会話をしながら、治療は続く。膝枕をされながら意気揚々と喋るクレマントリーヌは、それだけ法国が被害を受ける事態が楽しいのだろう。偶に薬草が口の中に入り咽るが、それでもお喋りは止まらない。

「しつかし……：私のとこなんか飛ばしてきて、どういうつもりなんだか」

「なにか、そういうった専門家様ではないのですか？」

「んー？ 絶望させるのは得意だし、心が壊れるのを見たりつてのは楽しいけど——ど

う考えても人選ミスでしょ」

「そうですか……その割には、私に優しくしてくださいますが」

「借りを返してるだけ。あいつを利用して言えば聞こえはいいけどさー、結局ただ守ってもらっただけだし。あんたの世話で返せるなら、まあ悪くないでしょ……あいつもそれが狙いだろうし。つたく、軽薄なんだか細かいんだか……」

あくまで願いを叶えてから、納得ずくのセックスをしたい。貸しの押しつけで、引け目の積み重ねから体を許すのは「違う」——そういうことなんだろうと、クレマンティーヌは解した。『王女様の世話で貸しはチャラにしてやる』と。やりたいのかやりたくないのか、『変な奴だ』と彼女は皮肉げに笑った。

「さつてと……法国はもう私なんか結構てる暇ないだろうし……『ぶれいやー』の監視もなんか無くなってるみたいだし、やっと森から出られる……」

「よくわかりませんが、大変だったんですね」

「ほんとにねー。とりあえずポーシヨンか神官探すかしないと、この顔じゃキツツイつて」

「ええ。私もクレマンティーヌ様の素顔を見てみたくなります」

「あんたほどお綺麗でもございませぬけどねー」

「それは仕方ありませんわ」

「おい」

「冗談です」

腫れは治まらないものの、ようやく痛みが引いてきたこともあり、クレマンティーヌは行動を開始した。現状の彼女にとつてもっとも注意すべき相手は、法国でもなくアイズでもなく、秘密結社『ズーラーノーン』である。

彼女がエ・ランテルでの事件の首謀者『カジット・デイル・バダンテール』へと協力していたことは、ズーラーノーンも把握している。しかしそれが失敗し、首謀者の死亡は確認されても、彼女の情報が一切上がってこないとなれば——追手をかけるのは明白。

クレマンティーヌはズーラーノーン幹部『十二高弟』として在籍してはいるものの、秘密結社とはいえ所詮は「組織」。派閥での争いや諍いなどは当然のように存在し、その性格故に煙たがられていた彼女を蹴り落とした人間は多かった。となれば、捕らえられた時点で釈明の機会を封殺される可能性は十二分にある。彼女が仮宿に戻る必要性は皆無だ。

ズーラーノーンの拠点は主に帝国、そしてそれより東——小国家群が主たる活動の場だ。故にクレマンティーヌは湖の縁をなぞるように西へ進み、リ・エステイーズ王国を目指すことにした。ラナーを最終的に送る場所というのも、ある程度は関わっているだ

ろう。

「…あん？ ……こんなところに集落？ 物好きだねー」

「森の湖には蜥蜴人が住んでいると聞いたことがあります。おそらくはそれでしよう」

「ふーん……ポーション持つてるかな？」

「…そのような技術があるとは思えませんが」

「うわ、出た出た王国エステイザつ子の偏見。あんたらが亜人如きなんて言ってられるの、私達のおかげだからねー？ ちよつと人の領域出たら、人間なんて家畜でしかないってのに」

「別に見下しているわけではないのですが……というより、法国出身の方に言われると物凄く違和感です」

「法国はそうすることで強国を維持してんの。そつちは単なる自尊でしょ」

「…耳が痛いですね」

そういつて、ズカズカと蜥蜴人の集落へと踏み込んでいくクレマンティヌ。ラナーがキチガイを見たように必死で止めるが、意味をなさない。顔を腫らした女戦士の背中にしがみつき、ズルズルと足を引きずる王女——そんな出で立ちで現れた二人に、集落の蜥蜴人が壁を作るようにして集まってくる。

「…何者だ！」

「なにになに？ ものもののしー。二人ぼつちの侵入者なんかには、こんな集まっちゃってさ」

「既に見張りから通達が入っていたのだろう。毛色の違う戦士たちが続々と近寄ってくる。蜥蜴人は見た目に反し、魚を主食とする穏やかな種族だ。仮に人間が迷い込んできたとしても、追い払いこそすれ襲うことはあまりない。だというのに、彼女達の前に集まつてきた蜥蜴人は非常に殺気立っていた。」

そんな中、蜥蜴人の集団を割るように出てきた人物が六人。黒い鱗を持つ、威風堂々とした蜥蜴人。氷の塊のような、奇妙な剣を持つ蜥蜴人。片方の腕だけが異様に太い、巨軀の蜥蜴人。頭の前から背にかけて赤髪を携えた、骨の鎧を着込む蜥蜴人。真っ白な鱗を持つ、白蛇を思わせる蜥蜴人。そして斑色の鱗を持つ、青いモヒカンの蜥蜴人。

「この人数を前にして、肝の据わった人間だな……人間だよな？ 顔はゴブリンに似ているが……」

「腫れてるだけだつーの。殺すぞ」

「……今すぐ出ていけば殺しはしない。今は皆、あの化物のせいで殺気立っている……留まるというなら、命の保証はせんぞ」

「……殺気立ってるうー？ く、ひゃひゃつ……アツハハハハ！」

「クレマンティーヌ様？ 皆様、かなり興奮状態にあるようですし……治療は諦めて先を急ぎましょう」

「ああ、ほんと世間知らずのお嬢様ね……くく、あれは殺気立ってんじゃなくて——ビ

びってんのよ」

クレマンティーヌの言葉を聞いた瞬間、蜥蜴人からの圧力が数倍にも変化する。野生に生きる以上、蜥蜴人は多かれ少なかれ「強さ」への信仰を持っている。五つある部族の内、その一つは強さのみを崇拜しているほどだ。それをあろうことか、外部の人間に侮辱されたのだ。この時点で、普通の人間であれば生きて帰れる芽はない。

——普通の人間なら、ではあるが。

「イカツイのが雁首揃えて『ボク怖いでちゅー』ってさあ、くひつ——殺気立ってんなら殺しにすればー? ……雑魚共お!」

「——なっ!」

前に進み出ていた、六人の蜥蜴人——各部族の族長と、一人の「旅人」。本来であれば、同種族であるとはいえ、部族間での交流など行わない彼等。しかし先日現れたザイトルクワエの威容は、そんな部族同士の壁を粉々に砕いた。

どんな融和政策よりも効果がある、『共通の強大な敵』という認識。彼等からすれば、ザイトルクワエは突如表れ——そして突如として消えたにすぎない。またいつ現れるともしれないそれを、とにかくは部族の族長達で寄り集まり判断しようと、彼等は結束したのだ。

そんな折、クレマンティーヌが侵入者としてやってきたのである。まさに踏んだり

蹴ったりというやつだろう。不幸中の幸いと言えば、彼女の武器が殴打武器のみであったことだ。エイとの最初の邂逅時に、ステイレットを四本全て消し飛ばされたため、彼女の武器はいまだにこれ一本である。

「は——っはあー！」

「ぐっ、なんだこの強さ——！」

巨軀の蜥蜴人——ゼンベル・ググーが、飛びかかってきたクレマンティーンの一撃を右腕で受け止め、しかしただ一合の元に骨を砕かれた。モンクである彼の最大の武器であり、最硬の盾である右腕が、だ。

次に標的となったのは、斑色の鱗を持つ蜥蜴人——スーキュ・ジュジュ。彼が得手とする攻撃手段は『投石』であり、元より近接戦闘は苦手としていた。その上、この人数を相手に人間が向かってくるなどとは露程も思っておらず、結果として腹部へ強烈な衝撃を受け昏倒した。

そのまま流れるように次の相手へと移ったクレマンティーンだが、結果としてそこで攻撃の手を止めることとなった。その相手は骨の鎧を着込んだ蜥蜴人——キュクー・ズーズー。彼が纏う鎧は蜥蜴人の四至宝の一つ『白竜の骨鎧』であり、その硬度はアダマントタイトにも匹敵する魔法の防具だ。

知力と引き換えに凄まじい防御力を引き出すこの防具は、かつて蜥蜴人で最も聡明と

言われた彼の智慧を奪い、そして正しくその真価を發揮していた。ユグドラシルの法則を当てはめるのならば、『呪われた装備』とは——場合によっては込められたデータ量を上回り、ワンランク上の性能を發揮する。

「——砕けない……？ 相当なアイテムだねー。それにどっちも死んでないか……割と頑丈じゃん。全員このレベルならちよつと厳しいかな？ ……ま、あんただけだろうけど」

「……取引だ！」

「あん？」

「先程、そちらの女が『治療は諦めて』と言っていた。察するに、その顔の怪我を癒やしたいのだろう！ 俺は治療の魔法が使える……治療する代わりに矛を収めてくれないか？」

「正気かシャースーリユー！ そいつは俺達を侮辱したんだぞ！」

「あの化物がまた出かねない状況で、これ以上戦力の低下は避けたい。そもそも——勝ち筋が見えん。後ろの女が同じくらしいの実力だとすれば、全滅は必至だぞ。俺は族長として、部族の者達の命を取りたい」

「ぐっ……！」

黒い鱗の蜥蜴人——シャースーリユー・シャシャの言葉に、うめき声をあげるゼンベ

ル。碎けた腕の痛み故か、それとも族長としての責任感か、ズサリと地面に座り込んだ。クレマンティーヌの圧倒的な強さに、場が静まり返る——その瞬間。後方で静観していたラナーから小さな悲鳴が上がった。

「——武器を捨てろ！」

「げっ……マジ？」

「も、申し訳ございません……」

振り返ったクレマンティーヌの目に入ったのは、戦士の一人がラナーに剣を突きつけている光景だった。そもそも「誰かを守る戦い」などしてこなかった彼女は、戦闘に入った時点でラナーのことなど忘却の彼方である。

一応お守りを引き受けただけに、どうしたものかと立ち尽くすクレマンティーヌ。人質のために自分を顧みないなどという、殊勝な人物ではないが——とりあえず武器は捨てるかと、モーニングスターを数メートル先へ放り出した。武器がなかるうが、所詮は彼女にとって己の足元にも及ばない巫人の群れだ。最悪でも逃走くらいはできるだろうと踏んでの、義理と保身に揺れた選択肢であった。

しかしそんな彼女を見て、初めて「本当」の驚きを見せたラナー。親ならば理解できる。騎士ならそれが責務。王国民ならば、あるいは。しかしクレマンティーヌはラナーに縁もゆかりもなく、大した義理も絶対の義務もない。異性ですらないのだから、魅力

に惚れたというわけでもない。だというのに、この状況下で武器を捨てたのだ。なぜ私のために自殺行為を——という勘違いをしていた。

——しかし戦士の行動を阻んだのは、誰あろう蜥蜴人その人であった。

「やめろ！——お前のその行動は……祖霊に誇れるのか！こんな状況で拾った勝利を！俺達が喜ぶと思うのか！」

吼えるように放たれた言の葉は、静かな森へ響き渡った。氷の剣を持つ蜥蜴人——ザリユース・シャシャ。ただ一人、族長ではないというのに前へ出た蜥蜴人だ。四至宝『フロスト・ペイン』を持つ勇者であり、帰還した“旅人”の一人である。

そんな彼の覇気に気圧され、戦士の手から剣が滑り落ちる。ほっと一息ついたクレマントリーヌと、そんな彼女をじつと見つめるラナー。ひとまず——戦いは終わったようだ。

「…失礼をした。手当をしよう、こちらへ」

「ついでに食料かなんかない？ あ、人肉は勘弁ね」

「我々は基本的に魚しか食わん……というか、あまり余裕はないのだが」

「お気になさらずー」

「むう……それはこっちのセリフではないか？」

「じゃあ適当にその辺で取ってくる」

「ま、待て！ 今は弟が養殖というのをしている……あまり荒らされたくないんだ。こちらで用意する」

「よろしくー」

傍若無人なクレマンティヌの態度に、あからさまな態度のため息をつくシャーズーリユー。弟であるザリユースをちらりと見ながら、頷きあつて湖の方へと向かう。そしてそんな彼等を見て、ラナーは後ろについていく。

「……ん？ なぜついてくる」

「少し興味がございまして。なぜあのまま私を人質にし続けなかったのですか？」

「……あの時に言った通りだ。あのような方法で勝ちを奪えば、祖霊に顔向けができない」
「祖霊……ですか。あなた方の信仰はそこにあるのですね」

「人の世界は——四大神、だったか？ だが俺達は遠く歴史を重ねてきた祖霊こそを大切にするんだ」

「あら、よくご存知ですね」

「俺は“旅人”——外の世界を知りたくて旅をした、蜥蜴人の中でも変わり者だ。だが、そのおかげで養殖というものを知ることができた。かつて起きた部族間での戦争も……この技術があれば、せずにすんだのではないかと思う。過去を悔やんでも仕方ないが、教訓は活かすべきだろう」

「…」

「——さ、ここが生け簀だ。一人一匹で足りるか?」

「いえ、二人で一匹で充分です。ところでこの生け簀ですが……あまり水質に気を使っておられません?」

「……どういうことだ?」

「餌の食べ残しや排泄物、死骸の堆積による水質汚染は無視できません。特に稚魚の生存率が大きく変わってきますし……」

「——ま、待て。書くものを持つてくる」

湖の縁でしゃがみ込むラナー。本で得た知識とはいえ、ザリユースが記憶を頼りに手探りで作成した生け簀よりは、よほど実践的だ。慌てて家に戻る彼をクスリと笑い、先程の一連の流れを思い返す。彼女は、人の善も悪も理解しているつもりだった。むしろ理解していなければ、遠隔で人を操ることなどできよう筈もない。

ただ彼女にとって予想外だったのは——当事者になった際の感情の振れ幅。たとえ暗殺者が目の前に現れても、心を動かすことなどないだろう。そう思い込んでいた彼女の心は、意外にも命の危機に対し少なからず動揺し、救い出そうとしてくれた人物への、憧憬にも似た感情を自覚した。

甘味や辛味、酸味という味覚を知っている上で、リングゴの味を説明されたとしよう。

それが甘酸っぱいものであると彼女は理解し、知った気になっていた。しかし食べた際の感動など、説明だけで得られよう筈もない。ようやく彼女は「体験」を知ったのだ。

『こういった状況下では、人はこういった感情を持つ』。それを図式に当て嵌めて人を操る少女は、計算式に間違いはなかったと確信しつつも、その揺らぎは実に面白いものだともうやく気付いたのだ。

——その晩、クレマンティーヌよりシャースーリユーへ魔樹の説明がなされ、蜥蜴人の警戒態勢は終わりを告げた。同時に泡沫の協力体制も消滅したが……しかし養殖という技術はラナーにより昇華され、ザリユースによつて各部族に伝えられた。

久しく途絶えていた交流は復活し、蜥蜴人はかつての隆盛を多少は取り戻すだろう。まさに万々歳、ここで物語が終わればきつと素晴らしい話となるのだろうが——主人公は腐つてもクレマンティーヌである。むしろ性根が腐りきっている彼女であるからして、華麗な幕引きなど有り得ない。

蜥蜴人が寝静まった深夜、ラナーは彼女に揺り起こされた。出発準備万端といった彼女の腕には、蜥蜴人の四至宝が一つ『白竜の骨鎧』が抱えられていた。

「あ、あの……？」

「いやー、やっぱり私って誰かを守るのつて向いてないからさ……かつぱらつてきちやつた。あの硬さならオーガの一撃くらい耐えられるだろうし。んじゃ——行こっか、お姫

様」

「ふっ……く、ふふ……！——クレマンティーヌ様」

「あん？」

「私、あなたに逢えて良かったです」

「は、はあ……？ まあ勝手に思う分には別にいいけど……ほら、さっさと鎧つけて」

「はい！」

差し出された手を取り、暗闇の森へ駆け出すラナー。その笑顔はクライムを想う時よりなお美しく——そして鎧を纏った彼女の知力は、『異次元の天才』から『普通の天才』へとただ下がった。ちなみに鎧が呪われているとされる由縁は、『一度下がった知力は戻らない』という事実に起因するものである。

「あら……？ なんだか頭がふわふわします……」

「なに言ってるんだか……」



使い込まれて良い感じに熟れたオマンコを、ズンズンと突く。腹の下で喘ぐエルフに興奮していると、横からデーブキスをされ、更に逆の手にはキュンキュンと閉まるアナルの感触が心地良い。初めての四人プレイだが、これは中々いいものだ。

欲を言うともうちよいおっぱいが欲しかった。僕は口リっ娘が好きだけど、つるぺた趣味という訳ではない。成人女性とやるならおっぱいの感触はぜひ欲しいところだろう。

エルフの奴隷制が無くなった帝国では、色んな商人や個人が影響を受けた訳だけ——そんな中、かの高名な嘯ませ役『エルヤー』さんはいまいち納得いかなかったようだ。三人の元奴隷エルフ達を開放したはいいものの、扱自体はなにも変わっていなかった。

もちろん逃げることは出来ただろうが、そもそも奴隷のエルフとは『徹底的に心を折られた』エルフである。自分が奴隷であろうがなかろうが、主人に逆らう気概が起きないのも当然の話だろう。

そんな彼等とばったり出会った僕は、お決まりのようにエルヤーさんからエルフ達を

救って、感謝のセックスと洒落込んだわけだ。しかしまあ、なんというか……性欲処理用の道具にされていただけあって、男が悦ぶツボを抑えている。穴も良い感じにほぐれてるし、申し訳ないながらも気持ちいい。

そんなこんなで真つ昼間から数時間ほどサカリ、事が終わった後は皇城へと出向いた。ジルが奴隷を解放して『はい終わり』などという杜撰な政策を取る筈もなく、元奴隷の支援機構はきつちり用意してある。そこへ彼女達を預け、なにかあつたら連絡するように伝えてお別れした。

その後はジルとのお喋りタイムである。なんせ僕つて男の友達がいらないから、彼との会話には割と癒やされる。もちろんジルは打算込みで友人関係を続けているんだろうが、そもそも成人して以降の友人関係など、割と損得や利害込みのものだ。長年続けば普通の友情くらいにはなるだろう。

「…それでドラウがさー、こっちにも塔を造れつておねだりしてきて…」

「うーむ……若作りのババアにおねだりされるとか、ゾツとするんだが」

「ギヤップ萌えてやつだよ。見た目が幼女で中身がババアだからこそ、そこに価値があるんだ。ロリババア最高!」

「なるほど、わからん」

「ジルだつてロクシーちゃんだかロキシシーちゃんだかを愛してるじゃん? もつと綺麗

な娘も可愛い娘もいるのに」

「む……まあ、そうだな」

「〴〵ギャツプ〴〵 つてのはそれだけで一つの萌えさ。昼は貞淑、夜は淫乱……ほら、男の夢だ」

「どこがだ？」

「人前ではツンツン、二人きりの時はデレデレ……これはツンデレじゃなくて、〴〵ギャツプ萌え〴〵だぜ。そう、男の夢だ」

「うーむ……」

「可愛い娘にアプローチしたら生えていた……これも一種の——」

「ホモでは？」

「……うん、それはそうだった」

最近フタナリ娘とか相手にしてたから、ちよつと緩んでたぜ。しかし的確なツツコミを入れてくれるジルとの会話は、やはり楽しい。たまにお見合いを勧めてくるところとか、近所のオバサンみたいでアレだけど。後腐れなくやれる可愛い娘とかなら、いくらでも紹介してくれていいんだけどなあ。

「そーいやアルシエちゃんの働きぶりはどう？ 上手くやつてるかい」

「ああ。つい最近、四位階に到達したらしい……魔法省全体でも類稀な才能だ。

フルーダの後継筆頭だな」

「そりや良かった。やつかみとか嫉妬とか大丈夫かな?」

「無いとは言わんが、本人で処理できる程度だ。何かにつけこちらが守っていては、魔法以外の部分が育たんしな」

「(もつとも)」

練磨の塔の調整段階で手伝ってもらったからか、アルシエちゃんもちよこちよこレベルアップしてるんだよね。触手部屋でアへ顔も見れたし、本人も強くなつたし、僕も気持ちよかつたしで良いことだらけだった。

「面白いやフルーダお爺ちゃんはまだ見たことなかつたな…」

「…ほう、興味がないのかと思っていたが…そうでもないのか?」

「や、興味って言うか——いや、興味だな。興味本位」

足ペロお爺ちゃんとか、中々見れるもんじゃないからな。魔力量を可視化できると、MP無限にしたらどうなるんだろう。アルシエちゃんはゲロ吐くんだろうけど。

「…会っていくか?」

「んー…そうだね。アルシエちゃんのついでに見ていこつかな」

「逸脱者をついで扱いにするのか…」

「僕は超越者だし」

ジルに案内してもらい、魔法省へと向かう。皇帝直々の道案内とは、なんとも贅沢だ……おつ、あつちから歩いてくるのは、もしやフルーダお爺ちゃんでは？ ぞろぞろと弟子を引き連れて、実験室にでも向かっているのだろうか。後ろの方にアルシエちゃんもいる。ちょうどいい、さつき言つてた魔力無限状態にでもしてみよう。足ペロを回避する避けゲーの開始だ。設定変更……そいつ。

「——目があああ!?!」

「目ぎやあああ!?!」

うおっ！ なになになにに!? 二人共、目を抑えながら倒れ込んでしまった……あれか、光の量で位階を判断してるから——光量が強すぎて、閃光弾みたいな感じになったのだろうか。ごめんアルシエちゃん。

「……何をしたんだ?」

「や、魔力無限にしたらどういふ反応するんだろうと思つて……ごめんジル」

「いろいろ無茶苦茶だな……命にかかわるものではないんだな?」

「たぶん。寝起きに強い光を向けられたような感じだろうし」

「そんなレベルではなかったような気がするが——まあいい。お前たち、二人を医務室に運んでおいてくれ」

「は、はいっ!」

…めっちゃビビられてる。そういうヤレント持ちとかじゃなくても、マジックキャスターならある程度の魔力は感じ取れるんだっけ。とりあえず魔力は普通に戻しとこう。驚かせて申し訳ない。

「心配だし、僕も医務室行ってくるよ」

「ああ。私は溢れっぱなしの仕事に戻るとしよう……最近、色々ときな臭くて敵わんな。お前が関わっているのか？ エイ」

「関わってるのもあるし、関わってないのもあるし。まあそうだね——よっぽど困ったことがあれば、手伝うよ」

「ふん……まったく、心強いことだ」

手をひらひらとさせて執務室に戻るジル。弟子たちが数人、慌てて付いていく。皇城で暗殺もないだろうけど、自由奔放な皇帝である。さて、じゃあ僕はアルシエちゃんのお見舞いにも行くか。網膜が焼き切れてたとかだったら、土下座しよう。

「アルシエちゃん……お元氣？」

「——『ウン||エイ』様。フルト様のお見舞いでございますか？」

「うん。具合はどんな感じ？」

「なにやら強いショックで気を失っておられますが……直に目を覚ますでしょう」

「そっかそっか。あれ、フルーダお爺ちゃんは？」

「医務室は男女別でございますので、隣の部屋におられます」

ほうほう……しかし広い割に利用者は少ないな。まあ皇城で怪我人なんて早々でるわけもないか。さてさて、それでは——ちよつとイタズラでもするか。ピンク髪のメガネっ娘な女医さんには眠ってもらい……ん？ 地味に可愛いな。ちよつとおっぱい揉ませてもらおう。ケツもいい。後でお誘いでもかけてみるかな。

「アルシエちゃん？ 起きないとイタズラしちゃうよー」

「ん……」

うーん、起きないな。つてことはイタズラオツケーつてことだ。たまには睡眠姦というのもありだろう。うつ伏せにして、お尻を高く上げてみる。ズボンと下着をずり下ろせば、可愛いアナルとオマンコが丸見えだ。

……なにやらアナルビーズ的なものが刺さっているが、気のせいということにしておう。まあ準備する手間が省けたつてことで、むしろ有り難い。指を一本挿れると、吸い付くように奥へ誘い込んでくる。うん、いい感じにほぐれてるし……チンポ挿れちゃう。う。

「——っ、ん、ぐ……」

相変わらず極上の締めまりだ。くぐもった声で鳴くアルシエちゃんだけど、起きる気配はない。なんか犯罪行為してるみたいで興奮するな……や、まごうことなき犯罪行為だ

けど。尻たぶを強く掴み、ピストンを速める。さっきの奴隷エルフちゃんたちには申し訳ないけど、やはりアルシエちゃんの尻穴は比べ物にならないほど気持ちいい。

「ひう、んっ——は、あ…」

最後にひとときわ強く腰を打ち付け、精液を流し込んだ。そのままぐるりと回転させ、繋がったままキスをする。小刻みに揺らしながら二度目の射精を行いつつ、舌で口内を蹂躪していると——ようやくアルシエちゃんが目覚めた。

「ん……—っ!? な、エ、エイ…?」

「おはよ、アルシエちゃん」

「な、なんで——んむっ!」

覚醒と同時に、アルシエちゃんの尻穴がぎゅつと締まる。気絶して緩んだ状態ですらあの極上っぷりだったんだ。気の入ったアナルがどれほどの雌穴かなど、言うまでもない。そのまま乱暴にピストン運動を開始し、三回戦を始める。

「あ、っ、ん、ひう……! こ、ここっ、医務室…?」

「そうだよ。ほら、お昼寝してる女医さんに見せつけてあげよう」

「だっ、あ、だめ……んうっ!」

「あ、起きそう」

「——ふうっ、ん、あうっ……!」

女医さんの眼前に繋がってる部分をもつていくと、顔を真っ赤にしたアルシエちゃん
の尻穴が更に締まる。ゆるふわトロふわなのにキツいって、矛盾してるけど——きつと
雌穴だけがこの相反を体現できるんだろう。

「射精すよアルシエちゃん」

「あ、い、っ——んきゆう……」

都合三度目の射精で、アルシエちゃんのお腹もタプタプだ。名残惜しそうにチンポを
離すアナルは、けれどびっぴちり閉じて精液を溢さない。何も言わずともお掃除フェラを
してくれる甲斐甲斐しさに、またぞろチンポが熱り立つ。

さて、四回戦目でも始め——

「失礼します。こちらにエイ様が向かったと……あつ」

——ようとしたら、レイナースちゃんが扉を開けて入ってきた。アルシエちゃんが驚
きのあまりチンポを噛んだのが、地味に痛い。慌てて布団を被ってるけど、流石に手遅
れだと思わずアルシエちゃん。

「こっちおいでー、レイナースちゃん」

「え、あ、え……は、はい」

最近思ってたんだけど、浮気への嫉妬に対する最適解って——女の子にチンポを生やす
ことなんじゃないだろうか。頭隠して尻隠さず状態のアルシエちゃんの下半身を撫で

回し、レイナスちゃんに指輪をはめて、剥き出しのアナルへとチンポを誘導する。事態を理解できていないのか、混乱の声を上げる彼女であったが——数分後には、アルシエちゃんのアナルに魅了されていた。四騎士『重爆』が魔法省期待の新人の尻穴を犯してるとか、その事実だけで既にエロい。

うんうん、仲良きことは素晴らしきかな。ルプスにも言ったけど、ぜひぜひこの輪を世界に広めていきたいものだ。夢中で腰を振る彼女達を見ていると、心の底から思う。そう——エロは世界を救うのだ。ペロロンチーノさんもそう言ってた。

14話

アルベドというNPCは、ナザリック配下の中でも非常に強欲なシモベである。常に主の心を独り占めしたいと考え、機会さえあれば行動にも移すような女性だ。彼女が『男にも生やす指輪』を手に入れたとなれば、もはやアインズの貞操が散ることに疑いはない——が、それを阻止せんとする者がいることも事実。

シャルティアとの同盟の一件もあり、そしてエイからの『あまりやりすぎると聾瘡を買おうよ』という言葉もあり、アルベドが出した結論は『モモンガに選んでもらう』というものであった。

指輪を手に入れるにあたってもつとも貢献度が高かったのは、アルベドで間違いないだろう。彼女が優遇され、しかし他の者にもチャンスはある——そういった計画を拵えるのは、守護者統括である彼女の専売特許だ。

『アインズに指輪をはめさせ、男性器を生やし、興奮状態に陥った状況で二人きりになる』。そしてその順番こそが、先の貢献度順という訳だ。一番手さえ取れるならば、アルベドにとって何も問題はなかった。性欲のなかった時とは違い、ギンギンに昂ぶった男の誘惑など彼女にとっては朝飯前だ。

——かくしてアインズを慕う女性NPCによる『誘惑作戦』は始まった。



「いったいなんなんだこれはー」

自室で怨嗟の叫び声を上げるオーバーロード——アインズ。困惑と混乱が緋い交ぜになった彼の様子は、アンデッドとは思えない精神の乱れを感じさせる。加えて、アンデッドとは思えないご立派な肉棒が股間についているのだから、今の彼は『五分の四デッド』くらいだろう。

それもこれも、彼の部屋に置かれていた指輪が原因である。慎重派のアインズが、鑑定もせずに装備することなどあり得ないが——見覚えのないアイテムをつい手にとつ

てしまうくらいは仕方ないだろう。なにせナザリック最奥ともいえる彼の自室へ何者が侵入し、あまつさえトラップを仕掛けるなどという事態はあり得ないのだから。

彼が手のひらの指輪をしげしげと眺めた瞬間、その効果は発動した。元々装備していた指輪を跳ね除け、その指輪は左手の薬指を陣取ったのだ。そして生えるご立派様。漆黒のローブの隙間から高々と主張するそれは、彼が人間であつた時の数倍もの威容を誇つた。

湧き上がる筈のない性欲が鎌首をもたげ、外そうとしても取れない指輪を見て、ようやくアインズはそれが呪いの装備品であつたことを理解した。そして上位道具鑑定をかけ——その説明文を読んでの感想が、先程の叫び声に繋がつたのだ。

『生える指輪：薄い本によくあるアレ。薄い本によくある通り、セックスすれば治る。アイテム没案百二十四個め』

「クウ、クソ運営がああ!! といふかななぜ没アイテムが俺の部屋にあるんだ!」

混乱しながらも、いくつかの案を脳内で検証するモモンガ。実際のところ、ユグドラシルのデータが異世界で現実になっていることを考えると、いくらでも想像はできるだろう。ユグドラシルの片隅にひっそりと置かれていたデータが、異世界への移行によつて顕現した——そしてそれは同じ世界のものに引き寄せられ、アインズの元へ現れた。そんな推測をしながら、彼は頭を抱える。

既に呪いを解除する手段は試したものの、その一切が効果を発揮しなかったのだ。つまり未完成品故に、ユグドラシルの理の外にある——そう考えるべきだろう。しかしセックスの相手など、簡単に見つかる筈もない。もちろん望めばいくらでも相手は湧いてくるだろうが、ギルドメンバーの子供のように思っているNPCを相手に『そういったこと』をするのは憚られる。

外に出て娼館にでも行くべきだろうか——アインズがそう考えた瞬間、部屋の扉が勢いよく開かれた。

「アインズ様あー！」

「あ、あ、ああ!!」

満面の笑みで、軽やかな足取りで部屋へ侵入してきたのは、ナザリック守護者統括——アルベド。腰の羽根をパタパタと上下させ、なにやらご機嫌な様子がかげえる。頬は紅潮し、腰をくねくねとさせる姿は男の情欲を誘っていた。

「な、なななんだ、どうしたというのだアルベドよ」

「く、ふう……！」

アルベドに対し、高速で後ろを向くアインズ。そのステップは戦士職を確実に凌駕し、ワールドチャンピオンに比肩するほどの速度であった。そしてそんなアインズを見て、アルベドは口が裂けるような笑みを浮かべた。

部屋の中で肉棒をさらけだしたままだったという事は——部屋中に雄のフェロモンが巻き散らかされているということだ。鼻をひくひくと動かし、胸いっぱいそれを吸い込むアルベドはまさにビッチの極み。アインズが振り返ればドン引きすること請け合いだ。

「失礼いたしました。急ぎで報告することが……『運営』と思われる者と、一時的に接触することができました」

「なに！ それは本当か——つ、とと」

アルベドの言葉について振り返るアインズ。ローブの前をしつかりと閉じ、若干ながら腰を引いている姿が物悲しい。しかしあばたもえくぼと言うべきか、そんな情けない姿であってもアルベドにとっては子宮が疼く雄姿である。

「はい、こちらの——ああんつ、失礼しました……すぐに拾います」

「……！ う、うむ……」

わざとらしく手に持った資料を落とし、よつん這いになりながらそれを拾うアルベド。主へ尻を向ける姿は非常に不敬であったが、今のアインズにとってそんなことは何一つ気にならなかつた。なにせ形の良いヒップが目の前でどどんと主張しているのだ。

なぜかお尻を高く上げていることや、ふりふりしていることや、何度も資料を落とし始めていることにも気付かない。ローブの中のご立派様がビクンと跳ね、我慢汁を垂らし始

めた。ああ、何を迷うことがあるだろうか。そのまま柔らかな尻たぶを乱暴に掴み、剛直を挿し込めばいい——そんな邪な感情が彼の脳内を埋め尽くす。

「くふう、申し訳ございません……滑りやすい資料ですわあ……」

「う、うむ……いや、ゆつくりでもいいとも。気にするな」

食い入るような視線を尻に感じ、アルベドはほくそ笑む。もはやよつん這いではなく、女豹のポーズになっているが、双方ともに気にしてはいない。腰をくねくねと揺らす女と、それを棒立ちで見ている骨——傍から見れば意味不明な光景であった。

「おまたせしました——ああんっ」

「ぬおっ……」

ようやく資料を集め終わったアルベドは、ますます腰を引いているアインズの姿を見てトドメを刺しに行く。足を滑らせた振りをして、仰向けに床へ倒れた。白くなめらかなフトモモをさらけ出し、扇情を煽る。アインズが眼窩の光を揺らし、理性のタガが外れたとでも言うように雄叫びを上げた。

「うおおお!!」

「……アインズ様あ!」

咆哮した主を見て、無理やり組み敷かれる自分を幻視したアルベド。しかしいつまで経ってもその時は訪れず、俯いた顔をちらりと上げると——主の姿は忽然と消えてい

た。

「…え？」

そう——彼女は童貞の奥手ぶりを舐めていた。彼とセックスをしたいのならば、誘い受けてはなくグイグイと行くべきだったのだ。かくして一番手という最高のチャンスを逃した彼女は、十分ほど忘我し——そしてナザリック全域に響き渡るほどの悲しい叫び声をあげた。



リ・エステイーズ王国辺境、カルネ村。かつて理不尽にさらされたこの村も、現在では見違えるほどの復興を見せていた。一度救われた後は自力での復興を目指した村人達であったが、ある時期を境に魔法詠唱者『アインズ・ウール・ゴウン』からの援助の規模が増したのだ。

それは各地で『ナザリック』という善の集団が現れ始めた時期とほぼ同時であったが、村人には知る由もない。しかし彼等の胸の内には、しかとアインズへの感謝と尊敬が刻まれていた。そしてそんな村の大恩人から、直々にマジックアイテムを賜った一人の少女——エンリ・エモット。

アインズが派遣した人員『ルプスレギナ・ベータ』と非常に親しいこともあり、彼女は成人も迎えないままにカルネ村の村長に任命されていた。それは彼女が持つ『ゴブリ部隊』という戦力が、村全ての戦力より大きいことも無関係ではないだろう。

村の規模に対しあまりに頑強な城壁が築かれたカルネ村は、所々に散りばめられたトラップの存在も加味すれば、城塞都市にも劣らない防衛力を誇る。そしてそんな村で采配を振るうエンリが有能かと言えば——そんなわけもない。ただの村娘に市政のあれこれなど期待できる筈もなく、彼女は助言されるがままに村を成長させていっただけだ。

傀儡政権と言えなくもない状況ではあったが、助言する方が彼女を敬っているため、それなりに健全な関係とも言える。結局のところ、エンリの生活は村長という役職には似つかわしくないものとなっていた。忙しさとは無縁の、割とほのぼのとした村娘の生活と言えるだろう——いや、言えただろう。

現在の彼女は会議が非常に多い。村の大恩人の関係者『ルプスレギナ』と二人きりで

の会議ともなれば、それを邪魔するものなどないだろう。『秘密の会議』——もちろんただのセックスである。とにかく彼女たちはセックスの魅力に取りつかれ、日がな一日を性交に興じることすらあった。

「ん、っ、は——あっ……だ、だめ、ルプス……もう、仕事の時間……あ、うっ?」

「はふう……じゃああと二回射精したら終わりっす」

「そ、れ——んぐうっ、三回前にも、い、っ、言つて、た、でしよ——きやうんっ!」

「くう…… そんなイイ声で鳴かれたら——また射精るっす!」

口の端にだらしなく舌を這わせながら、エンリの雌穴を蹂躪し続けるルプスレギナ。既に抜かすの射精は六連発に達しており、幾度も抜き挿しされた秘裂は精液と愛液で泡立っていた。肉がぶつかる音に、粘性の水音が混じる。

ルプスレギナがぶると体を震わせるのを見て取ったエンリは、彼女の腰に足を絡ませて肉棒を子宮に迎え入れる。指と指を熱く絡み合わせ、舌と舌を淫らに絡み合わせ、長い射精の時間を双方が堪能し合う。

数分ほどそのままの体勢を維持していた彼女達であったが、再びどちらともなく動き出す。先程の約束など忘却の彼方にあり、いかに快楽を貪るかが二人に共通する思考であった。どちゅどちゅと肉棒を出し挿れする音が響き、部屋の中に充満していた雌の匂いがますます濃くなっていく。

——そんな部屋へ、一人の男が足を踏み入れた。

「入るぞルプスレええええー!」

「また射精る——で、え……あ、アアアインズ様!? し、失礼致しました……え、エンちゃ

ん! アインズ様の御前つすよ!」

「い、いきゅ——ん、ん、つ……へっ? あ、え、あわわ……! し、失礼しました!」

アルベドの誘惑から逃げおおせたアインズは、そのままナザリックに居てはまずいと考え、カルネ村へと避難したのだ。冒険者としてあまり活動していなかったが故に、彼の行動範囲は非常に狭い。単身で見知らぬ地へ向かうより、勝手知ったるこの村へ来たのは自然の成り行きだろう。

そして特に縁の深いエンリヤ、この村に入り浸りのルプスレギナの元へ向かうのもまた道理。村人から“会議”などという言葉を聞けば、なにかあったのかと心配するのは当然だろう。徐々に小康状態になっていた肉棒も、真面目な話になれば更に鎮まるだろう——そう考えたアインズは何も間違っていない。

「え、いや、え……は? なん……?」

「どうかされましたか? アインズ様」

「いやいやいや……どうかもなにも……え? ちょ、え……」

ささっと身なりを整えた二人を見て、混乱の極地に陥るアインズ。あらゆる意味で困

惑していた彼であったが、なによりも気になったのはルプスレギナの肉棒である。生やすマジックアイテムの存在など聞いていなかったアイنزは、彼女の下半身を見て『もしやルプスレギナは両生具有であったのか』と思い至った。NPCの身体検査などしていなかったのだから、そう思うのも仕方ないだろう。

そして実のところ——エンリなら事情を話せばさせてくれるのではないかと、ほんの少しだけ期待していたアイنز。それが配下に肉棒を突き挿れられていたのだから、童貞の心には甚大なダメージであった。

「……………」

「…アイنز様?」

「…お前には失望したぞルプスレギナ」

「ふあっ!」

「ドちくしょおおー!!」

「ア、アイنز様ああー!」

失望したというよりは『嫉妬した』の方が正しいだろう。出ない涙を隠しながらアイنزズは転移した。嫉妬と悔しさと羨ましさが滲み出る、アンデッドとは思えない性への渴望であった。

「…どういふことつすかエンちゃん!」

「へっ? な、なにが…?」

「さっきのアインズ様は……完全に私に嫉妬してたっす! いつのまにアインズ様を誘惑してたんすか!」

「え、えええええ!? そ、そんなわけないでしょ? 私なんかアインズ様に…」

「言い訳は許さないっすよ! 誰彼構わず誘い込むオマンコには……躰が必要っすね!」

「え——ひやううう!?!」

出しそこねた精液を、浮気への怒りとともに注ぎ込むルプスレギナ。主を誘惑された嫉妬と、自分以外のチンポを啜え込もうとしたエンリへの嫉妬——ごちゃまぜになった感情を、膣内にぶちまける。ああ、エイがこの場にいればこう言ったことだろう。『NT R属性に目覚めたね』と。

リ・エステイーズ王国首都『リ・エステイーズ』。その街の一角に立つとある一軒家——それがナザリツクの『王国支部』、『善行の家』である。基本的にセバスが常駐するこの家で、現在は一人の女性が療養中であつた。

八本指の壊滅にあたり、紆余曲折ありセバスの庇護を得た女性——『ツアレ』。拷問に近い性的暴行を繰り返し受け続けていた彼女は、ようやく救いを得たのだ。辛い記憶は消えずとも、彼女の元には大切な妹とその仲間たちがいた。彼等とセバスの厚い介抱により、ツアレの心の傷は徐々に癒えてきていたのだ。

「ツアレ、まだ無理をしてはいけません。体の傷が癒えたとはいえ、心の健康は快復し辛いものです」

「いえ……みんなに迷惑をかけてばかりですから。あの子の仲間の皆さんも、本来なら無関係なのに……」

『仲間の姉だから』……あの方たちが関係するには充分なのでしょう。好意を受けてばかりで心苦しいのは理解できませんが、恩返しはあなたが万全になつてからでも遅くはありません。今は自分を労ることが、彼等の献身へ報いるただ一つの手段ですよ」

「…はっ」

——エイが八本指の娼館を襲撃した際に、護衛が漏らした『銀級の冒険者』という情報。それはエ・ランテルの騒動に際して活動の場を王都に移した『漆黒の剣』の四人のことであった。ひよんなことからボロボロのツアレを発見した彼等は、八本指傘下の娼館から彼女を奪い返したのだ。

もちろん、面子を重んじる犯罪組織がそのままにしておく筈もない。マジックキャスターを含んだ冒険者という厄介さを鑑みて、八本指最強の戦力『六腕』も動こうかというそんな折に——ナザリックが善行の押し売りを開始したのだ。

六腕の報復にあわや全滅の危機に瀕した漆黒の剣の前に、颯爽と駆けつけるイケメン執事。結果は誰もが予想する通りであり、語る必要すらないだろう。その後は、一冒険者チームには手の届かない高位の治療が望める『善行の家』へツアレを移し、今に至るという訳だ。

漆黒の剣自体は王都の宿屋に拠点を持っているが、妹であるニヤが頻繁にツアレの元を訪れる関係上、その仲間たちも何かと彼女を気をかけていた。

とはいえ——最近のツアレとセバスのやり取りを見て、彼等も見舞いの頻度を減らしていた。人の恋路を邪魔する奴はなんとやら、ニヤ達の生暖かい視線に気付いていないのは当事者の二人だけであった。看病する者とされる☒。それだけの関係であった

筈の両者だが、しかしその空間には甘酸っぱい空気が漂っていた。

ツアレの震える手がそつとセバスの手に重ねられ、見つめ合う二人。『まだ心に不安があるのだろうか』という気遣いから、執事はその手を握り返すが——ツアレの方は意を決したように目を瞑り、そのまま上体を起こして……キスをした。

——そしてそんな部屋へ、一人の男が足を踏み入れた。

「入るぞセバ——ああああス!!」

「……?!? ア、アインズ様! このような場所に何故……つ、大変申し訳ございません、早急に部屋を整えさせていただきます。しばしお待ちを……」

「……」

「アインズ様?」

「……ブルータス」

「は……?」

「ブルータス、お前もか」

「ア、アインズ様? 私はセバスめにございますが……」

「ドちくしよおおー!!」

「アインズ様!!」

ルプスレギナとエンリの情事を目にし、傷心のままに王都へ向かったアインズ。先述

の通り、彼がナザリツク以外へ向かおうとすれば選択肢は少ない。とりあえずは格好を『冒険者モモン』に変え、王都の拠点である善行の家へ姿を現したのだ。なによりその状態であれば、彼のご立派様は鎧に押さえつけられて目立たない。窮屈ではあるものの、ベターな選択肢だろう。

そしてナザリツクの中でもトップクラスに常識人であるセバスであれば、アインズも安心して相談ができる——そう踏んでこの地を訪れたのだ。そう、彼は何も間違つてはいない。しかしリア充な空気を前に、アンデッドの精神は耐えられなかったようだ。

——彼の逃避行は暫く続くようである。



この世界にきて何が一番素晴らしいかと問われるならば、やはり最高クラスの女性達とセックスし放題なところだと答えるだろう。二番目は豪勢な食事かな？ リアル世界の住人ならば『自然』などと答えるかもしれないが、あいにくと僕は普通の日本も経験してるわけで、きれいな空気や水にそこまで感動したりはしない。

そういう訳で、食事の次点には『飛行魔法』あたりが選択肢に上がるのだ。何を言っているのかと思うかもしれないが、これは実際に体験せねばわからないだろう。生身のまま空を飛ぶというのは、思いのほか楽しい。

スカイダイビングにハマる人の気持がなんとなく理解できたね。むしろ僕のそれは自由度が桁違いなのだから、楽しさも倍増だ。そりゃあユグドラシルでも擬似的には体験できたけど、圧倒的なリアル感がそのまま感動の差に繋がっている。

——そんなわけで空のお散歩を楽しんでいるのだが、なにやら地上が少し騒がしい。エ・ランテル近くの平地だから、冒険者による魔物の間引きだろうか？ もし危険な状況になっていけば、助けてあげるのも吝かではない。男だったら普通に助けて、女の子だったら下心ありありで助けようではないか。

…と思っていたけど、完全不可知化で近付いた時にはもう終わっていた。危なげなく魔物を狩った冒険者チームの手際は、レベルに対して見事なものだ。というより、この

世界の人々はレベルに対して技術が高い傾向にある。

まあゲームではなく常に命懸けなのだから、真剣味が違うのだろう。ついでにレベルの非効率さがそれに拍車をかけている……しかしそんなチームの中で、一人ばかり精彩に欠ける動きをしていた女の子が一人。

いや、身も蓋もなく言うなら完全に足手まといになっていた。本人も自覚はあるようで、暗い顔で俯いている。しかしなんか見覚えあるんだよなこの娘……誰だっけ？ ニヤなんとかさんではないし……どこかで会っただろうか。

現実とイラストの差と言うべきか、よほど特徴のある姿でもしてない限り原作キャラかどうかなど解りはしない。仮にここがハリーポッターの世界だとしたら、ハーマイオニーはエマ・ワトソンなのだ。でもエマ・ワトソンをイラスト化したら魔理沙とかセイバーみたいになりそうじゃん？ 何が言いたいかよく解らなくなってきたが、とにかくエマ・ワトソンの幼少期は可愛いのだ。

「…なあ、ブリタ。やつぱらもう諦めた方がいいんじゃないかねえか…？」

「…！ つ、次は！ 次は大丈夫だから…！ だから…」

「別に多少の迷惑はお互い様だがよ、俺達も完璧にフオローできるわけじゃあるめえし。そのうちおつ死んじまうぜ？」

「う…」

ああ、誰かと思いきやブリタちゃんか。ポーション壊され娘ことブリタちゃん。ちよつとギアスのカレンに似てるブリタちゃん。はて、この時期ならカルネ村に移住しててもよさそうなもんだけど……村民の募集時期がずれているのだろうか。

シャルティアちゃんに心折られて冒険者をやめた……んだっけ？ いまいちよく覚えてないけど、冒険者稼業から足を洗ってはいないようだ。というか大した蓄えもなさそうだし、食い扶持を稼ぐ選択肢があまりないのだろう。

戦闘に対する恐怖心がまだ残っていて、上手く動けない……とか？ いやでもトロールの襲撃とかでは普通だったような……うーむ……まあ気にしてもしょうがないか。がんばれブリタちゃん、僕は応援しているぞ。

「うひゃあっ!？」

「おわっ!?! な、なんだよ急に」

「だ、誰よお尻触ったの!」

「はあ……? いや、誰もお前の後ろにいなかったらうが」

「あ、そ、そっか……でもいま確かに……」

「やつぱ疲れてんだよお前。しばらく休業したらどうだ?」

「うーん……でもお金ないし……貸してくれる?」

「はっはっは! 俺あ今日、借金を返すために狩りに出てんだが!」

「俺はツケの酒代が……」

「俺も装備新調したばっかだなあ」

「西側の復興で人足募集してたる？ お前もそっち行きやいいじゃねえか」

「あのさあ、賃金いくらか知ってて言ってるの？」

「だははは！ まあタダよりはマシだろ」

うーん……意外と深刻そうでもないみたいだ。しかし中々いい感触のお尻だったな……あの底辺御用達の宿屋で襲われたりはしないのだろうか？ それともこの世界の美醜基準では大したことがないせいなのか。

ブリタちゃん可愛いものになあ。そもそも美の水準が高い上に、モンゴロイド目線で見たコーカソイドってなると余計に違いがわからない。もちろんラナーちゃんやカルカちゃんは尋常じゃなく可愛いんだけど、ブリタちゃんだつて僕目線だとめっちゃ可愛い。というかお尻を触ったせいでムラつときたので、セックスしたい。彼等もそろそろ帰るみたいだし、ついていってみるか。

……いや、待てよ？ そういえばあまりに陳腐すぎてやっていかなかったシチュエーションが一つあったな。まさに丁度いいタイミングだし、ブリタちゃんとセックスするにあたって誘導しやすい状況だ。ここはいっちょ、オバロ名物『マッチポンプ』を試してみるとするか。

「…ん？ あつちからなにか…」

「——なっ…！ ギ、ギガントバジリスク!? なんでもこんなところに…！」

「なんかこつち向かってきてねえか？」

「まあ遮蔽物もない平地で餌がいりや、向かってくるわな」

「い、言ってる場合!?! 逃げるわよアンタ達！」

「恨みつこなしだ！ フォーメーションオールサイド！」

危機感ねえなこいつら……というか逃げ一択なのか。いやまあ、それはそうか。僕だってそうするし、誰だってそうする。むしろ判断の速さを褒め称えるべきだ。しかしフォーメーションオールサイドってなんぞや——っておい！ なんて散開すんの!?! 僕がかつこよく助けるところを目撃できなくなるじゃん！

あ……ああ……うん、なるほど。そもそも完全なチームというわけじゃなくて、間引き用に集まった即興のチームなんだろう。立ち向かえないような強力な魔物が出た場合、散らばる用に逃げて運任せの囮作戦をするってことか。

弱者の戦略と言うべきか、刹那的に生きる者達の知恵と言うべきか……でも間違っつてはいないのかな？ 立ち向かえば全滅必至だし、このやり方なら上手く行けば一人の犠牲ですむ。もちろん帰還する際に一人というのは非常に危険だが、まあギガントバジリスクと相對するよりはマシだろう。

——じゃあない、とりあえずブリタちゃんの方に差し向けよう。

「ぎゃあああ！　なんでこっち来んのよ！」

「よっしや！　頼むぞブリタ！」

「骨は拾ってやるからなあー!!」

「うわああん！　呪ってやるうー！」

「コントかな？　意外と底辺冒険者稼業って楽しいのかもしれないな。つってもブリタちゃんってポジション買える程度には稼ぐんだから、一般人からすれば高給取りだと思うんだけど……おつとと、そろそろ魔眼の効果範囲に入っちゃうな。」

ブリタちゃん程度の耐性だと、ある程度まで近寄られたら即座に石化だろう。さて、剣士で行くべきか詠唱者で行くべきか……よし、前者でいこう。そっちの方がなんとなくかつこいいい気がするし。

「もうダメだあ……おしまいだあ……」

「伏せろ！」

「——え……」

「《次元断切》」

特に伏せさせる意味はなかったが、『女の子の危機に言ってみたいセリフ』七位くらいには入ってるから言ってみた。というか僕の後ろにいるのに伏せる意味よ。でも律儀

に伏せるブリタちゃん可愛い。突き出たお尻がキュート。

「うそ……一撃……?」

「大丈夫?」

「あ、は、はい……その、ありがとうございます!」

「まあお気になさらず。あ、料金は金貨二十枚になりまーす」

「につ……!」

顔面蒼白ブリタちゃん。まあでもギガントバジリスク討伐依頼つてなると二十枚じゃ利かないし、割と妥当だと思うけどな。彼女もそれが解っているのか、現実的な値段に懐いている。金貨一枚ちよつとのポジションを手に入れてご満悦だったブリタちゃんからすれば、節約に節約を重ねても年単位で頑張らねば稼げないだろう。

「……というのは冗談だけだね。ほら、手」

「あ……う、うん……ありがと——つていうかタチの悪い冗談やめてくれる!? 心臓止まるかと思つたわよ!」

「まあまあ、いつても冒険者ならそのくらい払えるだろう?」

「わ・た・し・は! 鉄級の冒険者なの! 金貨二十枚なんて、何百回依頼受ければいいかわかつたもんじゃないわよ」

「ああ、そりゃ失礼……まあでも、何百回も受けてりゃランクも上がるだろうに!」

「…」

「ん……なんか悪いこと言っちゃったかい？」

「……うん。あんなのを一撃で倒せるような人には、言ってもわからないだろうし」

「…君は——僕がなんの犠牲も払わずにここまで強くなったとも思うのかい？」

「…っ！ ……ごめんなさい。そうよね、何かを得るには………相応の対価が付き物。あな

たも色々失つてきたのよね…」

「いや、僕のはなんの犠牲も払わず手に入れた強さだけど」

「さっきの前振りは!？」

いい突っ込みだな……正直リアルで出会ったなら相方に誘いたいくらいだ。『ウン』

エイ』と『ブリタ』だからコンビ名は——あ、ダメだ。絶対にウンコブリブリとか言われるやつだ。

「はあ……あやかりたいもんよね。アンタと比べて私ときたら、オークどころか今はゴブリンの一体でも怪しいわ…」

「へえ。なら少しくらい指導してあげようか？ 僕の『簡単ラクラク冒険者教室』なら、短期間でミスリル級くらいは間違いなしだぜ」

「あ、怪しすぎる…」

「やだなあ、そんなことないヨ」

ものすごく疑いの目を向けてくるブリタちゃんだが、しかし同じくらい興味も惹かれていたようだ。ギガントバジリスク瞬殺という実績は、それほどに強い。ぶつちやけアダムンタイトがチームで挑んでも苦戦しかねない強さだし、発言の信憑性が深まるのは当然だ。

「……た、対価は？」

「君がこれから冒険者として活動する上で、経費を除いた純利益……その5%でどうだい？ 今がお先真つ暗って言うなら、悪くない提案だと思うけど。もちろん引退してから稼ぐお金にはノータツチだぜ」

「……なるほど……」

これから長い人生で稼ぐ内、常に5%を取られるとなればかなり莫大な金額に昇るが……しがない鉄級の冒険者がミスリル級の実力を得られると言うなら、安い買い物だろう。どちらにも充分なメリットがある提案は、猜疑心を薄めさせるものだ。お金はどうでもいいが、ブリタちゃんの納得を得る上では効果がある筈。

「……うん、決めた！——お願いします！」

「オーケー。じゃあ期間は今日から三日……その間は僕の言葉に絶対服従。始めた瞬間から、降りるのは許されない——それでいいなら契約しようか」

「……騙してないよね？」

「ウン」

「怪しすぎるー！」

「じゃあやめるかい？」

「うー……あーもう！　ここが人生の岐路よ私！　伸るか反るか！　やってやるわよー！」

「承りましたー。ではでは、試練の間へとご案内」

「へっ……？」

ブリタちゃんを連れて、ささっと転移。到着したのはラキユースちゃんでお馴染み、全てが真っ白い空間……通称『試練の間』だ。強くするだけなら経験値を譲渡すれば済む問題だが、やはり真に身についたとは言い難い。ならばどうするか……うむ、真っ当に強くなつてもらえばいい。

現地の人間が強くなりにくい最たる要因は、適正レベルの敵が少ないせいだ。強すぎる敵にエンカウントすればゲームオーバー、弱すぎる敵を倒し続けても大した意味はない。これでレベルを上げるといふのは酷だろう。だから僕は場を整えるだけでいい。

「じゃあ無限耐久戦闘開始だね。まずはゴブリン千体いつてみよう！」

「え、いや、ちよ、え……？　死ぬわよねこれ」

「大丈夫大丈夫、死ぬ前に回復魔法打つからさ。精神力の続く限り無限に戦えるぜ！」

「ちよつ——無理だつてええー!!」

ブリタちゃんに殺到する無数のゴブリン。うわあ、これはゴブリンスレイヤーさんが必要ですね。まあ不幸中の幸いと言うべきか、こつちの世界のゴブリンはレイプとかないから。人間を犯すゴブリンとか、人間社会でいう獣姦好きみたいなものだ。

「やつぱり騙されたああー!!」

「いや騙してないつて。三日後にミスリルかオリハルコンくらいになれるように調整してるからさ、頑張つて」

「むりむりー!!」

んじゃ、後はNPCに任せよう。とりあえず……六時間後でいいか。疲労困憊ブリタちゃんへのマッサージが楽しみだ。まったく——女の子が絶対服従なんて契約、受けちゃだめだよねえ。



「おまたせー。おつかれー」

「ぜひい……はひい……」

「お、予想よりだいが上がってるね。どうにも早熟型と大器晩成型の二極化してるからなあ、この世界。後者は生き残れない人が多いし、まあ良きかな良きかなってやつ？」

「もう……無理ひ……」

わお、ズタボロで大の字になってる女の子っていいよね。とりあえず回復させて……最後だけはそのままにしておくあたり、NPC達の優秀さがうかがえる。ブリタちゃんの方は——髪が額に張り付いて、なんだか艶めかしい。

「あ……ふう。やつと落ち着いた……にしても——なんなの此処!? アンタ何者なの!? 殺しても殺しても湧いてくるし……ま、まさかこの前のアンデッド騒動って……」

「いや違うって。あれはズーラーノーンの幹部がエルダーリッチになりたくて起こした事件。僕とは無関係さ」

「うー……」

「さ、それより明日のために英気を養わなきゃね。次はゴブリンからオークにランクアップするから、頑張んなきゃだぜ」

「ひい……」

「じゃあ総仕上げ。これを欠かしちゃ今日の修行も意味なくなっちゃうし」

「そうしあげ……?」

魔法でパパツと汚れを除いて、ブリタちゃんを施術台に乗せる。そしてそのままバサツと服を剥いだ。物理法則を無視した、まさに本物のマジックである。悲鳴をあげるブリタちゃんが新鮮でなんだかいい感じ。

「な、ななな、なにすんのよ!?!」

「いや、最後に特殊なマツサージをしないとね……ほらほら、この特殊なローションも結構お金がかかってんだぜ? 素肌に馴染ませないと。ちなみに五百ccあたり十五金貨でござい」

「じゅっ……!?!」

あ、おとなしくなった。なんとなくわかってきたが、彼女はお金に弱いタイプだ……いや、弱いというよりその価値以上に有り難がるというべきか。前世はもったいなお化けだったのかもしれない。

「はーい……力抜いてねー」

「ひゃうっ!?! ちよ、ちよっ……」

「はい、一塗り金貨二まーい」

「うう……」

……さて、そろそろ本番といこう。ちなみにローションはちゃんと効果を持たせていて、永続的な能力上昇効果が見込める。力の種とかタウリンとか、そっち系のやつだ。飲んでも美味しいし、潤滑剤としても優秀な一品である。

「……んっ、ちよ、ちよつと!? そこは……!」

「あー、この辺にリンパが集まつてるからね。リンパマッサージこそが強くなるための根幹みたいなのがあるから」

「い、いや、だからって……んっ、ぐっ……」

「あー、これほんとリンパ。マジリンパ。これは集中的にやらないとダメですねー」

「ウソつけえ! ひやつ——んうっ! あ、そこダメ……ひっ、あっ——」

「ちよつと指じゃ奥まで届かないな……指より大きくて、返しがあるナニかがない……おや? ちようどいいモノがここに」

もう体中ローションまみれでぐっちよんぐっちよんのブリタちゃん。乳首もクリも尖らせて、膣口をなぞると体をビクンと跳ねさせる。彼女に伸し掛かるように押し倒し、雌穴に鈴口をあてがう。裏筋と入り口をにゅぷにゅぷと擦り合わせると、ぷるんとした唇から嬌声が漏れる。

「挿れていい?」

「はふ——あう、ひんっ……いい、いれないと効果が出ないんでしょ……？　なら——しかたないじゃない」

「——だよね」

「お、っ——んきゆうう!!　も、もつとつ、ゆつくり……んん、っ！」

うひゃー、ソープよりもぬるぬるだぜ。ぶつちやけると潤滑剤を使いすぎて、チンポへの刺激が若干ながら緩んでるんだけど……これはこれで悪くない。ローションでテラテラと光る女性の肌つて、なぜこうもエロく見えるのか。

刺激が緩いぶんピストンを速くしたら、ブリタちゃんの喘ぎ声がひとときわ強まった。ちよつとガツシリめの体型だけど、充分やわっこい。それにいちいち反応が可愛いから、こちらとしても下半身に響くものがあるね。

「ほら、膣内に出すよ」

「あつ——熱、う……う、あ……」

「ほら、お掃除して。これも修行の内だよ」

「ん、んぶつ……んぐ……ひゆぎようなら、しひやはないよえ……」

ぽつかりと空いたオマンコをヒクつかせながらチンポをしゃぶるブリタちゃん。仰向けに寝かせた彼女の顔に、腰を打ち付ける。両手でおっぱいを揉みしだきながら、口をオナホ代わりにするのって——すごい興奮するよね。

後ろの穴は二日目か三日目にとっておくとして、今日は上の口と雌穴を徹底的に堪能するでしょうか。ルプスも呼んであげようかな？ 最近『マジカル☆イウエン』時のオマンコを狙われているようで、ここらでガス抜きをしとかないと貞操が危うい感。

「ん、ちゅ……はぶ、じゆるっ……」

「ん、そのくらいでいいよ。じゃあ今度は後ろからしようか……おっと、修行のためにね」

「ふあい……」

そういえば、これは騙したと言えるのだろうか？ まあ別にセックスしないなんて言った覚えはないし、絶対服従の約束もしたよね。そして三日後に彼女は強くなってるんだから、何も問題はないだろう。うむ、言い訳完了だ。

よし——今日は一晩中挿れ続けてみよう。無限耐久戦ならぬ、無限耐久セックスだ。惚けた顔のブリタちゃんに後ろからキスをして、そのまま挿入する。悲鳴のような嬌声は、いまのところ異世界で一番蠱惑的で……いくらでも腰を振れそうだ。

15話

エ・ランテル——冒険者御用達の安宿。駆け出しの冒険者がよく利用するこの宿屋だが、メインの客層はうだつの上がらない鉄級冒険者達である。新人であればすぐに死ぬか、あるいは駆け上がっていくか——そうでなければ彼等の仲間入りをするか。故にこの場所は常に底辺であり、中核をなすメンバーは古株が多い。

一階の酒場はもちろん自由席だが、こういった場所では大抵の場合において『定位置』が存在する。いわゆる『常連席』というものであり、新人が間違つて座つた際に絡むための決まりでもあつた。

——当然、それなりに長く鉄級冒険者をやっているブリタにも定位置はある。そこが埋まつていたからといって因縁をつけるような彼女ではないが、他者からはそこが『彼女の席』という認識をされていた。

しかしその席には今、みすぼらしい花がポロポロの花瓶に活けられていた。明らかに死者を悼む目的で置かれたそれは、ブリタという女性が二度と帰つてこないであろうことを悲しく示していたのだ。そしてその机の前には——ぶるぶると体を震わせながら怒る本人が居た。

「…私は死んでなああい！ 誰よこれ置いたの！」

「やっべ、おい生きてたぜ」

「悪運の強い奴だぜ、まったく」

「乾杯だ乾杯！ 強運のブリタに乾杯！」

「いやあ、寝覚めの悪さもこれで解消してもんよ！」

「ハ、こいつら…！」

死んだ筈のブリタが宿屋へ姿を現した瞬間、すわゾンビかと構えた冒険者達。アンデッドの大騒動は彼等の記憶にも新しく、彼女が化けて出たと考えてもおかしくはないだろう。そんな彼等にゲンコツをお見舞いしつつ、自らの生存を主張するブリタ。

なんだかんだで顔なじみの帰還が喜ばしいのか、昼間だというのに宴模様になる酒場。陽気に歌う彼らに大いなる憤慨と、少しばかりの感動を滲ませて彼女は口元をひくつかせた。そしてそんなブリタの肩に手を置き、宿屋の主人は帰還の祝いと重要な情報を伝える。

「なんにしても生きてて良かったな、ブリタ」

「へへ……あながと」

「まあそれはともかくだ。お前さん、死亡認定されてるから早いとこ組合に顔出しした方がいいぞ」

「えええっ!？」

「どう逃げ切ったかは知らんが、『クラルグラ』に会ったら礼でも言っておくんだな。あいつらがギガントバジリスクを討伐しなけりや、また出くわす可能性もあつただろうよ」

「…はあああつ!？」

「ああ、俺もミスリル級があれを討伐したと聞いた時は驚いたが…：…よほど上手く戦略が嵌まつたんだろうな。結成以来死人が出ていないチームだとも聞く。優秀な奴は上にあがつていくもんだ——今回の件でオリハルコンも近いって噂だぜ」

「いやそうじゃなくて…：…ギガントバジリスクは私の目の前で倒されたんだけど」

「…どういうことだ?？」

「どういうこともなにも——ああもう！ ちよつと行つてくる!！」

「お、おい!？」

勢いよく駆け出したブリタを止められず、立ち尽くす宿屋の主人。そんな二人のやりとりを聞いていた冒険者達が、興味深そうに集まってくる。

「んん…：…なんだ、つまりクラルグラの奴らは他人の功績を掠め取つたつーことか?？」

「おやつさん」

「…：…かもしれないな」

「だははは！ そりゃいいや！ 他のメンバーはともかく、リーダーのイグヴァルジつてのはどうもいけ好かねえ奴だったからな……オリハルコンに昇格どころか、下手すりゃ白金に降格もあんじゃないやねえか？」

「うーむ……」

「なんだよ、歯切れ悪いな」

「いや、ブリタがそれを指摘したところで水掛け論になると思つてな。そうなれば後は発言力が物を言う……鉄級冒険者とミスリル冒険者の言い合いなんぞ、結果は見えるだろう？」

「あー……そりゃそうか」

「あまり食い下がるようなら、立場がなくなる可能性もある。行つてやつたらどうだ？」
「俺が？ ミスリル級に物申しに行く馬鹿を止めろつて？ 冗談キツイぜ。それにそれいつら目の前にしたら、アイツだつて冷静になるだろ……だいたいメリットが何もねえじゃねえか。ブリタは損得勘定のできねえ馬鹿じゃねえよ」

「…それもそうか」

「そうそう！ そんなことより酒追加だ！」

「先にツケを払え大馬鹿野郎！」

仮にクラルグラの悪事が明るみに出たところで、ブリタがギガントバジリスクを討伐

したという訳でもない。ゆえにそれを指摘するメリットなどなに一つないだろう。偽証を叫んで組合での立場を悪くするか、あるいは証明されたところでクラルグラに恨まれるかの二択だ。

ブリタが正義感で動く類の人間ではないと彼等も知っている。だからこそ止める必要性は感じず、そのうち冷静になって帰ってくるだろうと考えていたのだ。

そう——彼女の三日間など知る由もない彼等は、そう考えた。しかしブリタは、師弟愛とまでは行かずともエイに恩を感じてはいた。その男の功績を掠め取ったチームへの憤慨するのは当然で——そしてその強気に相応しい力を得たことなど、現状では誰も知らない。



エ・ランテル冒険者組合。冒険者が依頼を探して賑わうこの場所も、現在は剣呑な雰

困気が漂う空間と化していた。それもこれも、宿屋の主人が危惧した通り——ブリタが冒険者チーム『クラルグラ』を糾弾したことに端を発する。

『たまたま死体を発見して持ち帰っただけだろう』『このホラ吹き男め』『これが上位冒険者のやることか』——などと組合で叫べば、騒ぎになるのは当然のことだ。加えてブリタの発言は、鉄級冒険者の嫉妬で済ませられるものではなかった。

なにせ他のメンバーが帰還した際、組合へ一通りの報告は済ませているのだ。その上でブリタという鉄級冒険者の生存は絶望視されており、組合としても強力な魔物が彷徨っている事態を放置できるわけもなく、早急な調査が望まれた——その矢先。クラルグラがギガントバジリスクの死体を持ち込んだのだ。

最後にギガントバジリスクを確認したのがブリタである以上、彼女の発言は無視できるものではないだろう。その諍いはギルド長『プルトン・アインザック』が出張る程の事態となり、冒険者組合は一時騒然としていた。

「なにがミスリルよ！ 駆け出しからやり直した方がいいんじゃない!？」

「……っ！ 言わせておけば……！ 鉄級如きが調子に乗るなよ？ ……組合長も、このような妄言のために時間を費やす必要はないかと思えますが」

「それは我々の方で判断すべき事柄だ。生きたギガントバジリスクに対する最後の目撃証言は、彼女を追った際のそれだ。ならば一定の信用は置くべきだとも……無論、ミス

リル級である君達を徒に疑うというわけではない。まずは詳細を問うべきだと言っているんだ」

ギガントバジリスクから逃れた後、どうしていたのか——そう問いたただすインザックに、ブリタは包み隠さず真実を話した。『ウンⅡエイ』と名乗る男が助けてくれたこと、弱さを嘆く自分に修行をつけてくれたこと、そして確かに自分は強くなったことを。「ふむ……『ウンⅡエイ』……なるほど、噂通りの実力ならば確かに可能だろう。解体されてわかりにくくなってはいたが、頭から一刀両断されたであろう傷は少し気になっていた。クラルグラにそれほどの剣技を持つ☒はいなかった筈だからな」

「……いや、それは……」

「もちろん罫を仕掛けた、あるいは奥の手を使用した可能性も十二分に残っている。このようなところで冒険者が手の内を明かす必要もない」

「あ、ああ……そうさ。だいたい竜王国の英雄が都合よく助けに現れて、修行をつけてくれたらど？ バカバカしい……！ 妄想も大概にしておけ！」

「はあ？ 誰が妄想よ！」

ミスリル級ともなれば、その強さに相応しい「庄」というものが存在する。鉄級如きが耐えられるプレッシャーではないが——しかしブリタはそれを物ともせず、負けじと吼える。それを見たインザックがどうしたものかと考え始めたその瞬間、組合の扉が

開いた。

そこに現れたのは、エ・ランテルに存在する四組のミスリル級の一組——漆黒の英雄『モモン』であった。漆黒の鎧を纏い、二本の大剣を携える姿はまさに英雄。登録してから間をおかずミスリル級となり、その後なんの音沙汰もなかったことで様々な憶測が流れている人物だ。

「…む。なにか騒ぎですか？ 組合長」

「…モモン君。色々と言いたいことはあるが——ひとまずは置いておこう。 // 野暮用 // は終わったのか？ ……トブの大森林近くで凄まじい戦闘跡が確認できた。誰の独断専行かは知らんが、成した偉業を考えると……正式に手順を踏んでいればアダマントイトは確実だっただろう」

「…奇特な人間もいるものですな。それより、これはいったい？」
「ふう……まったく、君は立場に執着しないな」

睨み合うブリタとイグヴァルジを見て、首をかしげるモモン。内密に吸血鬼を討ったであろうモモンと、オリハルコンへの昇格が危ぶまれる事態に取り乱すイグヴァルジとの差を見て、アインザックは二人の器の違いにため息をついた。そして諍いの経緯を軽く話し始める。

——もちろん、『ウン＝エイに鍛えられた』というブリタのことも。

「…ほう。ならば話は簡単だ。彼女の言葉が真実かどうか——實力を見てみればわかるのでは？ 鉄級を凌駕する強さを見せたのならば、その話の信憑性も高まるでしょう」

「…ふん、良い案だな。ブリタとか言ったか…裏の修練場で模擬戦だ。つまらねえ妄想ごと叩き潰してやるよ」

「上等よー」

「待て、そんな安易な案を認める訳には…というより、ミスリル級と鉄級の模擬戦など——」

「ええ、そうですね。それに双方頭に血がのぼっているようですし、模擬戦で終わる保証もない。ですからここは、同じミスリル級の実力を持つ私が試してみるというのは？ 部外者の私であれば、冷静に見極めることができる」

「い、いや、しかし…」

明らかにブリタの實力を知りたがっているモモンに、困惑を覚えるアインザック。イグヴァルジがモモンを煙たがっていることもあり、場の混乱具合は相当なものだ。早期的に事態を鎮静化するには、モモンの提案に乗るのもありだろうか——そう考え、アインザックは修練場の使用許可を出した。

そしてモモンの提案を静観していたイグヴァルジは、複雑そうな表情で腕を組んでいた。彼としても鉄級冒険者との戦闘に敗北する気はないが、それはそれとしてモモンの

実力が己を超えているであろうことは気付いているのだ。どちらがより実力差の出る戦闘になるかは、わかりきっている。

一方モモン——もといアインズは、ブリタが本当に運営と接触したのか……そして接触したのならば接触したで、どれほど実力を得たのか気になっていた。彼にとつてブリタという存在は『ホニョルペニョコ^{ンヤルテイ}の姿を目撃した冒険者』という部分で重要な人物だ。折を見て記憶を操作する必要のあつた人物が、運営の関係者になつたかもしれないとなれば、これはあまりよくない事態だろう。故に、本当に彼女が運営と接触したかどうか確認する意味合いも込めての、模擬戦の申込みであつた。

——ちなみに彼の鎧の下はいまだにギンギンである。

「……確か君は先の吸血鬼戦での生き残りだったな。どこまで強くなつたかは知らんが、今の実力なら——どうだ？ 倒せる自信はあるか？」

ブリタの実力を推測する上での質問は、いくつか目的があつた。要は運営がどの程度『考え無し』かという点だ。アインズも運営が各地で行動を起こしていることは認識している。そして明らかに接触を避けられているという点も、当然ながら気付いていた。

GMコールが『ただいま留守にしております。またのご連絡お待ちしております』などというふざけた文言になっている以上、それは確信犯だろう。運営が『どの程度まで好き勝手しているのか』『どの程度まで異世界に気を使っているのか』。これはアインズ

が異世界に存在し続ける以上、どうしても確認したい事柄だ。

弱い冒険者を気の向くままに強くしてやる——ああ、いかにも増上慢だ。絶対的な上から目線で、『良いことをしてやった』と自己に酔う行為だ。あるいはゲームキャラを強化するような遊びに近い感情かもしれない。

そして対象をどの程度まで強くしているのかで、運営の性格を多少は把握できるだろう。平均的な強さが異様に低い世界で、仮にレベル百付近まで強化したのだとすれば——運営はなにも考えていない、あるいは異世界への迷惑をなにも考えていない大馬鹿だ。

逆に既存の冒険者の枠に収まる範囲内だと言うならば、最低限ではあるにせよ、常識的な感性と考え方を持ち合わせている可能性はある。どちらにせよ見極める必要があると、アインズは《完全なる戦士／パーフェクト・ウォリアー》を発動して模擬戦に臨む。

「…たぶん、無理かな。夜に眠れなくなるほどじゃなくなっただけ……まだ怖いもの。アレは何か……あり得ない存在だって、いまだに思ってる」

「…そうか」

戦士としての技術という点において、アインズのそれはいまだに未熟であった。技術のみをランク付けすれば、精々が銀級といったところだろう。しかしパーフェクト・

ウオリアーによつて百レベルの戦士と化した今であれば、その未熟さを見抜く者はいない。百レベル戦士の戦闘とは、正しく音速である。その力と速度は技量の低さを覆い隠し、見る者を畏怖させる。

——故に、目の前から一瞬にして消失したアインズをブリタが捉えたのは、彼が手加減をしたからに他ならない。しかし背後からの攻撃を長剣でいなした技術は、彼女の實力の確かさを、観戦している者達に一目で知らしめた。

オークとオーガに後頭部をかち割られること二十二回——実際に死んで得た体験というものは、しかと身につくものだ。脳漿をぶちまけた代償として手に入れた強さは、アインズの大剣を受け流す境地に達していた。

——言い換えれば、天賦の才能を持つ☒が順当に手に入れる技術は、彼女にとって数十回死ななければ掴めない感覚であつたとも言える。

「……ミスリル級、か。彼が自身をそう評価するならば、どの国のアダマンタイトも裸足で逃げ出すだろうな。そうは思わんか？ イグヴァルジ君」

「ぐ……」

「そして明らかに手加減はしているが……君はあの猛襲を捌き切ることができるか？

ブリタ君のように」

「……くそ、ふざけやがつて……鉄級が三日の修行であんな——ちくしょう、ありえねえだ

ろうがよ……！」

劍戟はアインズによる一方的なものになっていたが、だからといってブリタを嗤う者は皆無だ。自分がそこにいれば、一合も持たず挽き肉になっているだろう——それが理解できたから。

戦いは佳境に入り、詰将棋のようにブリタは追い込まれていく。一手、足りなくなる。次の一撃でもう一手。更に次と——手詰まりとはこのことだろう。アインズが最後とばかりに二本の劍を交差させ、ブリタの長劍を弾き飛ばしながら首元で劍を止める。

誰が見ても決着はついた。アインザックが終了の声を発そうとし、周囲も高レベルな模擬戦に感嘆のため息をつく。が、ただ一人——ブリタだけは違った。エイによる素人考えな修行による弊害と言うべきか、彼女は致命の一撃をそうと認識しない。

傷を負っても終わらない。体力が尽きても終わらない。死にかけても、そして死んでも終わらない。無数の敵がひたすらに襲いくる状況が三日も続けば、身につくのは防衛反応よりも攻撃本能である。

己がどうなろうと、敵の急所を攻撃し続ける——職業として『狂戦士』を手に入れた彼女は、首筋に劍を突きつけられた程度では止まらなかつた。

「うおらああ——!!」

「ぐおおおっ!!」

剣を弾き飛ばされたならば、手で、足で。戦いに狂った戦士は的確に急所を——男の急所を蹴り上げた。男の比率が多い冒険者という職業故に、観戦していたものもまたほとんどが男だ。残像が見えるほどの速度で股ぐらを蹴り上げられたアインズを見て、周囲の者も思わずゾツとした。

とはいえ、三十レベルにも届かない程度のブリタの攻撃がアインズに通る筈もない。人間だった頃の残照で悲鳴をあげはしたものの、ダメージが入ったのは精々が鎧までだ。頑強な骨の体は傷一つ付いていない。

「け、決着はついたのでろう!？」

「へっ? ……あ、ご、ごめん………つい癖で」

「どういう癖なんだ……」

ブリタへ突っ込みはしても、攻撃自体にはまるで痛痒を感じていないアインズに、周囲の冒険者達から尊敬の目が向けられる。そしてアインザックが今度こそ制止の声をあげ、模擬戦は終わりを迎えた。

ブリタの強さは鉄級の枠に収まるようなものではなく、オリハルコンは確実……ともすればアダマントナイトにも届きうる水準だ。元高位冒険者として確かな選定眼を持ち合わせているアインザックは、彼女をそう評価した。

モモン共々エ・ランテルで囲い込めば、王都の組合すら凌駕する戦力となるだろう。

既にクラルグラとの諍いの件など思考から追いやり、ブリタをどう昇格させていくか考え始めたアインザック。いくら多数が彼女の強さを目撃しているからといって、それだけで高位の級を認定する訳にはいかない。ミスリル級以上には、誰もが認める偉業が必要なのだ。

とりあえずモモンには無理やり吸血鬼の件を認めさせ、アダマタイトになつてもらう——そう考へてにこやかに二人へ近付くアインザック。しかし事態は彼の思惑から外れ、盛大な破砕音を立てて砕け散つた。

——アインズの尊厳と共に。

「……へっ?」

「……ん? ——はっ……?」

「で………でかい!」

「どつちの獲物もすげえな……!」

「つーかなんで勃つてんだ?」

「まさかブリタで……?」

「いや、戦闘に興奮するバトルジャンキーつてやつじゃねーか?」

「なんにしてもでけえ……!」

——ひび割れた鎧の股間部分から、雄々しく屹立する巨大な肉棒。それを見た周囲の

つまりアインザックの提案は渡りに船であったのだが——このような状況でそれに応じるほどの度胸を持ち合わせていれば、そもそも童貞など卒業しているだろう。まるで高位の大治癒でも食らったかのように苦しげな声をあげ、アインズは転移した。

「なっ……! 転移魔法!?! あれほどの技量の戦士が、高位の魔法まで……!」

「う、嘘だろ……?」

最強の戦士。しかし高位の詠唱者。そして巨根。いまこの時より、アインズの二つ名は『漆黒の英雄』ではなく——『黒光りの英雄』となつた。そして彼の『夜のお世話』をしているであろう『美姫』ナーベもまた、『ブラックホール』などと囁かれるのであつた。

エロ——それは人によって見え方が異なるものだ。低俗であり、崇高である。浅くも

あり深くもある。子作りではなく快樂を得るためだけの性交は、神に背く行為だと声高に叫ぶ者もいる。エロの在り方は千差万別、多種多様だ。

しかしあらゆるものに通ずる『飽き』という観念からは、エロも逃げられない。世の中にありとあらゆる性癖が溢れているのは、それに抗う先人たちの、飽くなき挑戦の結果なのだ。『好きなものが好きでなくなる』——これほど不幸なことがあるだろうか。

だからそれを避けるためには、努力が必要だ。『好き』に努力が必要なんて、それはもう好きではないのでは？ と揶揄する人がいる。けれど、個人的な見解では間違っていると思う。肉が好きだからって、そればかり食べていては気持ち悪くなる。たとえ野菜が嫌いでも、それを付け合わせるからこそ肉の旨味がより映えるのだ。

つまり何が言いたいかというならば、新しいシチュエーションの開拓である。セックスへの『飽き』とは、つまるところ心因性の勃起不全に繋がる。せっかく極上の女性達と繋がりをもてたんだから、いつまでもいつまでもそれを幸せだと感じてたいじゃん？ となれば、やはり必要なものは新しいなにかだ。同じ女性とセックスするにしても、場所や趣向を変えれば新鮮味が増し、当然ながら興奮も増す。マンネリを回避する努力は、常に怠るべからず。それがセックスへの——ひいては女性への敬意というものだ。というわけで、新たなシチュエーションを切り拓くと同時に……イビルアイと仲良くなるためのイベントもこなしていきたい所存である。といつても——もうそれなりに

仲が良いし、なんなら押せ押せでいけばセックスさせてくれそんな気がしなくもなくもないくらいではあるんだけど……やっぱり永い付き合いになるのなら、より親密な関係でいきたいものだ。

女の子には基本的に“素”で接しているけど、それでも多少なり被つてはいる。人間関係としては当たり前のことだし、なんなら誰とでも同じように接する人のほうが珍しいだろう。だから本当の本当に素で接してるのは、ドラウとかイビルアイとか——つまり寿命が長かったり、あるいは不老だったりする存在だけだ。恋人であると同時に良き友人でありたいというのは中々贅沢だろうが、彼女達も彼女達でそんな節を見せることがある。

人間としての短期的な視点と、人外としての長期的な視点の両方を持ち合わせた、長寿特有の精神性なのかもしれない。僕だつて前世を考えればそれなりに長生きしてるし、あまり普通の感性とは言えないだろう。何かしら通ずるものがあるのかもね。

——さて、前置きが長くなってしまった。結局なにをするかっていうと、『記憶の操作』だ。誰もが一度は思ったことはないだろうか？ 『記憶を消して、もう一度あの作品を見てみたい』……なんてことを。

伏線がうまいこと回収される作品や、思いもしない結末を迎える作品などに対して、特にそう思える。結末を知っているからこそ二度目三度目を堪能できるとはいえ、やは

り初めての感動を二度と味わえないのは悲しいものだ。

しかし今の僕ならば、自身の記憶操作すら可能だ。それを利用して面白いイベントを開催したい。ぶっちゃけると、僕にとつても割とリスクとがありそうなイベントなんだけど——だからこそやってみたいってのはあるよね。

なんたつて『運営』だ。自分自身で危ないことをしない限り、ハラハラドキドキなんて味わえるものじゃない。ちよつと危険なことをしてみたいなんて——それは僕だけじゃなく、どんな世界にもどんな人種にも共通する感性だろう。

死亡率三割超えの登山を敢行する人間も、少なからず墜落死する可能性があるのにスカイダイビングを趣味にする人間も——あるいはバンジージャンプで遊ぶような人間も、その大元は同じだ。

スリルなくしてカタルシスは得られない。立ち向かうハードルが高ければ高いほど、超えた時の快感は大きい。それは現実でも創作でも同じことで、楽しさとはヤマでありオチなのだ。だから僕もそれに倣つて、多少の無茶を試みようと思う。

このイベントにおいて一番重要なのは『どれだけ自分を理解しているか』だ。自分がこういつた状況に陥れば、きつとそう行動するだろう——それをどれだけ理解しているかで、どういつた方向に進むのかも決まる。

——ではでは、タイトルを決めてから随分経ってしまったけれど……『失われた記憶

と偽りの恋慕』、始まります。



「…い！ おい！ ——大丈夫か？ なにをやっているんだお前は…」
「…う……あ……う？」

…視界がぐらぐらする。というか誰の声だ？ 父さんでも母さんでも、お姉ちゃんでもないが——なんだか心配されているようだ。体の感覚が戻るにつれ、硬い床の感触が不快感を訴えてくる。ぼやけた目に入ってくるのは、知らない天井だ。

というかあの灯りはなんだ？ モダンといえいいのか、およそ近代的とはいえない

不可思議な形だ。そもそも眠った記憶もないのになぜ「目覚めた」んだっけか……うーむ……むむ……ああ、思い出した。

大学へ行く途中、トラックに轢かれそうになったんだった。反射神経の申し子と言われた僕が華麗に左へ避けたら、あろうことか運転手も右にハンドルを切りやがったのだ。響く轟音、凄まじい衝撃……で、そこで記憶が途切れた。

生きてるんなら病院の筈だが、上体を起こしてみれば血色の悪い幼女が心配そうに覗き込んでくる。はい、異世界転生ですわかります。なんか変なマントとか着てるし、これはもう確実に剣と魔法の世界だろう。そうか……あれが噂に聞く転生トラックだったのか。サイン貰つとけばよかったな。

「エイ、大丈夫か？ まったく……雑に扱うからそうなるんだ。錬金術とは本来繊細なものなんだぞ？ 適当に調合などするから爆発するんだ……当然のように無傷なのはアレだが」

「……」

「……エイ？」

……ん？ ちょっと待て、これはもしや転生ではなく……誰かに魂が憑依したとか、そっち系なのか？ オイオイオイ、やめてくれよ神様。つまり僕は間違いなく死んでて——その上で異世界の人物の体に乗っ取ったことになるじゃないか。

「ちよつと、変な音がしたけど……大丈夫？」

「危ないお薬のにはい……どうせまた変なクスリでも作ってた」

「つーか宿屋で実験すんなよな。金で解決するつっても、限度あんぜ？　おい……エイ？」

どやどやと部屋に入ってきたのは、金髪美女に双子の忍者にいかついおっさん。この体の持ち主の仲間だろうか？　うーむ……どうすべきか。相手の立場にたつて考えるならば、今の状況は非常に危険が危ない。仲間が見知らぬ他人に乗っ取られたとか、超お怒り案件だろう。

剣と魔法の世界であれば、悪霊に取り憑かれたとかそっち系の判断もあり得る。だつたら事情を隠すべきか……うーん、それもどうかと思う。死にたくはないけど、もう死んでしまったのは確かっぽいのだ。他人の人生を破壊してまで生き延びるのは、ちよつと心苦しい。

僕は小市民なんだ。常に罪悪感を抱えてストレスだらけの人生を送るのは、勘弁願いたい。ここは正直に状況を申し出て、どうにかこの体を持ち主に返却したいところだ。ただ——もし同時に存在できるなら、たまに体を貸してくれる状況にもっていったら万々歳だろう。

せつかく自我が消滅しなかったのだから、面白おかしく生きたいものだ。なにせまだ

童貞だしな……ああ、使用できなかった我が息子よ、すまんこつて。

「あー……『エイ』って僕のこと言ってる……よね？」

「はあ？ お前がエイじゃなかったら誰がエイだつてんだ」

「いや——非常に申し訳ないんだけど、僕はその『エイ』じゃないんだ」

「…っ！ ま……まさか……！」

「ん？ なんか心当たりあんのか？ リーダー」

「エイの内に眠る……ネフィリムの欠片が覚醒した……！」

なに言つてんだコイツ……いや、待て待て。ここは明らかに現代日本ではないのだ。あちらでは痛い中二病発言だとしても、こっちではマジのガチという可能性はある。

「アホか。さっきの爆発でおかしくなっているだけだろう。それで？ お前がエイじゃないならどこの誰だというんだ……どうせからかっているだけだろうがな」

明らかに僕の発言が信用されていない気がする。まったく、元の体の持ち主はろくな奴じゃないようだ。普通、仲間がそんなことを言い出したらまず心配するだろうに。

「…でも嘘は言っていない」

「同じく」

「…なにこ？」

ん？ 双子の忍者ちゃんはちゃんと信じてくれたようだ。というか、なんだ嘘は言っ

てないって。嘘を見破る技能でも持っているのか？ 本音と建前が殴り合っている現代日本じゃ、生きにくそうな能力だな。しかし今この時であれば非常に助かる。

しかしまあ……とりあえず、なんとなくの力関係は見えた。こう見えても人間観察は得意なのだ。リーダーと呼ばれた金髪美女は、そのままリーダーだろう。しかしもつとも態度がでかいのは、あの顔色の悪い幼女だ。お偉いさんの孫とかそんな感じ？

おっさんだと思っていた人は女性のようだが、見た目とは裏腹になんとなく気遣いができる雰囲気を感じる。パーティの調整役とかかもしれんな。双子の忍者は……綾波とかタバサ的な独特な喋り方をしてるけど、感情の起伏が薄いというわけではないようだ。というか異世界に忍者ってどういうことだよ。よくある『極東の島国』的なところ出身なのか？

「や、やつぱり……これは私に与えられた試練……！ 失われたネフィリムの秘紋が覚醒する兆し……！ エイ、よく聞いて！ ……あなたは『失われた世界の管理者』。私のために、この世界にあまねく『最古の管理者』と敵対することになって……」

「う、うん……」

どういう運命背負ってんだよこの体。誰も突っ込まないということは、本当の本当にガチなのか？ 一応よく聞いておくべきか……頭が痛くなってくる。しかしそんな超常の存在が関わっているからこそ、別世界の魂が入り込むという異常な事態が起こった

とも考えられるな。

『ネフィリム』『管理者』……それに『太古の厄災』。絶え間なく喋り続ける金髪美女の話を、要点だけ記憶に留めて整理していく。うーむ……もしかして体の持ち主の魂はその『管理者』に囚われたとか？ 空っぽになった体に、別世界の魂が入ったとか。どこの少年誌展開だ。

「……それで、私の中に眠る彼の魂が……“白亜の空間”での修行が……そして……」

とりあえず三十分は経過したと思う。これは本当に覚えておくべき情報なのだろうか？ 記憶容量の無駄であると、僕の直感がひしひしと訴えてくるのだが。心なしか他のメンバーも面倒くさくなっている感。

「そ、それでね……試練に打ち克った私と契約を……そ、その契約っていうのが……！
そ、そして私は災厄の魔樹と……」

一時間くらい経ったかな？ いかつい人は飽きてどっかに行ってしまった。幼女はベッドでゴロゴロし始めて、双子の忍者の片割れとよくわからない攻防を繰り広げている。あの忍者はレズでロリコンとかなのだろうか。救いようがないな。

「……それで……それから……うんたらかんたら……」

ダメだ、もう頭に入ってこない。もういいや、直感を信じよう。この娘の言ってることは覚えなくていい。このままじゃ更に数時間くらい続きそうだし、適当にはぐらかし

ておこう。たぶん中二病患者だし、意味深なこと言っとけば勝手に解釈してくれるだろう。頑張れ僕、エヴァ信者を前にした庵野になりきるんだ……!

「ラキユース」

「それでね……えっ? あ、う、うん……?」

「君の話を聞いて、僕もなんとなく思ったよ! ネフィリムを取り戻すために何をすればいいか——君にはもう解ってるね? さあ、早く! あまり時間はないようだ」

「——! わかったわ! 私は試練の間に行つてくる……あなたの契約者として、必ず記憶を取り戻すから……待ってて、エイ」

「ウン、ガンバツテ」

部屋の外へ飛び出していく美女を見送つて、ようやく一息ついた。ベッドの上の攻防も決着がついたようで、頭に大きなたんこぶを作つた忍者が、涙目で床に突つ伏している。片割れが慰めながら姉(妹?)を背負い、部屋を出ていく。え? ちょ、おいおい僕の処遇はどうなるんだ……みんな薄情すぎない? それとも別に仲間とかではなかったのだろうか。

「記憶がないのは本当みただけだ」

「どうせまた何かの遊び」

「ずっと戻らなかつたら手を貸す」

記憶を消す遊びってなに!? この体の持ち主ってどういう存在なの? まったく訳がわからんな……残された幼女は探るようにこちらをうかがってくるし、なんだよもう。自由に行動しちやっついていいのか? チュートリアルは? なんかチートとかないのか神様……いや、ネフィリム様。

「…本当に記憶がないのか?」

「いや、だから記憶喪失とかじゃなくて……別人なんだって。僕が僕である記憶はちゃんとあるよ」

「…」

疑るように僕を睨めつける幼女。ぐるぐると僕の周りを彷徨う様子は、警戒する子猫さながらだ。そして何かを思いついたように手をぼんと打ち、僕の膝の上に乗り出した。この歳で対面座位とか、中々レベルが高い幼女だ。

…と、なるべく動揺を表に出さないようにはしているのだが——いかんせん、僕は口リコンの童貞である。こんな美幼女にくつつかれたら、手が出る前に口から心臓が出そうだ。緊張すると勃たないってほんとなんだね。いま血圧を測ったら異常値を叩き出していることだろう。甘ったるい香りが鼻孔をくすぐってきて、心臓が早鐘を打っている。

「…ふむ」

「な、なんだよ?」

「いや……こんなことで赤面するとは思ってもみなかった。いつもならそっちから抱きついたり揉んだり触つたりと、変態そのものだったからな」

どんな変態だよ。というか——女の子にこんな密着されることはそうない。ドギマギするのは仕方ないだろう。努めて冷静を装っていたのだが、見透かされているようだ。つーか体が冷たいというか……体温感じないな。子供つてもっと暖かいイメージだけだ。

「…別人なのか記憶がないのか、なぜ判断できる?」

「へっ?」

「ある一定までの記憶がすっぱぬけただけかもしれないだろう? 私達に見覚えがないからといって、別人だというのは——」

「いや、そもそも明らかに世界が違うし……体だつてどう見ても僕じゃないし」

「お前は最近『こちらの世界』に來たと言っていた。姿も自由自在に変化できるだろう? ならば根拠とするには薄いな」

「それ人間やめてない?」

「力は神そのものだな」

なんだ別世界つて……そういうのつて認知されてるのか? しかし彼女の言葉を信

用するならば、記憶が抜けただけの可能性も確かに否定はできないな。トラックで転生して、チートを手に入れて……好き勝手やった後に記憶が抜けたとか？ だとするとどうなってるんだチート、僕の記憶もちゃんと守れよチート。

「そもそも、別人にしては言動や雰囲気がそのまますぎるぞ。ティアの発言がなければ、単にからかわれているとしか思えん」

「うーん……そつか。ならどうすべきかな……あ、えつと名前は……」

「……イビルアイだ」

「イビルアイちゃん、ね。一応——うん、一応ヨロシク」

「ちゃん付けはやめろ」

「おっと、大人扱いしてほしいお年頃だったか。そりゃあ失礼」

「お前より年上だろうが！ ……ああ、忘れてるんだったな……」

……ん？ 幼女が僕より年上……？ ははあ、これはもしやロリババアというやつだろうか。血色が悪いのは、もしかして吸血鬼だからとか？ ロリババアと言えば狐娘か吸血鬼娘だと相場が決まってるしね。

「もしかして君って……人間じゃなかったり？」

「ん？ ああ、そうか……そうだと、私は吸血鬼だ……気味が悪いか？」

「じゃあ吸血行為がセックスに相当するってほんとなのかい？ ——ぐふうっ!？」

「いま確信したよ。お前はエイだ」

「もうちよつと感動的な場面で言っただけでよかったな、そのセリフは……ん？ あれ、痛くないな……」

いくら幼女とはいえ、かなり腰のはいった一撃だった筈だ。まったく痛くないというのは違和感だが……イビルアイが言うところによると、僕はちよつと反則的な存在であるらしい。やあ、やつぱりちゃんとチートしてるじゃないか。サンキューネフィリム。フオーエバー管理者。

「さて……まあ別人なのか記憶が抜けてるのかはわかんないけど、どうすればいいのかな。なんか良い案とかない？」

「そうは言ってもな。そもそもなんの薬を作っていたんだ？」

「いや、そう聞かれても。僕に対する僕の認識は、一般人でしかないし……どこにでもいる学生だし、家庭も一般的な中流家庭だよ」

「……！ ふむ……」

ん？ なにやら幼女が複雑な顔をしている。これはどういった感情だろう……うーむ……『興味』と、ちよつとばかりの罪悪感……かな？ しかし見れば見るほど可愛い幼女だ。どのくらい生きてるんだろうか。ロリババアの定義は曖昧だが、個人的には百歳は超えてほしいところだ。五十歳とか半端なところだと、生々しい年かさを感じ

るし。

「ああ……そうだ。お前が本当にエイなのか、簡単に判別する方法があつたな、う、うむ」
「ほほう。どうやって?」

「ま、前に聞いた『昔話』を聞かせてくれれば——それが合致していたら、間違いないだろう? その、お前がまだ普通の人間だった頃のだ。つ、つまり今の記憶だ、うん」

キヨドリすぎだろこの幼女。絶対知らないよね僕の過去。しかし……チートを手に入れたところで、過去バナを避けるような僕ではない。別に虐められてた記憶もなければ、知られて恥ずかしい経歴もない。ならなんで話さなかつたのか……それはおそらく、トラックに轢かれてから今現在までのどこかで——何かしらを挟んでいるのではないだろうか?

それがどういったものかはわからないけど、話していないなら話していないの理由があるのだろう。記憶が戻るかどうかは不明だが、もし戻ったときに困った事態になるのは避けたいものだ。

嘘について人の過去を探ろうとする幼女へのお仕置きも兼ねて、ここは遙か昔に作成したブラックヒストリーの一部でも公開するでしょう。中学二年生の頃、ノート一杯に書き連ねた設定集。主人公にはこれでもかと悲惨な過去を詰め込んだ、中二心満載のノートである。

主人公の辛い過去を、仲間が知らされる展開って胸がくすぐられるよね。その点において某魔法先生の記憶（夢）覗き魔法は優秀である。数々のEMILYAさんやYOKO SIMAさんといったクロス主人公が、過去を暴露されてきたものだ。僕もそれにあやかって、辛い過去（）でも話すとするか。

「…記憶の始まりはいつも雨だったかな。無数の死体と瓦礫の山の中で……黒い雲を見つめてた」

「…… あ、ああ……」

平々凡々だったという前置きをいきなり無視したが、幼女は突っ込んでこない。いや、突っ込めよ。むしろ僕が君に棒を突っ込みたいよ。ベッドで横並びに座るとか、もうこれオツケーサインじゃないの？ それとも童貞の早とちりなのか？ くそ、わからんちん……仕方ない、もう少しブラックヒストリーを語るとしよう。割と僕にも精神ダメージが入ってくるんだけど、ネタばらしのタイミングが掴めない。

「『ブラッド・チルドレン』……それが僕たちに付けられたただ一つの呼び方だった。個人を識別はされない。兵器でさえナンバーはあるつてのに、酷いもんだつたよ。まあ名前を付けられたところで、すぐ死ぬ運命……つける必要性は薄かつたんだろうね」

「……、っ……」

「戦場を血で彩る子供たち……そんな中で偶然か必然か、僕は生き残り続けた。百回も

帰ってきたところから、一つだけあだ名がついた。『死イにぞこモーないタル』、なんてね」

百回の戦場ってあたりがほんと草。激戦区でもあり得ないだろ常識的に考えて。しかし常識的に考えられないからこそ中二病患者であり、実際に中学二年生の頃に考えたのだから仕方ないだろう。なんか手をギョツと掴まれたが、押し倒していいのだろうか。

とりあえず話を続け、なんか色々と凄い活躍とか悲劇とかを並べ立てる。いやあ、意外と覚えてるもんだね。途中から宇宙人や地底人が出てきたり、魔界やら天界やらが出てきたりと、設定を書いている途中で何にハマっていたのか透けて見える。黒歴史で大抵の場合はパクリ要素の寄せ集めなことが多いけど、僕のこれもご多分に漏れずオマージュだらけだ。

最後は元氣玉っぽい感じで力を集めてボスを倒して終わりだ。現代風の戦争モノから一転、異能バトルやらSF要素が入り乱れているが、まあよくあることだ。そして最後に放った一撃は一つの街を崩壊させて……うむ、要はあれだ。ラスボスを倒せずに世界の終わりを選ぶか、一つの街を犠牲にしてラスボスを倒すかの究極選択的なやつだ。

しかし『もつと犠牲を少なくできた筈だ』と声高に叫ぶ輩に糾弾されて、僕は夕日にバックに姿を消す。じゃじゃーん……はい、終わり。要所要所で突っ込んでほしかったのに、最後まで語るハメになってしまった。大丈夫か？ この幼女。

…ん？

「わ……私も、同じなんだ……」

「え？ あ、はい……ん？」

僕が話を終えたと思つたら、今度は涙混じりに自分の過去を話し始める幼女。僕にしがみつきのながら話す姿は、いまさら『冗談でしたー』とは言えない雰囲気だ。というかやっぱり過去の話なんてしてなかつたんじゃないか。

そして語られる幼女の歴史……ふむふむ、元は普通の幼女で……どこぞの竜が『プレイヤー』とやらに対抗するため人の魂を集め始めて……ほほう、それで？ タレントとかいう固有能力でその力をコピーしてしまつた幼女が、図らずも吸血鬼になつて……？ ふむ、結果的に国を一つ滅ぼしてしまつたと。それで『国墮とし』。

…重すぎない？ ちよつと受け止められないんですけど。え？ お前と同じ？ あ、いや僕のはただの妄想といふかなんというか……どうしたもんだらう。なんか妙な雰囲気だ。色気のある空間とでも言うのだろうか？ 『女性のオツケーサイン』というものがあつたらば、まさに今つて感じ。

「…私はお前のように性に奔放な男を良く思つていなかった。むしろ毛嫌いしていたと言つてもいい……だがお前だけは、どうにも憎めなかつた。私よりも強いから——だからなんだと思つていた。だけど違つたんだな……お前は私なんだ」

いや全然違いますけど。性格も過去も人種も、なんなら性別すら違うんですけど。ちよ、待って、幼女に迫られるのは嬉しいんだけど、勘違いさせたままというのは非常にアレだ。後々にこじれるやつじゃないか。イビルアイちゃん！ 赤い顔で唇近づけないで！

「んっ……」

「——っ」

——唇が触れた瞬間、何かが輝いた。

……ん？ あ、記憶戻った……早いなオイ！ 少なくとも三日はかける予定だったんですけど。イビルアイとの粘膜接触で記憶が戻るようにしていただけに、長期間かかる可能性もあった。最悪の場合はNPCに頼んでいたけど、彼女のチヨロインぶりを舐めていたぜ。

……っっていうか過去重っ！ そして僕の過去（○）も重っ！ 恥ずかしい思い出が僕を苛む……やめて、ブラッド・チルドレンとかほんとやめて。大学生の僕は大丈夫だったようだが、今の僕はそれをネタにするのもちよつとキツイ。

「エ、エイ……？ その、嫌だったか……？」

「……ん、いや……記憶戻ったみたい」

「……！　　そ、そうか！　　良かった……あ、その……騙すような形でお前の過去を聞いてしまつて……すまん」

「あー……うん、気にしないで」

謝罪するイビルアイを抱きしめ、押し倒す。顔を赤くする彼女は非常に可愛いが、血が通っていないのに赤面するとはこれいかに。まあそれは気にせず、謝罪を受け入れる代わりに僕の謝罪も受け入れてもらおう。うん、まさにイーブンつてやつだ。

「は、ん……」

「……イビルアイ」

「う、ん……？　　あつ、ひうつ……」

「君のことを許す代わりに、僕のことでも許してほしい。一つだけ……嘘をついていたんだ」

「ん、つ……ああ、なんでも言つてくれ。お前のことは……全て受け入れるつもりだ」

「ありがとう。それじゃ言うけど——さっきの話つて全部ネタなんだ」

「うおらああ!!」

「ぐふうっ!？」

金玉を蹴り上げられた。おいおい、許すつて言つたじゃないか。こらこら、腕を噛むんじゃないやしません。皮膚を突き破らないと吸血はできないでしょ？　どうせなら腕

じゃなくてチンポを口に含んでくれませんかね。

——しかしセックスするような雰囲気でもなくなってしまうたし、数日はご機嫌とりに専念するでしょう。なんやかやで処女を喪失する相手として合格判断はされたのだ。あとは機会があればつとところだろう。

プンスカ怒っているイビルアイを撫でながら、申し訳なさそうに笑う。彼女も本気で怒ってるって訳じゃないだろうし……これもイチャツキの一つと思えば可愛らしいものだ。

…ん？ なにやら階段をドタドタとかけ上がる音が…

「——エイ！ 戻ったわ！ …え…？ イビルアイ……あなたまさか、記憶がないのを良いことにエイを……！」

「ラ、ラキュース!! いや、これは違うんだ、その……」

半裸でベッドインしてイチャついてるとか、これは言い訳できませんねイビルアイさん。ここは一つ、ベル薔薇みたいな表情になっているラキュースちゃんに乗っかるうじゃありませんか。

「えつと……彼女と僕は恋人だつて聞いたんですけど、違うんですか？」

「ちよ、おまつ」

「イ、イビルアイ、あなた……！ ——ティナ達のこともあるし、普通にエイと関係する分

には何も言わないけど……こんな卑怯なやり方を認める訳にはいかないわ！」

「イビルアイさん……残念です」

「エ、エイ、おまつ——どわあつ!? 待てラキユース! これは罠だ! まずは落ち着いてだな——」

「問道無用おお!!」

「エイいいい!!」

あつはつは、ラキユースちゃんもだいぶレベルアップしてるし……相性を考えればイビルアイでも結構キツいだろう。世界最高峰レベルの鬼ごっこは中々に見応えがある。鬼の方が追いかけられているのはご愛嬌といったところだろう。

——ま、どんな過去でも今が楽しければそれでいいんじゃないかな……僕はそう思うけどね、イビルアイ。

16話

国家間での戦争とは、あらゆるものが激しく動く。人の移動、兵糧の運搬、その他諸々。いかに質の高い兵士を揃えようとも、数の力とはそれを覆しかねない。故に少しでも多くを揃えようとするのは、国として当然の行動だ。例年行われるバハルス帝国とリ・エステーゼ王国との戦争——前者は專業兵士を揃え、後者は農民を徴兵しているため、質の差など歴然だ。しかし王国は数に物を言わせ、曲がりなりにも帝国の侵攻を防いでいる。その事実を鑑みれば、数は力と断言できるだろう。

しかし——あるレベル以上の『個』が出現した時、『数』は意味をなさなくなる。難度にして二十にも届かない弱者の群れなど、限界近くまで鍛えられた強者にとっては塵に等しい。何をしようとも傷一つ付けることすら叶わないだろう。

もしその『強者』がアンデッド等であれば、弱者にとつてはもはや悪夢だ。疲労もせず、空腹も覚えず、睡眠すら不必要な絶対の『個』。どんな奇跡が起ころうとも勝利は掴めない。仮に敵がアンデッドでなくとも、終わりを迎える時間が遅くなるだけで、結果は変わらない。

つまり絶対的強者を抱える国同士での戦いとなると、暗黙の了解が成り立つのだ。そ

れすなわち——『代理戦争』。現代で言うならば、オリンピックのようなものだ。一流のアスリートとは、富国ならずして育たない。メダルの数は強国としての象徴のようなものだ。だからこそ、国家ぐるみでドーピングを奨励する事案なども発生する。競技の勝敗は、国の優劣を決めると言っても過言ではない。それと同様に、強者と強者の戦いの行方こそが戦争の勝敗を決めるのだ。

取り決めもなしに戦争が始まってしまえば、強者のすれ違いの果てに、互いの領地での蹂躪が始まる。それはどちらにとつても不利益で、言うまでもなく『無駄な犠牲』だろう。それを避けるため、竜王と法国の戦争とは『個人での戦闘』に代替されるのだ。

『ツアインドルクスⅡヴァイシオン』と『番外席次』の激突。法国にはツアーの他にも『真なる竜王』は存在するものの、その全てが個人主義である。そもそも現状で生き残っている竜王とは、八欲王との戦争において無視を決め込んだ者達だ。世界の命運を分かっつほどの戦いにすら興味を示さなかった者達が、たかが一国との諍いに出張る筈もない。

そして法国において真なる竜王を相手にできる存在は二人しかない。一人は言うまでもなく『番外席次』——そしてもう一人は存在を秘された『神人』。番外席次の存在が明るみに出てしまった今、残った一人は法国の希望だ。今回の戦争に出張るとすれば、国が滅びかねない危機においてのみだろう。

——しかしして『戦争』は『戦闘』となり、決戦の地は『王国』となる。

元々王国は『法国と評議国が諍いを起こさないため』の折衝地としての役割が大きい。となれば、両者が決裂した時に被害を受けるのもこの地だ。そもそも両国とも、街一つ消えかねない強者同士の戦闘を、自国で起こすことなど認めはしない。ゲームとは違い、相手に当たらなかつた攻撃が消える筈もない。近接同士の戦いであればともかく、一方は空を飛び広範囲のプレスを吐く「竜王」なのだ。となれば中間に位置する王国での戦闘になるのは、自然の成り行きとも言えるだろう。

二国間のちょうど中心——王都『リ・エステイーズ』と『エ・レエブル』に挟まれた平原。そこでツアーと番外席次は相対し、睨み合っていた。

「はーあ……憂鬱」

「心中察するよ。僕も荒事はあまり好きじゃないし」

「あら、じゃあ戦わなくてもいいじゃない。お互いに戦いたくないなら、意見の一致つてやつよね？ はい、終わり！」

「それは助かるね。なら君の身柄と——プレイヤーが残したアイテムを全て差し出してほしい。それで今回の裏切りは見逃そう」

「無理に決まつてるでしょ？」

「なら残念だけど、戦うしかないね」

「う〜……別にいいじゃない、強者の一人や二人。そっちの国の方がずっと強いことなんてわかってるでしょ?」

「問題はそこじゃないよ。プレイヤーの血を引いた存在が」 至高の領域に至ったことが問題なのさ。君達の魂は世界のバランスを崩す……もちろん一人や二人程度で揺らぐことはないけど、だからといって放置はできない。明確に盟約を破られるような状態が続けば、いつのまにか世界が汚れるかもしれないしね……君が短命種であれば、少しは違ったんだけど」

「魂?」

「強いことが問題じゃないんだ。『存在すること』が問題なんだけど……まあ散々話合って理解しあえなかったんだ。これ以上は話す意味もない」

「…」

会話が終わり、数瞬の時間が流れ——戦いは始まった。難度にして三百を超える存在の戦いとは、真実、おとぎ話に語られる戦闘だ。余人には何をしているかも理解できない、高速の戦闘。白金に光る鱗が縦横無尽に空を駆け、十字槍に似た奇妙な鎌が鋭く走る。

かつて世を支配した『始原の魔法』が飛び、今の世を示す『位階魔法』が受ける。牙が、刃が、プレスが、尋常ならざる威力の攻撃が飛び交い、大地を削り取っていく。純然たる実力で言えば竜王に分があり——しかし、少女にも十二分の勝機があった。

席次の番外という称号は伊達ではない。職業構成こそ無駄な部分はあるものの、それを補って余りある『タレント』が彼女にはあった。奇跡のような確率で生まれた『強者』——そんな存在に神が与えたのは、世界に二つと無い奇跡のようなタレント。

その二つが合わさった結果が、上位のプレイヤーにも引けを取らない『番外席次』という怪物だ。ともすれば、大墳墓の支配者すら打倒しうる実力を彼女は持っていた。

「しいつ——りやあああ!!」

「……っ！」

空間が歪曲し、予想された軌道から外れた鎌の一閃が、ツアーの翼を——その皮膜を傷付ける。神人とはいえ、自身の実力からは大きく下回るだろう……そんな推測をしていたツアーは、即座に慢心を戒めた。敵は己を殺し得るのだ、と。

「……強いね」

「はあっ！——っふう……降参してもいいわよ」

「うん、そうだね。負けそうになったらそうするよ」

「むう……そんなの想像もしてないって顔じゃない」

「そんなことはないさ、君は十分に強い。ただ、長く生きてるとね……なんとなく想像もついてくるもんさ——三、四十回も戦えば一回くらいは落とすかもね」

「あら、朗報じゃない。なら——それをいま持つてくればいいだけだもの！」

「はは、そういうことだね」

人外の膂力で振られた鎌が、ツアーの瞳を正確に狙う。しかし刹那の攻撃を見逃すことなく、その頑丈な顎と牙で鎌を啜えるツアー。空間がギシリと軋めいたのもほんの一瞬——ツアーが体を半分折り曲げ、番外席次の無防備な背を、尾で強かに打つ。

あまり戦闘の経験がない上に、その少ない機会もほとんどが人型との模擬戦だった番外席次。予想もしていなかった攻撃手段とその衝撃に、思わず武器を手放し、肺の中の酸素を咳き込みながら吐き出す。

——幼さの残る言動とは裏腹に、ツアーの戦闘は老獪そのものだ。あからさまな勝機を見逃す筈もなく、そのまま番外席次の胴に尻尾を巻きつけ、啜っていた鎌を放り出し——鋭い牙で首を落とさんと嘯み付いた。

「……ぐつ、——あ、あぐつ……ふ、う……っ！」

胴に尾を巻きつけられたとはいえ、両腕は健在だ。その細い腕からは考えられない程の力をもって、番外席次はツアーの上顎と下顎を掴み、抵抗を試みる。しかし人間種と異形種はそもそもその能力値に大きく差があり、その中でも「竜」はあらゆる面で優遇され、世界に祝福された最強の種族だ。

断頭台の如く、ゆつくりと顎が閉まり——番外席次の腕が圧力に耐えきれず、小刻みに震えだす。尾の締め付けも強まり、口の端からは血の泡が溢れだしていた。勝敗は既

に明らかだが、しかしツアーにとっては彼女を捕虜にするより、殺してしまつた方がなにかと都合が良い。自他共に温厚な性格と認識されている彼であっても、必要とあらば厭いも躊躇もない。

——硬いナニカが千切れる、無情な音が平原に響いた。



黒いポニーテールが目の前で揺れる。対比が鮮やかな白い肌は、うなじからヒツプまで染みひとつ無い。何度も下半身を打ち付けたせいか、結合部の周囲だけがほんのり桜色で淫らだ。そして目の端から悔し涙を滲ませる様子は、嗜虐心をこれでもかか煽ってくる。

「ほら、もつと締めなよ『ナーベラル』。ルプスと比べると緩いぜー」
「う、つ、ぐ……こ、の……!」

「あれ、なんか反抗的? ふーん……」

「っ! ふぐつ、んっ、ぐっ……!」

「おつ、そうそう。やればできる娘つて素敵だぜ。頑張れナーベラルちゃん、ナザリックの存亡は君の雌穴にかかっているぞー」

潤滑液でまみれた穴がキyunと締まる。それでもまだ名器とは言い難いが、抜き穴としてはギリギリ合格点だろう。ピストンを早め、チンポを昂ぶらせる。中のヒダがいまいちなので、穴の入り口をカリ首で擦るように小刻みに体を揺らす。

うーん、もうちよつと刺激が欲しいな。ひくついているケツ穴に指でも突っ込んでみるか。排泄の必要がないだけあって、汚さとは無縁だ。出す穴じやないってことは、用途としては挿れるためだけに存在してるんじゃないかなろうか。なら無遠慮に突っ込むのも、むしろ当たり前な行為だろう。

「んう、っ……!?! き、きさ——」

「なに?」

「……う、う……!」

こちらに顔だけに向け、呪い殺すかのように睨んでくる彼女。応じるように、親指で

乱暴にケツ穴をほじくる。まさに『くっ、殺せ』といった風だが、僕にできるとすれば精々イキ殺しにするくらいのものだ。

ケツ穴を弄る手とは逆の方で、乱暴に後頭部を押さえつける。完全無欠にレイプの場面だが、ちゃんと合意の上でのセックスだ。何も問題はない。

「あー出る出る……く、ふ……！」

「ひっ、あ、熱っ……！」

「あーあ、美味しそうに飲み干しちゃって。この穴はご主人様のためのものだろ？ だらしないマンコだなあ……それとも僕を主として認めたってことなのかな？」

「だ、誰が——んうっ?!？」

「まだ出し終わってないんだから、気を抜くなよ。ちなみにこの精液……『的中率』百%の大サービス中だぜ」

「ひっ……!? や、やめ——!？」

「もう遅いって」

四つん這いで必死に逃げ出そうとする彼女だが、僕の方でガツチリと腰を押さえつけているため、射精からは逃れられない。むしろ動いたせいかな、より膣奥に精液が流れ込んでいく。やがて諦めたのか、嗚咽混じりに動かなくなった。ただ精液を流し込まれるだけの、哀れな雌と化している。

「ご主人様にちゃんと報告しなよ？ 初めてのチンポで淫らにあえいで、立派にメイドとしての役目を果たした——つてき。膜はもうないけど、ご褒美に抱いてくれるかもしれないぜ」

「ひっ、うっ、……ひぐっ……」

「泣いてないでさあ、射精が終わったんならお掃除だろ？ ……それとも、使えないメイドだったって報告しとこうか？」

「……っ！ き、清めさせていただきます……、っう……」

雌穴から精液を溢れさせながら、汁にまみれた肉棒を頬張る彼女。できる限り接触面を増やしたくないのか、舌でチロチロと精液を舐め取っていく。人外の美貌でそんなことをされると、確かに興奮するけど——じれったいよね。

「んぶうっ!? ん、ぐっ——じゅぶっ、じゅるっ、……ぷはっ、や、やめ——……んぐっ!?」

「おー、喉奥の方が雌穴より締まりいいんじゃない？ ほら、もつと舌を動かして」

「……ん、っ、ん、っ……っ、あえ、っ、じゅぶっ、ん、——んぐうっ!?」

「ほら、さっきの三倍ぐらい早く射精できたぜ。ナーベラルは下の穴より上の穴が名器……っつと。覚えとこう」

後頭部をこれでもかと押さえつけ、えづく喉の感触を楽しみながら射精を堪能する。

苦しきのせいかマンコから逆流した精液が迸っている。まるで喉奥に流し込んだものがそのまま流れ出ているようで、少し滑稽だ。モデルのように整ったボディが、お腹だけポツコリ膨らんだ頃——ようやく射精を終える。

ベッドの上で苦しげに嘔吐する彼女。まあ胃の中にあるのは精液だけだから、これも一つの射精と言えるのかも知れない。四つん這いのまま、上から下から精液を垂れ流す姿はひどく惨めで……無性に虐めたくなる。

「え……なっ、や——」

ご主人様にケツを向けたまま嘔吐するなんて、失礼だろ？ でも完璧なメイドである君がミスをする訳はないんだから——その醜態は誘惑の一環ってことにしといてあげよう。思わず逃げようとした彼女の体を、ベッドに押し付ける。まだ未使用の新品アナルに肉棒をそえ、一気に突き挿れた。寝バックと言えいいのか、体全体で押さえ込みながら全力で腰を振る。もつとも征服感のある体位の一つだろう。

何百回ピストンを繰り返しただろうか……諦めたように脱力する彼女の、そのケツ穴がポツカリ開ききつて戻らなくなった頃、ようやく僕の性欲も落ち着いた。最後の射精を堪能した後、柔らかくなったチンポを尻タブで挟み、擦る。にゆるにゆるとした感触が心地よく、火照った体が落ち着いていくのを感じる。スポーツでいうクールダウンつてやつだろう。

——さて、もういいかな。

「いやー、名演技だったよ。ありがとね」

「はっ！ 恐悦至極に存じます！」

哀れなレイプ被害者といった姿から一転、シユタツと立ち上がって敬礼するナーベラル……ならぬドツベルゲンガー。まあナーベラルちゃんもドツベルゲンガーだけど、もちろん彼女は僕が作った別個体である。その能力を使い、ナーベラルちゃんに変身してもらっていたのだ。

無理やりが良くないってのは確かだけど、たまにレイプもので抜きたくなるのは男の本能だろう。チンポの具合によって、ケモノナーにもレイパーにも熟女好きにもロリコンにも純愛信者にもなるのが、男つてもものだ。

「ご満足いただけましたか？」

「うん、充分充分。強いて言うなら、本当の彼女だったらもう少し言い返してきそうかな……つてとこくらいい？」

「も、申し訳ございません！ 精進いたします！」

「あ、いや、充分に高水準だったからね？ 余は満足じやつて感じー」

感極まったように震えるドツベルちゃん。なるほど、一言一句にいちいち感銘されるというのはいくらものか。ギルマスの苦労の1%くらいは理解できたような気がする

る。さて、性欲も落ち着いたことだし今日はナニをしようかな。

頭を撫でる代わりにケツを撫でながらそんなことを考えていると、監視システムからメツセージが入る。何事かと思えば、ちゃんツアーと番外席次ちゃんが戦闘を開始したとのことだ。まあどちらにしても国力を消耗させたくないだろうから、トツプ同士の対決になるのは既定路線か。

僕に関係ないのなら放つて置くところだけど、思いつきりでドンパチされてるこの状況。王国に被害が出るのをよしとしない友人が多い関係上、無視はちよつとあれかな。なにより番外席次ちゃんの可愛さは、ラナーちゃんに勝るとも劣らない。機会としては絶好ではなからうか。

困った時に、苦しい時に助けてくれた人には恩を感じる。そしてそれが講じて愛へと変わる。本能に依存した当たり前の反応とも言えるだろう。つまり僕が番外席次ちゃんの危機を颯爽と救えば、待ち受けるのは感謝のセックスである。ほとんど謎に包まれている彼女だが、一つだけ覚えていることがある。『私より強い男とエッチしたい』——だったっけ？ もうちよつと真面目な言葉だったような気もするけど、まあ似たようなものだろう。

つまり今は恩を着せるいい機会でもあり、これ見よがしに実力を見せられる素晴らしい機会でもあるということだ。

：しかし気になるのは、番外席次ちゃんの陰毛だ。つーかあの髪の色は本当にどうなってるんだ？ 真ん中できつちり白黒になってるとか、モノクマなの？ 似たような毛色の猫とかいるけど、あれと同じなのかな。遺伝子って不思議。

まあそれは置いて、さつさと現地に向かおう。甲斐甲斐しく服を着せてくるドッペルちゃんにお礼を言い、転移する。どれどれ……おお、強いな番外席次ちゃん。現地の人間でプレイヤーに勝つ人ってまずいないと思ってたんだが、あれだと準廃人クラスはある。ロマンビルドにしているギルマスなら負けもありうるかも……まあ実際に戦えば、使えるアイテムの差からして結果は見えてるけど。

決着まだかなー。まだかなー。ちゃんツアー、早く決めちゃってよ。ちらちら見えるフトモモが目毒なんですけど。クール系とサディスティック系と不思議ちゃん系が混ざった彼女に、『なのはの声でやってよw』とか言ってみたい。単芝はやしたい。

しかし彼女のゆかりん声といい、クレマンティーヌのまどか声といい、どういう絡繰なんだろうね。まあ人の声なんて機械で再現可能だし……というかアニメの声だつて実際は機械が発してる音声な訳だし、今更か。そもそも前世の地球上でも、ほぼ同じ声の人間は多数存在した筈だ。常識的に考えて、人の可聴域という狭い範囲で、何十億種類もの声に分かれるってことはないだろう。だからこそ――

…ん？ ――っ!? ば、番外席次ちゃんの首が無くなつて…? しまった、決定的瞬間

間を見逃した。この場合、蘇生魔法は頭にかけるべきなのか？ それとも体？ ちゃんツアーがベツと吐き出した頭には、絶望の表情が彩られている……うわあ、グロテスク。重い何かが落ちた音が、都合二つ連続した。勝利の咆哮を上げる竜王さん……そういうところあるんだ、意外。いやまあ殺し合いの後だと、種族問わずに昂ぶるものなのかな。彼に少しでも危険を感じさせる敵なんて早々いないだろうしね。とりあえずさっさと蘇生させよう。レベルダウン、意識混濁なしのスペシャル仕様だ。

「——っ！ ……君は？ 戦闘中だったとはいえ、僕の知覚をすり抜けるなんて——」

「あいあい、ちよつと待ってねー」

「……？ あ、あれ……私、死んで……？」

「大丈夫かい？」

「え、えつと……？」

状況を十分に理解してくれていないのは残念だけど、まだ挽回は可能だろう。とりあえず僕が蘇生魔法をかけた旨は伝え、彼女をかばうようにちゃんツアアへと向き直る。軽い警戒に、探るような瞳。知性つてのはやっぱり目でわかるんだなあ……というのがよくわかる、深慮遠謀を感じる眼差しだ。

「どうも、ウンⅡエイです……プレイヤーって言った方がわかりやすいかな？ 君の知ってるそれとはかなり違うだろうけど」

「……！ そつか……もうそんな時期だったか。ちなみに、彼女を助けた理由を聞いてもいいかい？」

「美少女は助ける主義なんだ」

「……つまり誰かに頼まれたとか、国の事情とかは関係ないってことでいいのかな」

「はいかイエスなら、前者かな」

「……………。彼女との戦いは正当な理由あつてのことだし、なるべくなら死んでほしいというのが僕の希望なんだけど……やっぱり竜と人なら、後者に寄っちゃうか。君も人間種みたいだし」

「んー……異種族に偏見とかはないよ。でもツアー、君が幼女になれるなら君寄りになることもあるね」

竜の人化といえば古今東西、幼女である。いやまあ最近の風潮だろうけど、やはり竜Ⅱ幼女は鉄板だ。狐娘、吸血鬼、このあたりも幼女でいてほしい存在である。

「……百年くらい前にも聞いた言葉だよ、それ。プレイヤーだと理解できるセリフなのかな？ ちなみに僕は雄だからね」

「そりゃ残念……でも人化はできるんだよね？ じゃないとドラウの存在自体おかしいことになるし。となれば、変化の際の性別くらいは選べる筈だ。だって元から人の姿が固定されてる訳はないんだから——となると幼女姿にもなれる！」

「なぜ人の子にこだわるのかが理解できないんだけど」

「様式美つてやつ？ まあどっちにしても中身が雄なら意味はないけど」

「ふうん……？ まあそれは置いておくとしよう。先に答えてほしいことがあるんだけど

——」

「うん？」

「——君はこの世界でどう生きるつもりなんだい？」

ふむふむ……ちゃんツアーの問いの真意は、結局のところ『ワールドアイテムによる世界の法則改変』に集約するんじゃないだろうか。他にもあるのかもしれないけど、ワールドチャンピオンズの行動ログと、ウロボロスや五行相克の使用履歴からしてもそんな感じだろう。

位階魔法を使いやすくするための法則改変は、主流であった始原の魔法の仕様に大きく制限がかかった。要は竜王たちの既得権益を犯した形になったのだろう。彼等がどれだけのプレイヤーのことを理解しているかは知らないけど、また同じことをされたらたまつたものじゃないだろうことは理解できる。

「んー……まあ僕の幸せって、なかなかちつぽけだからさ。大したことをするつもりはないよ。もちろんできるかできないかで言うなら前者だけだね。君達が結局どうにもできなかった八欲王……が、仮に八百万欲王になったところで、僕には逆らえない」

「……」

『僕には逆らえない』。『僕には逆らえない』。言った後で思ったんだが、中二病全開だなこのセリフ。どこぞのキセキの世代が使いそうな言葉だ。『僕に逆らうやつは雄でも犯す』ってか——いや無理無理。

『プレイヤーとは違う』ってさつき言ってたね。詳しく教えてもらってもいいかな？」

「うーん……短く纏めるのって中々難しいんだよね。わかりやすく言うなら……そう、君らと一緒にかな？ 真なる竜王は『世界の管理者』を自認してるんだろ？ それと一緒に

君達が見てきたプレイヤー、苦戦したプレイヤーは、元いた世界で言うところごく普通の人々。僕はその世界での、管理者の一人」

「……」

難しい顔をしている……のだろうか？ 目で知性がわかるといっても、表情までは読めない。異種族の顔の違いなんてわからない、という言葉がよく理解できるな。別にちゃんツアーを屈服させたい訳でもないが、僕という存在がどういったものか不明のままだと、あちらとしても気持ちが悪いだらう。

という訳で、わかりやすい形で示してみるか。彼がこの世界でほとんど動かない理由は、遙か遠くにあるギルド拠点——『浮遊都市』のギルド武器を守護しているからだ。どいう経緯かは知らないけれど、彼はあの都市が滅びることを良しとしていないのだら

う。ギルド武器の消滅とは、すなわちギルド拠点の崩壊と同義。いま離れているだけでも、彼にとつては非常に不本意な状態である筈だ。

そしてギルド武器は権限がなければ絶対に動かせない。だからこそ自由に羽ばたける翼を持ちながらも、一所に留まり続けているのだろう。ならそれをどうにかすれば、そこそこ友好的にはなれるんじゃないだろうか。

「まあ証明はできるから、実際にやってみるよ。まず君が守ってるギルド武器をこつちに移動させて……」

「……え？」

「お………白金水晶のフランベルジュか。そういやミズガルズのチャンピオンがフランベルジュ使いだっけ？ 装飾弄るのは失礼だし……サイズだけ変更して、と。アクセにしたから、首にかけてきなよ。破壊不可オブジェクトにしたから、壊れる心配もないぜ」

「……」

おお、驚いてる……のだろうか？ さつきも言ったけど、表情の変化がマジでわからない。もつと『アリエナインですけどおおお!!』とか『魔女様すぎですううう!!』とか言ってくれたらわかりやすいんだけどな。

「これで信じられるかい？」

「う……ん、…そうだね。確かに僕が守っていたギルド武器だ。ここに来る前に、何重にも防護魔法をかけておいた筈なんだけど…」

「まあほら、僕の管理者権限って結構エゲツないからさ。という訳で、そんな僕の顔に免じてこの娘は諦めてくれないかな？」

「……うん……仕方ない、か。そのかわり、また話す機会をつくってもらえるかな。君がプレイヤーを管理する存在だつて言うなら、頼みたいことがあるし。君は——プレイヤーに対して責任を持つてるつて認識でいいんだよね？」

「……ん、それは……この世界にきた時点で、その関係は破綻してる……かな？ 君達みたいな自主的な責任感じやなくて、僕が彼等を管理してたのは仕事の一環。彼等が管理されていたのは遊びの一環。それでも多少なり気を使つてるのはさ……ん——…」

「……？」

「んん……言語化できない感覚つてあるよね。そんな感じ」

「訳がわからないよ」

「ま、理解して欲しいとも言わないよ。とりあえず、今見たように——僕の管理者権限なら大抵のことはできるからさ。もし争い事でしか解決できない案件があるなら、最初に相談してくれるかい？ 大局的な考え方をする君の頼みなら、たぶん優先するだろうか」

「…ずいぶん買ってくれてるんだね」

「プレイヤーに関する過去ならある程度まで見れるからね。君は——竜の癖に人間に気を遣うみたいだ。そうだろ？ ツアー」

「…」

笑った……のか？ 口元を歪められても、威嚇してるのか笑顔なのかわからない。ワンプリースみたくに特徴的に笑ってくれたらわかりやすいんだけどな。『ツアーツアー ツア!!』とかどう？ 嫌？ そっか、残念。では……うん、また後日。

…さて、では長くなってしまったが本命だ。やあやあ、命拾いしたねモノクマちゃん……じゃなかった、番外席次ちゃん。その髪どうなってるの？

「え、えつと……」

「どこか痛いとかかない？ 蘇生はちゃんとうまくいったと思うけど」

「は、はい……あの、その」

感謝よりも困惑が強いな……くそ、手順を間違えてしまったな。かつちよよくギリギリで助けて、ちゃんツアーを相手にちよつとした無双でもすればまた違ったんだらうけど。まあ育ち的に対人関係に難はあるけど、頭が悪いという訳ではなさそうだな。

僕とちゃんツアーの話を理解していたからこそ、かしこまっているのは間違いないだろう。つまり僕が自分より強いと認識はしている……となれば、もうそのままイッ

ちやつていいんじゃないか？ 『自分より強い男の種が欲しい』とか公言しちやつてる系の女の子だし、そうだ、断るまい。

「よし、セック——」

「〔無事ですか！〕」

…そこかしこからぞろつと現れる謎の集団。いやまあ謎っていうか、法国の人達なんだろうけどさ。そりや見張つてないわきゃないか……急いで来たからシナリオもクソもないし、理想通りの展開など望むべくもない。というかめっちゃひれ伏されてる。魔法的な監視では認識できなくとも、物理的な視覚は制限していない故に、番外ちゃんの蘇生とちゃんツアーを追い返した場面はしっかり見ていたのだろう。

口々に神の再臨を叫んでいる……うーん……法国で祭り上げられると、ちよつと面倒くさい感じなんだよな。そりやあ女の子は選びたい放題できそうだけど、こちらを妄信する信者とのセックスは、催眠セックス以上に気味が悪い。

ちなみに僕は催眠系の作品では抜けないタイプの人間である。肉体だけが勝手に動き、意識はちゃんとある系の催眠なら好きだけど……え？ 細かいって？ いやいや、

性癖というのは人間の願望の中でもっとも細分化されるものなのだ、仕方ないだろう。

ま、ここはいつたん退こうかな。番外席次ちゃんとの顔合わせは済んだわけだし、彼女の願望を考えればいつでもセックスできるようになったとも言える。

『お待ちをー!』などと叫んでいる宗教好きな人々を尻目に、王都へと転移する。どうにもこう……三つ子の魂百までと言うべきか、日本人の感性が抜けないというか。信者」というものへの忌避感が否めない。

たぶん僕みたいに自己愛が強い人間は、彼等みたいな人種と相容れないだろう。得体の知れない存在に縋り、敬う人というものが、どうにも気持ち悪くて仕方ない。言い換えてみれば、信者とは純粋な人間で、僕みたいなのは汚れた人間とも考えられる。要は価値観の違いでしかないだろうけどさ。

『私はこうします、だから神様、どうか見守っていてください』——そんな考え方は好きだ。けど実態は、信仰を言い訳に他人を害する信者も多い。行き過ぎた信仰は寛容の幅を狭めるのかもしれない。そもそも日本においての神は、古くから『敬うべき存在』ではなく『どうにもできない存在』を指すことが多いのだ。

歴史を紐解いても碌なエピソードがないしな……まあそれは日本以外もそうだけど。というか思考が逸れまくってるな。そんな高尚な考えは前世に置いてきたのだ。今の僕はオマンコがあればそれでいい。ちゃんツアーにも言ったけど、僕は適当に楽しく生きればそれでいいんだから——さ。

17話

王都の中でも最高級の宿屋——その一室で、四人の女性が机を囲んでいた。その全てが見目麗しく、それぞれが別々の輝きを放っている。そのうち三人は冒険者においての最高位『アダマンタイト』を冠する者であり、そして残りの一人といえ、それすら凌駕する化け物運管であった。

——が、いまこの場においての頂点は違う。本来であれば、あらゆるものを思うがままに出来るような美少女……そんな人物が、今にも儂く消え入りそうになっているのだ。汚されることに恐怖する生娘のように、半裸かつ涙目で、指先を震わせていた。そして残る三人の内の二人も、同様に半裸であった。

エイが姿を変えた美少女の外装——その白魚のような指から、おそろおそろ差し出された白磁の牌。河に投げ捨てられたそれを見て、ただ一人服を纏っているティアは、無情にも目の前の十三牌を倒した。

「ロン」

「なばっ!? イ、イビルアイがさつき出したじゃないか! そのあとツモ切りだっただろ!」

「直撃狙い。これで全員首切れ……三コロトツプ」

「ぐっ……! くっ、ここ三回の依頼料が吹っ飛んだ……おい! ビンタアップだ!」

「了解。じゃあいビルアイとは差しビン金貨百枚」

「ね、ねえいビルアイ……そろそろやめたほうがいいんじゃない?」

「手は入っているんだ! 次は勝つ!」

「で、でも……次に直撃されたら、全裸よ?」

「……」

「エイもさつき直撃。さつきと脱ぐ」

「むぐっ……!」

うら若き乙女たちが集まって何をやっているのかと言えば、ギャンブルの代名詞とも言える『麻雀』であった。そしてエイからの提案というだけあって、当然のように脱衣麻雀である。しかし誘った本人の思惑は大いに外れ——素人をむしるだけの簡単なお仕事だった筈が、いつのまにかケツの毛まで筆られかねない状況に瀕しているのであった。

「くっ……! もう読みもクソもないぜ! 棒攻めだ棒攻め!」

「ロン」

「ふあっ!」

「フハハハ！ 見ろ！ 役満テンパイだ！」

「嬉しいのは解るけど、言うなよイビルアイ……」

「ふふふ、しかも不要牌はティアの現物だ……もらったぞ！」

「ロン」

「なっ……！ ふざけるな！ 一萬は三巡目に捨てただろう——って無いっ!？」

「見間違い」

「これが変わり身の術ってやつか……」

元暗殺者だけあって、表情から心を読み取る能力に長けたティア。手癖の悪さも相まって、完全に無双状態であった。順位点は現金精算、直撃ボーナスは脱衣という特殊ルールにも臆することなく、舌なめずりをしながら仲間の裸体を拝んでいた。

「ラキユースってオープンリーチとか好きそうだよね」

「すぐく馬鹿にされてる気がするわ……」

「…カン」

「——ちよつと待て！ カンドラは人差し指で捲れよ！」

「ん」

「そう、そうだ……ふふ、新ドラは三枚切れだな」

「嶺上ツモ」

「あうっ!?　しまっ——そっちか!」

「責任払いは直撃扱い……イビルアイ」

「ぐっ、くっ……!　ぬがああ!!」

怒りの叫び声を上げながら、イビルアイは下着を脱いだ。一糸まとわぬ青白い肌に、薄いピンクの割れ目がむき出しになる。しかしそれが欲情を煽るかといえ、そうでもなかった。なにせ、幼い体のその上——端麗な顔がある筈のそこには、興奮を削ぐ奇妙な仮面があつたからだ。

「局部より顔を優先とは……いったいどんな顔なんだ……!」

「知ってるだろうが!」

「顔より体を見せつきたいお年頃」

「んなわけあるか!」

「や、やったわ……オープンリーチ!」

「結局するんだ……しかもペン七萬……」

「追っかけリーチ」

「ひいっ!?!」

「一発」

場は進み、ティア以外の全員が全裸になったところで部屋の扉がノックされた。ガ

ガーランあたりから昼食のお誘いだろうかと、エイはたわわな双丘をぶるんと揺らしながらドアを開ける。しかしそこにいたのは、無骨な骨の鎧を装備したラナー、そしてクレマンティーヌであった。

「あれ、ラナーちゃん……とクレマンティーヌ?」

「あん? 誰アンタ」

「……! 僕を覚えてないのかい? それは——まさか、法国が記憶を弄って……! くつ、なんてことだおひやうつ!!」

「それはもういいつつの。ふーん……アンタ……女にもなれるんだ」

「乱暴に揉まないでくれる?」

「エイ様……なのですか?」

「そうだぜー。そんなにマジマジ見られると恥ずかしいんだけど」

目を丸くしながら、エイの裸体を観察するラナー。なんの邪気もない視線に晒され、逆に恥ずかしくなってしまったのか、エイはさっと両手で胸を隠す。そしてクレマンティーヌは、そんな彼を見て口元を歪めた。出会ってから今まで、常に上から見下ろされてきた——少なくとも、彼女の主観においてはそうだった。その屈辱が晴らせそうかどうか、と言ふのだから、是非もないだろう。

ヤンキー座りでエイの眼前に陣取り、しげしげと秘所を眺める。産毛の一本も生えて

いないそこは、作り物のように整っていた。

「へー……ほー……ふーん……」

「なんだよクレマンティーヌ」

「べつにー？」

「まさかそつちの気が……？ それならそうと言ってくれりや、最初からこの格好でするの？」

「ねーよ！」

「あ、そうだらナーちゃん——外の世界はどうだった？ 面白かっただろ」

「ええ、とても。クレマンティーヌ様もよくしてくださいました」

「よしよし、なら君は僕に恩があるわけだ」

「……？ ええ、そうですね」

「じゃあ代打ちオナシヤス！ このままじゃ僕の貞操が……」

「えつと……？」

麻雀という競技においてエイが金を掛けたとしても、彼にとつて何一つリスクは生じない。故に、ティアとエイの間にはまた別の取り決めがあった。ギャンブルとは、負けに不利益が生じてこそギャンブル足り得るのだ。そしてこのままエイの敗北が続くのであれば、もはや彼が『女の悦び』を教え込まれること間違いなしである。たとえ女

の姿を取っているとしても、好き好んで棒を突っ込まれたい男はいないだろう。

そんな状況に突如現れた異次元の天才——ラナー。たとえ麻雀を知らなくとも、勝ちを確信させるほどの器量が、彼女にはある。喜々として彼女を卓につかせるエイの脳裏には、ティアをどこまで陵辱してやろうかという皮算用しかなかった。

——そして数局後。

「ラナーちゃあああん!？」

「も、申し訳ございません……どうもここ最近、頭が冴えないと言いますか……」

「前と後ろの権利ゲット」

「ふ、ふふ……貯金が全て無くなったな……」

「お金もだけど、尊厳も持っていかれたわ……あら？　あなた、確かトブの森で会った

……」

「いま気付くんだ……」

「こんな格好でごめんなさいね。私は蒼の薔薇のラキユースよ」

「全裸で挨拶された……」

「まあ部屋にいる半数が全裸なんだし、むしろみんな脱ぐつてのはどう？」

「死ね」

「相変わらず辛辣ウー」

「なに喜んでんだか……ん？ あれ、そっちのちっこいの……もしかして吸血鬼……？」

「——ハッ!? し、しまった!」

「あーあ、仮面まで外しちゃうから」

「誰のせいだ! 誰の!」

「吹聴されちゃまずいぜ。とにかく確保だ!」

「ええ!」

「はあつ!? ちよつ、まつ——」

全裸の幼女と全裸の少女と全裸の美女が、クレマンティーヌへと襲いかかる。あまりにもあまりな光景に、彼女も思わず固まってしまったのだろう。なにより、法国生まれかつ漆黒聖典であったクレマンティーヌからすれば、吸血鬼は嫌悪の対象——というよりは、討伐対象である。それが裸にされて辱められているなどは、想像もつかなかったのだ。

「うぎやあああつ!? 放せ変態ども!」

「見られたからには逃がせんのでな……!」

「ごめんなさい、まずは話を聞いてほしいの……!」

「へへへ、良い体してんじやねーか姉ちゃん」

「二人おかしいだろうが!」

三人に担がれ、ベッドへと投げ込まれ、拘束されるクレマンティーヌ。そして身動きできない状況で、いかにイビルアイが人畜無害なのかを語られる。なんとも意味不明な状況であったが、しかし彼女にとってそんなことは他人ごと以外のなにものでもない。己に類が及ばないのであれば、吸血鬼だろうがゾンビだろうが勝手にやってくれという話である。

「はいはい、そうですかそうですか。わかったから放してくんない?」

「…本当か?」

「吸血鬼だかなんだか知らないけど、正直どうでもいいんだよね。襲ってくるならばつ殺すけど」

「はは、そりや無理だぜクレマンティーヌ。イビルアイを倒したいんなら、少なくともナナ……いや、ハチマンティーヌは必要さ」

「なにその単位!?!」

「番外席次と第一席次を除いた漆黒聖典全員でかかれば、なんとかなるかもつてくらいだよ。クレマンティーヌ一人じゃ、ひっくり返つても勝てないだろうね」

「はあ? …ちつ……そんな強いやつがゴロゴロいるとか、最近おかしくない?」

「ま、時期が時期だし。ちなみに蒼の薔薇一人一人が相手でも、たぶん厳しいと思うぜ」

「…ああ?」

「彼女たちも君と一緒にでき、安易に強くなることを良しとはしてないけど……強くなるための『場』の提供くらいは、僕も手伝ってるから。順当に強くなってるよ」

「…」

クレマンティーヌが法国にいた際に聞かされた情報……彼女と対峙できるレベルの戦士。王国戦士長『ガゼフ・ストロノーフ』。蒼の薔薇『ガガーラン』。『ブレイン・アングラウス』——その他数人を知識として把握していた彼女は、蒼の薔薇のうち、戦士職ですらない面子にも及ばないだろうと聞かされ、額に青筋を立てた。

「…試してみるかい？」

そんなクレマンティーヌを見て、何かを思いついたとでも言うように、指先をパチリと弾いて笑うエイ。やれるチャンスは見逃さない——そんなイヤらしい笑顔であったが、手のひらの上で指輪を弄っているティアが横目に入り、ドツと冷や汗を流した。やるかやられるか……勝負の世界はいつでも非情である。

住人が寝静まったカルネ村……ほとんどの者が夢の世界に浸っているこの時間だが、ある場所だけは毎夜毎夜、嬌声が響くようだ。肌と肌がぶつかり合う音——肉と肉がぶつかり合う音。そこへかすかに粘性の水音が混じり、籠もった苦しげな声があくセントになっている。

しかしその声もどこか悦びが混じり、深夜の秘め事がどういったものかを如実に表している——などとナレーションのような思考をしながら、こそこそと情事を覗いている僕。視界に入るルプスとエンリちゃん……彼女たちも、既に肉棒の扱いは手慣れたもので、入れ代わり立ち代わり突き合っている。

もちろん乱入すれば快く迎え入れてくれること間違いなしだが、本日の目的は別にあり。僕とは違う位置で覗いている、小さな女の子……ネムちゃんだ。ごくごく普通の村

人だし、隠密のおの字も習得していない彼女だが、ルプスには気付かれていない。

言わずもがな、僕が完全不可知化をかけているからである。頬を上気させながら、食い入るように情事を見つめている彼女が見つかったら——間違ひなくルプスにいただかれてしまうだろう。人狼と姉に貪られる幼女というのも、それはそれで見てみたいが……幼い膺に初めて肉棒を挿入するという快感も、やはり捨てがたい。

空き家の窓の端から顔を覗かせるネムちゃん。不可知化をかけていなければ、向こうからも丸見えだろう。しかし男も女も、性欲が高まっている時は馬鹿になるものだ。質素な服の上からもぞもぞと秘所を擦り始めた彼女には、バレる危険性など彼方に吹き飛んでしまったに違ひない。

確か十才前後だっただろうか？ 小学五年生と考えれば、性的な知識は十分に持っているだろう。現代よりもむしろ、こういった世界の方がそつち系の教育は早そうだ。まあ作品的な知識を前提に考えると、言動は実年齢より幼かったような気がするが……どちらにしても、自ら雌穴を弄る幼女は実に淫靡だ。

下半身付近に広がる染みは、彼女の興奮具合をよく表している。姉と友人の痴態は、それほどに興奮するものなのだろうか？ なんにしても、僕の方も限界だし行動に移すでしょう。腰を引きながら快感に感うネムちゃんの後ろに立ち、肩をポンと叩く。

「はあつ、んうつ、あ、ん……は、あつ——え、ひゃわあつ!」

「覗き見する悪い子はここかなー?」

「ひやつ、えつ、あわつ……!」

達する瞬間を狙って叩いたせいとか、その驚きも相当なものだったようだ。足を絡ませて転倒し、尻餅をつくネムちゃん。しかし快感の余韻は、達するに充分だったのか——頬を真っ赤にしながら、チョロチョロとお小水が漏れ出した。大開きになった足を閉じて、必死に誤魔化そうとする幼女可愛い。

「お姉ちゃんのセックスを見て、自分で慰めてたのかい? お漏らしまでするなんて、ネムちゃんはエッチだねえ」

「ち、ちがつ……」

「エンリちゃん、ルプスー! こっちにネムちゃんが——」

「ひやめええ! ダメつ、おねがいつ、いわないで……!」

「えー? どうしよつかない」

二人を呼びに行こうとする僕の足を掴み、ぐるぐると目を回しながら懇願してくるネムちゃん。スカートの前部分はすっかり濡れてしまっていて、すっかり出し切ったことがうかがえる。スカート口趣味は一切ないが、『お漏らしをした事実』に恥ずかしがる女性はアリだ。

縋り付いてくるネムちゃんの胸部分を軽く押すと、こてんと引っくり返った。びしよ

濡れになった下着を脱がし、スカートを捲ると、てらてらと光る一本のスジが見えた。慌てて起き上がろうとするネムちゃんを片手で止め、無遠慮に股間へ手をのばす。

瞬間、ぬちゆりと粘ついた感触が指に触れる。驚きと羞恥の入り混じった声が、小さな口からかすかに零れた。見知らぬ男に性器を触られる恐怖より、自身が『イケナイこと』をしていた恥の方が勝っているようだ。まあエンリちゃんとルプス呼びに行こうとしてたんだから、ある程度は想像できるか。

「これ……おしっこじゃないよね。どれだけ興奮してたんだい？」

「ひ、ひぐつ……」

「姉妹揃って『好きもの』とはねえ」

「す、好きもの……？」

「んー？　好きものつてのはね、こういう風に——」

「——ひやつ……あぐううつ!?　んきゅつ、ひうつ……!」

「雌穴ぐちゅぐちゅされて悦ぶ、淫乱なメスガキのことだよ」

「ん、ううつ——ひあつ、あ、うつ……!」

男と違って、女のオーガズムは連続して達することができる。快感の波をグラフにするなら、男は鋭角の鋭い逆V字、女は富士山のような形になる。山頂を長くすることも、開発すればできないことはないのだ。さつき達したばかりのネムちゃんは、まだまだ敏

感な状態だ。

幼い割れ目に指を突つ込み、陰核を擦り上げれば波も復活するだろう。こちらの世界の女性はなんかイキやすいし、公式淫乱娘ことエンリちゃんの妹ともなれば、素質は十二分だと思われる。

「あぐつ、や、やめつ——んくつ…?! ひやうつ！」

膜を破らない程度にじゅくじゅくと掻き回していると、喘ぎ声が増すごとに色を含んでいく。女性の方が性的な成長は早いと言うが、処女でここまでとは流石エモットの血族だ。覗きオナニーをしていただけにはある。もちろん僕の誘導あつてのことではあるが、別に催眠や暗示を使ったわけでもない。二人の情事を目にしてからの自慰は、彼女の素質ありきのことだ。

幼い顔が淫らに彩られ、そのギャップが下半身にこれでもかと訴えかけてくる。我慢できずに、彼女の頬に肉棒をべちりと叩きつけた。最初はそれが何かわからなかったのだろう——少し顔を引いて、その全容を視界におさめた彼女は、目を見開いて息を呑んだ。

雌穴を掻き回されたままの呼吸は、荒く激しいままだ。熱い吐息が龟头にかかり、びくりと震える。ネムちゃんにどこまで性的な知識があるかは不明だが、少なくともフェラは知っている筈だ。なんセルプスの肉棒を、蕩けた表情で頬張る姉の姿を見ていたの

だから。

鼻先に突き出されたそれを、唇を小刻みに震わせて見つめるネムちゃん。唾を二、三回、こくりと嚙下し、快感に乱された目がそれでも数度逡巡し、ようやく小さな口が開いて——舌先がちろりと亀頭に触れた。

よくできましたとでも言うように、彼女の頭を撫でる。そしてそこからは、堰を切ったように肉棒をむさぼる幼女の姿があった。チンポが欲しいというより、見たままの行為を『そういうもの』として覚えたのだろう。顎まで目いっぱい開いて男根を受け入れる様は、姉とそっくりだ。

苦しいだろうに、ちらりと上目遣いで僕をうかがう様子は——ああ、そういうことか。確かに、ルプスはイラマチオが大好きだ。犬科だけに、征服するのが好きなのだろう。期待に応えるためにも、僕は彼女の小さな頭を掴み、乱暴に前後させた。

「おっつ——んぐつ……じゅぶつ、んぐつ……ん、うっ……い！」

ネムちゃんを持ち上げ、逆さにして、口を雌穴に見立てて腰を振る。ひっくり返った雌穴を気ままに弄ると、時折乳菌の固い感触が肉棒を刺激する。それでも食いしばらなように配慮するのは、子供とは思えないエツチングマナーである。

このまま喉奥に出してもいいが、やはり一発目の濃い精液は子宮に出したいというのが男の本能だ。急速に湧き上がってくる射精感を覚え、慌てて彼女の口から肉棒を引き

抜く。唾液の糸が絡みつくそれを、ふやけきった割れ目にあてがい、思い切り腰を前に押し出した。

「……ん、——っ!?!」

熱くトロトロに、しかしぎゆうぎゆうに締まった幼腔は、見合わないサイズの肉棒を必死に呑み込み引き挿れる。限界までぎぢぎぢに伸び切った割れ目は、吐き出された精液の逃げ場をなくした。白く濁った液体を無遠慮に排泄し、狭い子宮をこれでもかと満たす。

「は……ひ……っ、んっ、あっ……なか、びゆるびゆるって…」

小刻みに痙攣した体が、だらりと脱力した頃——ようやく肉棒を引き抜く。途端、割れ目から溢れ出す精液。ぼっこりと膨らんだお腹が元に戻ると、幼穴もぴちりと閉じた。いまだ締まりのよさを見せつけてくるスジに、またぞろ男根が熱り立つ。

そうだ、今度はエンリちゃんとルプスの目の前でやってみよう——ん？ あれ、いつものまにかいなくなってる。そういや完全不可知化も解けて——ハッ!

「エ・イ・さ・ん?」

「……やあ、エンリちゃん……さん。月が綺麗な夜ですね」

「エイ! なんてことするっすか! 私が目をつけてたのに……!」

「ふふ、ふ……」

「…エンリちゃん？」

「——少しは…」

「っ!? ちよっ…!？」

「少しは挿れられる気持ちを味わいなさい！」

「うわわっ!?! ちよっ、せめて女のすがっ——」

人を呪わば穴二つ。フタナリ指輪は、カテゴリー分けすると呪いの装飾品である。それをばら撒いた僕に因果が帰ってくるのは、道理なのだろうか？ …このあとどうなったかは、神のみぞ知るということにしておこう。



情報の広がる間口が『人の口』しか存在しない、未成熟な文化形態の世界——そんな場所で情報を収集する場合、やはり『酒場』というものは鉄板である。アルコールが入っ

た人間の口は、とかく軽くなるのだ。浮ついた気分は、警戒心も緩くなる。

そして王国の首都ともなれば、得られる情報も多岐に渡る。もちろん、そのほとんどは酒場に相応しい下世話なものが大半である。しかし会話の端々から得られる僅かな情報を繋ぎ合わせ、重要性を高く昇華させる——ラナーのような存在がいれば、諜報には最適な場所だろう。

エイがその酒場へ足を向けたのは、そんな目的のため——という訳ではなく、むしろ下世話な話の方をメイン目的としていた。『どこどこの娘が可愛い』『あの店の人妻は股が緩い』『あの娼館のナンバーワンのテクがババない』『エ・ランテルのミスリル冒険者に超巨根がいるらしい』『その相方の美女は既にガバガバらしい』などと、様々な話題が飛び交っている。カウンターでグラスを傾けながら、エイはそんな喧騒を肴にしていた。

しかしその姿は常と違い、どことなく影を背負っている。まるで心に傷を追った少女のような雰囲気、背中から滲み出ている。彼がここに来たのは、男としての自信を取り戻すためだ。酒場特有の俗な情報を求めてきたのだが——しかしいまだ動かずにいるのは、心の痛みかケツの痛み故か。

「ふう……」

「はあ……」

そんな彼の横には、いつのまにか白い騎士が座っていた。同じようにため息をつく騎

士に親近感を覚えたのか、あるいは『酒場の隅っこで一人グラスを傾けてる自分』に酔ってしまったのか、エイは珍しく男に声をかける。

暗い雰囲気を纏った白い騎士などという、いかにも訳ありそうな人物に好奇心をくすぐられたというのもあるだろう。酒場で一度はやってみたいシチュエーション『グラスをシュツと滑らせる』を試してみたのも、これもまた仕方ない行為である。

「…君もなにか抱えてるみたいだね……何があつたか知らないけどさ、赤の他人のほうがいいしやさいこともあるぜ。滑らせた口は、その酒のせいによければいい」

「…」

傷心はどこへやら、『決まった……』などと内心で思いつつ、白い騎士へと顔を向けるエイ。揺れる液体に視線を落とす騎士の様子は、まさに意気消沈といったものだ。何もかもがうまくいかない、そんな疲れた雰囲気を醸し出している。

「…娘や息子のよう思っていた者が……いつのまにかずつと先へ行っていた……そんな時、どうすればいいんでしょうね……」

「へえ……まあ、子は親を超えていくつてよく言うし。娘や息子のよう思ってたんなら、成長を喜ばばいいんじゃない？」

「ですが……私でさえまだなのに……というかなんで生えてるんだ……」

「は、はあ……?」

机に突つ伏しながら嘆く白い騎士の様子に、さしものエイも狼狽える。酒には口を付けていないというのに、悪酔いでもしているかのようだ。ヘルムの中の瞳が危なげに据わっているだろうことも、容易に想像できる。

「あー……んん、まあそう落ち込まずにさ。寂しいときには女の肌が最適つて言うじゃん！ 最高級の娼館でも行かない？ もちろん奢るぜ！」

「……！」

連れシヨンならぬ連れソープ。会社勤めかつ、独身の先輩と仲がいい人間であれば、誘われたことくらいはあるだろう。白騎士はそんな誘いを耳にすると、ビクリと体を揺らした。逡巡する様子は、まるで経験のない素人のようだ。

「僕は『ウン＝エイ』。君は？」

「……っ！ ウン……エイ……！」

「あ、聞いたことある？ 最近わりと有名なんだよね」

「ええ。何度も……何度も、聞いたことがありますよ」

騎士にそう言われ、エイは心地よさと鬱陶しさを緬い交ぜにした笑顔を返す。人を『有名になりたい人間』と『有名になりたいくない人間』にわけるとするならば、エイは前者よりの後者である。人である以上、多かれ少なかれ承認欲求というものはある。多数から称賛される状況を忌避する人間は少ないのだ。

しかし『有名税』というものは、確実に存在する。『有名になりたくない人間』というのは、称賛されることそのものは嫌いでなくとも、それに付随するデメリットを考慮して『表舞台には出たくない』というものが大半だ。

エイは称賛や尊敬を向けられること自体は嫌いではないが、それについてくる面倒事は嫌いであつた。『自分のやりたいようにやる』ということが、なによりも好きなのだ。白騎士によく知っていると言われても、大して気にせず流したのはそのせいだろう。騎士の雰囲気の変化にも気付いてはいない。

「…珍しい名前ですが……本名ですか？」

「ん？ ああ、いや……？ そんなこと聞かれたの初めてだな。まあ本名と言えば本名だし、違う名前があると言えればあるし……」

「不躰ですが、どのような？」

「へ？ まあ佐藤とか田中とかモミジとか——どあつ!？」

特に嘘はつかない——つく必要がないエイは、問われると大抵のことは答える。前世で本名だつた『佐藤』も、リアルで本名だつた『田中』も、GMキャラとして名乗つていた『モミジ』も、知られたところでデメリットなど存在しないからだ。

しかし最後の『モミジ』という名を聞いた瞬間、白い騎士はエイの肩を強く掴んだ。 //

上手く情報を得よう”……そんな慎重な雰囲気から一転、明らかに怒気を発したのだ。

「お前、俺のことネットで馬鹿にしたよな? 『イキリ骨太郎』とかなんとか言つて」

「…っ!? ——……モツ、モモン——あ、いや、えー……えー? ……なんでこんなところに…? じゃなくて、えつと……し、知らんモミヤツ!」

「語尾いつ!」

「モミは何も知らんモミ! 帰らせてもらうモミヤツ!」

「クソ運営がああ! 俺が何も知らないとも思っているのか! ヘルヘイムのGMナンバー十三! “クソレス製造機” 『モミジ』!」

ユグドラスレに降臨しては、クソにも劣るレスバを繰り返して去っていくGM……クソコテ『モミジ』。『運営が最良をする訳にはいかない』という信念の元、全方位に喧嘩を売っていくスタイルを確立させたクソ運営である。もちろんアインズ・ウール・ゴウンにもそれは及び、心ならずも『イキリ骨太郎』などというレスを書き込んだこともあったのだ。

「い、いや、それには深い理由があるモミ…」

「ほう。言ってみろ」

「楽しかったんだ…」

「浅い!」

「娯楽は何にも勝る幸せモミ！　だから君もユグドラシルをプレイしたんじゃないのかモミ！」

「そのふざけた語尾をやめろ！」

「オーケーオーケー、わかった。だから剣から手を離すんだ、アインズ・ウール・ゴウンのギルドマスター」

モモンガがふと辺りを見渡すと、周囲の客が縮み上がっていることに気付いた。絶望のオーラこそ漏れてはいないが、存在の格が違う者の怒気にあてられて、本能が恐れているのだろう。怒りがすぐに沈静化したこともあり、モモンガは慌てて腰をおろした。

「…GMコールを無視し続けたのは、何故だ」

「異世界に来てまで職務を全うしろってかい？」

「その答えはおかしいだろう？　俺はこの世界に来てすぐGMコールを試した。ここが異世界だと最初から解っていたわけでもあるまいし、普通はすぐに応える筈だ」

「…」

「なぜ黙る」

「いや……確かにそうだな、と」

「もう少し言い訳の仕方ってあるだろう！」

「すぐに言い訳考えられるような頭してないんだよ！　そつちがいいように解釈すれば

いいだろ！ そしたら僕が『全て見抜かれていたか、流石はモモウルゴス』って言うてやんよ！」

「ぬぐつ…!? おまつ……ナザリックを覗いていたのか！」

「ふふん、僕にかかれればシャルティアちゃんの下着の色までお見通しさ」

「…！ シャルティアの下着…？ お前、まさか…！」

「ようやく気付いたかい？」

「尻の穴を掘られることが大好きな変態吸血鬼か…！」

「なんでだよ！ …ナザリックの報連相つて、伝言ゲーム並にむちゃくちゃじゃない？」

「…正直、うまく機能しているとは言い難いな」

いったい『マジカル☆イウエン』の正体はどこへ向かっているのか…そんなことを思いつつ、エイは白騎士を横目で見ると、日常から一々個人を精査している筈もなく、白騎士がアインズ・ウール・ゴウンであると気付けなかった——それはいい。

問題は、先日モモンガの配下に語った『至高の四十一人の帰還はあり得ない』といった部分だ。いつそれに関するのを聞かれるのかと、エイは戦々恐々としていた。しかし彼の予想とは違い、モモンガの口から零れ出たのは——

「…この呪いの指輪も……お前の仕業か？」

「…っ！ …し、知らんモミ。おおかた性欲を失った哀れな骨に、優しい誰かが恵んで

やったに違いないモミ」

「効果まで言った覚えはないが」

「ギクツ」

「御託はいい。さっさと外せ」

「う、うーん…」

悲しいかな、人間とは目の前の物事に集中すると、それ以外がおろそかになる癖がある。モモンガにとつて最大の関心事は、間違いなく仲間たちのことだ。しかし、現状での問題は限りなく肉棒である。今にも鎧を突き破り、雄々しく屹立する機会をうかがっているポケットモンスター。これをどうにかせねば、仲間に会う会わないの話ではないだろう。とはいえ、エイにもアルベドとの約束がある。そう簡単に頷くことはできない。

「あー…：ほら、なんてーの？ 異世界にきて色々法則が変わってるってのは、君も理解してるだろ？ 僕にだって出来ることと出来ないことがあるんだよね」

「む…」

「つていうかき、セックスするだけでいいんだから自分で解除できるだろ？」

「…っ！ む、ぐ…！」

「NPCとセックスしたくないってんなら、その辺に娼館なんていくらでもあるし。正

体バレずにやる方法だってなくはないだろうし、最悪でも記憶改竄すればいいわけだし」

「うう……」

ドンドンと萎れていくモモンガを見て、エイは調子を取り戻していく。相手が童貞だと理解した上で『セックスなんて大したことないじゃん』という論調で話を進めていく——それはあまりにも残酷な行為であった。しかし童貞とは、そっち系の話になると急に口数が少なくなるのだ。それを利用するのは、エイにとって当然のことである。

このまま仲間のことを聞かせずに、上手くフェードアウトしよう……そんな目論見で話し続けるエイ。『コンドームはこのメーカー派?』などという必殺の間合いに踏み込み、モモンガの心を殺していく。

——しかし、そんな彼らの間に割り込む偉丈夫が一人。それは誰もが知る王国の雄、王国戦士長。『ガゼフ・ストロノーフ』その人であった。

「失礼。私の聞き間違いでなければ、そちらは——もしかや『アインズ・ウール・ゴウン』殿では?」

竜王国の英雄『ウン＝エイ』。近隣諸国最強と謳われる王国戦士長『ガゼフ・ストロノーフ』。そして最近台頭し始めた、善なる秘密組織のトップ『アインズ・ウール・ゴウン』……彼らが交わる時、何が起きるのか——今はまだ、誰も知らない。